
ゼロの使い魔～魔眼を持ちし霸王～

× ×

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜魔眼を持ちし霸王〜

【Nコード】

N2337M

【作者名】

××

【あらすじ】

いらっしゃいませ〜

年齢確認が出来るものをお願いします

あつ？ふざけんなよ。えつちよつ！？死んだ死んだの僕！？

目覚めたらゼロの使い魔の世界でしたって・・・おい貴様

この作品はあまり深く考えず勢いで読むことをオススメします。

耐えられないって人は何も言わずにお戻りを

三作品目です

相変わらずの駄文ぶりですがよろしくお願いします。

プロローグ：お話しが始まる訳（前書き）

三作品です

相変わらずの崩壊ぷっり

しばらくは更新がづらいZE

衝動的に書いているからなあ・・・バカだな僕orz

ちなみにやっぱり神様は全作品共通

誤字脱字は報告お願いします

プロローグ：お話しが始まる訳

「ユウキーっ！どこにいるのですかー！？ユウキーっ！！」

晴れ渡る青空の中で人を呼ぶ声が響き渡る。

「姫様！はしたないですよ！！」

「いえアイリ、これぐらいの声で呼ばなければあの人は絶対に逃げます。皆もユウキを探してください！城の中にはいるはずですよ。食堂や屋根の上・・・城を掘り返すぐらいの勢いで探してください！」

「「「「はっ！」「」「」」」

そしていくばくかの時間が経ち、姫様と言われた人物の前に縄で顔すらもグルグル巻きにされた男が転がされた。

「「よつやく見つけましたよ、ユウキ？」」

「ちっ・・・これは、姫様ご機嫌麗し・・・」「今日何かしなければならぬことがあったのを覚えていますか？」えっ！？・・・あつもちろんです。アレですよ？アレ。ではそれをしなければならぬので失礼します！」

そう言つて男は逃げようとするが・・・周りにいた護衛が彼の周りに剣を刺した。

「っ！？危ないじゃないか！この裏切り者たちめっ！！」

「」「はっ」「」

「お前ら今僕を鼻で笑つたな！！畜生！今日という今日は許さねえ全員かかってこいや！！・・・あつちよつ縄解いてからに決まってるだろうが！！ふざけんな！オイッ誰だ今僕の大事なマイサンを蹴つたのは！！！」

「ぶちっ」

この騒ぎに何かがキレる音がした・・・それと共に強大な魔力のうねりを感じそれと共に呪文を詠唱する小さな声が聞こえた。

「ちよつ姫様っ！？アンリエッタ様あつ！？それは洒落になりませ

んよっ！！ペンタゴンスペルですよね！？」

「貴方が忘れていたのは私の護衛ですっ！！女王陛下直属の魔法衛士ユニコーン隊の隊長さんっ！！」

『ブリザードトルネードっ！！』

アンリエッタ姫の怒りの声と共に氷の刃を従えた竜巻が縄でグルグル巻きの男を襲う。

「ギヤアアアアーっ！！」

ここトリスティン王国の城に悲鳴が響き渡った。

今姫様から折檻をうけた男の名はユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリス

一応公爵家の次男で女王陛下直属の衛士隊の隊長である。

そして何より彼は転生者である。

彼がここハルゲニアに来た理由についてお話ししよう

- - - - -

彼もとい花村悠紀はとあるゲーム屋でバイトをしていた。

そのゲーム屋は年齢確認が必要なゲームしか売っておらず、コアなファンに人気な作品がいっぱいおいてあった。

ある日いつも通り狭い店内のレジの前で椅子に座りながら雑誌を読んでいると客が入ってきたので、一応いらっしやいませと機械的な応対をして雑誌に目を戻した。

そして何分か経って客がレジの前にきたので雑誌を読むのを止めて、商品を受け取り客を見て・・・商品を戻しにいくこうとした。

「ちよつ会計したいんじゃないけど!？」

「ナメんな幼女。その年でエロゲーやろうなんざ笑えない。帰れ」

「いやちゃんと18歳越えているから！」

そうやって金髪碧眼の白いワンピースを着た少女は免許証みたいなものを渡してきたので見てみると・・・

『神様認定証

姓名： でもあり でもあり でもなく でもない者

年齢： 宇宙が生まれる前

住所： ウゝアルハラ

引退まで有効

壊すと天罰が降るゾ
』

叩き割った

「大人ナメんな」

「あっー！！ひどいのじゃっ！！再発行に何年かかると思っておるのじゃ貴様っ！！」

鼻で笑いながら殴り掛かってくる少女の頭を抑える。

リーチの差だな。

「はっ手のこんだことを・・・騙されるわけがないだろう」

「なっ!?!?・・・我は神なのじゃ!?!」

「アホか」

「ぐっ」

幼女は涙目になりながら、僕を睨みつけてくる。

「なんで我に借金 妹2を売ってくれないんじゃ!?!」

「いやあれは1の方が面白いだろ」

「イチヤイチヤな方もみたいのじゃ!?!売ってくれ!?!」

「いやエロゲーは調教系だろ、やっぱり。普通に外見的な年齢で売れねえから」

「ぐっ貴様とは相容れることは出来ないようじゃな!?!エロゲーはイチヤイチヤ系が一番なのじゃ!?!」

「お前が幼女じゃなきゃ売ってやったんだがな・・・だが大人になればお前とはエロゲーについて語り合えるさ」

「なっ！？何故じゃ！？」

「エロゲー好きに悪いやつはいないさ」

そう言って屈んでとびきりのスマイルを浮かべながら幼女の手を握る。

幼女は俯きながら一応手を握り返してくる。

何分か経つと幼女は僕の手を離して、捨て言葉をはいて逃げ去った。

「くっ今日は退いてやるのじゃ！」

僕は笑いながら手を振って幼女を見送っていると

トラックが僕に突っ込んできた。

あっ・・・死んだ

目が覚めると真っ白な空間にいた。
自分の身体を見ると半透明になっている・・・うん笑えない

どうしようもなさすぎて大の字で仰向けになって寝ていると、トボトボという足跡が聞こえた。

気になって寝ながらそちらを向くと俯いて歩いてくる先程の少女が歩いてきた。

「なあ少女、ここはどこなんだ？」

「死後の世界じゃ」

「ああ・・・僕はまじで死んだわけか」

「……………」

「ということはお前はまじで神様だったわけか」

「……………」

「死ぬんだったらお前にゲーム売ってやればよかったな」

そう言っただけで笑いかけると少女は辛そうな顔をしてこちらを見てくる。

「我がお前さんにあの認定証を渡さなければお前さんは死ななかつたのじゃ」

「じゃああれは認定証を割った天罰ってわけか……なるほど」

いやあまさかまじだったとは……笑えない

まあでも死んだら終わりか

「お前を違う世界に転生させるのじゃ」

「いやいいよ。死んだら終わりなのは平等だろ？ 同士に迷惑をかけるわけにはいかないからな」

「同士を死なせるわけにはいかないのじゃ」

そう言っただけで少女は微笑んで僕の頬を撫で、何故か僕の両目に目潰しをした。

「うおおおおーっ！！いてえええっ！！バカか！？バカなのかお前は！？何故このいい雰囲気を目をつく！？」

「今のでお前さんの目に特殊な力がついたのでじゃ」

幼女は無い胸を偉そうに張って何かをおほざきになっていらっしやいます。

特殊な力？なんだそれ？

「とりあえず5種類の力を入れてみたのじゃ」

「どんなの？」

「まあ転生すれば分かるのじゃ！じゃあいつてらっしやいー！」

そう言って腹部に両足を叩き込まれ、浮遊するような落下をしていた。

「テンプレすぎるだろっ!!」

そうして気を失い、目が覚めると目の前には長い金髪で茶色の目をした豊満な胸を持った女性が優しい笑顔を浮かべて僕を見ていた。その隣には薄い赤色の髪の毛のオッサンが厳しそうな顔を少しだけ嬉しげに歪めている。

「あなたの名前はユウキよ。初めましてユウキ」

そうして僕はハルゲニアに誕生した。

《続く》

プロローグ：お話しが始まる訳（後書き）

はいお楽しみいただけましたでしょうか？

作者は別に金髪碧眼の幼女が好きなのわけじゃありません

あと2話ぐらい過去編が続く予定です

まあ予定は未定なので違っても悪しからず

では次回もお楽しみに？

1話：鍛練鍛練また鍛練（前書き）

はい1話ですよ

全員集合っっ！！

誤字脱字は報告お願いします

1話：鍛練鍛練また鍛練

どうもユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです

舌嚙みそうなんだけど

ようやく3歳になり、喋ったり歩いても怪しまれなくなりました。

3歳まで自立たないように頑張りましたよ

ええ本当に

静かすぎて逆に怪しまれたときもあつたぐらいに

さあて今からこの世界についての勉強をしたいと思えます。

3歳児が小難しい本を読んでいるのはさすがにおかしいので、幼女にもらった特殊な眼の出番なのである。

ちなみに特殊な眼は5種類中3種類までなら今現在使える。

一つ目は特殊な複写眼

元々は伝説の勇者の伝説の主人公の能力で、魔法を見ることが解析し構造を理解することが出来るというものだが
僕の目は伝説の勇者の伝説の主人公が物語後半で手に入れた複写眼の上の存在のようだ。

魔法に限らず人や物、全ての構造を解析し理解することが出来る。

使用時には瞳の中央に七色に輝る涙型の紋様が浮かび出る。

そして二つ目が魔法を吸収し自分のエネルギーに変え、自分の肉体を強化・再生させる力だ。

これは殲滅眼というものでこれもまた伝説の勇者の伝説のキャラクターが使っているものである。

あれは魔法だけではなく人からもエネルギーを奪っていたが、それは人を食べなきゃいけないのでごめん被りたい。

使用時には瞳に赤い十字が浮かび上がる。

そして三つ目

何故かギアスであった。

目があった人物に一回だけどんな命令でも下せるといって絶対遵守の力

使用時には鳥が羽ばたくような形の紋様が浮かび上がる。

全てONとOFFが切り替えられるので、殲滅眼所持者のように自分の魔法を発動する前に吸収してしまうなんてことも勝手にギアスが発動して誰かに命令をしてしまうなんてことも起きない。

問題なのは残り二つで

これらは相当な魔力が必要らしく今現在は発動できない。

故にどんな力かも全く理解出来ていないのである。

まあ誰かに魔法を撃ってもらってその魔法を魔力に換えて発動するという手もあるが、成長するまで待つことにした。

転生を断って起きながらなんだかんだでここでの生活に慣れ楽しんでしまっている僕がいる。

そして最近世界を複写眼で覗いて気づいたのだが、ここはゼロの使い魔であった。

普通に魔法が存在する時点で気づけやとは思わなくもなかったが、なかなか気づけないものである。

でやりたいことが出来た。

エロフに会いたいなエロフに

今なんかどっかの土くれさんから殺意とか感じたけど気にしない

全国のエルフに謝れとか言われそうだがそれも気にしない

幼女は乳神様ティファニアに合わせるために僕をこの世界に送り込んだに違いない！

まあ会ってどうこうする気はない、ただ愛でたいのである。

というか才人くんを殺す（ハート）

あのスケコマシにはかなりイライラさせられた。

どんだけ手を出せば気がすむんじゃポケエっ！！

あとアンリエッタ姫も好きじゃない

あんだけウエールズ、ウエールズ騒いでおいて最後はお乗り換えで
すか？

エコカー減税やってるわけでもないのに、よくそんなに簡単に乗り
換えられるな

この がっ！！

とか思ったこともなくはない

まあ別にお姫様と絡むことなんかないと思うからいいんだけどね

父上曰くラ・ウゝアリエール家と同じく王家と多少血の繋がった身分が相当高い貴族だからいつか姫様に会うらしいんだけど実感がわきません

といつか会いたくありません、行儀作法とか面倒くさすぎる。

ずっと引きこもっていたい

それに母上がマザコンになりそうな程優しいです。

5歳上の兄上がいるんだけど、あんまり好きじゃない

才能を鼻にかけすぎとかかなんとか・・・貴族で多少魔法が使えるから何？って感じ

そして5歳になりました。
他の人に見つからないようにメイドさんにギアスで命令をして色々な本を読んで魔法を勉強したんですが・・・この魔法は正直つまらない

属性系統の魔法が多すぎるし、杖を使わないと魔力を行使出来ないとか効率が悪すぎる。

それに身体に魔力を纏って肉体を強化するという手段もない。

ブレイドと言って杖に魔力で出来た刃をつける魔法はあるが、それを肉体に変えればいいだけなのに何故出来ないんだろう？

23

まず杖を捨てるとか思ったのは内緒である。

実際僕は杖も詠唱もなしに魔法を発動出来るし

肉体に魔力を纏って強化することも出来たのでちゃんと理解すれば他の人も出来ると思う。

まあやり方を教える気は微塵もない

あと暇すぎてオリジナル魔法とかも作ったりしていたが、高威力な

ものは魔力が足らずに概念的なものしか出来なかったのが残念である。

ちなみに5歳になったので杖と契約させられ、系統を調べると風の系統で母上と同じらしい

父上と兄上は火なので同じにならなくてよかったと思わなくはなかった。

まあぶっちゃけ僕には系統は関係ないけど

そして初めて杖による魔法をやらされてわざと失敗しまわった。

優秀な兄上がいるのに、目立つのはごめんである。案の定兄上は僕を見下したような目で見据え、父上は残念そうな顔そして何故か母上は微笑んでいた。

そして内緒で鍛練に鍛練を重ねまくり、月日も経ってついに僕もエ

イトイヤーズオールドようは8歳である。

筋トレとかしまくったのでわりと体つきはよくなっている。

魔法も風のドットメイジということになっているがあんまり関係ない
ちなみに兄上は火のトライアングル

よって僕のおだ名は才能のなさから出来そこないやら次男の鏡やら
穀潰しやら残念な子やら搾り滓である。

内心兄上を馬鹿にしているので全く悔しくはなかった。

そんなある日何故かトリステインに連れていかれ、城の中に入りマ
リアン又太后とアンリエッタ姫に挨拶し、マリアン又様に抱きしめ
られ

二歳下のアンリエッタ姫とその場にいた居合わせたルイズと遊ばさ
れた・・・訂正遊ばれたorz

なんなんだあの元気さとやんちゃさは・・・ついていけねえよ

野山を駆け回る姫様がどこにいるんだよ

というか護衛をぶつちぎりで置いていくなよ

ええ残念なことに姫様とおともだちになりましたよ
ハイハイ面白い面白い

笑えねえ

僕にはなんかヤバいフラグが立っている気がするんだが・・・そこ
んところどう思うよみんな？

で家に帰ると何故か母上に呼び出されたので、母上の寝室に向かい
ノックして中に入ると

母上が椅子に座って僕を手招きで呼んでいます。

しょうがなく近づいて反対の席に座ると急に母上が人払いを命じて
使用人たちを部屋の外に追い出して、部屋にサイレントの呪文をか
けて僕に話し掛けてきました。

「ユウキ・・・どうして本気で魔法を使わないのですか？」

あるえ？バレテラー

どうしよう

まずいぞ

とりあえず

「僕はいつでも本気でやっているつもりですが・・・」
「嘘ですね」

即答ですね母上！

というか笑顔が怖いんでやめて下さい。

「3年前、杖の契約をした直後に魔法を使わせたでしょう？」

「ええ全然成功しませんでしたか・・・」

「あれわざとでしょ？」

「ナニヲオツシャルハハウエ」

「火の系統であるあの人やあなたの兄は分からなかったかも知れませんが、私にはわかりましたよ」

「・・・・・・・・・・。」

「やり方はわかりませんがあなたは発動する直前にわざと魔法を消

滅させています。私には微細な風の動きが分かったのでちょっとでも発動すれば分かりますよ」

ちっ・・・しくじったな
どうするか？

「それに私はあなたがこそこそと身体を鍛えたり、魔法の勉強をしているのを知っていますよ」

「ぐっ」

「ふふっ母はなんでもお見通しなのですよ」

母上は悪戯に成功したような笑みを浮かべている。

「どうして本気でやらないのですか？」

しよつがないので真面目に答えた。

「面倒なんです。あまり目立つの好きじゃないし、それに・・・」

そう言って僕は複写眼を発動させ、瞳に紋様を浮かび上がらせた。

「こんな瞳ですから」

「あら」

母上は片側の頬に手をあて首を傾げている。

「その瞳にはどんな力があるのかしら？」

もう追い詰められたも同然なので複写眼と殲滅眼についてだけ話した。

ギアスは他言すると笑えない事態になるので言わなかった。

母上は楽しそうに僕の話聞いて、複写眼を利用して作った新しい魔法が見たいと言われたのでお見せすると嬉しそうにさすが私の息子ねと言って頭を撫でてくれた。

精神年齢が30過ぎのオッサンが頭を撫でられるのは恥ずかしかったが母上の温もりは暖かいものだった。

そして何より私の息子と言われたときに認められた気がして、つい泣いてしまう。

この世界に来て初めて褒められ認められたせいである。

自分からうつげや出来そこないを演じてきたのに、褒められてなくなんてアホすぎるだろ僕

そして一ヶ月に一回新しい魔法を見せることを約束して、自分の部屋に戻った。

母上に認められ、その人はニヤケ顔が止まらない日となった。

《続く》

1話：鍛練鍛練また鍛練（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ええ魔眼については悩みました。

ギアスがかなりの悩みどころだったので、あっさり採用

うん便利

直死の魔眼とかにしようかと思ったんですが、物体を解析し分解できる複写眼があるからいらないやと思って付け加えるのを辞めました。

次回はまだあんまり考えていませんがフラグをたてる予定ですWWW

次回もお楽しみに？

2話：お姫様に殺意沸くって相当なことだよね？（前書き）

連続投稿

疲れた・・・グダグダです

誤字脱字は報告お願いします

2話：お姫様に殺意沸くって相当なことだよな？

どうもみんなのアイドル ユウキ・エンドリオール・ル・デファン
ス・ド・アンペラトリスです

今現在死にかけています、テヘッ

前回立てたフラグは死亡フラグだったようだ・・・ああ笑えない

右腕はちぎれかけ、肺には穴が空いてるし
というかあと秒単位で死ぬる

周りは土砂しかねえし

本当アホなことはやめてほしいです、このアホリエッタ姫！

治癒の魔法をかけて欲しいんですがね？

それに貴女が邪魔で土砂を複写眼で解析して分解できないんですよ、
まじで。

本当に僕の顔の前から離れて下さい

何回か貴女を殲滅眼で食ってエネルギーに変えようかと思ったのはお兄さんとの秘密だよ？

ああまじお姫様に殺意沸くとか・・・普通ないよ

なんで僕が死にかけているのかというとお話しは4時間ぐらい前に戻ります。

またも嫌がらせのようにお城に行く父上に呼ばれた僕

もちろん逃げようとしたがあっさりと捕まりました・・・母上に

あの人絶対父上より強いです。

よくある母上無双ですね、分かります。

というか僕が教えた捕縛魔法を系統魔法に変換して使うのやめてください。

母上は絶対チート、なんか僕以上のチート能力を持っている。絶対に

だって僕が行く先々に罾と捕縛魔法が仕掛けられているんですよ？
きつと予知眼とか写輪眼ついてるよ

だって捕縛魔法作るのに3ヶ月使ってるですよ？
複写眼を使って3ヶ月ですよ？

母上に捕縛魔法を教えたの一週間前ですよ？

自分に使えるように改良して一週間で使用できるなんて

絶対おかしいですって母上

母上には絶対に広域攻撃魔法は教えないようにしよう・・・うん絶対死ぬ

母上の恐怖を身に刻みつつ、城に向かう馬車の中でガクブルしているといつの間にか城に就いていた。

マリアンネ大後に挨拶すると再び抱きしめられた・・・あれですか？大後はシヨタコンか何かでございますでしょうか？

失礼なことを考えていると抱擁がつよくなり、さばおりを喰らっているようなダメージが蓄積されている。

がっ・・・やばい

ええ死にます死にますとも！
タップするとようやく離してくれた。

ぜ〜ハ〜ぜ〜ハ〜

orzスタイルで呼吸を整えていると、今度はアンリエッタ姫とルイズに誘拐された。

今日はオママゴトをするらしいです。

30歳のオッサンには究極的に辛い嫌がらせだな

いつも僕は浮気をして殺される町の平民の役です。

とてもよく僕に似合っているとの話・・・嫌がらせにも程がある。

なんかAでもなくCってところが僕らしいとのこと・・・浮気して殺されるってところではないが若干嬉しいですね。

というかこのオママコドは何かが間違っている。

で巻き込まれること1時間ようやく解放され、グッタリとした僕に更なる追い撃ちがかかることに・・・

馬鹿なお姫様が家出というか城出？をしたらしい・・・しかも護衛を置いて

そして何故か捜索に借り出される僕・・・

ふっざけんなっーーーーーっ！！

おともだち（笑）なので居そうな場所は分かっていますが・・・そこには居てほしくないな

と思いながらもトリスティンの奥の方にある人があまりいない山に到着

案の定頂上にて姫様を発見・・・行動力がすごすぎるだろこのお姫様
というか馬鹿

そういう僕も護衛三人しか連れて来ていないかなりお馬鹿な状態だ
けど

ここは姫様にとって特別な場所らしいのでここに目をつけたのです
が当たりだったようで・・・

ああ居てほしくない理由？

まず狼の群れがでること、そして前日の大雨で地盤がめちゃくちゃ
緩いことである。

わりと笑えない

だって今日の前で姫様に狼が襲いかかろうとしているからな!!

僕は魔力で身体を強化して姫様の元に駆け付ける。

ああ間に合うか間に合わないか微妙スピードだな・・・全身の魔力
を脚に集中させ、さらに加速

かなりのスピードなので触れる小枝で肌が切れて血が出ている

姫様は迫りくる狼の爪に恐怖を感じ、目を閉じてしまう・・・諦め
んなよ、アホ姫!!

ギリギリで間に合い、右腕で姫様を抱き寄せ狼からの爪を庇おうと
する。

しかし全身に魔力を行き渡らせていたわけではないので、右腕は生身

・・・よって簡単に爪が通り、さらに痛みで硬直したことにより第一撃を胸につける始末

ぐっ鈍ってるな僕

とりあえず狼を追い払うためにファイヤーボールを放つが

ここでどっかの紅い魔術師さんみたいなスキル発動

死の間際のせいか火事場の馬鹿力+うっかりで加減を間違え、大爆発を発生させてしまうorz

その衝撃で緩んでいた地盤がずれ土砂崩れ発生してしまった。

当たり前のように巻き込まれる僕とアホリエッタ姫

風で障壁をはり、土砂で押し潰されないようにしつつ左手で姫様が離れないよう抱きしめる。

限界まで頑張ったのだがさすがにダメージが大きかったようで、魔

力が切れて気絶した。

目が覚めると目の前で泣きじゃくっているアホリエッタ・・・アン
リエッタ姫

そして首も動かせないほど衰弱した僕

さらに周りは土砂だらけ

で最初のお話しに戻るわけだよ
分かるかい？

この最悪な感じ

魔力ないし血足りないし体のパーツ足りないし、ないない尽くしだ
よ畜生！！

ああもう絶対姫様とは遊ばねえ

命がいくつあっても足りないよ

あまりにも泣き声がつるさいので黙らせようかと本当に何回か思い
ました。

・・・はあ、しょうがない生き残るためだ。

僕は肺に穴が空いてしゃべりにくい状態で姫様に話しかける。

「コヒュー・・・ひ・・・めさ・・・ま・・・」

「グスツ・・・しゃべらないでユウキ・・・しんじゃうわ」

「ぼく・・・に・・・ヒュー・・・ファ・・・ヒュー・・・イ・・・

・・・ヤーボールを・・・ヒュー・・・撃って・・・くだ・・・さ・・・
い」

「なっ!?!どうして!?!」

「い・・・い・・・ヒュー・・・から・・・はや・・・くっ」

「・・・分かったわ」

そういつてあまり納得していない顔をしつつも杖を構えファイヤー
ボールを僕に向かって撃ってくる姫様

助かった!!

僕は殲滅眼を使用してファイヤーボールを吸収し自分の肉体を再生させる。

「力を喰らう・・・」

とりあえず致命傷な感じの肺から

姫様は撃った瞬間目をつぶっていたが、爆発するような音がしないので目を開け肉体が再生していく僕を目を見開いて驚愕した様子で見つめている。

今程度の魔力だと肺しか再生できないか・・・
とりあえず命は助かったからよしとするか

肺が治り会話も可能になったので呆然としている姫様に話しかける

「大丈夫ですかアホリエツタ姫？」

「……えっ……ええ大丈夫ですってアホリエツタ!？」

うん元気が戻ったようでよろしい

「もう一発……今度はさらに強いファイヤーボールをお願いできますか？」

「……あっはい」

姫様は従順に僕の言ったことに従い、先程より強いファイヤーボールを撃ってくる。

「力を喰らう……」

吸収し肉体とエネルギーに変換……腕は繋がってギリギリ動かせる程度に

エネルギーは身体が動かせる程度に

ようやく起き上がることが出来たので周囲から（大気やら土砂+少し姫様）殲滅眼で魔力を吸い上げる。

複写眼に切り替えここから出るための魔法を放つ前に姫様に一言

「今日僕がしたことを秘密にしていただけですか、姫様？」

「あつ！？……ええわかりました」

何したかあんまり理解してないみたいだな……よかったおバカさ
んで

と内心馬鹿にしつつ

魔法発動

僕が作った魔法ではなく、既存の土系統の魔法で僕たちの上にあっ
た土砂を全て巨大なゴーレムに変える。

ああダルい

ゴーレムを使ってそこから引き上げさせ、そのままサイズを小さく
して僕と姫様を乗せて城に向かう。

そして門番に止められながらも城につき、姫様を太后にお渡しした。

身体が治ったのはいいけど若干血が足りない。

フラフラした僕を尻目に太后と姫様の会話が始まる。

「どうして城をでたのですか、アンリエッタ？」

「……………」

「黙っていては分かりませんよ？」

ああ太后様わりとキレ気味だよ

ざまあ

「…………だれも私をひつようとしてない気がしたからです」

「…………それはどういことですか？」

ちよっ太后様！？

いきなり態度が軟化してますよ！？

「…………お母様はいそがしいし、城のみなもいそかしくて私の場所が…………ないみたいで…………みんなに嫌われているみたいで…………」

悲しくて」

ああ？

そんなことのために僕は致命傷を負ったのか・・・ああいらついち
やったよ僕

「失礼します」

パンツ

そう言つて姫様の頬を張り、呆然と僕を見つめている姫様にお説教
を開始する。

「甘えるな！！アンリエッタ・ド・トリステイン。貴女は姫なんだ・
・孤独なのはしょうがない淋しいのは分かる。だが見誤るな」

「・・・」

「外を見てください。外には貴女がいなくなつたと聞いて探し回つ
た兵たちがいます。」

確かに大后様の命令で動いたかもしれませんが・・・それでも嫌いな
奴を探すためにあんなに必死に貴女を探すとお思いですか？」

「・・・」

静かに俯いていくアンリエッタ姫

「居場所がない貴女のために駆け回り泥と汗にまみれる人がいますか？」

「・・・グスツ・・・ヒッグ・・・」

肩を震わせ泣き始めるがまだ終わりではない。

「この国の皆は貴女を愛していますよアンリエッタ姫・・・もちろん目の前で少し目の赤いマリアンヌ大后も」

僕に言われ顔を背ける大后を見上げる姫様

全く素直じゃない大后様で・・・いなくなって一番騒いでいたくせに・・・

さあて・・・お説教も終わったし・・・死ぬか

「失礼しましたマリアンヌ大后。王族に手をかけた罪甘んじてこの身で受けたいと思います大后様」

王族の頬をひっぱたくなんざ前代未聞。普通に不敬罪とか反逆罪で殺されます。

まあそれなりの準備はあるけど・・・

「はい。・・・では罪を申しつけます」

「お母様っ!？」

大后様に姫様が縋り付くが大后様は受け入れない。

「汝ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリ
スは王族に手をあげました・・・よってここに処刑と処します」
「・・・お母様」

再び泣きそうな姫様

そりゃそうでしょ不敬罪を赦したら国が壊れるからね

大丈夫すでに身代わりの準備は万端だぜ!

「と言いたいところですが・・・私の娘を助けたばかりか、娘の心
も救ってくれた功績があります」

ああよくて百叩きとかかな?

悪くて何年か独房とかか・・・

「よって汝ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペ
ラトリスに翌日よりアンリエッタの護衛見習いとして城中にあがる
ことを命じます。」

「はあ!?!?」

一番最悪なものでした。

《続く》

2話：お姫様に殺意沸くって相当なことだよね？（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

疲れましたorz

お説教のシーンがもう少し綺麗に纏められる気はするんですが・・・
僕の貧相な語彙と愚かな文才では無理なようです。

次回も微妙に過去編

ようやく出だしに近づいてきた感じですよ。

次回もお楽しみに？

3話・僕とみんなとプロジェクトU（前書き）

3話です

またろくでもない話

いつもよりは長めです

誤字脱字は報告お願いします

3話：僕とみんなとプロジェクトU

「いやいや陛下お待ちください。僕はアンペラトリス家の出来損ない、絞り滓などと言われているロクデナシですよ？」
そんなのを姫様の護衛に置くのはまずいですよ」

「自分でそういう事を言える時点で貴方をロクデナシだとは思えないのですが？」

ぐっ・・・まずい
この流れは・・・

「しかし・・・こと護衛となりますと僕のようなものでは・・・」
「大丈夫です。まだ見習いですからそこまで期待しているわけでは
ありません」

・・・ああはめられたな
うん
先立つ僕をお許してください母上

「失礼します!!」

くっまずいまずいぞ母上がいては逃げることは容易ではない・・・
というか無理だ!!

「ふふふ・・・陛下この魔法はうちの息子が作ったのですよ？」
「母上っ!?!」

「そうそれは知らなかったわね・・・優秀だったみたいね」

ニヤニヤと笑いあう母上と陛下

「それに息子は杖なしで魔法を使うことも可能ですわ」

「ちよっ母上!?!」

何故こんなに簡単にベラベラと僕の秘密を・・・はっ!!

そして僕は気づいた。・・・母上が入ってきた扉が開いており、母
上の後ろに大量の酒樽がつんであることを

あのアマっ!!

買収されやがった！！

「母上っ！！僕を売りましたね！？というかその量からして元々売
る気でしたね?!」

「あらあら人聞きの悪い・・・何を証拠に「後ろの扉が開いて酒樽
が見えてるんですよ、母上えっ！！それ前から飲みたいって言っ
たヴェンテージワインですよね？そうですよね!?!」・・・あらな
んのかしら?」

そう言っつて扉を閉める母上

やられた

最初から僕を売る気だったんだ畜生っ！！

まずい本格的にまずいぞ！！

このままでは何か原作に変な影響がでるフラグが立っている。

というか目立たないようにしてきた意味ない！！

「諦めなさいユウキ・・・人生は無常なものよ」

ぐっならせめて・・・せめて!!

「お願いします!!一年間だけ猶予を!!一年間くださったら城中にあがり姫様の護衛をさせていただきますから・・・どうぞ一年間ください!!」

陛下は悩み母上とゴニヨゴニヨと僕に聞こえない声で相談している。頼む一年あればなんとかなるんだ・・・

「いいでしょう一年間の猶予を与えます。その間に更なる研鑽をつみその後アンリエッタに誠心誠意使えなさい」

「ははっ!!ありがとうございます」

助かった・・・しかしまだこれからだ
これからが大事なんだ・・・

城から家に帰るまでにどうやってアレをつまぐ発動させるかを計画する。

まあ協力者がいるから多分大丈夫だろう・・・多分

あっ・・・右腕繋ぎ忘れてた。

「諸君大変なこととなった」

家に帰り右腕を繋げ、屋敷の裏庭にある隠し部屋に同志たちを呼び集め会議をする。

「どうしたんっすか、若？そんな真面目な顔して」

今言ってきたの庭師の一人アルフだ。

「どうせユリさんに下着の盗難がばれたとかでしょ？」

今のは料理人のヨナン・・・ちなみに下着の盗難はまだしていない。それとユリとはメイド長である。

僕の探知魔法をくぐり抜け僕の覗きを妨害してくる鉄の女でもある。

「いやその割には真面目な顔していらっしやるから重要なことかも
しれません」

これは裁縫師のマルス

全員友達であるちなみにまだみんな10代

僕たちは四人で覗きスポットを搜索し情報交換をしあう仲である・・・
・うんろくでもない。

「プロジェクトUを起動します！！」

「プロジェクトUを！！」

「いやいやそれはまずいでしょ下手したら吊されますよ？」

「それをしなきゃいけない状況ってことっすか？」

「どうしたんですか、ユウキ様？」

三者それぞれに驚愕する中何故プロジェクトUを発動させなければいけないかを話す。

「あと一年で城中にあげられて、僕の自由な時間が消滅してしまう・
・それまでに・・それまでにメイドさんを隅々まで楽しみたい
んだっ！！！」

「というか若は貴族なんっすから何をしても許されると思うんっす
けど」

「それにユウキ様は使用人たちの中でも好感度高いですからね」

「というか若を貴族とは思えないんだけど・・・」

「それは僕に貴族の品位がないということか！？」

「まあそれもあるけど普通の貴族と違ってお礼言ってくるし、困ってたら手を貸してくれるし、平民相手でも敬称をつけるし・・・普通の貴族じゃありえないことだからなあ」

あるのかよ!!!

とつかお礼言つのも手伝つのも仲良くならない限りは敬称をつけるのも、これら全て当たり前のことネ!!!

「そのせいで使用人たちはユウキ様はかなり忠誠心を持っています」

「女性使用人の仲には若になら抱かれてもいいって言うてる人がいるぐらいすからね」

「何っ!?!? 本当か!?!? ならシャロンちゃんを抱いてくる」

シャロンちゃん「この屋敷のアイドルメイド

サラサラの金髪を持っていて可愛い顔立ちでかなりの巨乳で魅惑的なボディの持ち主

ちなみに兄上がアホみたいに夜伽に呼んだことがあるが全力で阻止した・・・あのクソガキがっ!!!

父上はメイドに手を出したら母上に殺されるから心配はしてないぜ
！！

「「「待つてや！」「」」

三人にガツチリホールドされる。

「確かにシャロンちゃんも言ってたけどちょっと待とうか」

「離せ！！待つていてくれシャロンちゃん！僕が今虜にしてあげる
からね！！」

「精通もしていない子供が何を言っているっすか」

忘れてた！！

まだ8歳だったよ僕

「魔法でなんとかなる！！」

肉体を強制的に成長させるとか

「というかそんな才能あるんだから普通に出世してください」

「断るっ!!」

僕と三人の睨みあいが続いたが時間がないので一時休戦とし、話を続ける。

「とりあえずプロジェクトUを開始しよう」

ちなみにプロジェクトUのUはユウキである。

つまりこのプロジェクトは全て僕の前で行われ、僕のために行われる。

くっくくくっ見てるがいいメイドたちよ

全員我が足元にひざまずかせてやる。

特にユリ

ユリには何回覗きの邪魔をされたか・・・何回三人が引きずり回さ

れたか

ああ僕は別口で母上に折檻された。

さあ同志よ

今こそ立ち上がれプロジェクトUのために!!

side ヨナン

うちの若様はかなり変わった人だ・・・というか変人だ。

まず俺達との出会いがおかしい

仕事をしている中で顔は何回か見ていたが完璧には覚えていなかった。なので最初は誰かわからなかった。

・・・あんな格好をしていればなお分からない

ある日俺とアルフとマルスの三人で近くの村に買い物に来ていた。

俺達三人は性格が全員違うがメイドフェチということでもかなり息が合い仲良くなっている。

そして買い物に来た村が異様に騒がしかったので、そちらを見に行くと例のごとく貴族様が村の娘相手にお騒ぎになっていらっしやりやがりました。

周りの野次馬から話を聞いてみると、村の女の子がお酌をした時にお酒を零して

貴族の服にかけてしまったらしく貴族様は服が汚れた罰として手込めにしようとした

で女の子は嫌がり、手を振った際にそれが顔にぶつかったらしくそれに貴族様がキレて女の子を手に掛けようとしているとのことだ。

周りの奴らは誰も貴族が怖くて手が出せない・・・俺はアルフとマルスと顔を見合わせ貴族と女の子の間に入り、仲裁することにした。

「そこまでにしてください貴族様」

「ここはアンペラトリス様の領地です。あまり騒ぐと御当主様がおいでになりますよ?」

「なんだ貴様らは？アンペラトリス様とはお知り合いだからなんら問題ない！！だから失せる！」

「いえそういうわけにはいかないっす」

貴族に立ちはだかる俺達

それを見た貴族は顔を真っ赤にして激怒し、杖を抜いて俺達に向けてくる。

「どかぬなら貴様らから手打ちにするぞー！！」

「どきませんー！」

「ぐっ……」

貴族が杖を振るおうとした時、貴族の後ろに薄い赤色の髪をして薄汚いつなぎ（修理業者が着ているやつ）をきたガキがバケツを持って立っていることに気がつく

そしてガキは杖を振るおうとした貴族に向かってバケツの中身をぶちまけ、中身は泥らしく貴族は泥だらけになった。

「あつすいません手が滑りました。僕も手込めにしますか？
あつもちろんお断りなんで殺される前に先に殴らせてください」

とニヤニヤした笑みを浮かべていやらしく嫌みを言うてくる。

もちろん貴族様はぶちギレてガキに向かって杖を向ける。

「私をランティー又家のものとしての狼藉か！！」

「はっ地方で領民を苦しめている貧乏貴族が笑わせんな」

「なつ私を侮辱するつもりか！！」

「ああそれよりあなたは僕をアンペラトリス家のユウキ・エンドリ
オール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスと知って杖を向けて
いるのかい？」

「「「「はあ！？」「」「」

嫌なことに貴族様と八モつちまった。

確かにあそこの若様は変わっているが・・・あんな面して

・・・あつ本人だ。

あの薄い赤色の髪に目つきが悪い顔

間違はなく若様だ

やべえよ

何してんだよあの馬鹿様は・・・火に油を注ぐなよ！

「はっ・・・貴様がアンペラトリス家のものだとしても、あそこの次男はおおうつつけの恥さらしだ。殺しても問題あるまい！！し」は
い」ガハッ？！」

貴様様が何か言っている間に若様は目にも留まらぬ速さで貴様様に近づき股間を蹴って気絶させていた。

「僕はうつけだけど・・・うちの母上は息子を溺愛してるから間違
いなく殺されるぜ？
まあ聞いちゃいないか」

と言つて貴族を蹴つて地面を転がしていた。

顔によくつけないきゃなとか言つてさらに顔をめちゃくちゃ踏んでい
る。

やりすぎだから!!

で若様は何を思ったか地面に倒れている女の子に手を差し出して、
立ち上がらせていた。

貴族があんなことするなんて・・・本当に変わった貴族様だよ全く

さらに若様は頭を下げ「その貴族が君に迷惑をかけた。本当にす
まない・・・この馬鹿には二度と手を出させないようにしよう」と
言っている。

女の子はあわあわして聞いちゃいない・・・周りの野次馬も突然領
主の息子が現れさらに頭を下げたことに慌てている。

そして若様は不意に頭をあげ、俺達に目を向け話しかけてくる。

「あなたたちはうちの使用人だね・・・ああいった手合いは今度から無条件で黙らせていいから、僕の名の元でフルボッコにしても構わないよ。」

それと・・・君たちはメイドが大好きだね？」

「えっ・・・あっはい」

「なら一緒にメイドを愛でよう・・・ああともっとフランクに話しかけていいから、メイド好きとは友達さ」

そういつて若様はニヤニヤといい笑顔を浮かべて俺達を引き連れ屋敷に帰り、そこでいい覗きスポットを教えてくれた。

元々屋敷でメイドを異様な目で見ていた俺達に興味があつたらしく話しかけるつもりだつたらしい。

ちなみに若様はつなぎを着ているところを奥様に見つかり折檻されていた。

こうして俺達は若様と友達になったわけだが・・・ろくなもんじゃ
ねえな

s i d e
o u t

《 続 く 》

3話：僕とみんなとプロジェクトU（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

今回は完全にギャグですWWW

今だに残りの魔眼が決まりません

終わってるな僕

次回もお楽しみに？

4話：ひき たん！（前書き）

4話目です

感想ありがとうございます

皆さんから色々な魔眼のアイデアをいただきましたが
余計決まりにくくなりましたorz

友達曰く

最初の三つだけでチートすぎて才人くんがいらなすぎるとのこと

うんまあやりすぎ感があります

誤字脱字は報告お願いします

4話：ひき たん！

「諸君！我々はとうとうやり遂げた！！」

「「「サイエスサー！！」」」

麗らかな春の中で集まった変態4人の声が響く

「正直頑張りすぎて偏頭痛がしたり、手が包帯だらけだったり、寝不足だったりするが・・・我々はやらなければならないっ！！」

「「「やらなければならないっ！！」」」

「そうそこに秘境がある限り私たちはそこに立ち向かい続ける！！」

「「「立ち向かい続ける！！」」」

「さあ始めよう！！僕たちの戦いを！！ジークメイド！！ジークオ

ッパオ!！」

「「「ジークメイド!」ジークオツパオ!」」」

異様なテンションの中
とつとつ始められたプロジェクトU

その概要は果たしてなんなのか？

「こちらハンター目標接近中オーバー」
「こちらマウス了解したオーバー」
「こちらバンビこちらもブツの用意はできたつすオーバー」
「こちらドッグこちらもセッティング完了いつでもいけますオーバー」
「」

「というかこれすごくないっすか？オーバー」

「こんなの初めてみましたオーバー」

「そうだろう僕制作の遠距離通信機だからねオーバー」

「そんなの作れるんだから真面目になってくださいオーバー」

「はっオーバー」

「どうやって会話しているんだ？オーバー」

「風石のかけらを使った通信方法だオーバー」

「貴族じゃなくても使えるってことっすかオーバー」

「いやボタンを押すことで一つの風石を振動させて他の風石を共振させ声を通達させているからさすがに始動に魔力が必要だねオーバー」

「というかオーバーって言う必要あるんですかオーバー」

「何を言っただマルス・・・その場のノリが優先されるんだオーバー」

「まあいいですけどオーバー」

「むっ目標が来たので一時連絡を中止するオーバー」

僕はやってきた目標に接近し話しかける。

「おはようございます兄上」

「ちっ」

舌打ちされた・・・まじで半裸にして馬で市中を引きずり回してやるのかな

「なんのようだ？」

「いえ兄上をお見かけしたので挨拶をしようと思ひまして」

「・・・・・・・・何を企んでいる？」

なんて疑心暗鬼なクソガキなんだ

たかが7〜8回騙して肥貯めや落とし穴やホモの泉（ガチな人達が集まっている場所）に落としたりぐらいで素晴らしい弟疑うなんて全く信じられないぜ

「いえ企むだなんて・・・あつ肩にゴミがついてますよ？お取りします」

兄上は少し悩んだ様子を見せたが馬鹿な兄上の考え休むに似たりつてね

すぐに了承しましたよ

「・・・頼む」

馬鹿めっ!!

「力を奪う・・・」

ふっ 殲滅眼を改良し対人相手でも食べないで魔力が吸えるようにしたのさ

「なっ・・・」

いきなり急激な速度で大量な魔力を奪われ気絶する兄上

これで邪魔物は消え、イケニエも手に入れた。

「こちらハンター。チキンサクリファイスを手に入れたオーバー」
「こちらもバッチリだオーバー」

よしこれでだいたいの準備は整ったぜ

行くか

「これよりプロジェクトUを開始する諸君悔いのないようにしたまえ！ーオーバー」

「了解！ーオーバー」

くっくっくっ見ているがいい

愉快的なショーの始まりだ！！

まず最初にメイドたちの井戸端会議場に接近・・・今は休憩なので大抵のメイドがいる。
シャロンちゃんの実在も確認完了

よし気張っていくぜ！！

わざとらしく大声で呪文詠唱をする。

「え〜とえ〜ラス・テル・マ・スキル・マジステル！！ウォーター
スライド！！あっ・・・失敗しちゃった！！」

そして失敗した魔法が暴走し至る所から水が吹き出てメイドたちを襲う。

もちろん失敗などではない・・・追尾する水柱などがあつたら聞いてみたいものである。

よしだいたいのメイドは水でびしょびしょに・・・ちつユリの奴が残っていやがった！！

まずいユリは濡らすか気絶させるかしなければ計画に支障が・・・

くっこうなれば・・・あまりこの手は使いたくなかったが・・・

僕は服の中から魔法で作ったあるものを取り出して操りユリの前に出現させる。

・・・1・・・2・・・3・・・ボタン・・・よし気絶した。

まさかあの銀髪鉄仮面メイドが蛇が苦手なんてギャップ萌えすぎるな

というか女の子相手に嫌いなもので攻める手は好きじゃない・・・
まあ時と場合によるが

気絶したユリを木陰に運び込み、びしょ濡れになってしまったメイドたちの前に登場する・・・濡れた服が体に張り付いて皆さんえらく扇情的な格好になっています。

だがまだだ！！まだ足りないっ！！

「すまないみんな、魔法を使うのに失敗してしまった。そのまま仕事するのは多少問題が出るので、詫びも兼ねてお風呂に入って来てくれ服はこちらで用意しておく・・・本当にごめん」

最後の言葉と共に俯き本当に悲しそうな落ち込んでいますというオラを出す。

そうするとみんな慌てて

「しょ・・・しょうがないですよ！！ユウキ様は風のメイジなんですから不慣れな水を使ったら失敗してしまいますよ！！」

「えっええだからそんなに落ち込まないでください！！」

「ほら私たちも休み時間が伸びたしお風呂に入れるので役得ですから！！」

「元気出してくださいユウキ様！！」

励ましてくれるメイドたち……

ふっ計画通り

)()()() () () () () () ()

「ありがとうございます……こんな愚かな僕を許してくれるなんて」
「いっついえ気になさらないでください！！では失礼します」

そう言っつてメイドたちは風呂場に向かう。

ちなみに貴族と平民はお風呂の様式が違い平民はサウナらしいのだが父上に風呂の大事さを説いて無理矢理風呂に変えさせた。

僕から離れるとメイドたちは小声で

「キヤー 失敗して落ち込んでいるユウキ様可愛かった」
「あの可愛い顔で謝られると嗜虐心をそそられるわよね？」
「いつも笑顔なのにあんな悲しい顔をされると堪らないわ！！」

などと言っている……プロジェクトUしない方がいい気がする

たな。

このまま順当にいけばいつか違う意味の魔法使いにはならず済んだかもしれない・・・

まあまだ未来があるさっ！！

「こちらハンター。獲物を狩場に送り込んだオーバー」

「こちらマウス接近を確認した。これよりプロジェクトU第二段階へと移行する各自集合せよオーバー」

「了解オーバー」

「了解したっすオーバー」

「了解しましたオーバー」

ふふふさあ今度は風魔法の出番だな

皆で一時集まり全員に風の魔法をかけて偏光率を変え身体を透明にする。

まず更衣室に侵入し皆の濡れた衣服を収集、さらに代えの衣装を各

自の棚に入れる。

ちなみに全員のボディサイズは把握ずみ、複写眼を利用しみんなを解析した。

くつくつくつ複写眼にはこのような使い方もあるのだよ

まあ二三日ぶつ通しで複写眼を使い続けたから使い過ぎて偏頭痛がするけど

そんなものはほとばしるパッションで痛覚を消滅させ痛みなんか無視してるけどね!!

みんなも似たようなものだし

代えの衣装を作るのにみんな三日三晩徹夜をして針と糸でチクチクチクチク衣装をつくり
たまに針で指を刺してしまったりしながらも血と汗を流し続け衣装を制作した。

最後らへんは頭痛とか目の痛みとか指先とか色々ヤバかったけど皆ほとばしるパッションが異常だったのでそんなの余裕で無視でき

るのである。

うんこれ常識

さすがに四人じゃきつかったかもしれないが今眼前に広がるアヴァロン（理想郷）を見れば後悔などない！！

アヴァロンにあるのは、無限に連なる乳の山脈

標高の小さなものよ高いものがあるが全てが美しい

昔見た霊峰の美しさを思い出させられる。

ああなんとという美しさ

最初に見たときについ全員でハモってしまったぐらいである。

「「「イエス！！」「」「」

おおシャロンちゃんあの雪のような柔肌に水がぶつかり反射して・
・あぁヤバイ鼻血が

同志たちもハアハアと息を荒げて興奮している・・・刺激が強すぎる！！

僕はおかしくなりそうな脳みそを落ち着かせるためにアヴァロンから一度目を背け、壁に頭突きをし続ける。

僕の姿が見える三人は若干引いているがそれどころではない・・・このままでは確実にアヴァロンに飛び込んでしまう。

緊急処置を終えアヴァロンに再び目を向けると、何故かこちらをガン見しているメイドたちがいた・・・うん透明化が今ので解けたみたい

「サクリファイス・ザマウス！！」

「イエスマイロードッ！！」

「なっ！？お前らズル・ぐはっ？！・・・きつきたないぞ・・・」

ヨナンを殴り弱らせ皆一斉に逃走を開始する。
すまないヨナン・・・君の犠牲は忘れないさ！！

しかし僕たちの前に立ちはだかる影
しまったユリの奴もう起き上がったのか！？

くっしょうがない正面突・・・ぱ・・・

突撃した瞬間合気道のようなもので投げられ湯舟に飛ばされる。

そうして呆気なく御用と相成った。
全員罪を重ねあい泥沼化していく・・・当初の予定では兄上に罪を
被せる予定だったのに

ちなみに兄上は口に猿轡をしてロープで木に吊してある。

そして代えの衣装についてだが、皆が破棄しようとしたが

四人で土下座しつつ「後生ですから着てください！！僕（俺）たち

の魂の結晶なんです！！」と恥も外聞も躊躇いもなしに頼みこんだら全員着てくれた。

ゴスロリメイドもやはりいいな！！

皆でアイコンタクトをとりサムズアップした。

夜なべして作ったかいがあったぜ！！

ちなみにメイドたちも気に入ったらしくその後たまに着ているのを見かける。

そしてその後全員折檻を受ける羽目となり、僕だけ何故か上級ハドコースな母上だった・・・地味に笑えなかった。

ちなみに兄上の存在を何日か忘れ

ふと思いだし救出したのはいうまでもなくお約束というやつである。

《続く》

4話・ひき たん！（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

若干ギャグに走りすぎてキャラが崩壊した気がしますますが気のせいでしょう

次回も全くノープランですが

次回もお楽しみに？

5話・母親同士の繋がりがあって果てしなくウザいよね(前書き)

真面目か!!

ええところどころ悪ふざけがあります

今回はいつもより長め

誤字脱字は報告お願いします

5話・母親同士の繋がりがりって果てしなくウザいよね

やあユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリ
スだよ

今僕は縄でぐるぐるに巻かれ、馬車に入れて郵送されているところ
さ！

前回のプロジェクトUが少々母上が気に入らなかったらしくてね

あるところで教育を受けさせるらしい・・・キャツホー死亡フラグ
だぜ

ちなみに母上の元同僚の烈風のカリン様です。キャツ・・・死にてえ

というか母上カリン様と同僚ですか！？
えっグリフォン隊の元隊長？聞いてないですね！！

隊長同士で隊員の扱き方で盛り上がった？

最低な盛り上がり方ですね母上！！きつと近くで聞いていた隊員たちは涙を流してビクビクしていたと思いますよ！！

えっわざと聞かせた？

さすがドS女帝ですね母上！

えっ冗談ですよ冗談！！

母上にそんなこと言うわけじゃないじゃないですか！！

はぁ・・・

まずいませういよ

ラ・ヴァリエール家なんて聞いてないよ

本当にエレオノールさんとか勘弁してください

まだルイズは間に合う気がするから調教して性格を・・・ああでも
変なフラグが立って婚約さそられたら嫌だし

ああーづ！どうしようー！ーっ！！

そんなこんなで着きました。

ええ非常に残念です・・・目の前には白くなりかつか金髪に髭を
生やし左目にモノクルをつけたダンディーなオジサマと桃色がかっ
たブロンドをもった目付きの鋭い女の人がいらっしやいました・・・
お揃いで囚人をお引き取りに？

95

「初めましてユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アン
ペラトリスです。ミセス・ヴァリエール」

「初めまして・・・カリーヌで結構です」

「ははっ久しぶりだねユウキくん。何日か泊まっていくそうだね？
ならば是非アレを・・・」

「ええ分かりましたヴァリエール公爵。アレですね」

小声でヴァリエール公爵と男のお話しをする・・・母上とカリーヌ様に聞かれたら殺されるからね！！

「聞こえていますよ」「

・・・おあと二人とも風のスクウェアメイジだったZE

すみせん公爵

「公爵に官能小説と春画（エロ画像）を頼まりました！！イエスマム！！」

ふっ正直に話せば僕は助かるからな

「ちよっユウキくん！？男同士の友情は！？」

そんなもの命に比べたら安いものさ

「ヴァリエール公爵に脅されて・・・ぐすっ・・・しょうがなく・・・

「・

「あなた・・・少しお話しが」

「えっちょっと・・・」

引きずられていく公爵
ドナドナドゥナ

まあ母上たちもさすがに僕が春画と官能小説で一財産稼いでいる」とは知るまい。

97

「ユウキ・・・聞きたいことがあるのですが」
「なんででしょうか母上?」

「貴方はセーラー・ニース・サイコー・ハナムーラという名前の人物を知っていますか?」

「イエマツタクシリマセン」

うん僕のペンネーム

バレてるZE

「・・・後でOHANA SIしましょう」

そんなお話しは嫌だーっ！

絶対ボディーランゲージでしょ！？

公爵と並べて魔法的とかにするんですよね！？

やめてください公爵

だいの大人がそんな

ざまあって言うみたいな目で子供を見るのは

二人仲良く折檻されたあとヴァリエール三姉妹と挨拶しました・・・
やっぱりエレオノールさんは無理だったわ。

カトレアさんは最高です！！

あんな義姉が欲しいっ！！血が繋がって意味がないんだっ！！

まあルイズと結婚するのは無理だからカトレアさんを義姉に迎えるのは無理な話だな

残念

とまあ冗談はともかく色々お話しをしたあと

少しヴァリエールの屋敷を歩き回ることにした。

綺麗な庭園があり湖もある

暇なので湖の近くで水面をチャプチャプ叩いて遊んでいると・・・
後ろから誰がやってきた。

振り返ると・・・母上でした。

普通ここはヴァリエール三姉妹の誰かじゃないのか!?

何故ここで母上を!?

「何をしているのですかユウキ？」

「暇潰しです母上」

「そうですね・・・」

母上は僕の隣にやってきて横に座る・・・珍しい母上が地べたに座るなんて

母上は無言で僕と一緒に湖に生まれた波紋を眺めている。

そして幾許かの時間が経ち不意に母上が口を開いた。

「カリンの娘のカトレアちゃんって知ってるわよね？」

「ええ先程ご挨拶をさせていただいたところですから」

「彼女原因不明の奇病を患っているらしいわよ」

「へえ〜そうなんですか」

「なんでも有名な水ねメイジや医者に頼んでも治らないらしくてね。カリンが不憫でならないわ・・・カトレアちゃんもあんなに可愛らしいのに」

病気で領地から出られずに・・・可哀相よね」

「そうですね」

「……………」

全くこの人は……

「言いたいことがあるならハッキリ言ってください母上」

「カトレアちゃんの病気を治しなさい」

治してあげてとかじゃなくて命令ですか母上

でもなあ

「無理です」

「……………」

理由を言つんでそんな笑顔で剣呑な視線を向けないでください。

「僕に彼女の病気を治すことは出来ません」

「あら、春画と一緒にベッドの下に隠してあった本に書いてある貴方が作った治癒用の魔法を使ってもかしら？」

やめてください男の子の部屋は時と場合によっては女性の部屋より繊細なんですから

というか他のページは見てないですよ？

母上が知ると僕が死ぬる魔法があるんですが・・・

「あれでも無理ですね」

というかあれは失った組織を再生させる魔法なのでカトレアさんのように病気が身体の一部と癒着している場合には全く効果がない・・・

「・・・ならどうしたらカトレアちゃんを助けられるのかしら？」

「さあうついで愚昧で愚かな僕には分かりません」

僕は皮肉げに片頬をあげる。

「・・・ユウキ。」

「・・・これは母からの一生のお願いです。どうか我が友カリンの愛娘を助けてあげてください」

「・・・。。。」

「・・・僕だって助けたいさ」

「お願いですユウキ」

僕の手を握り瞳を見つめ頼みこんでくる母上に僕は瞳を逸らし唇を噛み締め答える。

「・・・できる限りはします」

すると母上は笑顔を浮かべて言う

「なら大丈夫ですね」

「えっ・・・」

僕は母上の言葉に開いた口が塞がらなかった。

何が大丈夫なんだ？

母上はさらに笑顔を深くして言い放つ・・・最も親バカな台詞を

「私の息子に出来ないことはありませんから、うふ」

僕は母上に台詞に愕然とし、そして笑う。

「なっ！・・・クツ・クツクク・・・アッハッハハハ・・・おっ
親バカすぎですよ母上。

なんですかそれは・・・クツクツアッハハハハハハふうプッ
プハハハ・・・あぁもう」

「うふふ」

ニコニコ笑う母上

全くやられたよ畜生

やられましたよ母上

こんなこと言われたら・・・・・・・・・・やらないわけにはいかな
いじゃないか

「さあ見せてください・・・私の可愛い息子。貴方の素敵な奇跡を」

ええ見せましょう！

貴方の息子であるユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスの最高の魔法を！！

とりあえず情報の整理だ

先程カトレアさんを複写眼で解析した結果分かったことは、あれは普通の病気じゃないってこと

多分最初はただの癌だったと思う

だけど残留魔力を吸収して癌細胞が増殖進化したと推測される。

残留魔力っていうのは

例えばファイアーボールを撃つのに必要な魔力を10とする。普通に撃つのに10必要わけだが威力を高めたり調整する場合には10ではなくなる

しかしカトレアさんの場合10の魔力でファイアーボールを撃とうとして過剰に魔力を作り15ぐらいの魔力でファイアーボールを發動させているんだと思う。

本来なら10で発動するファイアーボールが15で発動させられたら威力が大きくなるか無駄な5の魔力は空中に霧散するのだが、カトレアさんの場合体内に残ってしまふのだろう。

これが残留魔力

本来ならなんら影響なくむしろ魔力が体内に残るので肉体が活発化するはずなのだが、カトレアさんの場合癌細胞が魔力を吸収したためにあの様な状態になってしまったんだと思われる。

で問題なのがこの進化した癌細胞が魔力を吸収するということと身体の一部に癒着しているということだ。

普通のメイジの治療は魔力を媒体にしているから治療しようとするたびに癌細胞が進化していく
逆に医者だとまだ癌細胞というものを理解していないので身体の一部としか見れないわけだ。

で僕に治せるかと言われれば少々賭けの部分が多すぎるのだ。

例えば複写眼の力で癌細胞を解析し分解するとして癌細胞が魔力を有しているせいで何かがあるか分からないし癒着部分も部分で・・・癒着部分は心臓なのである。

何かあったら再生魔法を使って治せばいいかもしれないが僕は医者じゃないのでどの程度の無理が利くかが全く分からない。

逆に殲滅眼を利用して癌細胞が有している魔力を全て奪い取りただの癌に戻し複写眼で分解するという手もあるが、さすがに体内にまで殲滅眼の能力を通すことは出来ない。

さあてどうしようかな

複写眼を使う手が一番いい気がするんだが・・・
ああどうしよう?!

考え事をしながらまだ湖でパチャパチャやっている間に母上は去ったらしく
知らない間に一人になっていた。

はあ・・・母上め

「あら」

「ああ？」

声をかけられた方にガンをつけてしまった・・・僕はどこの出来そこないのチンピラだ

「ユウキくんよね？どうしたの怖い顔をして」

噂のカトレアさんだった。

「いえなんでも・・・」

と言いつつ半目で複写眼を発動させカトレアさんをさらに解析する・・・やっぱり僕の思った通りだ

癌細胞の魔力の吸収化が原因だな

「あら素敵な目をしてるわね」

「っ！!?」

バレないように半目にしてたのに・・・

バレたのでしようがなく目を開く

「素敵な紋様ね・・・これはなんなの？」

「複写眼というものです。全てのものを解析できる魔眼です」

「あらあら凄いわね」

コロコロと笑顔を浮かべるカトレアさん・・・この人母上に似てるなあ

これに怖さが加われば完璧に母上である。

おっと寒気が

「カトレアさんの病気も解析できますよ」

「そつなの？治りそつ？」

簡単に聞くなこの人は・・・

「正直きついです・・・治すなら命を懸けないと無理です」

「そう・・・病気は治したいけど・・・ルイズや家族といられないのは嫌ね」

ですよね〜

「でも貴方なら信用出来るわ」

「はっ？」

何を言ってるんですか貴女は・・・

「貴方を信じれば大丈夫・・・そんな気がするのよ」

言いながら僕の鼻の頭を人差し指でちよんと可愛らしく触るカトレアさん・・・ああ全く母上も母上だしカトレアさんもカトレアさんだ！

こんなうつけになんでも任せるなよ！！

「・・・じゃあいきます」

僕はカトレアさんを助けるために複写眼に力を込めつつ、空中の魔力をかき集め再生魔法をいつでも発動できるようにしておく

「癌細胞を解析し分解す「待ちなさい」っ！？カリー又様?!」

僕の後ろには杖を背中に構えたカリー又様が立っていた。

いつの間に？

全く気づかなかつたよ

「なんのつもりですかカリー又様？」

「貴方こそなんのつもりですかユウキ殿？何の確信もなく実験的な方法で娘を治療しようとするのはやめてください」

殺気が込められたその台詞に怯えながらも反論する。

「ではどうすれば？」

「もういいのです・・・私は・・・私はカトレアが生きていてくれるだけでいい。

例えばどんな病にかかっているても・・・私より早く娘に死なれてしまいたくはないのです」

「・・・お母様」

カリー又様の声は震えていた。
あの烈風のカリンがだ

ああ畜生責任重いな！！

賭けはできないし・・・ああせめて体内から魔力を正常に排出でき
れば

・・・あつ

出来るじゃん！！

魔法じゃなければいいんだ！！

「カリー又様・・・僕に最後の手段があります」

「・・・それでカトレアは助かるのですか？」

「多分・・・いえ必ず助けます」

僕はカリー又様の目を強く見返す。

「信用しましょうユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリス」

「ありがとうございます」

よしやったるか！！

「ではお手を拝借して」

カトレアさんの手を取り説明をする。

「このように動いてください」

と地面に三角形を繋げたような図形を書く

下記

	1	8	3		
	<	<	<		4
0	—	—	—		
•	>	>	/		
6	7	2	9		

「1から9まで0と6は被ります。
終わったら1から繰り返してください」

「これはなんなの？」

疑問を呈するカトレアさん

カリイ又様は無言です・・・逆に怖い

「これは東方にある魔法の一つ陰陽術の一つ禹歩です」

「オンミヨージユツ？」

「ええ不躰にいえば異端です」

「そう変わってるわね」

カリイ又様無言・・・可愛い愛娘のために無視かな？
鋼鉄の規律はどうしたんですかね？

「まあ改良版ですが、実際の禹歩は

禹歩の法、前に左を挙げ、右左を過り、左右に就く。次に右を挙げ、
左右を過り、右左に就く。次に左を挙げ、右左を過り、左右に就く。
此の如く三步せば、満二丈一尺に当たり、後に九跡有り
というものです」

今言ったのは治療ではなく道の安全を祈る方なので関係なし

禹歩の一つは体内の病魔を追い出すための歩法なのだが今回は追いつくのではなく
病魔をループさせ魔力を消費させる。

移動させることにより癌細胞の魔力を排除させる

でやっていただいたんですが・・・鼻血が止まりません。乳揺れがヤバい
あれはまずい

カリーヌ様がヤバい目で見てきたので真面目に逝き・・・いきたい
と思います。

複写眼でカトレアさんの癌細胞を解析・・・完全に魔力の排除を確認
「・・・解析し分解する」

癌細胞の分解完了・・・疲れたーっ!!

というか禹歩なんかよく覚えてたな僕

ありがとうライトノベル

一家に一冊ライトノベルを

ライトノベルのおかげでテストの点数もアップ彼女もできました。

ライトノベルのおかげで足が早くなり公式戦で一位に

もうライトノベルを手放せません。

うん調子に乗りすぎた

おふざけをやめて周りを見ると

何故かカトレアさんが目を見開いて呆然としている・・・ああ分かったんだ

「カトレアさん多分分かったと思いますが・・・治りましたよ完璧に」

にひっ

最大級の笑顔を悪戯げに浮かべる

「ああ・・・お母様っ！！」

「・・・カトレア」

涙を流しカリーヌ様に走り駆け寄るカトレアさん

そして抱きしめあう二人

僕はその光景を見ながら思う

こんな愚かな僕一人でも小規模ながら奇跡が起こせる

・・・この世界はなんて凄いだらう

本当にこの世界は素敵だ

月夜は煌めき星は輝き草木はざわめく湖は囁く・・・本当に美しい

ああ大好きになってきたよこの世界

んっ？ああ親子の感動の場面に僕はいきりませんよね？

じゃあアディオス！

《続く》

5話・母親同士の繋がりがりって果てしなくウザいよね（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

うんやっちやいましたね

陰陽術

元々結構好きだったからしょうがないww

実際の禹歩はループしません
今回使用したのは地獄先生ぬ べ〜で使用されたものを活用しました。

というか今現在出ている魔眼候補が

アイオン
却の眼

直死の魔眼

写輪眼

歪曲の魔眼

風の聖痕（危うく即決しそうになったww）

バロールの魔眼

カトブレパスの眼

どれがいいかな？

なんか転移系の魔眼が欲しいんですが
作者の知識内ないので知っている人がいたら教えてください

次回もお楽しみに

6話・無限の覗き魔（前書き）

おふざけが酷すぎるWWW

今回かなりエヤシロウくんに謝らなければいけないようなネタがあるのでは

Fateファンの方で嫌な方は読むのをやめてください

前書きで書いたので否定的な批判は全部全力で無視します！！

誤字脱字は報告お願いします

6話・無限の覗き魔

「あの〜」

「うふふ」

「もうよくないですか?」

「うふふ」

「僕の精神的なライフはすでに0なんですか」

「あらあら」

「聞いてますか? 貴女のお姉さんの視線が僕の魂を惨殺しているんですが」

「あらあら」

「

「ど〜ゆ〜すび〜くジャパニーズ? って日本語じゃねえか」

「うふふ」

「というかもう離してくくださいっ!」

「あら駄目よ。これはお仕置きなんですから、うふふ」

「もう……しませんから……」

「嫌み」

「じゃあああああーーーーーっ!!」

今僕はカトレアさんの膝の上に乗せられ赤ちゃんプレイばりの過保護を喰らっています・・・さっきからエレオノールさんの視線がヤバイです。

突き刺さるなんでもんじゃありませんゲイボルグってます。

若干ルイズも睨んでますがあれはお姉ちゃんをとられたという感じの視線だと思います

ほら食事中ですよ？マナー悪いと思いませんか？

許可出ているから問題ない？そうですね・・・この羞恥プレイは母上たちの策略なわけですね？

「はいあ〜ん」

「いや自分で食べれますから・・・」

「駄目よ〜お仕置きなんだからね」

「ぐっ・・・」

何故僕がこのような羞恥プレイにあっているかと聞かれると話は今朝に戻る。

昨日カトレアさんの病気を治し、誰が治したかの口止めを頼み寝ました。

さすがにバレると異端審問とかくらいそうなんで

で翌朝

超ご機嫌な母上と珍しくというか初めてじゃないのか？微笑を浮かべたカリーヌ様が庭でお茶を飲みながらお話しをしていたので、逃げようとしたら・・・後ろから捕縛魔法が飛来して僕の足に巻き付き引きずられて母上たちの近くに連れ去られました。

「おはようユウキ」

「おはようございますユウキ殿」

僕は土のついた服を払いながら挨拶を返す

「おはようございます母上、カーリー又様」

すると母上が手招きをしているので近寄ると

何故か拘束魔法（母上には絶対に教えないようにしていた）で腕と身体をまとめて拘束された。

ちなみに拘束魔法は物質化した魔力の帯で敵を拘束する魔法である。

そして持ち上げられ母上の膝の上に乗せられる。

「これなんという羞恥プレイですか母上？」

「うふふ昨日はちゃんとカトレアちゃんを治したそうね。さすが私の息子ね」

そう言って笑顔を浮かべ頭を撫でてくる母上

「いややると約束したので・・・」

居心地が悪い・・・というかまじで恥ずかしい

モゾモゾと逃げようとするが母上は僕を抱きしめ逃げられないようにする。

「もう離してくれませんか?」

「あら駄目よ、これは愛しい息子とコミュニケーションなのだから」

「その愛しい息子は全力で拒否権を使用しているんですが・・・」

「ダメ」

さらにニコニコする母上・・・くっなんだなんだこのプレイは!!

というか「これではまじでママゾンになりかねん!!」(わりとママゾンだと作者は思う)

「カリンも撫でる?」

「……遠慮しておくわ」

「あらそう」

母上はさらに僕を撫でくり回す……。ちよつやめてっ！！やめてえ
えええええええええええええええええええええええええええええええ
えええええええええええええええええええええええええええええええ
……………！！

解放されたのは一時間後だった……。ふっ燃え尽きたぜ、おやっさん

126

しょうもないことを思いつつライフを回復させるために、屋敷の屋
根に魔法で上がり屋根に座り胡座をかき集中する。

風の流れて風呂場を探し出し確認する……。よし使用中だな

ちなみにこの屋敷も使用人用のお風呂があるのである……。公爵と
ほとばしるパッションをディスプレイした結果公爵も風呂場を
作っただけらしい。

魔力を集中させ風に視覚情報に移させる。

この魔法は実験段階だからまだ成功するか分からない

集中集中集中集中集中集中

『I am the bone of my breast (体は
おっぱいでできている)』
僕の身体が怪しく光りだす

『Passion is my body, and lust
is my blood. (血潮は情熱で 心は欲望。)
』

風が吹き荒れ僕を中心にとぐるをまく

『I have watched over a thousand
d breast. (幾たびの戦場を越えて不敗。)
』

風と僕の魔力が混ざり始める

『Unaware of loss. (ただ一度の失敗もなく、)
Nor aware of gain. (ただ一度の成功もなし。)
』

まだまだ！！まだ集中が足りないっ！！

『Withstood lust to watch breasts
peeping for one's arrival.
(担い手はここに独り乳の丘で欲望を満たす。』)

ピンク色の魔力と青い風が混ざりあい竜巻になる

『I have no regrets. This is the
only path. (ならば、我が生涯に意味は要す。)
』
今だ！！

『My whole life was "unlimited
breast peeper." (この体は、"無限のおっぱい"
で出来ていた。』)

完全に混ざり合った魔力と風が吹き荒れ視覚が風に移行する。

フツハハハ成功した！！成功したぞっ！！

ようやく手に入れた最高の覗き魔法を！！

使ってる途中

エ ヤシロウに謝れとか聞こえたけど気のせいだろう

フツハハハ

覗きH O U D A I

キヤツホー

ハアハアうへへへまずはお風呂

アヒヤヒヤヒヤ

最高です

ここにもあったのかアヴァロン（理想郷）よ！！

これなら前回のよう飛び込みそうになる心配はない！！

鼻血が止まらない・・・カチャツ・・・思わず両手を上にあげた。

「何をしているのですか？」

おっとまた気配が感じられなかったZ E

とつかカリィ又様とか死亡フラグ

杖を背中に突き刺すのをやめてくださいカリィ又様

「魔法の勉強です！！イエスマム！」

「ほうあんな膨大な魔力が必要な魔法とは如何なるものですか？」

やべえ魔力垂れ流しにしすぎたorz

「いえ実験的なものだったので調整を間違えまして・・・」

「ここらへんは邪まな風が流れていますね」

まあ僕の欲望を注ぎ込みましたからね

「失敗したみたいなんで失礼しますね・・・」

「随分と邪まな風のように使用人たちの風呂場に向かっていたみたいです」

「……………」（滝汗）

「何か言い残すことは？」

「…………我が生涯に一片の悔いなし」

「よろしい」

僕の身体に城を壊せそうな大きさの『カッタートルネード』が突き刺さった。

その後スタボロになった僕を引きずり母上に引き渡すカリーヌ様

母上は「あらあらお仕置が必要ね」とドSな笑顔を浮かべています。

で現状にいたるわけですよ

ええ逃げられません

魔力の使いすぎとカリリーヌ様のお仕置きで身体が動きません

確かにカトレアさんの太股の柔らかさと顔にあたるおっぱいは嬉しいんですが・・・公爵からは殺気

エレオノールさんからは黒いGを見るような目で見られています

うんべリーベリーきついね

とつか普通の体罰より堪えるorz

もう本当に解放してくださいorz

「さあ食事も終わったし一緒に風呂に入りましょうか」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアア————————————————————————
」————————————————————————つ————————————————————————」

《続く》

6話・無限の覗き魔（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

やりすぎ感が募る××です

残り二つの魔眼についてですが

一つはオリジナルにすることにしました。

まだ能力については書きませんがあまりチートじゃないので悪しからず

もう一個が全然決まらないけどorz

今一番人気なのが却の眼です

作者は11eyes見てないんで

ちゃんと把握できてないと思われま

まあでも登場するのまだ先なんで
まだ時間があります

次回もお楽しみに？

7話・あさきゆめみし（前書き）

感想ありがとうございます

うんまあ感想というか魔眼についてのお話が多いけど

頑張っています

そういえば過去編は2〜3話とか言いつつめっちゃくちゃ続いていますね

誤字脱字は報告お願いします

7話・あさきゆめみし

13歳なのに随分と素敵なボディのカトレアさんから逃げ回り続け

時間も経ち

『カッタートルネード』

「うおおおおおーーーーーっ!?!?」

『カッタートルネード』

「そおいつ!?!」

『カッタートルネード』
『カッタートルネード』

「ふんっ!?!?!せいっ!?!?!」

分かりますか？

一日一回は迫りくるカッタートルネードの恐さが？

分かりますか？

風の刃が完全に首を落とすコースでくる恐さが？

分かりますか？

ドS女帝（母上）が嬉々として魔法を放ってくる恐さが？

殲滅眼も複写眼も使うのを禁止されただひたすら逃げ回っています

母上たちに一撃でも当てたら終わりにしてくれるらしいです・・・
無理じゃね？

いやだってあの人達風の流れて僕の場所を確認してるから目眩まし
とか聞かないんだよ？

必死こいて発生させた煙幕が一瞬で消され一瞬で隠れていた場所に
風の刃が飛んでくるんですよ？

起き上がり周囲を見てみると湖の上の小船から聞こえる・・・ああ
ルイズか

多分魔法が爆発するからキツイ姉ちゃんやカリー又様になんか言われ
たんだろっとな

まあ今無駄なイベント起こしたくないから無視だな無視

フハハハあんなピンクの核爆弾はいらん！！

普通に無視をして再び寝転がる。

暇なので湖から魔法で少し水を汲み上げ形を変え遊ぶことにした。

ネズミ〜猫〜犬〜熊〜竜〜オカン

だいたい強い順に作っていく・・・母上より強いものが思いつかない
宇宙戦艦とかか？

などくだらないことを考えていると・・・視線を感じました。

それもコソコソ見る感じじゃなくてガン見・・・無視に限るな

水を空中に霧散させ、寝たふりを決め込む・・・むしろ自分に催眠魔法をかけたい!!

パタパタと近づいてくる足音がして、僕の上が瞼越しに暗くなる。

「ねえユウキ・・・」

「すーすー」

話し掛けない僕は寝てんだから!!

「ねえ」

「くみみもっとうううう」

「ねえってびびっ!!」

ちつとるせえな

「何？」

僕は起き上がり嫌そうな顔をする。

「何よ嫌そうな顔して少しは喜ばなさいよ」

ルイズは僕の顔を見て不満げに言ってくるので

「ルイズ！ルイズ！ルイズ！ルイズ！ルイズううううわあああああああ
ああああああああああああああん！！！！
ああああああ．．

．ああ．．．あつあつー！あああああああ！！！！ルイズルイズル
イズうううあわああああ！！！！

ああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハー！スーハー！スーハー！ス
ーハー！！いい匂いだなあ．．．くんくん

んはあつ！ルイズ・フランソワーズさんの桃色ブロンドの髪をクン
カクンカしたいお！クンカクンカ！ああ！！

間違えた！モフモフしたいお！モフモフ！モフモフ！髪モフモフ
！カリカリモフモフ．．．きゅんきゅんきゅい！！

ルイズたんかわいいよう！！ああああ．．．あああ．．．あつあ
ああああ！！ふあああああんっ！！

ルイズたん！あああああ！かわいい！ルイズたん！かわいい！
あつああああ！

会えて嬉し．．．いやあああああ！！！！にゃあああああああ
ん！！ぎゃああああああ！！！！

ぐああああああああ！！！！コミックなんて現実じゃない！！！！
！！ああ．．．小説もアニメもよく考えたら．．．
ルイズちゃん は 現実 じゃ な い？にやあああ
ああああああああん！！うああああああああ！！
そんなああああ！！いやああああああああ！！はあ
あああああん！！ハルケギニアああああ！！
この！ちきしょー！やめてやる！！現実なんかやめ．．．て．．．
え！？見．．．てる？表紙絵のルイズちゃんが僕を見る？
表紙絵のルイズちゃんが僕を見てるぞ！ルイズちゃんが僕を見てる
ぞ！挿絵のルイズちゃんが僕を見てるぞ！！アニメのルイズちゃん
が僕に話しかけてるぞ！！！！よかった．．．世の中まだまだ捨てた
モンじゃないんだねっ！！
いやっほおおおおお！！！！僕にはルイズちゃんがいる！！！！や
ったよケテイ！！ひとりのできるもん！！！！
あ、コミックのルイズちゃんああああああああ！！！！い
やああああああああん！！！！シ、シエスター！！アンリ
エツタああああ！！！！タバサアああ！！！！
うううううう！！！！俺の想いよルイズへ届け！！！！ハルゲニアのルイ
ズへ届け！！！！というか僕今ハルゲニアに居てルイズに会ってる
けどおおおおおーーーー！！！！」

「もついい？」

僕のおふざけにルイズは目をあげ呆然としている。

「じゃっ僕の最大限の嬉しさを表現したからさようなら!!」

立ち上がり逃げようとしたら

ガシッ

「待ちなさいよ」

捕まりましたorz

「意味のわからないこと言わないでよ!!」

「だって～面倒なんだもん」君が!!

m9j'(.!!

「……ねえどっやったらユウキみたいに上手に魔法が使えるの?」

「僕風のドットメイジだけど？」

「なっ！？嘘よ！！さっき水で色々作ってたじゃない！！見てたんだからね！」

この桃色核弾頭めっ！

僕は頭を掻きながら応える

「気のせい気のせい英語でいうとウッドスピリットってやつだよ」

「英語？なにそれ？・・・じゃあドットメイジのユウキがあんなに上手く魔法を使えるってことはなんか秘密があるんでしょ！！！」

背理法ってやつ？
頭いいな〜

「ないない」

「ならどうしてお母様やウルズ様（母上）がユウキに魔法を教えているの！？」

あれは教えるというか折檻だからね

あんなん受けたいならいつでも代わるけど？

「僕が出来損ないだからだよ」

「・・・なら何にもできないわたしはなんなのよ」

と言って俯いてしまうルイズ・・・ああうぜえっ！！
うざっ！！うざい！！

こんな僕柄じゃねえっ！！

僕はルイズの肩を叩き湖の方を指差す

ルイズは顔をあげ湖を見るがそこにはなににもない

「なによ」「さあご覧にいれましょう！！ユウキ・エンドリオール・ル・デフアンス・ド・アンペラトリスによる最高の魔法ショーを！！」「えっ？」

湖の水を魔法で操り人の形にして何体か作り水人形たちによる舞踏会を始める。

まずお辞儀、そうして手を取り合い踊らせる軽快なステップ優雅に踊る人形たちさらに風を振動させハープやバイオリンやピアノの音を奏でる。

「うわぁ」

その幻想的な風景にルイズは目を奪われ口を開いている。

そして音楽は終わり舞踏会は終わる、水人形たちは一斉にお辞儀をして水に帰る。

「あっ・・・」

ルイズは終わってしまった水人形たちの舞踏会を見て残念そうな顔をして声をあげた。

僕も人形たちに併せてお辞儀をする。

「如何でしたか、レディー？ユウキ・エンドリオール・ル・デファ
ンス・ド・アンペラトリスによる魔法ショーは？」

「……………」

再び無言で俯いてしまいうルイズ……なんだよまたか？

励ましたつもりだったんだが……失敗した？

「す……」

「す？」

「すごいじゃない！！あんな魔法みたことないわ！！どっやってや
ったの！？」

急に顔をあげ僕の襟を掴みガクガク揺すってくる。

なんだ感動してたのか

「それは秘密ということ……」

「・・・もう何が出来損ないよ。わたしなんか・・・」

「だああああーっ!!」

「うぜえ！」

「暗いのうぜえーっ!!」

「ルイズ」

「何？」

「杖を構えてみて」

「えっ?なんで？」

「いいからやれや！」

「いいから」

「分かったわ」

ルイズはそう言って渋々ながら杖を構える

「じゃあファイアーボールを作ってみてくれる？」

「・・・うん」

僕に言われ自信なさそうにファイアーボールの呪文を詠唱していく
ルイズ

僕はそれを複写眼で解析していく・・・うわぁこれが虚無か

キモッ！！

魔力が捻れてる！

なんていうか・・・電圧がずっと乱れて一定にならない感じ

こんなんじゃ発動なんかしねえよ

というか魔力の性質が気持ち悪い・・・僕でも複写するのは不可能
な気がする

『ファイアーボール』

ズドンッ！

うん案の定失敗です

「・・・やっぱり失敗したわ」

「あぁ～もう一回やろう」

「・・・もういいわ。どうせ無理なんだから」

「いいからいいから」

僕はルイズの手を取り杖を構えさせる。

「ちょちょっと!」

「はいはい集中して」

「う、うん」

「我は無、無にして有限なるもの。有ありて無あり、無ありて有あり。我が心に広がりしは虚無なり」

「えっ?なにそれ?」

「何も考えずに魔法を発動させてみな。今のはその心構え」

「でも魔法はイメージだつて魔法の先生が・・・」

「いいからやってみて」

というか虚無の君が系統とか考えても意味ないでしょ

だから魔力が捻れるんだって

無が火や水に変わるわけないでしょうが

『ファイアーボール』

ボツ！ドンツ！

はい成功

「えっ？嘘・・・成功したの？ねえ・・・今成功したの？」

「ああうんそうだね。基本的な魔法は今のやり方でだいたい出来るから」

応用とか難易度高いのは無理
それは虚無に目覚めないよね

今のは鍵穴に何分かしたら固まる粘土みたいなのをに入れて無理矢理
鍵を作って開けたようなもんだから

複雑な鍵だと開かないのだ

「・・・・・・・・・・やった!! やったわ!!」

はしゃいで飛び回るルイズ

あれうざささ倍増?

「ありがとうユウキ!」

何故か抱き着かれる僕

あれフラグ? これフラグなの?

しまったー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

《続く》

7話：あさきゆめみし（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ルイズフラグは回収しないので悪しからず

というか魔眼が決まらないからもう近眼とか邪気眼とかでいいかな
と思いはめる作者

後先考えなさすぎorz

まあ次回もお楽しみに？

8話・過ぎたころには既に遅く、遠い傳い夢とならん(前書き)

今回は短めです

さして面白くもなかつた話しが進むだけです

誤字脱字は報告お願いします

今からトリスティン王に挨拶に行くところです・・・ぐすっ

なんか今までゲルマニアで会談をしていたらしくお会いしたことがなくて初めてお目にかかるんですが・・・正直作者が忘れていただけな気がする（キノセイダヨby作者）

そんなこんなでお城に

「お初にお目にかかります陛下。今日からアンリエッタ姫の護衛見習いを勤めさせていただきユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスと申します」

「うむ。8歳にしてその物言い素晴らしいな・・・してユウキ・エンドリオール。汝は大層な魔法の使い手であると我妻リアンヌから聞いている。その腕を披露してはくれぬかな？」

余計なことをーーーーするなーーーーっ!!

「ははっ御意にございます」

嫌々ながらも王様の命令は絶対なので、杖を取り出し植物を生み出す。

「ふむ、植物を生み出すとは初めてみる呪文だの・・・これだけか？」

「これからでございます陛下」

そう言っつて杖を振る。

「東方には面白い考えがありましてそれを披露しとございます」

「見せてみよ」

「五行思想と言いまして万物は5種類のものから成り立ちその5種類は互いに効果を及ぼしあうというものです。

まずは木生火

木は燃えて火を生む」

植物に魔法で火をつけ燃やす。

「次に火生土

物が燃えればあとには灰が残り、灰は土に還る」

これはそのままなのでスルー

「次に土生金

鉱物・金属の多くは土の中にあり、土を掘ることによってその金属を得ることができる」

灰を錬金し純金に変える

「おお

「さらに金生水

金属の表面には凝結により水が生じる」

魔法で金の温度を下げ表面を凝結させる。

「最後に水生木

木は水によって養われ、水がなければ木は枯れてしまう」

純金の表面から木を生やす。

「以上でございます陛下」

「うむ、なかなか面白いものであった・・・しかしこの程度ではあるまい？」

ちっ面倒くさい

折角目立たないように目立たないように生きてきたのに・・・

「ではこれで・・・」

外から水分を呼び出し、ルイズに見せた水人形による舞踏会を見せた。

「おお素晴らしい！！見事であった！！」

「光栄でございます陛下」

膝をつき頭を下げる・・・臣下の習いだね

「・・・そなたは二つ名を持っていたかな？」

「ああ・・・いえありません」

ロクデナシとか微風とか悪逆非道とかならつけられましたがちなみに製作者は兄上

ああ腹立つ

「では余から二つ名を授けよう」

「ははっ」

まじかよ!?!?

また目立つネタが増える!!

「汝の二つ名は『魔法』そなた程の魔法使いは見たことがない！！
そなたにこそ魔法は相応しい」

「ありがたき幸せでございます陛下」

・・・『魔法』かよ

また微妙な二つ名を

「では下がってよいぞ」

「畏まりました」

そして王の間から退室する。

・・・はぁ疲れた怠い
もうやだお家に帰る

と落ち込んでいると

ドンッ!!

「ゲフツ!?!」

ロケット頭突きを喰らった・・・効果は抜群だ!

というかレバーが・・・

「ユウキ!!ようやく来たのですね!私はずっと待っていたのですよ?」

そう言って僕に抱き着いてくるアホリエッタ姫

普通に引きはがし、たしなめる。

「姫、ダメですよ女の子は好きな男以外にそういうことをしてはなりません」

「なら問題はありませんね、私はユウキが好きですから!」

「かはっ」

そう言って再び抱き着いてくるアホリエツタ姫

僕はあまりの事態の最悪さに・・・吐血した。

やべえ絶対これ死亡フラグだって！！

とうにか僕与えられた一年の間で僕のうつけ伝説をさらに増やして、僕を王宮にあげてはいけなくらいにさせようとしたのに・・・覗こうとしたら母上とカリーヌ様に察知され、毎日のように扱かれ精も魂も尽き果てた状態にされ・・・シクシク

なんにも出来なかったorz

とうにかヴァリエール家に連れていかれた時点で気づくべきでした。
・・・母上が僕の作戦に気づいているって

今日王宮にくるまえに母上に言われたんです・・・「計画通りいかなくって残念でしたね、クスッ」って

完璧に分かってましたよねあの入？嫌がらせですよね？

ああもう嫌だ

なんだろうこの頬を流れる水滴は・・・何だか虚しいや

自分の人生の流動に絶望しているとマリアンヌ大后がいらっしやっ
た・・・まだ僕の体にアホリエツタ姫がくっついてる状態で

死んだZE

「久しぶりですねユウキ殿、アリエツタと仲がいいようで」

ニヤニヤすんなー！！

「いえこれは「アリエツタ離しちゃダメですよ」「はいお母様！
！」」

最悪や

なんか最悪な予感がする。

「では今日からのアンリエッタの護衛頼みましたよ？」

「……はい受けさせていただきます」

ああ空が青いなあ〜

もう本当に帰りたいです母上

マザコンでいいんで……帰らせてください

その後ずっと右腕に抱き着いてくるアンリエッタ姫に困りながらも色々と城内を案内された。

こうして僕の護衛見習い生活が始まったorz

《続く》

8話・過ぎたころには既に遅く、遠い夢い夢とならん(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか？

次回から何年か飛びます

ようやく8歳を終わりにできます・・・長かったな

今日ゲーセンにいつてメルティーブラッドをやったら途中で乱入されフルボッコにされましたorz

格ゲーとかめちゃくちや弱いから練習してたのに・・・ひでえ(泣

若干涙目です

今回はあんまり考えていません(まあいつも通りですわW)

次回もお楽しみに

9話：マスターソード扱いちゃいました（前書き）

9話です

また話しが進むだけです

マザリーニの登場

誤字脱字は報告お願いします

9話：マスターソード抜いちゃいました

A f t e r f i v e y e a r s

トリステイン王が崩御して2年が経ちました。

マリアンヌ大后は喪に服しアンリエッタ姫は国の象徴として忙しい日々を過ごしており

かくいう僕は護衛見習いを卒業、女王陛下直属のユニコーン隊の隊員をやっています。

そして現状

このまま放っておくとこの国は他国に吸収されたり色々あるのは目に見えていた。

しかしさすがに自分のいる国がなくなるのは嫌なのでようやくやって来たマザリーニに色々と国を栄えさせる方法を与え、自分はのんびり過ごそうとしていました・・・but

N o w

「僕は案は出すが手伝わないうって言ったぞおおおおおーっ
！！というか僕の方が書類一山多いんじゃないか？」

「使えるものはクソガキでも使わないとやってられないんです。
一山多いのは見間違えです、数も数えられなくなりましたか？」

「なら他のやつ使えや！！
数えられないのはお前だ、チキンボン野郎！！もう許さん！！キ
ツチリ半分だけ殺してやる！！」

「他の方は誰と繋がっているか分かりませんからね。私を半殺しに
したら書類は全部貴方の方にいきますよ」

この鳥の骨がっ！！

「ぐっチクシヨーーーーっ！！こんなつもりじゃなかった
のにつ！！
僕は昼寝して覗きをして女の子とイチャイチャしたただけなの
にーーーーっ！！」

僕の夢い嘆きの叫びはかなりの大音量で城中に響きわたり大半の人の
耳に入った。

……後で聞き付けたアンリエッタ姫に折檻を受けたのは言うまでもない

s i d e マザリーニ

今日の前で姫様から逃げ回っているクソガ……子供、ユウキ・エンドリオールと知り合ったのは先王が崩御し、空位となった王座が心配なり

国に宰相として使えることになった初日である。

あのクソガキは最初城に不慣れであろう私の案内役として私に付けられていて三日ぐらいは普通に任務を果たしていた。

しかし途中で飽きたと言わんばかりに私を放置し、使用人たちの風呂（何故か使用人たちも貴族と同じ風呂であった）を覗きまわり

隊員たちに捕まり折檻をうけていた。

そして私が城にきて一週間が経ったある日

私はクソガキに呼び出され城の中から国が一望出来る場所へと連れていかれた。

ユウキ・エンドリオールは最初外を眺め私に何も話し掛けては来なかったが、不意に口を開きこんなことを言いはじめた。

「なああんた、あんたはこの国が好きなのか？」

と今までのこいつからは想像も出来ない真面目な顔で言われた台詞に私は驚きつい真面目に返してしまった。

「ああ私は先王が崩御し、マリアン又様も喪に服され空位となった王位が心配になってこの国の力となりたくてここに来た」

クソガキは私と向かいあい指先を私に向けて言い放つ

「本当か？嘘じゃないだろうな？」

直後空中に氷で出来た刃物のようなものが10本ぐらい現れ私に刃先が向けられる。

「嘘だったら殺す」

そう言ったクソガキの目はとても11歳のするような目ではなく、何かを守るために必死な者のする目であった。

そうして張りつめた空気が私を覆う中、私は誠意と本心を込めた目で目の前の子供を見つめ返し答える。

「本当だ」

「なら協力しろ」

クソガキが指を降ろすと同時に空中にあった氷の刃は霧散し、先程まで張りつめた場の空気が消えた。

「僕は国を栄えさせる手段と方法を知っている貴方にはそれを実行してもらおう。もちろん貴方が利益の見れないと思ったものは実行し

なくていい」

「それは・・・」

「ただし僕が提案したことは誰にも言うな」

「はあ？」

私は驚いていた最初は子供が名をあげるために私を利用するつもりなのかと思っていたのだが・・・このクソガキは自分の名前を出すなど言う

「何故名前を出してはいけない？」

「・・・目立つし面倒だからだ。目立つと仕事が増えて、偉くされとど・・・面倒な悪循環が増すばかりだ。ロクなもんじゃない、だいたい二つ名を与えられた時も・・・ブツブツ・・・」

何か恨みごとを言っている子供を前にして私は呆然とした・・・面倒だから？

目立つから出世したくない？

クックククなんなんだこの子供は

普通の貴族と全く逆の考えじゃないか！

アツハハハ八面倒だから嫌とは恐れ入る

私は声に出して笑い続けた、それをクソガキは不思議そうに眺めていたが途中で使用人たちの怒鳴り声が聞こえたのを皮切りに逃走し始め

その場から飛び降りてどこかへと消えていった。

先程から不思議に思っていたんだが……あいつ杖なしで魔法を使つてないか？

城にいて異端審問とか受けさせられないのであろうか？

色々と考えているとモップやら釘バットを武装した使用人たちが飛び出してきた。

「どこに行ったクソガキーっ！！あつ、宰相様。ここに赤い

髪の子供が来ませんでしたか？」

「ユウキ殿か？」

「ええそいつです」

「ええ、彼がどうかしたのですか？」

「あのガキは度重なる覗きはあまつさえ、とうとう下着を盗みやがったんです！もう許せません！吊します！」

あのクソガキは何をやっているんだっ！！

全く

「彼なら今さっきそこから飛び降りていきましたよ」

「ふざけんなチキンボンっ！！」

「ありがとうございます宰相様！！みんな裏庭よ！！裏庭にいるわ

「！」

まさかまだいたとはな

はあ・・・大丈夫かな？
心配になってきた

s i d e o u t

そして現在アンリエッタ姫による折檻も終わり再び書類に向かい合
う僕とマザリーニ

終始無言でただひたすら書類を処理していく

そして不意にノックをされ兵士の一人が入ってきた。

「失礼します。ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・ア
ンペラトリス殿。太后様直々の命令がございますので至急お向かい

ください」

そう言って扉を閉じ去っていく兵士

そうして書類から顔をあげ見つめ合う僕たち・・・そして

「よっしやあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああ――――
――――！！ごまあみるおおおお――
――！！」

「ちっ・・・早く帰ってくることをお待ちしていますよ」

そう宣うチキンボン野郎

誰が早く帰ってくるかボケエがつ！！

浮気してる旦那並に遅く帰ってきてやらあ――――っ！！

むしる泊まりじや――！！

部屋を飛び出てマリアン又様の部屋に行くとしし遠くの森にいるオ
ーク鬼たちの討伐命令が下された。

すでに死者が出ているらしく早めの討伐を依頼されていたので、女
王陛下直属の部隊であるユニコーン隊に依頼が回ってきたらしい・
・うっしっ!!

しばらく書類を見なくて済むぞ

アヒヤヒヤヒヤぞまあ

・・・そう思っていた時期もありました。馬車に積まれた書類を見
るまでは

あの鳥の骨!!

殺す殺す絶対に殺す

《 続 》

9話：マスターソード抜いちゃいました（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

マスターソード抜いたばりに時間が飛びましたね

本当は8年ぐらい飛ばす気でしたが

まあ中間地点を

次回もお楽しみに

10話・討伐をがんばる(前書き)

またしょうもないお話です

誤字脱字は報告お願いします

「もう終わったのですか？」

「マダdeath」

「早く終わらせてこちらの仕事に集中してください」

「・・・イエスマム」

今話しかけてきたのはユニコーン隊の隊長であるファレンさん・・・
正式な名前は長くて忘れた。火のトライアングルメイジで二つ名は
『灼熱』

僕の見張りでもありますorz

なかなか立派なボディーをお持ちの灰色の髪を持った女の人である。

ちなみに一度戦い方を見たことがあるけど結構エグい戦い方をなさ
る方です。

目標は烈風のカリン様だそうで・・・ああまた変な死亡フラグが

そうこうしている間に目的地に着いたらしく馬車の外にたたき出され整列させられました。

「そろそろオーク鬼が出没するとされる区域です。気を張って行動してください」

「「「「はっ！」「「「「」

ユニコーン隊は女の子が多いんですが・・・皆さん怖いですよね

覗こうもんなら躊躇いなく魔法を撃ってくるし・・・はあ

着いた場所を見回すとそこは湖のほとりらしくなかなか綺麗な眺めである。

ああここはいいデートスポットになりそうだ、まあオーク鬼がいなきゃだげど

湖も綺麗だし泳いだら気持ちいいだろうなあ〜

今暑いし

・・・そうだ!!

いいこと思い付いた!!

アヒヤヒヤヒヤ〜これで早く仕事を終わらせる気が沸いたぜ

頑張る僕お仕事頑張るよ!!

「オーク鬼は15匹という情報ですが、それ以上いる可能性もありますので気を抜かないように!!常に四人一組で行動するよう気をつけなさい!!」

「『イエスマム!!』」

「さあてオーク鬼をぶち殺すぞ野郎どもっ!!」

「・・・俺こんなにやる気のあるユウキは見たことないんだが？」

「覗きをするときはこんなもんじゃないかしら?というかウチは野郎じゃないし」

「・・・覗きの時は冷静に燃えている。あんなテンションではない。ボクも野郎ではない」

上から簡単に名前と特徴を言うと

レイナー（男）茶髪マツチヨ

アイナ（女）緑髪ツインテールセクシーボディー（ファレンさんには劣る）

ナイル（女）銀髪ポニーテールロリボディーボクツ娘

「ぶち殺すぞおおおおおーーーーっ!!ちやっちやと出ていちゃああああーーーーっ!!」

「本当に何なのあのテンション？ウチなんか心配になってきた」

「・・・何故か危険な気がする」

「まあいつもに比べたらいいんじゃないか？いつも後ろで寝ようとするし・・・役に立たないし」

僕は後ろでグダグダ言っている奴らを見無視して敵を探し続ける

「うおっ！？」

レイナーが大声を出したので近寄るとそこには30匹以上いそうなオーク鬼たちがいた。

「うおい！ー！どうするんだよ！？あんなにいるなんて思ってなかったぞ？」

「・・・引くべき」

「そうだね。ウチもそう思う」

「じゃあ一時撤た・・・あれ？あの赤髪バカは？」

「・・・あそこ」

そう既に僕はオーク鬼たちに向かって歩いていく。

「うおおおおおおおおおおおー！！！！！！！！いいいいいいいいいい！！！！！！！！何やってんだあのバカ！！死ぬぞ！！？」

「止めてっ！！レイナー！！ユウキを止めてよ！！！！」

「ああもうあのバカっ！！！！」

僕は後ろを完全に無視して魔力を練りつづける・・・消滅させるための魔力には程遠いから（本来複写眼で何かを消滅させるためには条件があり、それは大切な人が死ぬというかなり嫌なものだが僕の場合は僕の周囲1キロの魔力を全て吸い上げることによって代用している。ちなみに使用後は周囲1キロは2〜3時間魔法の発

動は出来ない)

生き埋めにしてやるっ！！

正直杖はいらないがいらぬ疑惑を集めるのは嫌だから手に持つておく、そして・・・

『アースクローズ！！』

地面を隆起させオーク鬼全てを土で出来たドームに閉じ込める。

さくらこ

『サウザンドアイアンニードル！！』

地面を錬金しドーム内に鉄で出来た鋭い柱を大量に発生させ串刺しにする。

さくらこさくらこ

『バーンボール！！』

超高温の炎を圧縮し作った玉を一時的に開けたドームの中にぶち込みすぐに閉める。

ズドンっ！！

という爆発音と共にドームが崩れ落ちる・・・中にいたオーク鬼たちは塵も残さず無に帰った。

ふっユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスによる最強の魔法コンボだっ！！

というかバーンボールの威力がわりと不安だった・・・アースクロードで覆わないと間違はなくこっちも被害受けてたな

いや反省反省

後ろにいた3人は口を開いてこちらを見ている・・・ふっ僕の美技に酔ったのか

「「「最初からそれぐらい真面目にやれっ！」「」」

めちゃくちゃ怒鳴られました。

「なんなんだあの魔法は！？あんな見たことねえぞ？！というか最初から本気出せやつ！！」

「あんなんスクウエアメイジでも出来やしないわよ！！というかこの前のゴブリン討伐の時にやりなさいよ！！！」

「・・・異常。というかボク的にはサンドワームの時にやって欲しかった。ボク食べられたし・・・」

「H a h a h a ！ たまたまダヨ。もう帰ろっ！！」

口々にウダウダと語るさいメンバーを無視してファレンさんに倒したことを報告する。

「報告します！！オーク鬼30匹、レイナー隊が全滅させました！」

「分か・・・ちょっと待ちなさい。何匹ですか？」

「30匹です」

「・・・本当ですか？」

「はいレイナーが頑張っていました」

平気で嘘をつく

ちなみに余計なことを言おうとしたレイナーには腹にエグいのをぶち込んで黙らせた。

「証拠はあるの？」

「いえレイナーが『アヒヤヒヤヒヤ、オーク鬼なんか俺様が塵も残さず焼き払ってやんぜ！！』と半ばキチガイのようなテンションで焼き殺したんで塵も残りませんでした」

「ちよつガハツ?!」

今度はレバーを蹴り抜く

「そうかご苦労様。では撤収しま」待つてくください隊長!」・・・
「なんですか、ユウキくん?」

「折角湖があるので隊員の疲れをとるために水浴びをしませんか?」

「・・・・・・・・。」

「みんな来てすぐに帰っては疲れがとれないと思います。どうか休
みを!!水浴びをつ!!」

思案しているファレンさんに僕は土下座をして頼み続ける。

「・・・・はあいでしょう。しかし水浴びしようにも襦袢(昔の水
着のようなもの)を持ってきていませんよ?」

「問題ありませんっ!!」

そう言っつて僕は懐から水着を取り出しファレンさんに渡す。

「これは東方の襦袢です!!どうぞこれを使っつてください!!」

「しかし全員のぶ」もちろんあります!!サイズもばつちりです!
「!.....何故隊員全員のサイズを知つてゐるのですか?」

ジト目で僕を見つめてくるファレンさんに僕は目を逸らし対応する。

「.....はあ。まあいいでしょう」

そう言っつて皆に水着を配るファレンさん

アヒヤヒヤヒヤ頑張つたかゝいがあつたぜっ!!

ちなみに後ろで

「だから頑張っていたのか・・・」

という声が聞こえたが普通に無視した。

そして最高の天国が広がっていた・・・胸の大きい女の子たちには
ビキニを渡したんで

プルプルがたまりません

男は全員前屈みになってます、僕含め

特にファレンさんが堪らないなあ〜ビキニを着るのが初めてだから
露出に慣れてなくてモジモジしてるのが普段とのギャップと重なっ
て堪らないっ！！

ついレイナーとハイタッチしてしまった。

いや最高です！！

脳内microSDに保存中アヒヤヒ・・・いや待て
どうして僕はカメラを持っていないんだ？

どうして僕はデジカメやデジタルビデオを持ってないんだ!?

何故ソリッドステードライブに録画出来てないんだっ!?

チクショウ! 魔眼の一つに赤外線撮影機能と大容量ソリッドステードライブがないのは何故なんだっ!?

くそっ!!

これ程我が身が生身だったことを怨んだことはないぞっ!!!!(
血の涙)

・・・まあいい今はこのオツパイ天国を楽しもう!!

あのPSS2のコントロールばりの乳の動きの自由さは最高だっ!!

えっ貧乳はどうしたかって?・・・ごめん僕は巨乳派だからチツパ
イには興味ないんだ

ちなみに貧乳さんたちは全員スクール水着を着せてます

えっどうやって作ったのかって？

そんなのご都合主義と禁則事項によって簡単に説明できるものじゃないっ！！

まあとりあえず・・・・・・・・・・・・・・・・アツハハハざまあみる鳥の骨が！！

その後天国をエンジョイするあまりまだ馬車に書類があることを忘れ、ガチ逃げしようとしたがフアレンさんに捕まり泣きながら馬車の中で書類の処理をさせられたのは天国を見るための代償ということを自分に言い聞かせた・・・・・・・・そっじゃなきややってられねえよorz

《続く》

10話：討伐をがんばる（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ユウキくんは多分分かってませんね
自分がかなり目立ち始めていることにWWW

まあ次回はまた時間が飛びます

次回もお楽しみに

11話・ぶっちょけ主人公違うw(前書き)

更新です

今回から主人公の視点が少しお休みにその変わり新キャラ登場・・・
あれ原作キャラとの絡みは？

誤字脱字は報告お願いします

11話・ぶっちゃけ主人公違うw

a f t e r f o u r y e a r s

あれから4年経ちました。・・・飛ばしすぎじゃね？って言ったやつがかつてこい！！

とまあそれはともかく・・・年数も経ちユニコーン隊の隊員たちも無事出世をしています（一人を除く）

ん？僕？僕はね・・・

s i d e ？？？

どうも初めましてネルフです。

今21歳です

今俺は絶賛迷子中っす・・・というのも初めてきた城の中につかれてキョロキョロしていたら周りの連中に置いておかれ、どこに行けばいいか分からなくなっただっすorz

今日から騎士として働くのに初日から遅刻とかかなりへっこむっす。

俺が配属されたのは女王陛下直属のユニコーン隊で、そこは役に立てば貴族だろうと平民だろうと関係なく取り立てるといっているので軽い気持ちで試験を受けたら受かってしまって、今ここに至るといっわけっす

試験内容は正四角形状の闘技場の上で試験官相手に10分間耐えるか、一撃でも当てられたら合格というもので

俺の相手は灰色の髪をした艶やかな身体をした女の人でレイピアを武器として使っていたっす。

ラッキーで一撃入れられたんっすが、試験官の女の人はとても驚いた顔をして俺に合格を言い渡してきたっす。

周りの人たちもかなり驚いた顔で俺を見ていたので気になって聞いてみると
なんでもあの試験官相手に合格出来たのが俺を含めまだ二人だけだったらしいです。

ちなみにもう一人は長い金髪を一つに束ね頭の上でおだんご状にした小さな女の子だけらしいです・・・その女の子は魔法である試験官に一撃入れたらしいです。というかあの女の人メイジだったんですね

今回の試験で受かったのは、メイジ12人と平民23人でメイジは殆どが貴族であからさまにこちらを侮蔑するような目で見てきます。

そして翌日、今度は城に来るよう言い渡され

現在に至るといっわけっすorz

ああどうしようかなっす

完全に行き先が分からなくなって辺りを見回していると、金髪の小さな女の子が俺と同じようにキョロキョロと周りを見ていた。もしかして・・・

「ええと君も迷子っすか？」

「・・・・・・・・・・。」

すごい不審者を見るような目で見られているっす！！

「俺はユニコーン隊に配属されることになったネルフっす。実は迷子になって困ってたんで一緒に探さないっすか？」

「・・・私も迷子だったからいいよ」

と少し朱くなりながら返事してくれたので、一緒に集合場所を探している赤い髪で薄汚れたつなぎを着た青年がいたので場所を聞いてみることにしたっす。

「すみませんっす。ユニコーン隊の集合場所を知らないっすか？」

「ああ？案内の人に案内されなかった？」

「ええと・・・ぼうとしていたら置いてかれたっす」

赤い髪の青年は口を開いて呆然としていたが、不意に笑い出し俺の背中を叩きだしたっす

「アツハハハそうかそうか、ならしょうがない！案内するよ」

青年は楽しそうに鼻歌を歌いながら俺達を案内してくれたっす

そして最後に・・・

「なあ君、名前は？」

「ネルフっす」

「ネルフね。僕の名前はユウキ、またいつか会うことになると思うからその時はよろしく！・・・絶対アルフの親戚だな（ボソッ）」

青年は終始ごく機嫌な様子で、その場から去っていく

俺たちが着くと同時に隊員に対する挨拶が始まったらしく急いで駆け寄り話を聞いたつす。

「諸君！！よくあの試験に合格しました！諸君たちはまごうことなきユニコーン隊の隊員であります！！」

新隊員達に挨拶と訓令を与えているのは俺の試験官だった灰色の髪の毛の女の人だったつす

「私の名前はファレン・アルメニア・ラ・トーネル・ド・ミネールです、ユニコーン隊の副隊長を務めています。

さてこれから諸君らに配るのはユニコーン隊の証である銀で出来たユニコーンのバッジです。このバッジには数字が書いており、その数字に対応して諸君らの備品の質もあがっていきます」

今配られた銀で出来たユニコーンが玉を抱いて横を向いているバッジが隊員の証らしい・・・ユニコーンが抱いている玉を見るとそこには？と刻まれている。

「一番質の低いのが？です、つまり諸君らのバッジ。これは貴族だろうが平民だろうが関係ないです・・・しかし諸君らにはチャンスがあります！！」

その声を聞き騒がしくなる周り・・・正直俺はどうでもいいっす

「バッジを賭けた決闘をして上の者からバッジを奪うことが出来ま
す！ただし決闘をする場合は我々に申し出ることに。死人を出さない
こと、この二つを守れば何をしても構いません！」

「「「「「おお」「」「」」

どよめき騒ぎ立てる周りの人達

キラキラと欲望を込めた目で話の続きを待つ

「ちなみに最高は？ではありません。その上に四角形、そして五芒
星。最高は六芒星です・・・四角形は部隊長であるレイナー、アイ
ナ、ナイルが所持しています。後で紹介するのですっかりと顔を覚
えるといいでしょう」

そして五芒星は私が所持していますが、負ける気は毛頭ないので覚
悟してくるといいです。

最後に最高の六芒星だが・・・これは隊長が持っています、しかし
隊長は逃げ・・・現在任務で外に出ておられるので今は紹介できな
いのですが、隊長は私より強いので挑戦するだけ愚かというもので
す」

隊長か、どんな人なんっすかね？

この仕組みだと当然一番強い人ってことっすよね？

ああ会ってみたいっす

「質問があるのですが、ミスミネール？」

「……………なんですか？」

ウェーブした金髪を持った碧眼の「私ナルシストです」と言わんばかりのオーラをだした男が副隊長に話し掛ける。

フアレン副隊長はミスと言われた時にあからさまに青筋をたて、尻をヒクヒクさせながらもナルシストに目を向けたっす

「隊長から六芒星のバッジを奪ったら僕が隊長になれるということですか？」

「ええ奪えたらですが」

「それは僕じゃ隊長には勝てないということですか？」

ナルシストは心外だと言わんばかりに手を広げて物々しく言ってく

る・・・うざいっす

「ええ隊長はもちろん？のバッジを持った隊員にも勝てないでしょう。前日貴方たちが戦ったのが？になつたばかりの隊員たちです・・・10分持たせることしか出来なかつた貴方に勝てますか？」

「ぐっ」

ナルシストはうざつたい顔を卑屈に歪めて副隊長の言葉に押し黙る。

「・・・はあ。今年は試験官に一撃当てて合格したのが5人しかいません。その人達には多いに期待を寄せています・・・特に私に一撃当てた二人には」

そう言つてこちらを見たのは気のせいなのだろうか？

とりあえず挨拶も終わり各自が泊まる部屋に連れて行かれたが、二人で一部屋らしく同居人がいたっす。

同居人はユウキだったっす・・・ベッドに横になつてこつちに手を振っていたところを発見したっす。

というかユウキもユニコーン隊だったんっすね

「そついえばどうしてユウキは挨拶に来なかったんっすか？」

こんな目立つ頭をした奴はあそこで発見出来なかった

「僕はユニコーンの世話をさせられてたから挨拶には行かなかったんだよ」

「へえ」

まあユウキも大変っすね。同じ？同士頑張っていきたいっす

そしてその夜はタイプの女性とどんな衣装で興奮するかについて語りあったっす・・・なんか異様に親近感が沸いたのが不思議でしょうがなかった、まるで兄ちゃんと話しているようだったっす

こうして俺のユニコーン隊での初日はなんの事件もなく過ぎていった。

《 続 》

11話・ぶつちやけ主人公違うw（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

オリジナルキャラの口調と性格がまともられねえ（泣）

まあほどほどに頑張ります

ちなみにネルフくんが主人公の外伝をまじで書こうかと思っている僕

まあ止めとこうかな

次回も主人公はネルフくん

次回もお楽しみに？

12話…やはり遺伝か…(前書き)

更新ですたい

キヤッホーやりたい放題

誤字脱字は報告お願いします

12話…やはり遺伝か…

目が覚めるとすでにユウキの姿はなく、ベッドを触ってみると温かくもなかったのだから早くに出ていったようであった…俺も朝飯でも食いに行くっす

わりと朝早く起きたつもりだったんっすがね

そう思い食堂に行くとユウキが椅子の上であぐらをかきながらガツガツと大量の食糧を食べていた

…ここにいたんっすか、何時間いるんっすか全く

「おはよっっすユウキ」

「おはようネルフ」

「朝からよくそんなに食えるっすね」

ユウキはフォークを止めずにもぐもぐと口を動かしながら応対を続ける。

「いやあ〜ここ二日ぐらいご飯まともに食べてなかったからさモグモグ・・・逃亡生活で（ボソツ）」

「そうなんつすか・・・というかおいしそうな料理っすね。今まで見たことない料理っすけど」

「そりゃあそうだよモグモグ。僕がこの料理長と協力して作り上げた料理だからねモグモグ・・・まあ昔食べてたものが食べたかっただけけど」

何か小さな声で一人ごちているユウキを無視してユウキが食べているものと同じものを頼む・・・カツドンとかいうやつす。

一口食べて分かったことは・・・旨すぎて表現できる語彙が見当たらないってことっす！！

なんなんっすか！？この味は！？下の白いのはなんっすか！？ライス？そんなん聞いたことないっす！上の茶色い肉みたいなのと玉子の絶妙なハーモニーが堪らないっす！！

おいしくて二杯目を食べているとユウキはすでに食事を終え、お茶を飲んでいたがユウキが口にしていたのは紅茶ではなく緑色をしたお茶で緑茶というらしいっす

ただ干し方を変えただけらしいんっすが、これもめちゃうくちゃ美味しいっす！

いやぁここは天国なんかっすか？

毎日ここに入り浸りそうっす

ユウキはすごいマツタリした顔でお茶を啜りながら給仕しているメイドさん達をガン見しているっす・・・さすがメイドフェチっすね。昨日の夜語り合ったほとばしるパッションには引きずり込まれそうになっただっす・・・俺はシスターフェチなんで、メイドはまた範囲外っす。

俺は近くを通るメイドさんを見ながらカッドンを食べ味わっていると、ユウキが鼻血を出してそれを手で押さえていたっす。

「どづしたんっすか？」

「……このメイドたちはノーブラだということを再認識した」

そう言ってユウキは俺の後ろを指差したので、指を追って後ろを向くと……ライスを吹いたっす

「ブツーーーーー」

そこにはびしょ濡れになったせいでメイド服が透けて乳が丸見えになったメイドさんがいたっす……脳内に保存っす。今の光景は生涯絶対に忘れないっす

ユウキは急に立ち上がり自分が着ていたつなぎの上着をメイドさんにかけてあげていたっす……あれ？エロ帝王の行動とは思えないっす

後で聞いたところによると自分の実力で覗いたものを凝視するのはいいがラッキーで見たものは一瞬でいい

というユウキなりの美学があるらしいっす

それに僕だけが見るならいいが野郎全員に見られるのは可哀相だ（

不快だとも言っていたっす)とのこと・・・正直お前も見るなよと思わなくはなかったっす。

「チツ」

ユウキが服を渡したことで何人かが舌打ちして不満げに文句を言ったり不満げな顔をしていたが、ユウキが黒い笑顔を浮かべ変な威圧感をだして黙らせていた・・・あんな笑顔は二度とみたくな
いっす(。(。；)(

黒い笑顔と威圧感を引つ込めたユウキは近くを通ったメイドさんとお喋りを始めている。少し会話を盗み聞きしたところ、ここに配属されたメイドさんたちは俺達と同じく新しく雇われた人たちらしい。バツジのランクによって食べる場所やメイドの質まで違うとは・・・すごい制度っすね

微妙に感心したっす

ユウキはさらに先程ミスをしたメイドさんの名前を聞いてあの娘を励ましてあげてくれとメイドさんに頼んでいたっす・・・なんでも初日にミスすると後でどんどん緊張してロクなことにならないらしいっす。

ユウキも素直じゃないっすね、純粹に可哀相だから励ましてあげて

と言えばいいのに・・・兄ちゃんの手紙を借りればツンデレって奴
っすか？

兄ちゃんの屋敷の人が使っていた言葉でなんでもかなり堪らないら
しい・・・まだ俺には理解できないっすけど

そして少し尿意を催したのでトイレに行き、食堂に戻るとそこには
ピンク色の髪の女の人が左腕にくっついたユウキがいたっす。

さっきまでいなかったのにと疑問に思いつつもユウキに誰か尋ねよ
うとユウキの顔を見ると口元をヒクヒクさせていた・・・あれ？こ
んな美人で巨乳の女の人に抱き着かれたらユウキなら喜びそうなの
に変っすね

「そちらはどなたっすか、ユウキ？」

「・・・カトレア様紹介するんで離れ「カトレアでいいわよ、ユウ
キくん」・・・カトレア・・・さん」

「あらあら」

ピンク色の女の人は嬉しそうに笑顔を浮かべながらユウキにさらに抱き着いていたっす

「……ネルフ。こちらはカトレアさん、ヴァリエール公爵家の次女……というか僕のトラウマメーカー（ボソッ）」

でこっちはネルフです、ユニコーン隊期待の新人です」

「あーそうなの？よろしくね」

カトレアさんは蕩けるような笑顔を浮かべて俺に挨拶をしてきたっす
というか期待の新人とか余計なこと言わなくていいっすからプレッシャーに負けそうになるっす

ん？カトレアさんは公爵様の娘さんっすか！あれ？

「ユウキとはどういう関係っすか？」

「婚や」友達です。そっちは強制なので拒否します」あー私は全然構わないのに」

さらに笑顔を深くするカトレアさん
ユウキが手玉に取られてるっす

「で今日はどうしたんですか、カトレアさん？」

若干嫌そうな顔を浮かべつつカトレアさんに質問するユウキ

「実はエレオノールお姉様にお使いを頼まれてお城に来たら、その
帰りにユウキくんが見えたからここに寄ったのよ」

「ソウデスカ・・・絶対カリーヌ様の企みだな（ボソツ）というか
婚約だってしたわけじゃないしブツブツ・・・」

ユウキは死んだ魚のような目をして人生を諦めた顔をしているっす

「その美しいレディー」

珍しいユウキを見ているとユウキの後ろからうざったい気障な声が聞こえたっす

「もしよければ私と一緒に食事でもいかがですか？」

あああのナルシスト野郎っすか・・・

「結構ですわ。今私はこの子と食事を楽しんでいるので、ごめんなさいね」

ばっさりと斬られ断られているっす

断られてなおもしつこく追い続けるナルシスト

「そんな平民とはなくグラモン家の三男である、この僕ゴーシュと是非一緒に・・・」

「あら？ユウキくんは「言わなくていいです、カトレアさん」そんなの？なら言わないわ。それに私はヴァリエール家の人間なので貴族の男性と食事をするにはお母様の許可が必要なの・・・本当にごめんなさいね」

さらにズタボロにされるナルシスト・・・こういつのをざまあって

言っつすかね？

なんか気分がすつとするっす

「なっヴァリエール家の御息女であられましたか！？これは失礼しました・・・しかしそれならばなおそんな小汚い平民から離れた方がよろしいかと・・・
平民といるだけで身が汚れますからね」

その言葉を聞き殺氣立つ周りの平民たち

ユウキは興味なさそうにお茶を啜りながらカトレアさんをどうにか引きはがそうと頑張っているっす

「あら私はそうは思いませんけど、同じ人同士が一緒にいてはいけない理由はありませんよ」

笑顔でさらっとナルシストを叩き潰すカトレアさん・・・女神だな
この人は

周りの平民たちも嬉しそうな笑顔を浮かべてるっす

「しかし・・・おっと手が滑っちゃったZ E 「ガッ!？」

ユウキは手が滑ったとか言いつつ振り向いて至近距離からオーバー
スローでナルシストに変なカップを投げつけていたっす（後で聞い
たら茶碗と言っらしいっす）

ナルシストは顔面にカップが直撃し中に入っていた熱い緑茶もか
り床で身もだえをしているっす

俺を含め周りはそれを見て爆笑しているっす

ナルシストは怒りで顔を歪めながら立ち上がりユウキを睨みつける
っす

「貴様っ!!礼儀を知らないようだな！」

そう言っつてナルシストは懐から杖をだしユウキに向ける・・・その
瞬間周りも気を張りつめる。

「うるさいよクルクル巻き毛
貴様の頭は陰毛に見えて食事中にはよろしくないから早く消えてくれ」

「なっ！？貴さ」とあそこの奴が言っていましたよ貴族様！」はっ
？」

ユウキは俺を指差して俺に濡れ衣を着せよとするっす。

「えっ？ちよっ「あいつに脅されて・・・やりたくもないのに貴族様に茶碗を投げさせられて・・・お願いです貴族様！あの極悪人を成敗してくださいっ！！」」

「えっ？いや君が「貴方様の様な素晴らしい貴族ならあんなデクノボウ一瞬でやつつけられますよ！！その様子をヴァリエール嬢に見せればヴァリエール嬢もイチコロですよ！」むっそうかね？」

あっさりと騙され俺に杖を向けるバカナルシスト・・・ユウキ

ユウキはナルシストの後ろに周り、後ろからナルシストを指差して口パクで（こいつ馬鹿じゃね？）とか笑って言うてくるっす・・・
馬鹿なのはお前っす！

「さあそこの君！決闘だ！！」

「いや俺は「おうおうやれやれ」やりたく「あんな貴族の坊ちゃん
やっちまえ！！」・・・・・・・・。」

周りの声で俺の声が掻き消されたっす、というか周りを扇動して大
声を出させている赤毛馬鹿のせいで

「さあ外に出たまえっ！！」

そして流れのまま外に連れていかれる俺・・・大丈夫っすかね俺？

《続く》

12話：やはり遺伝か・・・（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ネルフくん扱いやすい！！

口癖が決まってるから楽チンすぎる！

ってかネルフくんサイドのヒロインの女の子が全く活躍していない
という事実www
なにげにカトレアさん再登場

彼女はユウキくんのトラウマの原因なのでユウキくんはカトレアさ
んが苦手ですw

というかあからさまな好意が苦手な子なんですwww

次回はゴーシュとの決闘ですw
ギーシュのお兄ちゃんなのでどんなかませを見せてくれるか楽しみ
ですねwww

次回もお楽しみに？

13話・井の中の蛙大海を知らず、そして空の深さも知らず（前書き）

ヒヤッホー13話です

皆さんから感想はいた dankun ですが・・・面白いと言ってくれ
人が少ないっすorz

色々自信がなくなりそうっす

まあそんなこんなで頑張っているので励ましの感想を待ってます!!

誤字脱字は報告お願いします

13話：井の中の蛙大海を知らず、そして空の深さも知らず

ドナドナを歌いたい気分っす

今俺は周りのみんなに押されてナルシストとの決闘の場所に連れていかれてるっす

なにもかも全てユウキのせいっす！

怨みを込めた目でユウキを睨むとユウキは目を逸らして口笛を吹き始めた・・・あいついつかしめるっす

ユウキへの怨みをフツフツと募らせながら処刑台へと上がっていく・・・殺されることはないとは思っんっすが、どの程度ボロボロにされるかがわからないっすね

そんなネガティブ思考でダメージ量を計算していると・・・

「貴方たちは何をしているの？」

初日に会った金髪のおだんこの女の子が騒ぎを聞き付けやってきた
っす

「決闘だよ。その平民を懲らしめるのさ」

ナルシストの言葉を聞き女の子は俺を見つめて、再びナルシストに
向き直り尋ねる

「この人が何か悪いことをしたの？」

「そいつはいただけな平民を力で脅し、僕に暴行を企てたのさ」

やれやれといたげに首を竦め肩を揺らすナルシスト

イチイチ芝居がかってっす、このバカナルシスト

それを聞き女の子は考えるようなそぶりをしてから再び尋ねる。

「証拠はあるのかしら？」

「脅されたと言言した平民がいるさ」

「・・・馬鹿なの、この人？」

「ぷっ！」

「なっ！？それはどういうことだい！？」

ナルシストは女の子の言葉に声を荒げ女の子に何故なのかを聞く

ちなみに俺はあまりの的確な表現に吹いてしまったっす

「どうして証拠もなくそんな赤の他人を信用できるわけ？」

その人が嘘をついてこの人を嵌めようとしてるとかは思わないの？」

言葉の刃がズサズサとナルシストに突き刺さる・・・もっと言って
やってくれっす！！

「だいたいこの人の顔を見ればそんなことしそうにないじゃない。
如何にもヘタレですって顔をしてるじゃないの」

ぐっは!?

何故俺にまで口撃を？

「あっ!!ごめんなさい、今はその庇おつと・・・」

女の子はダメージを負った俺に気づき頭を下げてくる・・・庇おう
としてくれたんっすか

それにしてもダメージがデカいっす

油断してた時に味方からの一撃は堪えるっすorz

「いや気にしないで欲しいっす。君の言う通りなんで・・・」

ダメージを受けている俺を見てニヤニヤしているユウキ・・・絶対
に何か仕返しをするっす

「そういうわけだからこの決闘はするべきじゃないわ」

女の子は胸を張って今の弁論をナルシストに通そうとする。

「では僕のこの怒りはどうすればいい？」

何も意味ないからドブにでも捨てればいいです

「そうね・・・ならこの人を嵌めようとした人と決闘すればいいじゃない」

えっ？

「なるほど・・・では赤髪の君！僕と」ちょっと待って欲しいです
！！」なんだね、平民くん？」

俺だったらいいけどユウキがいたぶられるのは・・・なんか嫌です
確かに俺を嵌めようとはしたけど・・・それでも

「あいつは俺の友達っす。だから俺が代わりに決闘を受けるっす！」

俺の言葉に女の子は目を見開いて驚愕しユウキは笑みを消して真面目な顔をしていたっす

「ちよつと！それじゃあ「いいんっすよ友達が傷つかなければそれで「っ！！……………」」

「よかろう……………なら君と」待つてください貴族様……………続けざまになんだね、まったく？」

偉そつに言う貴族に割り込み何かを提案しようとするユウキ

そしてユウキは……………

「彼と僕二人で貴族様の相手をさせていただけませんか？」

と無謀にも提案したっす。

「なっ！？待つつすユウキそれは「いいから」・・・。」

ユウキに笑みを浮かべた顔で見られ思わず黙ってしまふ俺・・・それじゃ庇おうとした意味がないっす

それにカトレアさんだって心配をしてるに決まっているっす!!

そう思つてカトレアさんを見ると笑みを崩さないでこちらを見ているっす

あら大変ねと今にでも言いそうな感じである。

全く止める気はなさそうだった。

友達が心配じゃないんっすか!?

カトレアさんの無情な態度に齒ぎしりをしながらもユウキを止めようと思うが

「いいだろう!!二人同時にかかってきたまえ!もつともメイジである僕が君達平民に負けるとは思わないけどね」

ナルシストが戦いを始めようとする。

そして自分が強者であることを信じてやまない嗜虐的な笑みを浮かべるナルシスト・・・くっ確かにメイジに勝てるわけは

「それはどうですかね、貴族様？」

「・・・えっ？」「」

不意にあげたユウキの意地悪そうな声に反応する俺と女の子とナルシスト

「この世にはメイジ殺しと呼ばれる方たちもいますよ」

「はっ！そんなのは迷信だよ、メイジに勝てる平民なんかいるわけないじゃないかー！」

ユウキの言葉に呆れたような顔をするナルシスト逆にユウキはニヤニヤと笑みを深める。

「では証明してみせましょう」

ユウキはそう言ってどこから取り出した不思議な形の剣を俺に差し出してきたっす

「これはなんっすか？」

「刀と言って東方に伝わる剣だよ。僕のお気に入りで、壊すなよ」

ニコニコと笑いながら気軽そうに言うユウキ

「でもこんなんでメイジに勝てるはずがありえ」「ありえないことなんかないんだよ」「えっ？」

「この世にいる限り絶対なんかない。いくら強い敵でも一瞬の間と油断そして一縷の卑怯で簡単に崩れるのさ」

ユウキは厭らしい笑みをニタニタと浮かべながらあくどい表情で言う

「さあアホな貴族にお仕置きをしようか？」

ナルシストに向き直り無手で立つユウキに俺は横に並び刀を鞘から抜いてナルシストに向ける・・・やれるとこまでやるっす!!

「始めよう!!」

ナルシストと高らかな合図と共に駆け出し刀をナルシストへと振り下ろすが、下から現れた銀色のゴーレムに弾かれ防がれてしまう。

ちっ・・・詠唱が終わる前に倒したかったんっすが

刀を構えながら間合いをとり後ろに下がる。

「ふっなかなか早いようだがこの『白銀』のゴーシュには届かないようだね!!」

芝居がかった態度で偉そうに言うナルシスト・・・まじム力つくっす!

ふと気になり相方を見るとやる気になさそうにぼうつと立っていた・・・ムカついたので頭を叩いたっす

「何をするんだよ!?!」

「ユウキもやるっす!?!」

ユウキは心底嫌そうな顔を浮かべて

「ええ、僕肉体労働はちよっと」とかほざいてやがるっす。

ムカついたので悪口を言うときゃあぎゃあと言いつけ合いになったっす。

246

それを見ていたナルシストは嘲笑しながら余裕の笑みで

「このままでは普通に勝つてしまいそうだな。なら僕が勝ったらそのメイドを貰おうかな!」

そういつてナルシストが指差したのは濡れた服を着替えて帰ってきた黒髪をポニーテールにしたキーリさんだった。

余談だが黒髪って珍しいっすね

「僕が勝つたら彼女を僕の専属メイドして貰ってしまおう！そしてもちろん夜伽もしてもらおう」

厭らしい笑みを浮かべながら言うナルシスト

周りのみんな不快そうな顔をしてナルシストを見ていたっす

キーリさんは身体をびくつと震わせ怯えている

そんなキーリさんを見てユウキは俯いて何も言おうとしない・・・
様子が変っす

247

「ネルフ・・・僕の言う通りに動いてくれ」

ユウキは急にいつもより3メートルぐらい低い声で俺に話し掛けてくるっす

「りよ了解っす」

あまりの変化に驚いて吃りながら答える。

「刀は剣とは違って力まかせに斬ればいいってものじゃない。流れで振るんだ、流れに乗るように刀を振り空気を斬るようにしてみても・・そして何より大事なのが引くように斬ること、押すんじゃないで引く。いいね？」

「了解つす」

ユウキは先程までとは完全に態度を変え何かに火がついたかのように刀の使い方を教えてくれたつす

「あのゴーレムは銀で出来ているから刀で簡単に斬れる。ただ銀の怖いところはその細工のしやすさだ、斬られたゴーレムを變形させて襲ってくるかもしれないが・・・そこは僕に任せろ」

「任せたつす」

ユウキは顔をあげ噴怒に満ちた瞳でナルシストを睨み言い放つ

「さああのクズを半殺しにしよう！」

俺はその言葉と共にナルシストに飛び掛かるナルシストは先程と同じようにゴーレムで防ごうとするが、ユウキに教わったやり方で刀を振るいゴーレムを切断する。

ナルシストは一瞬驚愕に満ちた顔をしたがすぐに表情を変え笑いながら杖を振るおうとする。

しかし俺が刀を振り上げナルシストに向けようとした瞬間ナルシストの杖は吹き飛び、ナルシストの手元から消えたっす

俺はその隙を見逃さずにナルシストに刀を突き付け言う。

「俺達の勝ちっす」

俺の勝利宣言にナルシストは歯ぎしりをして俺を睨みつけるっす

「途中で杖を落としてしまったんだ！！やり直しを要求する！それ

に僕はまだ本気を出していない!!」

ナルシストの言葉に呆気に取られ野次を飛ばす周り・・・いくらなんでもそれはないっす

「・・・構わないよ」

「「「「はっ?」「」「」

ユウキの言葉に何言ってるんだお前的な目を向ける俺を含めた全員

「貴方が納得できないなら再戦しても構わない」

ユウキは真面目な顔で応対してるが・・・何かがおかしいっす

「そうかならばもう一回だ!!」

ナルシストは笑いながら杖を取りに行く中周りの人たちは責めるよ

うな目でユウキを見つめてくる。

どういづつもりなんっすかユウキ？

「さあ勝負だっ！！今度は本気で行くぞ！！」

「さあ…………お仕置きの時間だ」

ユウキは右腕を後ろにして左腕を前に突き出し足をがちりと地面に着けた構えをとる

そして黒い笑顔と威圧感を出しながら平然と俺に下がるよう言うてくる。

「ネルフは下がってて」

「だけど！」「大丈夫…………少し怒っているからね」

ユウキはナルシストの方に向き直り威圧感をさらに出して…………言う

「貴様は僕のメイドフルヘヴンを破壊しようとした！！その罪は万

死・・・いや無限大数死に価値する！！そして大海も知らず、さらに空の深さも知らない井の中の蛙がピーピー喚くなっ！！」

ああメイドさんに手を出そうとしたからキレてるんっすか・・・ユウキらしいっす

ナルシストはユウキの変な威圧感にビビりながらも杖を振るい先程のゴーレムを18体も召喚する。

「ぼっ僕のこのヴァルハラに勝てるわけがないだろう！！」

ナルシストは再び杖を振るいユウキにゴーレムを差し向ける。

ユウキは微動だにせずただじっと構え続ける、そしてゴーレムたちが近づきゴーレムが持っていた剣を振るった瞬間

『乳帝の選定！！』

ズドンッ！！

爆発するような音と共にユウキの前に並んでいたゴーレムは全て粉々になりナルシストは吹き飛んだ・・・何をしたんっすか！？全く動いたようには見えなかったんっすけど！！

「とうか不意に言った『乳帝の選定』ってなんっすか！？技の名前っすか！？」

「あまりの事態の展開に戦いを見ていた野次馬たちは口を開き放心している。」

「吹き飛んだナルシストは完全にのびていたとうか泡を吹いている・
・よく見ると股間の部分に何かがぶつかったような色落ちが見れた
ひでえ・・・股間を狙ったんっすね」

「何をしたんっすかユウキ？」

「音速で拳を振るって衝撃波を飛ばしただけだよ」

「オンソク？」

「ああ～音と同じ速さ拳を振るっただ」

「へえ～そうなん・・・はあ！？」

あまりにも簡単に言うので聞き流しそうになったすが、音と同じ速さって・・・普通無理じゃないっすか？

それに衝撃波って・・・

ユウキはまるでなんてことはないと言わんばかりに無気力な顔をして、キーリさんの元に向かい話し掛けています。

「ごめんね怖い思いさせちゃって・・・」

ユウキはキーリさんの前に立ち頭を下げる。

「・・・・・・・・・・」

「?どうしたの?」

「・・・・・・・・・・」

無反応なキーリさんにユウキはキーリさんの顔の前で手を振り反応を確かめる。

「おい大丈夫かい？」

「にやつ！？だっ大丈夫ですご主人様！！しっ失礼します！！」

急に意識を取り戻したキーリさんは顔を真っ赤にしてペコペコ頭を下げすごい速さでユウキから逃げていったっす・・・あああれがブラグってやつっすか

ようやく兄ちゃんの言ったことが理解出来たっす

ユウキに惚れたっすねキーリさん

というかユウキめっちゃくちゃ強いじゃないっすか！！

だからカトレアさんは心配してなかったんっすね・・・なんか申し訳ない気分になるっす

と、いつかこれで？なんて上の連中はどんな化け物なんっすか！？

ユウキは首を傾げながら「嫌われたかな？ってかご主人様って・・・」
「とか言っつてこちらにやっつてきたっす」

ムカついたので頭を叩いておいたっす・・・この鈍感めっ！！

ちなみにユウキはこのあと、一部始終見ていたカトレアさんに褒めながらもお仕置きされるといふ大変不思議な状態になっていた。

《続く》

13話：井の中の蛙大海を知らず、そして空の深さも知らず（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

昨日間違えてあげましたが見てないですよね汗？

ちなみに井の中の蛙大海を知らずされど空の深さを知るが正しいやつです

まあされど空の深さを知るは日本人が付け足したやつらしいですよ

さあて次回はガリアに行く予定です

シャルロットファンにはお待たせ、シエスタファンにはごめんまだ出ないと言っておこう！！

次回もお楽しみに？

14話…どこの幻想殺しだよ!?(前書き)

すみませんタバサは来週です
まじすみませんごめんなさい

来週からネルフくんはお休み

誤字脱字は報告お願いします

14話…どこの幻想殺しだよ!?

昨日結局ユウキは帰って来なかったっす
どんだけカトリアさんから逃げ回ったんっすか？

朝起きてベッドを見ても見つけれなかったので、多分徹夜で逃げ回ったんだと少し同情しながらももういいっすよと投げやりな思いになり食堂に向かったっす。

するとやはりという食堂でお茶を啜っている薄汚いつなぎを着たユウキがいたっす

朝飯だけは食いに行くんっすね

若干つなぎがさらにボロボロになってるのは俺の見間違いつすかね？

近づいて挨拶しようとするユウキも俺に気づいたらしく挨拶をし
てきたっす

「おはようネルフ」

「おはよつっすユウキ・・・昨日は結局どつしたんっすか？」

「カトレアさんが疲れるまでガチで逃げ回ったよ。ウィンドカッターが掠ったり何回か捕まりそうになってさ・・・あれ？なんか目から汗が」

「頑張つて生きて欲しいっす」

なんか俺もつられて涙が出てきたっす

「でさつきから気になってたんっす、なんでキーリさんはユウキの横に待機してるんっすか？」

「ごっごっごっごっご主人様のおおおっ お茶のおかかかかかかわりを！！」

「うん、落ち着こうか。僕がキーリさんに昨日大丈夫だったかを尋ねようとしたら周りの人たちが気をつかってくれてね。

ゆっくり話しが出来るようキーリさんを僕のお茶くみにしてくれたんだ」

「へえ、そうなんっすか」

周りは気づいてるっすね、気づいてないのは本人だっけっすか・・・
たくこのエロ帝王は

「ふうーいやぁおいしかったよ。また今度キーリさんのお茶飲み
てね」

「にゃあっ！！りよ了解しました！！失礼します！！」

そう言って走り去っていくキーリさん、テンパリすぎじゃないっす
か？

ユウキはキーリさんの様子を見て首をまた傾げているっし・・・殺
意が沸くっすね

ユウキはお茶も飲み終えたので机にペタッと身体を投げ出してグダ
グダし始めたっす

「いやあ疲れたよ、昨日は本当に最後は野宿だったからね」

「ご愁傷様です」

そんな他愛のない話をしていると金髪のおだんこの女の子が食堂に入ってきたので、手を振って呼んでみたっす

すると女の子はこちらに気づき料理を受けとってからこちらにやっ
てきて俺の隣に座ったっす

「昨日はありがとうございましたっす」

「私は結局何もしてないわ」

「そんなことないっすよ。味方してくれるだけで嬉しかったっす、
だからありがとうっす」

「……………」

笑顔を浮かべてさらにお礼を言つと女の子は恥ずかしそうに顔を赤

くして俯いてしまったっす・・・なんかまずかったっすかね？

ユウキはニタニタしながらこちらを見ているっす

「そついえば名前聞いてなかったっすね、俺はネルフっす。よろしくっす」

「私はデンベール・ド・アルザス。二つ名は『電光』よ、よろしく」

ユウキはデンベールの名前を聞いて一瞬ビクツとしたがすぐに戻りニコニコしている

そして俺は自己紹介し合い互いに握手をした・・・するとデンベールはユウキを見てユウキに話し掛けたいっす

「あなたは？」

「僕はユウキ。以後よろしく」

「そうユウキって言うのね。こちらこそよろしく」

ユウキは相変わらずグダグダしながらもデンボールが差し出してきた手を握り握手をしたっす

そして手を離し一緒に食事をしていると食堂に部隊長のレイナーさんが入ってきたっす

レイナーさんはキョロキョロと一通り誰かを探したあと大きな声で叫んだっす

「ネルフはいるか!？」

俺っすか!？

「はい、いるっす!」

立ち上がり答えるとレイナーさんはこちらに近づいてきて俺に話し掛けてきたっす

ちなみに新隊員たちは最初それぞれのポジションごと4つの部隊に

分けられてそれぞれにあった訓練をさせられるっす

俺は前衛で相手がメイジだった場合に詠唱させないよう突っ込む役
っす

そしてその前衛たちを教えているのがこのレイナーさんっす

「お前がネルフか・・・ほう中々強そうだな！昨日の決闘騒ぎについて聞きたいことがあ・・・ああ!？」

レイナーさんは不意に喋るのをやめて机の上でグダグダしているユウキを見て大声をあげたっす

ユウキは起き上がり手をあげてレイナーさんに話しかける

「やあレイナー久しぶり」

「久しぶりじゃねえよ!!どこ行ってたんだよ!？」

レイナーさんはそんなユウキに心底驚いたような表情をして大きな
声で怒鳴る

「ああ〜家出？」

「……はあもういいや。逃げないのか？」

そして急に投げやりな態度になりユウキに近寄っていく

「うん面白いもの見つけたからね」

ユウキが一瞬こちらを見たような気がしたんっすが気のせいっすよね？

「そうか」

レイナーさんユウキを肩に担いで食堂から去っていく、その途中で振り返り俺に来る必要がないことを伝えたっす。

「ああネルフもう用は済んだから気にしなくていいぞ」

「了解っす」

俺はその言葉に頷き立ち上がった状態を止め席に座り食事を再開したつす

「キヤア〜人さらい〜」

「うるせえ!」

ユウキはレイナーさんの肩の上でぎゃあぎゃあ騒いでいたがレイナーさんから鉄拳制裁を受け黙った

デンベルは今の光景を不思議そうに見ていたがユウキのことは気にしたら負けつす

そう思いユウキという存在を無視するようにガツガツと食事を取り、お茶を飲んでから訓練に向かう。

訓練場にはすでにレイナーさんが来ており、ユウキは肩に担がれていなかった・・・どっかに捨てられたんっすかね？
五月蠅いから

そんなこんなで訓練が始まり二人一組でペアを組み打ち合いをした

後、レイナーさんと模擬戦・・・二人でかかったのにポコポコにされたっす

疲れのあまり訓練場の端っこで大の字で寝ていると

デンベルがやってきて俺の横に座って俺の顔を覗きこんできたっす

「大丈夫なの？」

「正直無理っす。立ち上がる気すら起きないっす」

「そんなに辛いの？」

寝転びながら他愛のないことを話す

「デンベルのところはハードじゃないんっすか？」

「そっね今日は城の周り30周に副隊長との模擬戦ぐらいかしら」

「……………」

それで『ぐらい』なんっすか？

俺の中ではデンベールも人外の仲間入りっすね

・・・はあ

ため息がとまらないっす

ネガティブ思考で変な方向に行こうとすると

「アツヒヤ!？」

デンベールが変な奇声をあげたので起き上がると目の前に白いドレスを着た綺麗な女の人が立っていたっす

「おっお会い出来て光栄ねすアンリエッタ姫殿下!」

デンベールは今まで見たことないようなテンションで立ち上がり敬礼をして嘸みながら挨拶をしたっす

という姫様だったっす

「お会い出来て光栄っす姫殿下」

一応デンベールに続いて立ち上がり挨拶をする

デンベールを横目で見るとガチガチに固まっていた・・・緊張しすぎっす

姫様は護衛に囲まれながらもさらにこちらに近づいてきて不意に口を開いて尋ねてくる

「ユニコーン隊の隊長はどちらにいますか？」

隊長になんか用なんっすかね？

「今まで隊長に会ったことがないで誰かも知らないっす」

「・・・そう」

姫様はあからさまに落胆の色を浮かべた表情をする

「ねえ貴方たちのお名前はなんていうのかしら？」

「俺はネルフっす」

「わっわわわわっ 私はデンベール・ド・アルザスっす 姫陛下！！」

緊張しすぎて俺の口癖が移ってるっす

「そうですか、ありがとうございます。覚えておきましょう」

姫様は俺たちの名前を尋ねたあとすぐに身を翻してその場から去っていったっす

そしてその場には姫様に名前を覚えられた嬉しさのあまり石化したデンベールが取り残されたっす・・・はあしょうがないから隊舎前まで運ぶっす

この時俺は気づいていなかったっす、名前を覚えられたことで始まる不幸があることに・・・

次の日の朝

珍しく食堂にユウキがいなかったので一人寂しく朝食を食べていると

再び食堂にやってきたレイナーさんに呼び出されマリアンヌ太后様の元に向かったす

なんか悪いことしたっすかね？

姫殿下と口聞いたから死刑とかつすか！？

と内心ドギマギしてマリアンヌ太后のいる部屋に入ると

そこにはマリアンヌ太后とアンリエッタ姫に硬直したデンベールと縄でグルグル巻きにされて床に転がされたユウキそしてユウキを逃さないように囲んでいるファレン副隊長とレイナーさんがいたっす

ツッコンだら負けのような気がしたのでユウキをスルーしてマリアンヌ様の前にひざまずき臣下の態度をとる

「ユニコーン隊ネルフただいま参上いたしました」

俺が来たことで全員揃ったらしくマリアン又大后は用件を口にした

「皆さんよく来てくれましたました。

貴方たち三人にはガリアに親善書を渡すための使いになって欲しいのです」

「はっ畏まりました!!」

ガチガチに固まりながらも俺と同時に答えるデンベール

俺は気になることがあったので少し尋ねて見たくなった

「失礼ですが大后陛下、質問があるんですけど……いいですか？」

「失礼だぞ貴様っ!!」

何故かデンベールに怒鳴られたっす

「いいのです、なんですか？」

「どうして俺達のような新人にそんな大事な任務を？それと何故ユウキを？」

俺達は全員ランクが？なのにどうしてそんな重大な任務を任されたのか理解出来ないっす

「貴方たち二人は新人の中でも強い方だと聞きました、それに今のうちに強い人の元で経験を積むのもいいことです」

274

「そうっすか・・・じゃあなんでユウキを？」

「それには貴方たちを大使に採用したよりも重要な理由があります・・・縄を解いてあげなさい」

「はっ！！」

マリアンヌ様に命令をされユウキの縄を解くファレン副隊長とレイナーさん、ユウキは縄で結ばれていた腕をときほぐすように腕を回

したりしているっす

そんなユウキにマリアン又大后は微笑みながら話し掛ける

「ではユウキくんお願いしますよ?」

「・・・了解しました」

マリアン又大后は少し考えこむようなそぶりをして再び口を開く

「言い直しておきましょう・・・女王陛下直属ユニコーン隊の隊長
ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスに
命じます。部下二人を引き連れガリアに親善書を届けなさい」

「はっ!!!! 畏まりました!」

ユウキはひざまずき臣下の礼をとり了承した・・・んっ?

「隊長!?!」

デンベルと共に驚きのあまり声をあげる

「ユウキがユニコーン隊の隊長！？こんなエロ帝王がつか！？この前だってメイドさんの着替えを覗「ちよつと黙ろうか？」イエスサーー！！」

べらぼうに強い殺気を出しながら睨まれて敬礼をしてしまう俺

デンベルは声を出した状態のまま硬直して「こんなのがあの伝説の・・・」とかぶつぶつ言っているっす

「ではいつて参ります太后陛下」

そう言つてユウキはその場から去ろうとするが

「待ちなさいユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリス！！」

アンリエッタ姫がユウキを呼び止め睨みつけるような縋るような目つきでユウキを見る

ユウキはそれに無表情な顔をして臣下のようにひざまずく

「なんでしょうか、アンリエッタ姫殿下？ご用があるならお早めにお申しつけください」

「っ！……なんでもありません。任務を頑張ってください」

アンリエッタ姫は唇を噛み締めてユウキに激励の言葉をかける……
なんか二人の様子が変っすね

そしてユウキはその場から去り俺達を引き連れガリアに向かうことになる。

俺達はすぐに馬車に乗りガリアに向かうことになったっす

しかしその馬車の中でつなぎから隊士服に着替えたユウキは不機嫌
そんな顔をして一言も喋らずただ重い空気が馬車の中に流れていた

なんなんっすか！？この空気は？

《続》

14話…どこの幻想殺しだよ!?(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか?

ネルフくん批判が多っ!!!
ネルフくん涙目ですよ!?

ということ以来週からユウキに戻ります
もうちょいネルフくんタイムの予定だったんですが・・・ネルフく
んフルボッコなんで

では次回もお楽しみに?

15話・あれ？僕復活なの？（前書き）

更新なりよ

タバサ来たけど微妙な登場orz

誤字脱字は報告お願いします

15話：あれ？僕復活なの？

どうも主人公の主人公の・・・大事なことなんで二回でも三回でも
言いますが

主人公のユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラ
トリスです

ええ皆さんお久しぶりです

今回から僕視点になります

ネルフくんがフルボッコすぎなんで

まあ元々すぐ辞めるつもりだったらしいですよ

・・・メタ発言ですがそこらへんは気にしないでください

それにして・・・もう嫌です

なんで僕がユニコーン隊の隊長なんかやってるんですかね？

まあ確かに任務で行く先行く先に湖やら何やらのロケーションスポ

ツトがあつてつい早く終わらせて女の子たちに各地にあつたコスチ
ュームを着せて欲望を満たしたくてハッスルしてがんばりましたが・
・隊長になるとは思つてなかつたorz

そんなに功績残してないと思つんですけどね？

まあ累計1000匹以上の亜人と100匹以上のドラゴンを殺しま
したが・・頑張ればみんなでもいけると思つんだよね

まあそれはともかく最初は隊長になつたから多少は書類整理しなく
て済むかなあゝなんて甘いことを考えていた時期もありました

ええ認めましょう愚かだったと！！

書類が2倍ぐらいになりましたorz

で最初は堪えていたんですが途中で堪えられなくなり脱走しました。
ム力ついたから何回か鳥の骨野郎を襲撃して一ヶ月ぐらい逃げ回っ
てたんですが・・

先日捕まり今はヘタレシスターフェチと金髪ロリータと一緒にガリ
アに親善書を届けに行く途中です。

で今現在若干イライラしている僕

あの　　がっ!!!

最近僕のこと避けていたのに急にあんな顔で話し掛けてくるなんて
どういつつもりなんですかね？

あんな恋い焦がれた乙女のような表情で僕を見やがって!!...
くっウエールズさんとちゃっちゃとくっついちゃってくれよ

僕を止まり木のように一時的に縋るために求めるなよ...

ああなんかイライラする
頭をガシガシとかいているとびくつと震えるネルフとデン...デ
ン...なんだっけ？

ああと...デンコちゃんだっけ？
電気を大切にね　とか言いそうな感じだし...
たしかデンコとか言ってた気もするからきつとそつだな

「何びびってんのネルフにデンコちゃん？」

「デンコじゃありません!!...デンボールです!!」

ああデンベルか・・・うんまあデンコの方が呼びやすいからデンコって呼ぼう

東 電力のデンコちゃんに似てるし

そういえば前世でデンコちゃんがタイプっていうやつがいたんだけど・・・いまだに理解できない

どこが可愛いんだ？

「まあ落ち着いてデンコちゃん」

「デンコじゃないって言うてるじゃないですか！！『電光』のデンベルです！」

「あれだよニックネームってやつだよ、フレンドリーな感じで話し掛けてるんだ」

「……………」

すげえジト目で見てくるデーンコちゃん、やめてそんな責めるような目つきで見ないで！

「まあともかく何をビクビクしてたんだ？」

「いやユウキ・・・隊長がなんかイライラしている気がしたんで・・・」

「公式の場所じゃない限りは今まで通りユウキでいいよ・・・ああ、そんなにイライラしてるように見えたかな？」

頭をかきながらネルフに尋ねると

「ああじゃあ今まで通りで、めちゃくちゃイライラしてるように見えたっす」

そうかそんなに表に出ちゃってたのか・・・

「どうして隊長はそんなにイライラしてたんですか？」

「だからユウキでいいってばデーンコちゃん」

「そういっわけにはいきません、上官のうえにアンペラトリス公爵のご子息ともなると馴れ馴れしくするわけには……」

頑なに僕をユウキと呼ぼうとしないデンコちゃん……なんでこうフレンドリーに出来ないかね？

だから隊長とか伝えるの嫌だったんだよ

「じゃあ命令ね命令ユウキって呼ばないとずっと僕に着替えを覗かれることになります」

「なっ!?!何を言ってるんですか、貴方は!?!」

顔を真っ赤にして大きな声をあげるデンコちゃん……おお可愛い反応するなあ〜

「いや覗き宣言ってやつかな」

「アホなこと言っなっす」

ネルフは呆れた顔をして僕をジト目で見てくるだけ……

「……………っ！…と叫んで連れ帰りそうになったよ

やべえこの娘はいいわ

「うんまあこれからためよろしく頼むよデンコちゃん・・・ついでにネルフ」

「ついでってなんっすか!?! ついでって!?!」

「うるさいよネルフ。君の人気のなさはこの2、3話で多いに分かったよ・・・ツッコミ役にでも甘んじていればいいのさ。このジミーがっ!?!」

「メタ発言はやめて欲しいっす。というかまじで涙が出てくるんでそこらへんには触れないで欲しいっす」

ネルフは僕の言葉に落ち込み馬車の隅での字を書きはじめる・・・
ごめん言いすぎた

反省してる

そんな下らないやり取りを続けながらも三日経ちようやくガリアに到着

正直横になりすぎてお尻が痛い

城に入り少し待たされようやくガリア王ジョセフのいる謁見の間に通される・・・覗き見しないで欲しいな

ジョセフの前まで行きひざまずき挨拶をする

「お初にお目にかかりますジョセフ陛下、マリアンヌ大后の命によりトリステイン王国から親善書を届けに参りました女王陛下直属ユニコーン隊が隊長ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリス」

「同じくユニコーン隊デンベル・ド・アルザス」

「同じくユニコーン隊ネルフ」

「ようこそガリアへ・・・ふむてつきり『閃光』が来るかと思っただが、まさか『魔法』が来るとはいやはやトリステイン最強にして最高の魔法使い殿が親善大使とは恐れ入る」

ジョセフは皮肉げに顔を歪め僕を見てくる・・・腹の探り合いは面

倒だから嫌なんですが

「お褒めいただき恐悦至極にございます陛下」

「ふむ、で何故トリスティンはガリアと同盟を組もうなどと思われたのかな？」

親善書の中身まで分かってましたか・・・何が無能王ですか厄介すぎる

「私はしがない一般兵でしかありませんので、そのようなことは分かりかねますジョセフ陛下」

しょうがなくシラを切ったが

「はっ戯言を吐かすでない『魔法』、余は知っているぞ。

貴様がマザリーニと共に国の内政を仕切っていることをな。

貴様がいなければトリスティンはゲルマニアと肩を並べる程の力を持った国にはならなかった」

通用しなかった。

ちっそこまで調べられてましたか・・・面倒だな

なら少し揺さぶりをかけてみますか・・・

「・・・優秀な『頭脳』をお持ちのようで陛下」

その言葉を聞いたジヨセフは口元を愉快げに曲げて笑いながら言う

「ほう貴様もなかなかの『眼』を持っているようだな」

成る程・・・かなり深いところまで調べられてるな

いや今調べられたか？

ちっ早めに潰しておけばよかったな

自然と高まっていく僕とジヨセフの間の空気

張り詰めるような濃い空気がどんどんと高くなりそして・・・

「クッ・・・アッハハハハハハ」

互いに笑い合う

「ハツハハなかなかだな『眼帝』!」

「いえ陛下の『無能』^{セロ}には負けますよ

ニヤニヤと互いに笑みを浮かべる・・・腹の探りあい終わった

「さあて・・・一献どうだ『魔法』?」

ジヨセフは僕に酒を勧めてくるので

「ではお言葉に甘えて」

受け取ることにした。

「フツハハ今日は気分がいい!者共下がれっ!」

ジヨセフは陽気に護衛や近くの臣下^トに下がるよう命じる

「しかしっ!」

「では杖と武器をお渡ししますよ」

「・・・それならば」

護衛たちが王の命令に抵抗して場が冷めてもなんなので自分から杖と刀を渡すよう提案して、護衛たちに受け入れさせる。

装備を渡しながら余計なことを聞かれるのも嫌なのでネルフとデーンちゃんにも下がるように言う

「じゃあネルフとデーンベルも下がれ」

「・・・はっ!」

二人は一瞬だけ迷っていたがすぐに命令を聞いてくれた・・・あああの子たちは絶対いい兵士になるな。

「ではお受けいたします陛下・・・その前にそろそろ覗き見をやめていただきたいのですが?」

「ハツハハやはり気づいていたか！部屋に入ると同時に我がシェフィールドの隠れている場所を見ていたからまさかとは思ったがな！クツクツやはり今日は気分がいい、そなたも下がれシェフィールド」

「・・・御意」

隠れていた場所から離れ去っていくシェフィールド・・・何も天井裏に隠れなくても

そして使用人たちが持つてきた酒を注ぎ込み合い飲み始める・・・ワインかあまり飲まないからなあ

294

「どうだ我が国の酒は？」

「すみません陛下あまり酒は嗜まないものでよく分かりません」

「そうかそれはいかな！次来るときまでに酒について学んでおくがいい！」

「・・・努力させていただきます」

シヨセフは口を大きく開けながら爆笑している

やれやれもつと責められると思ってたんだが・・・

「さあて『眼帝』よ・・・何故そなたはトリステインなどに仕える？貴様ほどの腕があれば仕えるところなどより取り見取りであろう？」

ニヤニヤと口を歪めて尋ねてくるジヨセフに対し僕もニヤニヤと笑いながら返す。

「私はトリステインが好きなのではなくトリステインの人々が好きなのです。ですからトリステインに仕えているまでのこと・・・国に仕えているわけではありませんのでトリステインがどうなるうと実際はどうでもいいのです陛下」

母上に父上に一応兄上、マルスにアルフにヨハンにシャロンちゃんにユリにカリーヌ様にカトレアさんファレンさんにレイナーにアイナにナイル、マザリーニにマリアンヌ太后そしてアンリエッタ姫

これだけじゃないが僕には守りたい人がいっぱいいる、だから僕はトリステインにいるんだ。

僕の答えを聞いてさらに嬉しそうな顔をするジヨセフ陛下

「クックククそうか、やはりそなたは面白いな！余はそなたが気に入ったぞ！！」

ジヨセフはそう言ってさらに酒を煽る

「再び会ったときには今度はいいものをやろう。それまで楽しみに待つがいい・・・余はそなたがトリステインにいる限り同盟を結ぶことを誓おう」

「では楽しみにお待ちしております陛下、そしてありがとうございます陛下」

「二三日ガリアに滞在していくといい案内係をつけよう」

「感謝します」

そう言って頭を下げるとジヨセフ陛下は笑いながら去っていった。

ああアルコールが頭に残ってるわ、クラクラする。

しばらくアルコールが抜けるまで座ってからちよつとフラフラとした足取りで外に出ると

誰かと言合いをしているデンコちゃんとそれを止めようとしているネルフがいた……なんて面白そうなんだ！

近寄ってデンコちゃんと言いつている相手を見ると……わお原作キャラの登場だぜ！

青い髪に眼鏡をかけたタバサだった

多分案内係ってタバサだな

ちなみに口喧嘩の中身はハシバミ草がまずいかどうかだった……
うんどうしてそんな話になるか理解出来ないや

気配を消してタバサの背後にたち両脇の下に手を入れ持ち上げてみた

やべえ柔らけえ

そのまま肩に乗せて肩車をする。

「「「………。」」」

うん全員無言！

「初めましてシャルロット・エレヌ・オルレアン殿。ユウキ・エ
ンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスと申します」

「っ！……私の名前はタバサ」

僕が本名を言ったことにたいして驚きながらも名前の訂正をしてくる

「ではよろしくお願いしますタバサちゃん……ああちなみにそこの部下AとBはネルフにデンコです」

と頭の上にいるタバサに向かって言う。

ちなみにこの時ネルフとデンコちゃんかなりジト目で見てきていたが無視した。

タバサちゃんを肩に乗せたまま街を案内をしてもらおう・・・という
か後ろからコソコソとシェフィールドがついてきてる

僕はムカついたので先程返してもらったナイフをシェフィールドに
向かって投擲し頬に掠らせた。

突然取った僕の不可解な行動にネルフとデンコちゃんはびっくりし
ていたがタバサちゃんは僕がシェフィールドに向かってナイフを投
げたことに気づきびっくりしている・・・ああ可愛いこのまま城に
連れてこうかな

シェフィールドは引いたようだが・・・なんか不快な空気が漂って
いるなあ

などと考えわざと街の人通りの少ない路地に入ると・・・・・・・・襲
撃されました！！

ガーゴイルが一杯だぜ！

さあてどうしようかな？

《続》

15話：あれ？僕復活なの？（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ジョセフの口調がよく分からないorz

それとなんかネルフくんが微妙に人気があったらしくてびっくり

次回こそタバサに活躍の場を・・・

次回もお楽しみに？

16話・ほのかな匂いに誘われて(前書き)

グダグダです

ああうまく書けなかったorz

誤字脱字は報告お願いします

16話：ほのかな匂いに誘われて

ヤッホーみんな〜！ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスだよ〜

今僕はね

街の不良にカツアゲされそうになってるいたたけな高校生ばりの困みを受けてるんだっ！！

迫りくる40体のガーゴイルたち！

素敵な御召し物（装備）をしているから輝いて見えるね！

キヤッホータバサちゃんを肩に乗せてるから動けないぜ！！

……まあ正直余裕ですけど

というかガーゴイル40体程度でどうにかなると思われてるのが若干ムカつくんですがね

いや疲れなくて済むからいいか

タバサちゃんを肩に乗せたままニコニコ笑って、ガーゴイルを操っているシェフィールドに話しかける。

「これはご主人様のご命令かな、ミヨズニトニルン？」

僕の言葉を理解出来ず首を傾げるネルフたち

『っ！貴様私のことまで分かっていたのだな！？』

明らかな動揺が目取れる・・・甘いなあご主人様ほど賢くないみたいですね

「早く質問に答えてください」

『・・・あのお方は関係ない』

シェフィールドはガーゴイルを通して今にも舌打ちをしそうな声色で言うてくる・・・まあ石像だから舌打ちとかは出来ないだろうけど

「なら面倒だから終わりにするね」

そう言うて足を振り上げ地面に下ろす

『サウザンドアイアンニードル』

地中から現れた鉄の棘がガーゴイルたちを串刺しにして身動きが取れないようにする。

『なっ!?!』

「ちよつと僕をナメすぎじゃないかな？」

僕を殺す気なら街を一つ焦土にする気であってこなきや」

僕はニタニタと厭らしい顔を浮かべて小馬鹿にしたような言い方でシエフィールドに言う

『ちっ』

舌打ちと共にガーゴイルたちから完全に魔力が消える……今度こそ逃げたか

一瞬の出来事に唾然とするネルフとデンコちゃん
タバサちゃんは何か思案げな顔をしている。

ちなみにネルフとデンベールはこんなことを思っていたりする

(やべえ！なんっすかあれは！？やっぱりユウキも人外クラスの仲間入りっす！怖えっす！逆らわないようにするっす！！)

(ふあああああー！！あんな鮮やかな魔法見たことがない！やっぱりこの人があの『魔法』のユウキ様なんだ！！ああこの人の部下になってよかったー！！)

「さあて面倒だから帰ろうか？」

「イエスサー！！」

なんか急に部下モードに成りはじめた二人・・・意味が分からない

というか杖も詠唱なしで魔法使っちゃったけど、先住魔法とか思われてないですよ？

若干不安になる僕

まあ実際は二人とも気にも止めてはいなかったわけだが……

そしてタバサちゃんに案内され街の宿に泊まることに……今回はわりと隠密任務なのでお城に泊まったりは出来ないのです。

デenkoちゃんと同じ部屋に泊まろうとしたらネルフに殴られたのでしょうがなくネルフと同じ部屋にいます……そういえばデenkoちゃん嫌がらなかったな

なんか嫌な予感がする。

クダクダとネルフと一瞬にベッドで横になっていると、部屋をノックされた。

わりと遅い時間なのに……誰ですかね？

「コンコン」

「はあくい入ってます」

「トイレじゃないんつすから・・・」

「鍵なら空いてますよ」

すると部屋に入ってきたのはタバサちゃんだった・・・成る程

「デートのお誘いかな？」

「なわけないっす」

僕のしょうもないことにネルフがツッコんできたがタバサちゃんは
頷く・・・まじですか？

「・・・ユウキ何をしたんつすか？」

「いや僕の魅力的なフェロモンに惹かれたんだよ！」

「ユウキは虫かなんかつすか？」

「失礼な」

「・・・外」

ネルフとおふざけをしているとタバサちゃんに外に出るよう促される。

「すまんネルフ・・・先に大人の階段上ってくるよ」

「・・・死ねばいいのにつす」

しょうもないことを言って先に外に出ていったタバサちゃんの後について外が出る。

「・・・。。。」

無言で突き進んで行くのでしようがなくついでいくと、人気のない街の外れの森まで連れていかれた・・・ああある意味デートだね

「・・・・・・・・。。。」

タバサちゃんは不意に立ち止まって僕に向き直り杖を構える。

「ああそれはジョセフ陛下の命令かな？」

「コケッ」

普通に頷くタバサちゃん・・・まじで？あの髭親父何してくれちゃってんの？

「殺して」って？」

「コケッ」

・・・なんかおかしいな

少し考え事をしてしているとタバサちゃんが呪文を詠唱し始める・・・
あの呪文は『ウエンディ・アイシクル』だな

僕は歩いてタバサちゃんに近づいていく・・・ちゃんと武器を用意して

タバサちゃんは僕の行動が理解できないと言わんばかりに首を傾げながらも呪文を唱え続け

『ウエンディ・アイシクル』

タバサちゃんが唱えた魔法によって大きな氷柱が僕に向かって飛来してくる。

僕は少しずつ左手に練り上げていた魔力を解放して魔法にして発動

『ファイアーブレード』

剣の形をした炎を振り上げ氷柱を切り裂く

余りの高温により氷がすぐに気化して水蒸気となり僕の視界を奪う
多分タバサちゃんこの水蒸気に隠れて襲ってくるから・・・後ろか
ら襲い掛かってきたタバサちゃんを組み伏せる。

「うわぁ〜危なかったよ」

「っ!」

タバサちゃんはおわされた上に腕を取られ組み伏せられたことに驚
きを隠せず驚愕する。

「で・・・もう終わりでいいよね?」

「・・・・・・・・。。。」

僕はタバサちゃんを離して少しだけ距離をとる。

「じゃあおやすみバイバイ」

「……………」

タバサちゃんは終始無言だったのでテンション高めに手を振りながら言ってみたのだが完全に無視されましたorz

まあいいや早く帰って寝よう

というか命令されたって言うの嘘だろうな

あの人が本気で殺す気なら絶対シエフィールドを監視要員として送ってくるだろうし

今回はあの人来てなかったからね

ああしょうもないことに付き合ってしまった……早く帰って寝よう

タバサちゃんは何がしたかったんですかね？・・・僕にはさっぱり分からん

タバサちゃんが襲ってきた理由が分からず色々考えながら宿に帰るとお腹が減ったので

何か作ってくれるよう宿の人に頼むと・・・オートミールが出された。

よし殺す！

いや確かに急に言った僕がいけないことは分かっているが・・・これはないと思うんですよね、本当に！！

ムカついたので厨房を借りて中華 番ばりにハッスルして料理していると

誰かが厨房に近づいてきた音がしたので覗いてみると・・・ネルフにデンコちゃんさらにタバサちゃんがいる。

あれ？タバサちゃん？

クンクンと犬のように鼻を鳴らしているのでしょうかがなく話しかけることにした。

「何やってるんですか君達は？」

「あっユウキ！いや美味しそう匂いがしたんで気になって来たっす」

「その淑女たちも？」

ニタニタとからかうようなニュアンスで言う

「うっっ」

「コケッ」

恥ずかしそうに俯くデンコちゃんにたいし無表情で頷くタバサちゃん

対照的だが実にイイネ！

うん、反応がよろしかったから食べさせてあげよう!!

出来た料理をどんどんみんなの前に並べていきみんなで食べることとなった。

「んじゃあ食べようか？」

僕の言葉と共にガツガツと食べていくみんな・・・ああ僕の方!!

急いで争うように食べ全て完食する

いやあこんなときに一人暮らして手に入れたスキルが役に立つとはね

皆満足げな顔しているから嬉しいよ

食事も終わり和んでいるとタバサちゃんが袖を引っ張ってくる。

「何かな？」

「どうして私を殺さなかったの？」

「「なっ!?!」」

淡々と自分の死を疑問視し尋ねてくるタバサちゃん……場所を考
えようね

「どういうことですか隊長!?!」

僕の首襟を掴んでガクガクと揺すぶるのは止めてくれないかなデン
コちゃん……首がとれるんで止めてください

「私は彼の命を狙ったのに彼は私を殺さなかった」

「「なっ!?!」」

タバサちゃんの淡々とした台詞に再び驚愕する二人

そしてデンコちゃんはタバサちゃんの言葉で僕を襲ったことに気づき腰につけたレイピアのような杖を抜こうとしたので間合いを詰めて柄を抑えこみ抜けないようにする。

「はい落ち着こうねデンコちゃん」

「しっしかし・・・隊長」

なんでそんな甘えた声を出して上目遣いで見るんですか？
止めてください

ガチでお持ち帰りしたくなります。

「いいんだよ別になんにもなかったわけだし」

そう言って柄から手を離し自分の席に戻りタバサちゃんに向き合い
質問の確認をする

「どうして君を殺さなかったか、だっけ？」

「コケッ」

タバサちゃんはそれに首を縦に振り肯定するので

僕は面倒くさそうに頭をかきながら応える

「ああ人を殺すのは面倒だし正直どうでもいいんだ・・・まあ可愛い女の子だから殺さなかったって理由が一番大きいかな」

タバサちゃんに近づいて笑いながら頭を撫でて言う・・・ふわあ柔らけえ

「・・・そう」

タバサちゃんは淡泊に応えて僕のされるがままになっている・・・このまま家に持ち帰っても大丈夫だよ、みんな！？

若干暴走していると

「ゴホン」

デンコちゃんが空気を読まずに咳をして僕を正気に戻してくれる・
・危ねえあと一秒遅かったら変なモードに入るところだったっ!!

手で額の汗を拭うような一人芝居をしていると

「でユウキどうするんっすかこの娘？」

なんか変なことを尋ねてくるネルフ・・・何言ってるのかな？

「何が？」

「いや人の命を狙っつて無罪って言うのはど「ネルフっ!!」な
っなんっすか？」

大声を出してネルフをビビらせながら大事なことをネルフに教える・
・世の中の唯一の真実を

「可愛いは正義だっ！！」

右手を握りしめ男らしく言う

「「はあ？」」

意味が分からないという風に首を傾げるネルフとデンコちゃん

僕はやれやれと言わんばかりに首を竦める。

「まったく君達は・・・可愛いは正義なんだ。可愛い女の子は何をやっても許されるんだっ！！」

僕の力強い宣言に呆れたような顔をする二人・・・あれ？何その顔ひどくね？

僕一応隊長だよ？そのゴミ虫を見るような目はなんですか？

泣きますよ？

《 続 》

16話・ほのかな匂いに誘われて（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

無理？ああうんごめんなさい

ネルフくんの外伝始めました
そっちもよかったら楽しんでください

次回もお楽しみに

17話：使い魔登場！？（前書き）

使い魔の登場です

皆さんなんだと思いますか？

誤字脱字は報告お願いします

17話：使い魔登場！？

どうもユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです

今僕はガリアから帰ってきてきてトリスティンの自分の部屋に監禁されているところさ！！

うん死にたいっ！

ネルフが面白そうだから潔く捕まったら一ヶ月分の書類を出されましたorz

まあ一ヶ月逃げ回りましたからね

あることは分かってましたが・・・一部屋埋まる量って言うのがありえないと思うのは僕だけですかね？

まあ確かに調子に乗って道路設備や公衆トイレの設置

汲み取り式トイレへの変更、農地開拓、税改正、公衆浴場の設置、平民も風呂に入らせたりと色々やっちゃいましたが・・・ここまで一般兵にやらせるかな、普通？

執務官とかいるよね？なんで僕に仕事がくるんですか？隊長の仕事より書類整理が多いんですけど？

よしあの鳥の骨をミンチにしよう！

ガリアから帰ってきてもう一週間も覗きをしてないんだよね！？乳帝たるこの僕が！！

・・・もう一週間もメイドさんを見てないんだよ？

見たのはいちいち確認にくるファレンさんと逃げようとして首に当てられる剣の輝きと過労で逝きかけた冥土だけだよ？

あつめいどさん見られてるじゃん、アツハハハ

あれ前世のオカンが手を振ってる・・・あつその川越えればいいのオカン？

今逝くから・・・

一部・完

って違うっ！！

目を覚ませ僕っ！！

このままだと冥土フルヘヴンに逝くことになるぞっ！！
僕が行きたいのはメイドフルヘヴンだろっ！！

どうにかして乳を見なければ・・・乳成分が足りない

また『無限の覗き魔』を使うか？

いや魔力反応で気づかれるし、あれだと視覚情報が全部あっちにい
っちゃうから仕事が進まないし

一回発動させて以来ピンク色の光がした瞬間城の女性たちが駆け付けてくるからね・・・素敵な装備つきで
釘バットとか鉈はメイドさんが装備するものじゃないから

メイドさんは優しさと思いやりと貞淑さそしてちょっとのドジを装備してください

お願いします

さあて話を戻してと

・・・どうすればいいんだ!?

全然思い付かないぞ!!

このエロ帝王がこんなところで乳成分が足りず力尽きるなんて許されることじゃないっ!!

くっ 僕が二人入ればな

・・・ああっそうだ!!

視覚情報が共有出来ればいいのかつ！！

なら誰かに覗かせてそいつと片目だけ視覚情報を・・・
いや待て・・・僕並の覗き力がなければこの城の浴場を覗くことは
出来ないんだつた！

くっファレンさん監修のもと浴場が作られたから周りのトラップが
危険すぎるんだよなあ

実際一度死にかけたことあるし・・・後一步のところで登っていた壁
から電流が走ってね、下には剣山があつたんだ。

あれは僕じゃなきゃ死んでたよ絶対

あの後会ったら舌打ちされたから若干殺す気だつたんだろうね！う
ん、生きてるって素晴らしいっ！！

さあてくだらないことを考えるのは止めにして

今一番大事なのはどうかやって乳成分をとるかだ

誰かに覗きの訓練を受けさせるか？

ネルフとか・・・いや駄目だ奴は最後の最後にへたれて誰かにチク
るタイプだ

ゴージュ・・・駄目だクソの役にも立たない

レイナー・・・顔がガチホモぽいから違うなきつと

ちつ駄目だ知っている男連中がろくでもないっ！！

くっならば人間以外に・・・・・・・・はっ！何故気がつかなかったん
だ、僕は！！

こっという時の為に使い魔という存在がいるのに！！

僕は魔法学校に行かなかった（行かせてくれなかった）から使い魔をまだ召喚してないんだった。

ちなみに行かせてくれなかった理由は「何か学ぶことがあるのかしら？」とか母上に言われて渋々引き下がりました・・・学校は女の子とイチャイチャするためにあるんですよ！！とは言えなかった。

r z

母上怖ええんだもん

・・・はあ

まあポジティブに考えよう今から使い魔を召喚して思う存分乳成分を吸収できると思えば憂鬱さも吹っ飛ぶというものだっ！！

僕はファレンさんに休憩してくると言っただけで城の中庭に行き使い魔を呼び出す準備をする・・・監視しているのはレイナーか

まああいつならいくらでも騙せる、よし行くぞっ！！

これより『サモン・サーヴァント』を実行する！！

というか僕の予想では「バのつくやつ」か「メのつくやつ」だと思
うんだよね

魔眼繋がりで

怖いから魔法陣に封印術式を組み込んでおこう・・・バのつくやつ
だったら世界が崩壊するだろうなあ

呪文もメのつくやつが呼びだされやすいよう改良しよう

「我が名はユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペ
ラトリス。五つの力を司るペンタゴン。我と共に運命を駆ける3の
1よ。我が元に姿を顕せ！！」

僕の呪文と共に魔法陣から煙と共に何かがい上がってくる・・・
紫？

煙でよく見えないけど

なんかトーテムポールみたいに・・・あっしまった！

「還れ！！」

僕は使い魔たちに近寄り上から地面に押し込む

「3の1って言ったでしょうが！！誰が3出てこいって言ったんだ
よー！！」

抵抗するよつにどんどん出てくる使い魔たち

くっ

「一週間はクリーニングオフじゃないのか！？還れっ！！」

頑張っ上から抑えつけるものの無駄な抵抗だったようで・・・紫
のトーテムポールが誕生した。

「アダっ!？」

噛まれた・・・このクソ蛇が!

「お前ら全員元いた場所に送り帰してやる!!」

僕は使い魔どもを元の場所に強制送還するために複写眼を発動させる、存在を解析すればそれに応じて場所「はうっ!？」

僕が解析に集中している時に紫色のトータルポールが崩れマイサンに直撃した・・・トータルポールは三つに分かれ直撃した奴を気遣っている。

貴様ら僕の股間を殴打しておいて心配なのは股間に触れた場所か!?

触れたからって腐ったりするかつ!!

「お前ら僕をナメなる!？」

ダメージが回復し立ち上がって叫んだ瞬間最初に攻撃してきたやつとは違うやつからもう一撃・・・僕のマイリトルサンシャインになんてことを!?

orzポーズになってダメージを回復していると突撃した二体が頭を抑えながら僕の周りをグルグルと回っている・・・なんかの部族かお前らは!?

もう一体ははわはわと口に手を当ててどうすればいいか悩んでいる・・・
・何もしなくていいよ!無垢な君のままできて!!

「お前ら・・・何ナメてんらばっ!?!」

ダメージも収まり産まれたての子馬のようなガクガクの足で立ち上がり
文句を言おうとしたらはわはわしていたのがマイオットセイに突っ込んできた。

再びorzポーズに移行する僕

キレたぞっ！！もう許さんっ！！こっとなったら・・・

「全員細胞の一欠けらも残さず塵にしてやる！！」

滅する！！

僕は空気中にある魔力を吸収し自分の中で練り続ける。

『聖なるかな星なるかな』

手を天へと翳し、足を開いて立つ

『万物の再生と破壊を司る対極なるものよ』

手に光を感じるように手を開き魔力を練る

『偉大なる存在にして邪悪なるものよ』

様々な魔力が僕の手に集まって行く

『最強にして最悪、最愛にして最高』

魔力は交じりあい虹色となり世界を揺るがす

『全ての母にして雄大、されど無限に広がりし天にただ一つ』

大地は奮え空は揺らぐ、全ての生物が異変に気づき怯えていくもちろん目の前の元トーテムポールどもも・・・ふっはは後悔するがい！！！僕の大事な子供に手を出したことを！！

『汝孤独なれど、祖は正に天空の霸王なり』

虹色に輝いていた魔力が金色へと輝きを変える

『無限にありし有を統べ、手繰りよせ引きずり落とせ！！』

翳していた手をつかみ取るように下に引く・・・この世界ごと塵と化せっ！！

『陽神墮と「何っ!?!」』

僕が詠唱している隙を狙って二体が僕の足にしがみつき、そして・

・

ゴンッ!!

「なああああああああ——————————っ!!」

四発目のゴールデンストライクだった・・・死ぬる

集まっていた魔力は霧散し発動は失敗した

三体は汗を拭うような動作をしたあとハイタッチなんかしてやがる。
・・何一仕事やり終えたみたいな面をしてやがる。

orzポーズのまま敵意を剥きだしにする僕に気づき近づいて突いてくる三体・・・ナメヤがって

僕は股間を抑えながら膝立ちで起き上がり元トーテムポールたちに話しかける。

「あれだろ、君達は。ぶつちやけ男日照りな某女神様に自分の神殿で逢引していたのが、気に食わなくて呪いを掛けられた三姉妹でしょ?」

僕の言葉にその通りと言わんばかりに指を指してくる三体・・・うぜえ

「言っちゃえば、行き遅れの女主任による『可愛い新入社員イジメ』の神話バージョンみたいな、給湯室レベルの遺恨で怪物にされて実際には関係ない上二人には酷い話しだよな」

二体は頷き一体を慰めるように抱きしめて頭を撫でている。

「君達の名前はゴーゴン三姉妹。ステンノ、エウリュアレそして・・・メドゥーサだろ？」

三体は名前を呼ばれるたびにそれぞれのポーズを取り、なんか戦隊ものみたいになっている・・・三女はあわあわしてたけど

ちなみに三体は二等身ぐらいの大きさと長女は紫色の髪をショートカットにしており次女は紫色の髪を肩まで伸ばし末女は紫色の髪を腰まで伸ばしている・・・まあ肩と腰も二等身じゃ大差ないけど

封印の効果でこんな状態になっているみたいだ・・・少し弱めるか喋れないみたいだし

「封印を弱めるから喋れる状態になってくれない？」

そう言って封印を弱めると長女と次女は頷き、身体が成長し美人な女の人たちになった・・・三女はなる気はないみたいだな

三体は同時にひざまずき、長女が恭しく口を開く

「お呼びいただきありがとうございます。『魔眼王』」

「はっ？なにそれ？」

唐突の意味不明なワードに固まる僕・・・ジョセフが知ってたのは知ってるけど
なんで魔族が？

「昔隻眼の韻竜を人里から追い払いましたよね？」

「うん」

まあ昔って言うっても2年ぐらい前ですけど

アホみたいにデカイ片目のドラゴンが人里に下りてきたから追い払おうと近づいたら韻竜で「暇だから戦え」とか言われてうんざり付き合ったら

僕も本気になっちゃって魔眼を使って応戦してギリギリ勝って追っ払ったアレか・・・

アレはやバかったなあ・・・母上に次ぐぐらいに強かった

というかバトルマニアの韻竜ってどうなんですかね？

「あの戦いを戦った韻竜が知能ある魔族や亜人にふれ回り、人の身でありながら竜に勝ったものとして知れ渡っております」

・・・あの韻竜あそこでぶち殺しておけばよかった

僕が思案していると次女が姉に続いて喋り

「でついたあだ名が『魔眼王』というわけでありますクソ主」

なにその中二病みたいな名前、まあ確かに呪文を詠唱してる時点でわりとイタい人だけどさ

いやだよ最後の魔眼が邪気眼とかだったら泣くよ？泣くからね？

というか

「キミクソ主とかナメてるでしょ？」

「ナメてはいませんがっついただけです」

「うおiiiiiiiiiiiiiiiiiiii可愛い顔をして下ネタ言っなっ！
「！」

サラッと毒というか下ネタ吐きやがって次女め

「まあいいや・・・で還っていいからキミたち」

「「また潰しましょうか？」

「うんずっと居ていいよ！-！」

マイサンを人質に取られちゃ勝ち目ないZE

僕は渋々コントラクトサーヴァントをして（僕のファーストキスが
露と消えました）三人は僕の使い魔となりましたとさ・・・
・・・
・おしまいorz

《続く》

17話：使い魔登場！？（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

正解はゴーゴン三姉妹でした。

ユウキくんはメドユーサだけを呼び出すつもりだったようですが・
・三体ついてくるお得パツクだったようです。

ちなみにバのつくやつは『バロール』

魔眼を持った神様で目があうと死にます

四人がかりで瞼の開閉をいつていたらしいので相当な大きさである
ことが推測できますね

そんなん出てきたらゼロ魔が終わるんで自重してもらいましたWWW

次回もお楽しみに

18話：能力確認（前書き）

グダグダと続きます

誤字脱字は報告お願いします

18話：能力確認

今僕は呼び出した馬鹿三体「ちょっと痛いからやめて蹴らないで！」
・素敵な使い魔三体の能力を調べようとしているところです。

召喚されたことで自らが持つ眼の力が変わったらしく本人たちも把握出来てないらしい・・・使えねえ（ボソッ

さあて三人を複写眼で解析してみますか・・・ほおほっほっ、こりや使えるな

名前に由来する力かステンノ（強い女、Sthennno）、エウリユアレ（遠くに飛ぶ女、Euryele）、そしてメドューサ（支配する女、Medusa）か・・・エウリユアレは随分といい能力だね。性格を抜きにすれば最高なんだけど

んっ？メドューサは史実通りの能力か、召喚に影響されなかったの

か・・・それほどまでに強く呪われたのかな、ひでえ話だね

というかよく考えるとメドユースって神話だと英雄ペルセウスに首切られて死んでなかったっけ？

もしかしたらパラレルワールドかもしれないな・・・まあそこらへんはあとでゆっくり考えるところとして

問題なのは・・・

「君達・・・どこに住むつもりなの？」

封印状態を解かない二等身の三女を頭の上に乗せながら唇をひくひくさせながら話しかける・・・最初は、はわはわしていたが今はお気に入りのようだ

歩幅が小さすぎてどんどん差が広がるのでしょうかがなく頭の上に乗せたのである。

・・・嫌な予感がするんだね

「ご主人の部屋ですが、何か？」

何言ってるんだこの人は的な目で見られる・・・いやおかしいのは君達だから

「普通に考えて僕の部屋に4人も住めないよ」

ちなみにサモンサーヴァントを見ていたレイナーは気絶させてある。

「ではどうすれば？」

「まあ隣の部屋を借りれるよう頼んでみるよ・・・だからバールのようなものを股間の高さで素振りするのは止めてくれないかな？」

バールのようなものだと言いつけるあの人のお話になるからやめようね

「住居は確保出来るなら問題ないでありますね、クソ主」

またクソ主って・・・

次女はそういつて素振りをやめてくれた

「にしても・・・いつまで君は封印状態でいる気だい？」

頭の上にいる三女に話しかけると身体をビクツと震わせて、顔を僕の頭に押し付けて顔を隠してしまう・・・そして射殺さんばかりに睨みつけてくる姉二人

「いついやほらせめているわけじゃないんだよ？」

君なりの事情があるのは分かるけど・・・ほら君自身が行動しにくいだろ？」

僕は姉二人の殺気混じりの視線にしどろもどろになりながらも三女を励まそうとする。

三女は俯かせていた顔をゆっくりとあげて、僕の顔を覗き込みなが

らゆっくりと首を横にふる・・・今君がどこにいるかを考えてくれれば問題あることに気づいてくれると思うんだけど

「はあまあともかくこれからよろしく頼むよ、マイサーヴァント」

「「仰せのままに」」

コクッ

姉二人は恭しく、三女は頭の上で首を縦にふり三姉妹全員が肯定を示す。

とりあえずファレンさんに使い魔を呼び出したことを報告し、部屋をもらった・・・あれ報告するならレイナー気絶させた意味ないや

まあいいやレイナーDMばっし

三人を部屋に案内し、自室で『無限の剣製』ばりの無限の書類を相手に格闘していると・・・僕の精神力の蓄えは十分じゃないからお

引き取りをお願いしたいです

お呼びだしをくりました。面倒だなファレンさんだけで行ってくれないかな？

魔法衛士隊会議なんかロクなもんじゃないから僕が参加しなくても大丈夫だと思うんですけどね……。ファレンさんにそれを伝えるとひっぱたかれたので渋々会議の行われている部屋へとファレンさんと共に向かう

すでに三人の隊長が集まっているらしく張り詰めた空気が外にまで漂ってくる……。真面目な案件か

尚更僕はいらないじゃないですか

などとファレンさんに内心文句を言いつつ部屋に入る。

部屋には『閃光』を始めとした魔法衛士隊隊長と副隊長やら高名な人達がいっぱいいた……。ああうざりたい

入ったと同時に感じる視線を全て無視して円卓の扉に近い位置の席に向かう・・・早く帰りたいから

ため息をつきながら席に座ろうとすると何故か隊長と副隊長全員が僕の一挙一動に注目している

「何か？」

「・・・いや別に」「」

訝しげな顔をして尋ねると全員が目を逸らして答えてくる・・・あからさまに何かあるじゃないですか

不満げな顔を浮かべながら今度こそ席につくと議長代わりのマンテイコア隊のド・ゼツサールが議題をだしてくる、それは・・・

「ユニコーン隊の過剰戦力について」

・・・面倒

「ユニコーン隊は過剰な戦力を持ちすぎではないだろうか？」

ヒボグリフ隊の隊長が小馬鹿にしたような口調で言ってくるので

「私たちは普通に訓練を行っているだけなのですが・・・過剰とは少々軟弱いや失礼」

こちらも小馬鹿にしたように返した

すると案の定面白いように釣れて

「何っ！？貴様我々ヒボグリフ隊を侮辱するのか！！」

「いえまさか由緒ただしきヒボグリフ隊が新設されたユニコーン隊なんかに負けるとは思っていませんよ」

憤怒のあまり顔を真っ赤にして怒鳴ってくるのでニコニコと笑いながら言葉を返す

「当たり前だつ！！」

はい、釣れました

「この通りヒポグリフ隊が勝てると言うのに過剰戦力なわけがないじゃないですか？もちろんグリフォン隊も余裕ですよ、ねえ」閃光『殿？』

ニコニコとロリコン子爵に語りかける・・・昔サボっているところを見つかり勝負を挑まれたのでフルボッコにしてやった。

それ以来ワルド子爵は僕のことを苦手な様で・・・絶対に僕には逆らわないし、関わろうとしませんね

「えっええもちろんですとも」

あからさまにびびりながら言うてる・・・やり過ぎたか、いや確かにあまりにもムカついたから全身の骨を砕いちゃったけどさ、ビビりすぎでしょ

「ほらこの通り隊長3人がユニコーン隊の過剰戦力を否定していません・・・もうお話しは必要ありませんよね、ド・ゼツサール殿？」

ド・ゼツサールは僕の言葉に苦虫を噛んだような顔になり、簡単に釣られた馬鹿と裏切ったビビりを睨んでいる。

「しかしユニコーン隊が強いのは事実、そちらの衛士を何人が・・・

「あまりナメるなよ、ド・ゼツサール」

あまりにもふざけた提案にいらつき殺気を出しながら睨む

「君達は自分たちの衛士たちを育てずにポイポイ違うところから借りる気なのか？こんなくだらないことで呼び出すなら衛士の質をあげろ・・・もう用はないですね、失礼します」

吐き捨てるように言って部屋から出ようとするがド・ゼツサールに止められる

「まっ待ちたまえ」

「・・・なんですか？」

低い声で返す

「きつ君はそんなに衛士たちを強くして何を望むのかね！」

ド・ゼツサールはヤケクソのように最後に質問を投げ掛けてきた。

だがこの質問の答えは簡単だ

「世界平和です・・・僕はユニコーン隊だけで他の国を落とせるくらい強くしますよ？」

ニタリと悪魔のような笑みで振り返りそのまま部屋を出る

外まで中の硬直した空気を感じるが・・・アホくさくて無視した。

実際ユニコーン隊を強くした理由は簡単である……僕がいなくなっても国が潰れない程度の戦力を保持して欲しいからである。

いつ死ぬか分からない個人をあてにするなんて愚かものすることである……なら周りをあてに出来ればいい

ということユニコーン隊は武はもちろん、ある程度の学を持っているやつらには執務官にも出来るよう鍛えさせている……早く使えるようになってくれなければ僕が過労と乳成分不足で死んでしま
うからな

358

さあて仕事仕事

ああ人生ままならん

《続く》

18話：能力確認（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

過去にワルドをフルボッコにしているユウキくんWWW

さあて次回も何も考えていませんが楽しんでいただければ幸いです

次回もお楽しみに

19話：バカデシヨキミ(前書き)

なかなか面白く書けませんorz

誤字脱字は報告お願いします

19話：バカデシヨキミ

アホな隊長会議から3日ぐらい経ち乳成分もすでに枯れつつあります・・・三姉妹は役に立ちませんorz

姉二人に頼んだら半殺しにされるのは目に見えているので三女を騙して覗かせようとしたら姉二人にばれフルボッコにされ

普通に土下座して頼んだらわはわしながらゴールデンボールストライカーをかましてきやがりました。

いや間違いなく姉二人と血が繋がっていることが分かりますね、躊躇わず急所を狙ってくる辺りとか・・・

そんな中書類の整理をしていると久しぶりの討伐任務を下された。

久しぶりにシャバに出れる嬉しさで舞い上がり、三女を抱きしめながら任務の詳細を聞く・・・はわはわしてる三女可愛いわ

一家に一人欲しい

「ラ・モミール伯爵より付近に出没するコボルト鬼を討伐して欲しいとのこと。なお数は分からずまるで見張りのように必ず2、3体はいるので気味が悪いから早く倒してくれと急かされています」

ファレンさんは僕が三女を抱きしめながら聞いているのを当たり前のようにスルーしながら冷静に報告してくる。

「ふむ、一回そこに討伐しに行きませんでしたか？」

「行ってます。話しが通じるコボルト鬼だったので隊長が約束をさせ山奥に帰ってもらっています」

「そうですよね、ならなんで約束を破ったんでしょうか？」

「所詮亜人ですから」

ファレンさんが亜人を見下したように言うので

ペチッ

軽くファレンさんにチョップをして言う

「亜人には亜人なりの思いや生き様があるんですからそんなこと言
っちゃいけませんよ、ねっ」

笑顔を浮かべファレンさんを説得するが、叩かれたことを怒ってい
るのか顔を真っ赤にして横を向いてしまった。

三女はそれを面白くなさそうに頬を膨らませて見ている。

「さあてじゃあ出勤しましょう。今回は僕が出るんでそんなに隊員
はいりません。そうですね・・・ネルフとデンバー・ド・アルザ
スの両名だけで構いません」

「はっ!?!」

僕の命令にファレンさんは受領し敬礼をしてから外に出て二人に任
務を伝えに行く

「君は来るかい？」

僕は三女の両脇に手を差し込み高い高いするように三女をあげながら共に来るかを尋ねる

コクッ

三女は小さな頭を振り肯定を示す
ついでにさつきから横に無言で立って僕を睨み殺そうとしている姉二人にも尋ねる

「君たちはどうする？」

「今回は遠慮しておきますご主人」

「面倒でありますクソ主」

「はい了解二人とも頭痛が痛・・・悪いからお休みと・・・嘘です！！ごめんなさい！！」

危ねえ、長女が僕を羽交い締めにして次女がゴールデンボールスト

ライクをかまそつと椅子を振り上げたところだったぜ！！

僕のマイリトルベビーは致死寸前です！！

むしろオーバーキル

土下座しながら謝り椅子を下ろしてもらい、三女を頭に乗せ城の中庭へと向かう・・・中庭に集合するよう伝えたのでもう来ているころだろう。

思った通りすでに二人は来ており、手を振りながら近づいていく

「やぁネルフ、デンコちゃん」

「久しぶりっすユウキ」

「お久しぶりです、ユウキ隊長！！」

フランクなネルフとは対照的に恭しく敬礼までしてくるデッコちゃんは

「相変わらず固いねデッコちゃんは」

「はっははそうっすね、デビィは少し固いっす」

「おっお前がフランクすぎるんだ」

・・・ふむ、なかなか仲良くなってマスネ

ネルフもデビィなんて愛称で呼んじゃって

デッコちゃんも顔真っ赤にしちゃって・・・僕こんなイチヤ
ラブ空間に堪えられるかな

堪えられなくなったらどうしよう

というか何があったんですかね？

まあ多分いつか外伝に載るからそっちをお楽しみに

うんメタ発言

「そついえば見てない間ユウキは何してたんっすか？」

取って付けた様に僕に話しかけやがって

「ずっと部屋に軟禁されたり、股間に連撃を喰らったり、風呂覗きに行こうとして半殺しにされたりとたいしたことはしてないさ」

外人のようなオーバーリアクションで腕をあげ肩を上下させる

「全部まともじゃなくてウチ二つは軽く犯罪っすね」

デンコちゃんは覗きをしたと言った時点で僕をゴミ虫を見るような目で見ていたのでそちらは見ないようになっている・・・怖いからね！！

「ネルフも手伝ったことあるよね！」

矛先をずらすために普通に嘘をつきネルフを犠牲にする

「いついやそんなことしてな」ネルフ、見苦しくZ.O」「ちよっコウキ?！」

僕の言葉をオドオドしながら否定するが・・・その態度は余計怪しく見えるからね

追い打ちをかけたので完全にデンコちゃんの矛先はネルフへと向かっている。

「・・・最低だな」

絶対零度のデンコちゃんの視線・・・・・・・・僕より先に大人の階段を登ろうとした罰だ

「違っつす!!本当に見てないっす!!！」

クックククざまあ

僕のおくどい顔を見て僕を窘めようとする三女……頭をポコポコと叩いてくる。

可愛い

三女に和んでいると痴話喧嘩を終えた二人はようやく僕の頭の上の三女に目を向けてきた。

「そっぴえは隊長、頭の上にいるその女の子はなんですか？」

「ああこの娘は……」

僕が喋ろうとした瞬間ネルフが突如僕の両肩を掴み、友を心配するような目をしながら言うてくる

「自首するっす、ユウキ。いくら女の子と付き合えないからって誘拐や小さな女の子に手を出すのは犯罪っす」

両肩に力を込めて僕の犯罪を防止しようとするネルフ

「僕はロリコンじゃねえー！ー！ーっ！！」

頭上の三女を掴みネルフに向かって投擲する、三女は空中で体勢を変え飛び蹴りをするような形になりネルフの股間に激突した。

ネルフは崩れ落ちorzポーズになって奇声をあげながら悶えている中、突撃した三女は仕事を終えたあとすぐにあわあわしながら僕の後ろに逃げ隠れる。

そして僕は何事もなかったようにデンコちゃんに向き直り、三女の説明をする。

「この娘は僕の使い魔だよ」

「そうなんですか・・・こんな小さな女の子が」

「いやこんななりでも違う国の神話に登場する娘だからね？」

「はっ？神話？」

僕の言った事実にはうけたように口を開くデンコちゃん

「うんメドユーサ」

僕は簡単に三女の正体を明かしたが三女は不満なようで頬を膨らませて僕の足にしがみつき頭をぶつけてくる………なんでこんなに可愛いんっすかこの娘？

やべえネルフの口癖が移るくらいテンパってるよ僕

「メツメドユーサ！？あのペルセウスに倒された！？」

ん？

「あれよく知ってるねデンコちゃん」

「あついやそついつお話が好きなんで」

確かに好きじゃなきゃ他の国のお話なんか集めないよな

「うん、そのメドユーサだけど?」

「そんな化け物を「はいストップ」なっなんですか!??」

僕は少しだけ声のトーンを落しながら言う。

「他人のことを化け物なんて呼んじゃ駄目だ。それに君はこの娘のお話を知っているんだよね?なら尚更この娘を化け物なんて呼んではいけない」

「あつ…….すいません」

僕の言葉でメドユーサの話を思い出しメドユーサに向かって謝るデ
ンコちゃん…….呪いで醜い姿に変えられた人を化け物なんて呼ん
じゃいけない

メドユーサは謝られて僕の足に隠れながらもオドオドしながら気に
しなくていいと言うように首を横にふる

にしても喋らないのござったいな

デンコちゃんとメドユーサは仲直りしたみたいだが・・・メドユーサは喋らない

どうにかして喋らせたいというか大きな姿になって欲しい

まあなんとなく大きくならない理由は分かってるですよ

「まあともかく馬車に向かおう」

「了解っす!!」

馬車を待機させている場所に行き馬車に乗り込み目的地へと向かう。
・・・あれ？なんか積み荷が動いたような？

僕は移動する時に便利なので自分用の馬車を持っているんですが・・・

・生き物は積んでないはずなんですが

まあ生き物は積んでないけど色々な魔具は積んでるけどね、それに馬車自体も魔法でコーティングしてるから戦車並に固いしぶっちゃけやり過ぎた感があります

で生き物は積んでないから動くものはないはずなんだけどと思い、動いたと思われる場所を見ると・・・・・・・・・・

このアホリエッタ姫がっ！！

《続く》

19話：バカデシヨキミ（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

いやはやユウキくんの口調が一定にならないorz

基本丁寧口調なのに、つい砕けた感じになるとそのまま戻れなくなります

馬車の中にいたのはアホ姫ですw

次回もお楽しみに

20話…いつか絶対にお仕事をやるから(前書き)

またグダグダ面白く書けないorz

)))))
(っブーン

誤字脱字は報告お願いします

20話…いつか絶対にお仕置きするから

髪が見えてるんですよ!!

あまりのアホさ加減に複写眼を使ってまで確かめてしまった。

僕は積み荷に隠れていたアンリエッタ姫をそこから引っ張りだし僕の前に立たせようとする。

「あっ」

隠れていたアンリエッタ姫は急に引っ張られたことに驚き、何故か僕に抱き着いてくる・・・何やってるんですか、あんたは

わざわざ町娘が着るような格好に着替えて

暗殺してくださいって言うてるようなもんじゃないですか、まったく

抱き着いてくるアホリエッタを引きはがして向かい合う。

「何をやっていらっしやるんですか？」

「……………」

無言で答えようとせず目を逸らすアンリエッタ姫

「まだ間に合うのでお城に帰りましょう」

「……………嫌です」

ようやく口を開いたと思っただけですか

「何を言ってるんですか貴女は？貴女が何かに巻き込まれて死んでしまったら国が終わってしまいます。どうかお戻りください」

「……………」

諫めるような口調でアンリエッタ姫に話しかけるがアンリエッタ姫は再び黙して答えようとしない

ちなみにネルフとデンコちゃんは御者をして馬を操っているので馬車の中にはいません・・・馬車の中でイチャラブされるのが果てしなく僕の精神面に悪いので馬車から叩き出したのである。

「・・・はあ。エウリュアレの力で城に転移させますから」

「待つてください!!」

僕がエウリュアレの力を借りてアンリエッタ姫を城に転移させようとするアンリエッタ姫は大きな声を出して止めさせようとする・・・御者している二人に気づかれるから大きな声はやめてください

貴女がここにいるだけで問題なんですから

「なんですか？」

「一緒にいさせてください」

頭を垂れ俯きながら言ってくるアンリエッタ姫

「駄目です。よく考えて」………「………します。」………
・すいません聞こえませんでしたもう一回言ってください」

なんか今嫌な台詞を聞いたような……

「……今私を城に戻したら」

「モドシタラ？」

あれ？なんか冷や汗が止まらないな

おかしいな

「部屋にある隠してある猥褻な本と衣装を燃やします」

毎日複写眼を使ってサイズを計ってぶっ倒れるまで頑張った僕のパ
ッションが！！

目から血の涙が出るまで酷使し続けたんだぞ！！

ストーカーも真っ青になるぐらい使用人全員のサイズを集め、成長
率やその他諸々まで考えつくつた衣装の精工さを！！

どこで売ってたものですか？とか聞かれるレベルなんだぞ！！

貴様に理解できるのかっ！？

クソっ！アホがアホなりに知恵をつけやがって！！

といつかなんでそれらの存在を知っているんですか！？

・・・あれ？もしかして母上？

この前お城来たって聞いたけど僕の部屋を漁りに来たんですか！？

ここでも尚立ち塞がるのか母上！？

絶対貴女ラスボスですよね！？

ジヨセフの後ろに母上がいても僕は驚きませんよ！！

チクシヨウ！

「・・・でなんで一緒に来たいんですか？」

僕は恨みの籠った目をしてアホ姫を見つめながらやげやりに聞く

「・・・貴方といたいからに決まってるじゃないですか」

少し拗ねたように頬を膨らませつつ紅く染めながら上目遣いで僕の瞳を見据えながら愛を囁いてくるが……

「はいはいそうですね」

普通に流す……アホ臭くて聞いちゃいらねん

エコカー減税でもないのにパンパン男を乗り換えるやつの台詞なんざ信用しない

それに僕なんかを誰かが好きになるはずはない

「っ!!……貴方は!!」

冷たい僕の態度に目を鋭くし敵意を向けてくる

「もういいですから着いてきていいですからやめてください」

「……………」

アンリエッタ姫は目を伏せながら口を閉じる。

僕はアンリエッタ姫から離れ、今まで空気だった馬車の端っこにいる三女に近づき抱きしめる……。ああ癒される。もふもふが堪らない。

三女は抱きしめられはわはわしていたが頭を撫でられてからは猫のように目を細め気持ち良さそうにしている。

386

そんな僕を見ながらアンリエッタ姫は所在なさに立ち尽くしているので座るよう促す。

「座ったらいかがですか？」

「……………」

僕の声に無言で答え僕と向かい合うように座り込む……。ジロジロ

見ないでください、三女が怯えますから

「ああ失礼ながらも今からは貴女様のことをアンと呼ぶので悪しからず」

「それはっ!!」

急にテンションをあげにじり寄ってくる姫様……えっ何これ？怖い、意味わかんないですが

「街中でアンリエッタなんて呼べるわけないでしょう？だからアンと呼びます。別に親しみを込めて呼んでいるわけではありません」

「っ!……分かりましたっ!!」

不機嫌になり怒鳴り付けるように答えてくる……何がしたいんだこの人は？

アンリエッタ姫の行動が分からずビクビクしながらも三女をもふもふしている、町に着いたらしく馬車が停止した。

すぐにネルフが馬車の中に来て着いたことを告げてくる。

「ユウキ着いたっす・・・よ・・・」

「ああ今いくよ」

ん？何固まってるのネルフ？

「ユウキ誰っすか？その人は？」

ネルフは僕の向かい側に座る姫様を指差しながら聞いてくる・・・
急に馬車に知らない人が乗ってたらそれは驚くよね

「この人は僕の知り合、彼女のアンです。よろしくお願ひしますね」
「.....」

そう言つて腕を絡め僕に胸を押し当てて顔を赤らめるアホ姫

何故か無言になる僕とネルフ

しばらく無言で見つめ合いネルフは馬車の中を見回して不意に口を開く

「ああうんユウキ彼女いたんっすね。悪いことしたっす……薄暗い馬車の中で二人きりだったらやることは一つっすね（ボソッ）」

そう言つて出ていこうとするネルフを思わずしがみつき止める。

「いや違つ！君の思っているようなことはしてないから！この人はただの知り合いだから！」

必死にしがみつき誤解を解くよう頑張る。

いや駄目だからこの人と肉体関係を結んだ時点で僕の人生は固定されるから!!

僕の必死の説得によやく誤解が解けたので、そのまま領主の屋敷へとは行かずアホ姫を引き連れたままコボルト鬼が発生しているという場所に向かう……どっかに置いておくよりは僕の近くにいる方が100倍安全だ。

するとそこには3体のコボルト鬼がいたので近寄ると

「止まれ！」

矢を番えた弓を向けられ停止するよう言われた。

「昔ここを訪ねたユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです。何故約束を違えたのかを尋ねに参りました」

「っ!! まっ『魔眼王』様でいらっしやられましたか!! しっ失礼しました!!」

弓を向けていたコボルト鬼たちは僕の名前を聞き、すぐに武器を放

り出し土下座をしている………前来た時は言われなかったのに

ここまで広がっていたのかその中二病なあだ名はorz

わりと本気で落ち込んだ。

「『魔眼王』ってなんのことっすか？」

ネルフとデンコちゃんは僕が魔眼持ちだと知らないの『魔眼王』
と言っあだ名を理解出来ずにいる……そのまま分からなくていい
からね！

「ただの嫌がらせだよ」

そう言ってネルフとデンコちゃんの疑問をぶった切り無視をして

更なる質問を無視するために精神的ダメージを受けた分回復するよ
うにほうけていると、森の奥の方からコボルト鬼の長らしきコボル
ト鬼が出てきた。

「お久しぶりでございます『魔眼王』様」

「久しぶりです」

頭をさげあい挨拶をしてから肝心の要件を尋ねる。

「どうして約束を破って人の領域に入ったのですか？」

僕の質問に長はとんでもないと言わんばかりに首をふり言う

「先に人間たちが約束を破り我々の領域に入ってきたのです！」

「本当ですか？」

僕が少しだけ強い言い方をして脅すように聞くと長は誠意を込めた目で僕を見返しながら断言する。

「はい、本当です」

長の目を見て嘘をついているようには見えなかったので詳しく話を聞くことにした……。面倒な事件に巻き込まれるとは知らずに

《続く》

20話・いつか絶対にお仕置きするから（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

相変わらず話し進めるのが遅い作者××です

ハツハハ笑えないorz

次回もお楽しみに

21話・世の中バカばっか（前書き）

こっちに夢中で他の作品を更新してない今日この頃

誤字脱字は報告お願いします

21話：世の中バカばっか

コボルト鬼の長曰く、ここ最近約束を破ってコボルト鬼たちの領域に侵入する馬車があったので警告するために近づいたら

メイジ何人がで守りを固めているらしく迂闊に近寄れないらしい馬車の中からはたくさんのお人の気配がするため伏兵の心配をして、より慎重になってしまい手を出せないとのこと

で馬車をつけて行き先を確かめると領主の屋敷に向かったと

護衛のメイジ

沢山の人の気配

領主の屋敷

成る程ね

まあ一応聞き込みを試みますか

面倒ながらもコボルト鬼たちに頼まれてしまったのでしょうがなくアホ姫、ネルフ、デンコちゃんを引き連れ近くの村に向かいあることを尋ねる。

案の定というかなんとか訪れた村は酷い有様だった・・・行き倒れている人々、やせ細った人々まともな食料がないのを見てはいられない有様であった。

この村では話しを聞いても無意味だな

そう思い隣の村へと移動するところらは先程と比べてまだましであった・・・こっちは養殖場ってわけか

近くにいた村の人たちに話を聞いていくとやはりアレは起きているらしい。

こんな厄介事に巻き込まれるとは思ってなかったdeath

まるで疫病神がついているような不幸加減に思わず疫病神Aを見て
しまう……まじで疫病神かもしれん

などと内心かなり失礼なことを考えつつ先程から寄生虫よろしく僕の腕に寄生しているアホ姫を見つめる。

……はあ。普通に可愛いだからアホみたいな冗談言っ
いでちゃっちゃんとウエルズさんと結婚しちゃってくださいよ。

398

右腕に抱き着いているアンリエッタ姫に心内で愚痴を言いながらも
事件の全容を解析していく

ふむやっぱり領主の館に乗り込んだ方が早いかもしれないですね……
……まあ出たとこ勝負で一丁派手にぶちかましますか！！

というかアンリエッタ姫が腕にくっついてからずっと頭上の三女が頭をポカポカと叩いてくるんですが……なんなんですか？

三女に尋ねるような視線を向けると三女は拗ねたように頬を膨らまして頭から飛び降りた。

そして何故か封印状態を止め人間形態となり僕を引っ張り姫様から引きはがした。

「あのメドューサ？なんでこんなことを？」

よく分からない行動に疑問符を浮かべつつ尋ねるとメドューサは僕の左腕に抱き着き姫様を睨むような目つきで

「御主人様は私のです」

と言いつつ放った。

あまりの事態展開にみんなはついていけず呆然としている……

・かくいう僕も硬直してますけど

まあそれはなんというかその台詞を聞いた直後姫様から出される殺気によってだからみんなとは事情が違うわけで

「貴女はユウキのなんなんですか？」

姫様は僕の右腕をとりメドユーサから引き離そうと引っ張りながらニコヤカに青筋を立ててきく………凄い威圧感が

「御主人様の使い魔です」

とメドユーサも僕を引っ張りながら少し頬を染めて言う………
なんでこうこの娘は可愛い行動を

メドユーサに和んでいると姫様から殺気を感じたので慌ててメドユーサから目を逸らす。

姫様とメドユーサは二人とも無言となり睨み合いが続く、もちろんその間も僕を引っ張る力は弱められずだんだんと強くなっていく

うん！もう無理ちぎれる！

右腕と左腕が悲鳴をあげてます！

先程から肩関節がゴキツと通常ならぬような異常な音を発しているんですが！？

あまりの痛みにセルフに助けを求めるように見つめると……
……野郎目を逸らしてデソコちゃんと話し始めやがった！

お前そんな魔法とか政治について興味ないだろ！？
なにそれ趣味とかなにお見合い！？ナメてんの！？

話題が尽きたからって天気の話なんかしてんじゃねえぞ！！

た・す・け・ろ・や！！

あまりの痛みに涙を流しかけながらセルフを睨む

くっ天は無情なり！！

「アンさん手を離してくださいますか？」

関節の悲鳴の代わりに捻り出すような声を出し姫様に頼みこむ

姫様は僕を睨むように見据え

「分かりました！もういいですっ！！」

叩きつけるような大声を出したあと僕の腕を離しどこかに行ってしまう……ちよい待てや！あんた自分の立場を忘れてますよ！！

しょうがないので紙に魔力を込め作った式紙のようなものを姫様に張り付け異常事態が発生したときに感知できるようにする……
・まあ一応対魔力結界を張れるようにしてあるけど

……はぁ本当にしょうもねえなあの姫様は

しょうがないのでアホ姫を放置して色々準備を進めていると・・・
・・・あつアホ姫!!

バカデシヨ

絶対にバカですよね？

ああもう!!

「今から領主の館に踏み込みます。準備は大丈夫ですか？」

「・・・・・・・・」

帰ってきたのが無言だったのでそれ以上は黙殺する。

さあショーの始まりだ!!

まったくユウキは!!

ユウキに対する怒りを燃やしながら町を歩いていると……
何者かに背後から襲われ気を失ってしまった。

目が覚めるとそこは牢獄の中で周りを見ると私と同じような身なりをした女の子たちが私と同じように捕われていた……ここは？

近くにいた女の子に尋ねると

「ここはラ・モミール伯爵の屋敷だよ……伯爵は人身売買をするために私たちをさらって来たのさ。これから人買いに買われて奴隷として働かされるのさ」

そう言った少女は泣いてしまい、ロクに話しも出来ない状態になってしまう……なんてこと！民を守るべき貴族が人身売買を！こんな愚かなことをするなんて!!

私は怒りに身を震わせますが、今の私に出来ることはなくただ絶望しないよう助けを求めるだけでした。

ユウキなら来てくれる・・・そう信じて

そして牢番に言われ牢から出されて屋敷の入口に並ばされました。伯爵は私たちを見て値段を決めているようです・・・このまま売られてしまったら、私はユウキに

とうとう絶望を身に宿して始祖ブリミルに祈りを捧げ始めたその時、入口の扉が蹴り破られそこからおかしな格好をした三人組が飛び出してきた。

そして私たちの前にたち

「可愛い女の子は正義の結晶!!」

「・・・そんな正義を貫き愛するために」

「・・・・・・・・・・。」

「ごほんっ、乳の理想郷からやってきた!!乳の戦士っ!!」

「……………可憐な花と可愛い女の子の笑顔を護るため」

「……………。」

「悪鬼非道な醜い悪を懲らしめる!!」

「…………オッオッパイの戦士」

「……………。」

「乳帝+ 参上っ!!」

黒い顔全体を覆う仮面をつけた全身黒尽くめの人と蝶をかたどったマスクをつけた金ぴかの二人である。

仮面の人物はノリノリで台詞を言い放っていたが、マスクの二人は一人は嫌々、一人は死んだ魚のような目をして黙して何も言わずにいた。

仮面の人がポーズをとる中、不審者たちの登場により場が固まっている……何をやっているんですかユウキ？

助けには来てくれましたが……これはいくらなんでもないと思います。

s i d e o u t

ヒーロー風に登場したのに場の空気が悪かった、人身売買のアジトを突き止め売られそうになっていた女の子たちを助けにきたのに……

「ふむ……台詞がまずかったか、だから君達も名前を決めた方がいいって言ったんだよ」

「そういう問題じゃないっすー！むしろ でよかったとすら感じた

っす！！」

僕が感じた盛り上がらない点とネルフが感じた盛り上がらない点は違っらしい………なかなか難しいな

深刻に悩んでいるとようやく太った油達磨みみたいなラ・モミール伯爵は気を取り戻し僕たちに怒鳴りかけてくる。

「貴様ら！ここを伯爵家の屋敷としての狼藉か！？」

太い腹を揺らしながら唾を飛ばしてくる

「知ったことかっ！！」

僕は相手の鼓膜を破らんばかりの大声を出しラ・モミール伯爵たちにたたき付ける。

「花は野に咲いてこそ価値がある！そんな可憐な花を無理矢理手折るとは言語道断！！万死いや無限大数死を越えても尚足りないっ！！とりあえず一回死んどけ！」

言葉と共に右足を地面に叩きつけ魔法を発動させる

『サウザンドアイアンニードル』

メイジたちの手足を地面から生えた金属の棘がつらぬき彼らに痛みを与え行動不能にする。

なんとか避けた伯爵は地面をはいつくばり逃げようとしている・・・
・・・その間に裏から回っていたメドューサにアイコンタクトを送り捕われていた女の子たちを逃がす。

伯爵は逃げられたことに気づき逆上して杖を抜いた・・・
更何を

慢心していた僕は愚かにもそんなことを思ってしまった。

そして伯爵はいまだに呆然としているアンリエッタに向かって杖を向け、呪文を唱えはじめた。

「「なっ！！」「」

それに気づいたネルフとデンベルが伯爵に飛びつこうとするが・・・すでに遅かった。

「僕の女に手を出すんじゃないっ！！」

キレた僕が魔力で身体を強化して突っ込み伯爵を蹴り飛ばしていたから

ん？あれ？なんかおかしい

落ち着け、落ち着くんだ僕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・よし待て

21話・世の中バカばっか（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

とうとうメドューサが人間形態に

というか名乗りの台詞をもうちよい変えたかったorz

ユウキくんは何をやっちゃってるんですかね？

次回もお楽しみに

22話・100年ぐらい放っておいてください(前書き)

中二病のような展開・・・なんだろう僕

色々終わってるorz

誤字脱字は報告お願いします

22話・100年ぐらい放っておいてください

やっちゃったやっちゃったよ僕

そうだ素数だ!!

素数を数えて落ち着くんだ!!

素数は1と自分の数でしか割ることが出来ない孤独な数字

僕に勇気を与えてくれる!!

・・・1・・・4・・・6・・・8・・・9・・・いやこれ素数じゃないから!!

素数も数えられないほど慌てているのか僕は!?

とうるか死ね!

今すぐ死ね僕！

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラッ！！

壁に頭を叩きつけ始めラッコのように殻（頭蓋骨）を割ろうとする僕

狂ったように頭を壁に打ち付け続け、すでに仮面は粉々になり破片が頭へと刺さり血まみれになる。

「ちよつと落ち着くっすユウキ！！」

僕の錯乱状態と血まみれになるのを見て羽交い締めにし動きを止めるネルフ

「嫌だ！！死なせてくれ！！僕は今ほど死にたいと思ったことはない！！口が滑ったんだっ！！」

僕は右手で紅潮した顔を覆いながらその場から逃げるように後退る。

「ネツネネネネネネネネネネネネネネネネネネネネネネ！あああああああつあああああああああああああああ後始末は頼んだにやつ！僕は100年程本気で放って置いてくれというかむしろ二度と城に帰らないから！」

そう言つて僕に蹴られ壁に突き刺さつたままピクピクしている伯爵を指差し、新たに手に入れたゴーン三姉妹の次女エウリュアレの力《転移》を使う。

「じゃあなー！」

右目に六つの正三角形が浮かび上がりロックオンサイトのように並ぶ……ゴーン三姉妹が使い魔になったことでルーンにより手に入れた新たな魔眼である。

元々僕が持っていた魔眼とは違うもので発動に僕の魔力を必要とせず、片目にしか発動出来ない。

そしてエウリュアレの魔眼を使いヘタレな僕はその場から逃走した。

A f t e r a m o n t h

周りの噂話を聞いているとあのあとラ・モミール伯爵は捕まり処刑にされるとのこと……まああんだけやれば当然かな

助けられた女の子たちは手厚く保護されそれぞれの村や家へと帰され元通りの生活を送っているらしい

そして前に売られた女の子たちは売人が持っていたリストを元に戻った人物を取り締まり丁重に元いた場所に戻すよう努めているとのこと……昔では考えられない対応ですね

これで何人かの膿のような貴族が搾り出されたわけである。

まあさすがにあまり身分の高いところには手を出しきれなかったらしいですけど……

ああ僕？僕が何してるかって？

s i d e o t h e r

ドンドンドンドン

「ユウキ様？いい加減部屋から出てきてください。もう一ヶ月もお部屋に籠りぱっなしですよ！」

昔からアンペラトリス公爵の屋敷に勤めていたメイドの一人シャロンが透き通るような綺麗な声を出しながら惜し気もなく美しい金髪を乱して扉を叩き久しぶりに屋敷に帰ってきたまま部屋に籠ったときのユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスを呼び出す。

「中からはずつとぶつぶつと呟いているのしか聞こえないわね」

こちらはユウキがいなくなったあとに遣え始めたメイドである茶髪にスレンダーなボディーを持ったミノー

扉に耳を押し当て中の様子を探るが、中から聞こえるのは「違う」「だの」「口が滑った」だの「アホリエッタなんか好きじゃない」など要領を得ない単語がばかりがぶつぶつと聞こえるだけである。

「このまま扉を破っちゃおう?」

シャロンの力押しを案をミノーは首を振り拒否しある方向に向かって指を指した。

「それはやめておきましょう……ああはなりたくないわ」

ミノーが指差した先に居たのは黒焦げになったいつぞやのメイドフエチ三人ヨハン、アルフ、マルスである……部屋に籠っているユウキにいらつき部屋に無理矢理入ろうとしたところ扉に仕掛けてあった罠が発動し感電

ところどころ煙を出してピクピクと身体を震わせている……わりと危険な気がするが、ギャグ補正でなんとかなるだろう。

そう我らが主人公ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスはあの日からずっと引きこもりと化しているのである。

使い魔を名乗る紫色の髪をした三人の美女が来たときだけ部屋から出されそうになっていたが……扉の枠にしがみつぎぎゃあぎゃああと文句を言うへタレ状態を見て放っておくことにしたらしい。

そしてそれ以後外敵（自分を部屋から出そうとする人）に対抗するようになり、本気で魔法を使い部屋が開かないようにしたとのこと

アンペラトリス公爵夫人ですら「さすがに本気のある子の魔法に勝てるほど私は魔法を上手く使えないわ」と言わしめる技量の魔法らしいのだが……正直技量の無駄遣いだと思わなくもない。

メイドフェチ三人によりユウキを部屋からおびき出すために部屋の前できぬ擦れの音をさせたり（昔はどこで鳴ろうと駆け付けた）誤って水を被りびしょ濡れになったふり（昔はそれを感知したら何処だろうと駆け付けた）などをしたのだがまったく効果がなかった。

そして使用人一同が困り果てる中

不意に屋敷中に響き渡るような怒鳴り声が聞こえた。

「ふざけるなっ！！！！あれは絶対に盗まれちゃいけないものだろうがっ！！」

そう我が家の次男ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスの一ヶ月ぶりの声が

s i d e o u t

僕はネガティブオーラを出し落ち込んでいたなか飛んできた非常事態を知らせる式紙を見つけ情性でグダグダと近づき何が発生したかを確認する……そしてそれを見て目が覚め怒鳴った。

「ふざけるなっ！……あれは絶対に盗まれちゃいけないものだろうがっ！！」

くそっ！！腐ってる場合なんかじゃない！

城の部屋にはトラップがあった筈だしアレは見つからない場所に隠してあったはずだぞ！？

どうして盗まれるんだ！？

僕は部屋から飛び出しエウリュアレの力を使って一ヶ月ぶりに城に戻る準備をする。

最も盗まれてはいけないもの

それは最初ただおふざけで作られたもので使用する気は全くなかったとっているだけだったなぜなら……

それは人々を傷つけることができる

それは無辜の民を虐殺できる

それは善悪を超越し消し去る

それは世界を滅ぼせる

それは・・・ユウキ・エンドリオール・ル・デフアンス・ド・アン
ペラトリスが魔法を解析し全てを理解した上で書いた最悪の魔導書
『アーリマンの書』

《続く》

22話：100年ぐらい放っておいてください（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ユウキくんはヘタレです。

目の前に裸の女の子がいても手を出すことはないでしょうwww

さてなんかアホっぽく出てきた『アーリマンの書』

適当な名前が思い浮かばずテキストな名前にorz

また絶妙にアホくさいお話になっていきますが次回もお楽しみに

多分次回はおふぎけはないと思われる。

23話・存在すべきではないもの(前書き)

やっぱりギャグへと移行してしまいましたorz

僕にシリアスなお話しは書けないらしい

誤字脱字は報告お願いします

23話：存在すべきではないもの

くそっ『アーリマンの書』だけじゃなくて『基本魔法読本』も盗まれているじゃないか！！

城に帰り急いで自室の中を確認するとやはり魔導書は盗まれており、それは一冊ではなく二冊であった……。一冊は最低最悪だが二冊目はまだ大丈夫だ。使い方さえ間違えなければ……

よりによって『アーリマンの書』ですか！？

あれには人から魔力や生命力を吸い上げる魔法やら石化魔法、広域破壊魔法、腐敗魔法、破城魔法etcいや読まれたくない一番の原因は別だけどさ！

あんな魔法が世界に広がったら大隆起が起きる前にハルゲニアが終わるぞ！？

そして何より僕の人生が終わる！

ああ畜生やっぱりあんな本焼却処分すればよかったんだ！魔法が解

析出来るからって幼いながらに調子に乗って造った魔法を記録するから！

しかもわざわざ系統魔法で使えるよう書き換えたりとか！

愚かものでしかない！！

せめてあのページだけでも捨てておけば！！

いやでもアレはさすがに魔力が足りないから発動は出来ないだろう・

・召喚するのに今の僕の魔力の1000倍はいるからな。

となるとやはり問題なのは他の攻撃魔法である。『アーリマンの書』はただひたすらに人を傷つける魔法しか記録されてはいない……
・いやまあ確かに違うことが書いてあるけどあれは

いやまああんなもん馬鹿なやつの手元にいったら本気で笑えない状況が発生してしまう、何度も言うようにまじでハルゲニアが終わる、それはなんとか防がなければ！

ああもう本当に僕のバカ！なんであんなもんをとつといたんだよ！
確かにあの本にアレを書いたから捨てられなかったっていうのはあ
るけど

僕はかなり慌てながら急いで城の人達に僕の部屋に侵入した人物が
いないかを尋ね回ったが怪しい人物ないし誰であれ見かけなかつた
とのこと

最初から盗む気で人にはばれないよう侵入したってことか？

『アーリマンの書』があるのを知ってるやつなんかいないは……
……いた一人いた！

母上に言ったよ僕！

急いで屋敷に轉移し直し母上の部屋を訪ねる。

ノックをしてすぐに部屋へと入り、編み物をしていた母上に息を荒
げながら聞く

「母上『アーリマンの書』について誰かに話したことはありませんか！？」

「どうしたのですか？そんなに慌てて落ち着いて話さず『アーリマンの書』が盗まれたんです！」・・・分かりました。私が話したのはマリアン又太后だけです、しかし中身についてはお話ししておらずただ『息子が書いた魔導書』があるとお伝えしただけです」

さすがに『アーリマンの書』が盗まれたと聞き事態の深刻さを理解した母上は朗らかだった表情を引き締めて僕の質問に答える。

「ありがとうございます。すぐに城に向かうのでこれにて失礼します！」

すぐに城に転移しようとするが

「ユウキ」

母上に呼び止められる。

「なんですか？」

「必ず取り戻しなさい。そしてすぐに処分なさい」

「分かりました。では」

言葉を返すと共にすぐに城に転移する……あの本に書かれていた魔法はさすがの母上でさえ使用をしようとはしなかった魔法ばかりである。

やべえあの目は帰ってきたらお仕置きしますって目だったよ……
・・帰る場所がなくなつたよ

いやまあ今は魔導書取り返そう!!

転移し終わりすぐにマリアン又大后を探して中庭でお茶をしているときき、中庭に向かう。

中庭にはゆつたりとお茶をしているマリアン又大后と……
アンリエッタがいた（ガハッ

近づくと案の定見つかり頬を膨らませて拗ねたような目つきで見
くる………それどころじゃねえないんですよ!!

とりあえずアンリエッタを無視してマリアンヌ大后の前にひざま
ずき誰かに本の話をしてないかを尋ねた………すると

「確かヒポグリフ隊の隊長に話しましたね」

あのクソ野郎か!!

すぐに駆け付けようとしたが、万力のような力で右腕を捕まれた。

「ユウキ？」

ニコニコと殺意100%な笑顔を浮かべていらっしやるアンリエッ
タ様でした。

「すみません、あとで必ずお話ししますから今はこれで！」

目尻を恐怖でヒクヒクとさせながらすぐに城の中に転移をした。

直後

「絶対に逃がしませんっ!!」と言う声が聞こえたが気のせいだろう、うん

急ぎ足でヒポグリフ隊の隊長の部屋に行き扉を蹴り破ると……
・メイドさんの服を脱がせようとしている変態親父がいた。

「……………」

「なっなんだね!?!」

メイドさんを襲おうとしていたところを僕が邪魔したらしい……
・僕のメイドさんに手を出しやがってコロスゾ?

とりあえず股間に一撃入れ気絶させ捕縛魔法で身動きが取れないようにしてから襲われそうだったメイドさんを逃がす。

とりあえず目覚めるまで部屋を漁ることにしたが………机の上
に普通に置いてあった。

なんなんだ僕の苦勞は？

とりあえずム力ついたので変態の陰毛を焼き払ったうえ永久脱毛さ
せた………これでメイドさんを襲おうとは思うまい。

誰かの前で服を脱ぐなど考えようとししないだろう。

時間が経ち変態が目を覚ましたので詳しい話を聞くとマリアン又大
后にお話しを聞きユニコーン隊の強さの秘密がそれに隠されている
と勘違いしたらしく盗んだらしい。

まだ中身は見てないとのこと……よかった

見られていたらこいつを殺さなければいけないとこだった………
・一応確認すると最後のページが破られていた。

最後のページって何が書いてあったっけ？

なにぶん10年以上前のものだから中身が思い出せない

まあいいやとりあえず返ってきたし、さらに股間に一撃を入れ再び
気絶させたあと自分の部屋に帰ることにした………そういえ
ば畏が発動しなかったらしいけど

どうしたのかな？

ミスしたのか？

などと色々考えながら取りかええした魔導書を手で弄んでいると・

……

「なんでありますか、これは？」

「ちょっと見ちゃダメっ！」

次女に遭遇し盗られた、そして気になるのか近くにいた長女と三女

も寄っていく

必死に止めようとしたが・・・一歩遅かったorz

読み進めていくうちに顔に青筋を浮かべる長女と次女、三女は顔を赤くしている・・・アーメン

「なんでありますか、これは？」

先程とまったく同じ台詞だが違う点は込められた殺意と次女の手に握られたバールのようなもの・・・神は我を見捨てたもう

とりあえず言い訳を試みることにした。

「いや確かに！その本には僕の素敵な妄想が書いてあったよ？オツパイに挟まれたいとかオツパイ肉布団で寝たいとかかなり精巧に書いてたよ？それにオツパイへの情熱とかメイドさんとニーソックスのよさについてもほとぼしるパッションを漲らせて書いたよ？でも

さ！？勝手に見たのは君達だよね！？僕悪くないよね！？」

『アーリマンの書』別名『メイドさんにやって欲しいこと100選』

魔導書を書いている途中で変に興奮したので自分の妄想をただひたすら書き続けてしまったのである。

出版している官能小説とは違い自分の欲望しか書いてないので誰にも見られなくなかったのである。

………が終わったな

ゴンッ！

久しぶりのゴールデンボールストライカーは今までくらった中でも最強の威力でしたorz

《 続 》

23話：存在すべきではないもの（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

なにが『アーリマンの書』なんでしょうかね？ただの変態本じゃないですかwww

微妙に伏線いれてみました

次回もお楽しみに

24話・部屋に自由に籠りたいなあ〜ハイ」いいから出る」……(前書き)

杜撰な出来ORZ

うわぁギャグないなあ

誤字脱字は報告お願いします

24話・部屋に自由に籠りたいなあ〜ハイ」いいから出る」……

よづやくやることも終え逃げようとしたら捕まりましたテヘッ

しかも転移が使えないようにエウリュアレが力を封印してます……
……久しぶりの二頭身形態は動きづらいみたいだ。

というか今さっき気づいたのだが三姉妹が封印状態に移行すると三姉妹の魔眼は使えなくなるみたいだ。

うん笑えない！

魔法を発動しないように人（物）質であるマイファイバリット衣装たちが奪われているし魔眼が発動しても大丈夫なよう目隠しされて地下牢に入れられています。

もつどつしようもないです………というかこれは思い人にとる態度ではないと思うんですね？

・・・・・・・・・・はあ

認めればいいんでしょう？

はいはい僕はアンリエッタが大好きですよ

ぶっちゃけ無視したのだってウェールズさんとイチャイチャしてん
の見たくなかったからだし

でも今好き好き言ってもどうせウェールズさんのところ行くんだ
から何したって無駄なんですよ

原作はそう簡単には壊せないんですよ

もう正直そついつのは嫌なんです。

にしても・・・・・・・・・・閉じ込められてもう一週間ですか

そろそろおそらくニコニコ笑顔で牢の前から話しかけてくるアンリエッタを無視する術が無くなりました………どうやったら逃げられるのかな？

本気で逃げる手段を考えていると……

「ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリス殿！マリアンヌ太后様がお呼びです！！」

兵が牢番に伝令を伝え、僕は牢から解放されることになった………
・…なんだ？結婚させられるとかか？いやさすがに

そのまま牢からだされ枷も目隠しも外されマリアンヌ太后の元へと連れていかれ、マリアンヌ様の前に頭を垂れひざまずく

「ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスお呼びに応じて馳せ参じました」

「よく来てくれましたユウキ殿。これから貴方にはアルビオンに向かってもらいます」

「またですか・・・また親善大使ですか？」

「今回はウエールズ皇太子の護衛をしてもらいたいのです。というのもここ何日か皇太子殿がよく分からない魔法で2回も襲撃され護衛は重傷皇太子殿も軽傷を負ったらしいのです」

「成る程・・・」

「で僕の出番と言っわけですね？」

「ええ幸い怪我が軽いものだったのでですが衛兵が来たら犯人に逃げられてしまったのです。ですから貴方ならきつと皇太子殿を守り抜くことが出来るでしょう・・・頼みましたよ？」

「はっ！！私にお任せ下さい陛下！！・・・ここから逃げれるなら地獄にだっていきますとも（ボソッ）」

ようやく解放されることに小さな幸せを噛み締めていると

「ああそうそうアンリエッタが呼んでいたので、すぐに行ってあげてください……孫が楽しみです」

ケフツ（吐血）

逃げ場がないZE

といつか孫とかマリアンヌ様は結婚賛成派なのですか!?

正直僕には無理なんですが!?

軽く自分の人生に呪詛をかけつつアンリエッタの部屋に向かいノックすると同時に部屋に引きずりこまれる。

「何をなさるんですか!？」

「……………」

めちやくちや焦る僕の胸元に無言で抱き着いてくるアンリエッタ・
・ちよつ当たつてる乳成分補充し始めて僕のかぁいいオットセイが
ブラキオサウルスに!!

離れてっ!!

口には出さずに念を送るよつに祈るとさらにギュッと抱き着いてきて

「愛していますユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・ア
ンペラトリス」

「……………それは違「私の髪の毛一本爪一欠けらさえも貴方の
ものになると誓います……………だから……………だから……………
……………私を愛してください……………」

あっ………

アンリエッタが顔をあげると……そこには涙があった。

「………お願いですユウキ、昔のように一緒にいてください」

「……アンリエッタ様」

僕の呼び声にアンリエッタは涙を宿したまま首を横に振り訂正させる。

「アンリエッタと呼んでください」

「アンリエッタ………昔と今では違うのです。貴方は恋に恋しているだけです。お話の中の恋に憧れただけ近くにいた僕に惹かれただけです」

「違います!!」

「……………」

自身の愛を否定され怒るアンリエッタ、僕はそんなアンリエッタをただひたすら無言で見つめる。

そしてアンリエッタはそんな僕を押し倒し床に抑えつけ抱きしめてくる……………もう嫌だ、僕の気持ちを伝えてしまえば

でもだけど…………

ずっと無言の僕にアンリエッタは言う。

「抱いてください」

「……………」

もう無理っ！！

いや頑張れ理性！負けたら終わりだぞ！！

僕が葛藤している間にアンリエッタは自分の服に手をかけ、その雪のように透き通る綺麗な肌を晒していく……ガツガツ無理だよ正気な僕

理性が本能に負けそうだよ……でも本当にこんな流れで愛しい人を抱いていいのか？

なあ僕？

自問自答し……そして僕はさらに服に手をかけようとしていたアンリエッタの手を握り止める。

アンリエッタは止められたことに驚きそして涙を浮かべ、服を脱ぐのを辞める。

自分の愛を拒絶されたと勘違いをして……

「やはり……ユウキは私のことを愛してはいな」大好きだよ畜生
！！」んっ！？あっ！んっ」

起き上がり泣き出そうとしていたアンリエッタを引き寄せ唇を押し
当てた……アンリエッタは最初は驚いた顔をしていたがす
ぐに自分を取り戻しさらに唇を押し当ててくる。そして舌まで絡ま
せてきた

そしてくっついていた唇を話し宣言する

チュパッ

「……今日はこれぐらいで勘弁してください。
……帰ってきたら……に……から」

「えっ？」

僕の言葉を顔を染め真っ赤になりながら再び尋ねてくる……
二回も言わせないでください。

「帰ってきたら僕の女にして一晩中抱いてあげますから」

「ユウキ…！」

アンリエッタは再び僕に抱き着きまた唇に唇を押し当ててくる、そして舌を絡めあいかなり長い時間そうしていた。

《続く》

24話・部屋に自由に籠りたいなあ〜ハイ」いいから出る」……（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

うんなんか急にくつつきましたねあの二人

どうなることやら？

次回もお楽しみに

25話：主人公なら出来るさ！（前書き）

結局下ネタorz

僕って最低

誤字脱字は報告お願いします

自死 慚死 慙死 惨死 獄死 枯死 刑死 経死 狂死 窮死 急死 客死 擬死 気死 愧死 諫死 怪死 餓死 仮死 横死 煙死 壊死 縊死 圧死
きつと・・・・・・・・

死亡フラグ立てちまったYO

老死 轢死 夭死 悶死 暴死 变死 斃死 勿死 憤死 病死 爆死 敗死 腦死 頓死 毒死 凍死 徒死 溺死 墜死 忠死 窒死 即死 戰死 衰死 水死 震死 情死 燒死 殉死 愁死

牢死
浪死
安楽死
嘔吐死
過労死
感電死
孤独死
自然死
失血死
心臓死
衰弱死
戦傷死
戦病死
尊厳死
窒息死
中毒死
墜落死
転落死
突然死
腹上死
腹下死

のどれかで死ぬんですね、分かります

並べると鬱になるけど………といつかよくこんだけで浮かんだ僕

まあ死ぬなら最後の二つを希望します！

いやでも待てよ

主人公なら死亡フラグを打ち破れるはずだ！

一応こんな僕でも主人公の端くれきつと死亡フラグを打ち破りアンリエッタとギシギシアン「ピITTERー」な生活を愉しめるはずだ！！（主人公はそんな妄想を吐かねえよby作者）

いやいや待てここで主人公を変えるためにわざと僕を殺すという展開は考えられないか？まさか！？いやでも！？

ネルフの失敗を活かして主人公を変えるはずはないよな作者！？」
メタ発言するな」

しょうもないことを考えつつ今回もまた隠密任務ということだ人数少なめの……ネルフ、デンバー、人間形態に戻っている

三姉妹以下略で行動している。

「ちよつ略はないですよ隊長」

「大丈夫きつと君の存在なんかみんな忘れてるから」

「僕の名前はゴーシュ！グラモン家の三男さ！」

そう白銀馬鹿も今回の任務に参加している………ちなみに最初僕が隊長と知ったときは硬直し、膝をつき謝ってきた。

こんなんでも一応公爵家の次男なので逆らったらというか完全に敵対行動をしているので不敬罪で斬られていてもおかしくはない。

どうでもよかったので赦したら足にしがみついて尊敬の眼差しで見てるようになった………野郎に抱き着かれてもなんら嬉しくないんですが

とまあくだらないことを回想しつつ空船でゆったりとアルピオンに向かっている。

ちなみにデンコちゃんとネルフはイチャイチャしつつも、さっきから百面相をしている僕をチラチラと伺っている。

ゴージュは三姉妹に話しかけ長女と次女によるツープラントン技『ゴールデンボールバスター』を喰らっている……長女が相手を打ち上げ次女が空中で相手を固定し長女が下で待ち受け急所に一撃を加えるキン肉マンも真つ青な必殺技である。

ちなみに僕は三女も参加したさらに上の必殺技を喰らったことがある。

長女と次女がゴージュを折檻している間三女は二等身の封印状態に戻り、コクピットよろしく僕の頭の上でもきゅもきゅしている。

どうも頭の上がかなりのお気に入りスポットらしく、だいたいは頭の上で生活している……さすがにお風呂とか着替えの時は引きはがすけど

前に目を指で隠しながら（あからさまに見えてるだろってぐらい隙

間が空いている）顔を真っ赤にしてはわはわ言いながら僕の着替えを見ていたことがあったので気をつけている・・・・・・長女と次女に注意という名のボディランゲージをされましたからね

そんな僕が何をしているかというところ三女を頭に寄せつつ、アンリエッタとの将来をずっと考えては落ち込んだり舞い上がったりと、町にいたら一発でお巡りさんのお世話になる不審者感を出している。

・・・・・・はあ

アンリエッタと結婚すればあの素敵ボディーが僕の思うがままに調教できます

というかアンリエッタと人目を気にせずイチャイチャ出来ます。

but

今の5倍は忙しくなるのは目に見えている、アンリエッタと結婚するということは僕が王位を引き継ぐ可能性があるということだ・・・・・・というさせる気満々だろうな

忙しすぎてアンリエッタとイチャイチャ出来ないのは辛いです（泣）

折角思いを打ち明けたのにイチャイチャ出来ないなんて耐えられない

とこんなふうにグダグダウダウダ悩んでいるわけで……

そんなこんなを続ける間にアルビオンに到着

場内に入り謁見の間でアルビオンの国王であるジェームズ？世に挨拶をする。

ちなみに僕一人である……大勢で行くのはよろしくないですから

「トリスティン王国マリアンヌ太后陛下よりウエルズ皇太子陛下をお守りするようお願い遣わされたユニコーン隊隊長ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスここに参上いたしました」

「うむ大儀である。『魔法』殿が来てくれればウェールズも安心できよう・・・下がってよいぞ」

「はっ！」

頭を下げ謁見の間から出たのだが・・・空気悪つ、品定めするよくな目つきで見てる者もおれば舌打ちしてくる者、さらにあるからさまな侮辱の言葉まで投げかけてくる者もいる。

まあ確かに自国の皇太子を他国の衛士なんか任せたくはないですからね

などと自虐しつつ皆が待っているはずの客間に向かうと金髪でイケメンオーラ丸出しの青年がみんなと喋っていた。

成る程あれがウェールズかと眺めているとあちらもこちらに気づいたらしく近寄ってきた。

「ほう君があのも『魔法』殿か・・・」

「陛下のお耳に入っているとは光栄です」

と頭を下げつつ様子を伺っていると齒をキラキラ輝かせながら

「なに愛しの従姉妹から手紙がくるのさ」

「そうですか」

イケメンスマイルで話しかけてくるウェールズに言葉少なく応対する・・・どうも苦手なんですよ

なんかアンリエッタを盗られると強迫観念みたいなのが埋め込まれているのかもしれない

・・・はぁ卑しいやつだな僕って

自虐しながらウェールズ皇太子殿に城内を案内される。

こうして僕のアルビオンでの一日はとりあえず何事もなく通過した。

《続く》

25話：主人公なら出来るさ！（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ギャグ要素低めでお送りしていますが………グダグダになっ
てきましたねorz

早く学園編というか本編に移行したいものです

次回もお楽しみに

26話：僕も大嫌いです（前書き）

キヤッコロボ案は排除

ただし外伝で短編扱いで登場予定

ちなみに短編は本編に全く関係なく
ハルゲニアでのお話しですらありません

まだネタを詰めているので少々お待ちを

誤字脱字は報告お願いします

26話：僕も大嫌いです

イケメンスマイルウゼエ

ヤッホー！！17歳のピッチピッチのユウキ・エンドリオール・ル・
デファンス・ド・アンペラトリスです

今アルビオンに来てから二日経ちイケメンスマイルを溶けるように
浴びる中

食堂で変な髭面のオッサンにガンをつけられています。

「ほう君が私の後にウエールズ殿下の護衛になった、あの有名なト
リステインの『魔法』殿かね？」

「ええどの『魔法』殿かは分かりかねますが多分そうだと思います
よっ。」

「はっ公爵家の穀潰しがよく吠えるわ、使用人風情の尻を追いかける駄犬が」

ブチッ

「そうですね、そんな穀潰しより王様に信用されず護衛を下ろされた方よりはましかもしれませんが・・・」

ニコニコと極上の毒を込めながら言葉を投げかける・・・僕が追いかけているのは乳だ！メイドさんを馬鹿にしてんじゃねえぞこの×××が！！

なんでこんなことになっていきますかという・・・宛がわれた部屋で起床しお腹が空いたのでどこで朝ご飯が尋ねるかを近くにいた兵士に聞くと

嫌そうな顔をしながらも貴族専用の食堂があることを教えてくれました。

そして彼の言う通り行くとそこには新しい理想郷アウアロンが広がっていた・・・
・・・そうトリスティンとはまた違うメイド服をきた給仕さんたちがせっせつと働いていたのだ！！

ウキウキルンルンな気持ちで席につき、遠く離れたトリストインから感じる殺気を無視しながらメイドさんを眺め話し掛けていると、怒鳴り声が聞こえた。

食事の場に相応しくない下卑た声なので気になりそちらを見ると髭面のオッサンが残飯まみれのままメイドさんを叩こうとしていたのが垣間見えたので、すぐに魔力で身体を強化しメイドさんに向かって振り上げていたオッサンの手首を掴み止める。

するとオッサンは捕まれたことに驚き僕を睨みつけ

「粗相をした給仕に罰を与える邪魔をするな」とかほざくので

「誰でも過ちを犯すのだから一々くだらないことでメイドさんに当たるな」と言い返すと髭面は………

「給仕」ごときをどうこうしたからといってなんら問題あるまい」

と言ひ僕の顔を見て僕の正体に気づき冒頭に戻るといつ訳である・・・
・・・とりあえずこいつは皮を剥いでやるんだ。

かなりの怒りを込めた目で睨み合う。

「ふん、なら護衛になった『魔法』殿に一手御教授いただくかな？」

かなり挑戦的に杖を構え喧嘩を売ってくるので・・・
・・・とりあえず買うことにした。

「構いませんよ、ただし貴方が負けたら貴方の××××をもぎ取って
串刺しにした後に貴方の屋敷の門に飾りますから悪しからず」

今私幸せですと言わんばかりの笑顔で宣言する。

「口だけは達者なようだな!!」

そう言っつて詠唱を開始する髭面のオッサン

よしすぐ抹殺だ（笑顔）

魔力で強化した身体ですぐにオッサンとの間の距離を詰め、さらに強化×10倍をした右手をオッサンの右鎖骨にぶち込む。

オッサンは錐揉みに吹っ飛び壁に突き刺さったままピクピクとしている、僕は優雅に歩いてオッサンに近づき壁に刺さったオッサンの足を掴んで壁から引きずりだし地面に叩きつけた。

472

地面に叩きつけた際に反応がなかったので気絶していると判断し、オッサンの穿いていたズボンを『ウィンドカッター』でスタボロに引き裂きパンツ一丁の状態にする。

そして土魔法で地面から盛り上がるように出てきた日本刀を掴みオッサンの陰部へと狙いを定める、気分は中世の処刑人である。

ふんふん その身体でメイドさんを侮辱した罪を償ってもらおうから

なファツキン×××

死にさらせ

日本刀を振り上げオッサンのリトルサンシャインに別れを告げさせようとした時

「待ちたまえっ!!」

知らない間に参上していたイケメンウエールズに止められた。

僕は抑揚のない低い声でウエールズに語りかける

「約束を果たすだけなのでどいていただけませんか？」

「っ!?!? すまないが今回は退いてくれないだろうか？ 彼も護衛を辞めさせ気が立っていただけなのだ。彼にはよく言い聞かせるので・
・頼む」

ウエールズは僕の声にビビりながらも家臣を一人失うのは嫌なのか

頭を下げ詫びてくる……なんかきな臭いな

皇太子殿下に頭を下げられては断れないので潔く刀を引き、地面に突き刺し刀を地面の中に戻した。

「感謝する」

僕が簡単に退いたことに若干の疑問を感じたような顔をしつつもお礼を言うてくるので……

474

「彼に伝言を伝えていただけないでしょうか？」

「ああ構わないよ」

イケメンスマイルで許可するウェールズ殿下

「ではお伝えください……次同じことをしたら殺して解して並べ

て揃えて晒してあげますから」

割りと密度の高い殺意を込めて言ったので殿下も多少はたじろぎながらも首を縦に振ってくる。

「しかと伝えよう」

「ではこれにて・・・」

すぐに踵を返しその場を後にすると、後ろから誰かがついて来るので振り向くと食堂の場所を教えてくれた兵士がいた。

「ああ朝はありがとうございます」

「いっいえ気にしないでくださいっ！っ！」

お礼を言つと何故か緊張した趣で答えてくる兵士・・・Wh
y?

「おっわた私の名前はニーファランスと言います!!」

なんか大声で自己紹介してくる……野郎の名前なんざ知りたくないです

「どうしてあんなに強いのですか!?!」

「鍛えたからです」

「どつやったらあんなに強くなれますか」

「毎日鍛えれば余裕です」

なんか質問大会みたいになってるので軽く流しながら自分の部屋へと帰る……ああ朝ご飯食べ損ねたorz

この後舎弟のように懐いてきたニーファランスにより食料を届けら

れたことにより

ニーフアランスをニンスと呼ぶほど信用してしまう僕

なんて軽い男！！・・・シクシク

すでに夜中となり城の中庭で空を見ながらグダグダしている僕

ああちなみに僕が切り落とそうとしたオッサンは品行方正で普段はあんなことをするような人じゃないらしい

護衛の件に関しても僕なら大丈夫だろうと周りに言っていたそうだ・・・ふむならあんなにタイミングよく出てきたイケメンスマイラーがめちゃくちゃ怪しいですね

いくらなんでもタイミングが良すぎですし、それに本当に僕をいたぶる気ならあのオッサンはもっと詠唱が早い魔法を唱えるはずですからね・・・十中八九僕に絡むよう言われたんでしょうね誰かに

まあメイドを馬鹿にした時点で彼の寿命が尽きてしまったわけですが、黒幕も予想外だったでしょうね

他国の者を本気で潰そうとするバカがいるなんて普通思いませんから

さあてとそろそろウザいな

「いい加減ジロジロ見るのやめてくれませんか？僕は野郎に10秒以上見られると吐き気がするんですよ……ウエールズ殿下」

478

柱に隠れて僕を見ていたウエールズ皇太子殿下に話しかける。

「気づいていたのか……」

バレていたと分かり潔く柱から出てきて僕の前に普通に姿を現し向かい合うよう立っている。

「稚拙な隠れ方でしたからね・・・で何の御用で？」

少し毒のある僕の言葉に自嘲するような笑顔を浮かべて両手を広げ肩を上下させながらウェールズ皇太子殿下はおっしゃる。

「なあに、私は君が大嫌いだと伝えに来ただけさ」

・・・正直どうでもよさ気な事だった。

《続く》

26話：僕も大嫌いです（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

書き上げるのがどんどん遅くなる今日この頃

まさかのウェールズが黒幕説！？

まあ嘘だけど

どうせイケメンなんか悪役に見えて実はいい人でした的なノリで終わるんです（血涙）

次回もお楽しみに

27話：誰が為の魔法（前書き）

イケメンは悪役なわけがないんです

エンジニアリックスマイルを浮かべて結局はいい人たちなんです

北斗 拳を見れば分かるでしょ？

イケメンはみんななんらかの理由があっといういい人で半分は仲間になるんです

ケッ

誤字脱字は報告お願いします

27話：誰が為の魔法

「そうですね……正直どうでもいいです」

ウェールズ皇太子殿下の「大嫌い」宣言に普通に返す僕ユウキ・エ
ンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリス、17歳

趣味：覗き

特技：覗き

好きなもの：メイドさん、巨乳、アンリエッタ

嫌いなもの：メイドさんを侮辱したり危害を加えようとする者、セ
ロリ……そして世界中のイケメン（ウェールズ殿下を含む）

あれ？僕ウェールズ殿下大嫌いだったぜ！！

「……………」

僕の無関心な態度に目つきを鋭くさせ無言で睨んでくるウェールズ殿下・・・・・・・・・・はあ

心の中で特大のため息を吐きつつ無気力な眼差しで殿下を見返し聞く

「でどうしてまた僕をお嫌いに？」

すると殿下は苛立ちを隠そうとはせずに憎々しげに僕を見て言う。

「君はアンリエッタの気持ちに気づいていながらあの子を無視しているのだろう！？だったら私は「・・・・・・・・ちよっと待ってください殿下」何かね？」

思わずorzポーズに移行しそうになる僕・・・・・・・・こつこつのはすぐに報告しようなアホリエッタっ！！

やはり見解の違いといつかなんといつか思わず（？）（？）という顔をしそうな感じですよ。

「ああその今まで何を聞かされたが知りませんが・・・・・・・・その」

「なんだ？早く言ってくれ」

少しというかかなり恥ずかしいので顔を真っ赤にしながら言葉に詰まっていると見兼ねた殿下が先を促してくる………恥ずかしいもんは恥ずかしいんですよ！！

「ああ今度の姫様からの手紙はただの惚気話になると思いますよ？」

「そのころは？」

大喜利じゃないんだから

「ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスはアンリエッタ・ド・トリステインに愛を誓ったからです」

「ふむなら私の怒りは無駄だったようだね？」

少し呆気に取られたような顔をしたあとニヤニヤと笑いかけてくる殿下

驚愕を込めた眼差しで男を見ると男が詠唱を終え魔法を発動させる。

殿下は警戒して杖を抜く中僕は茫然と立ち尽くしていた……魔法の発動と共に中庭にあった噴水の水が操られるように隆起し人型を形取り、それが15体程現れこちらへと向かってくる。

これは『基本魔法読本』に書かれていた魔法の一つで僕がルイズを元気づけるために見せた魔法である。

それが悪意を秘め悠然と襲い掛かり、腕を鞭のように振るい空気を切り裂くような速さでぶつけようとしてくる。

踊り人々を笑顔にさせるための水人形たちがただ暴力的に腕を振るい地面をえぐり、柱を薙ぎ払う

僕はそれらの攻撃を紙一重でかわしながらも殺さんばかりの憎しみを込めた目で仮面の男を睨み続ける……この魔法は子供たちを笑わせるために作った魔法なんだぞ？

それをこんなふざけた目的で使いやがって……

「この魔法をこんな目的に使っんじゃねえっ!!」

僕は手の平を差し出し、その上に複雑な記号が絡み合ったような球体を作り出す。

それは立体魔法陣、二次元であった魔法陣を改良し三次元にし威力と精度と速度を引き上げた魔法……それを握り潰す

その瞬間ガラスが砕け散るような音と共に僕の周り20m内がすべて凍りつく

そして水人形たちは断末魔の悲鳴をあげる間もなく一瞬でその形を変え凍りついた。

『アイスアイランド』

「ちっ」

仮面の男はそれを見て舌打ちをし、すぐに新しい呪文の詠唱を開始する……なっ!? またか!?

先程とは違い短い詠唱を終えたあと直ぐに杖先をウエールズ殿下に向け放つ

『スターフラワー』

花火のように凝縮された火の玉が連鎖するように爆発しながらウエールズ殿下へと向かうが、魔力で強化した脚力を用いて殿下の前に移動し殲滅眼を発動

「力を喰らう……そして放つ」

向かってきた魔法を吸収し自分の魔力へと換算、驚異的なまでに引き上がった身体能力で魔法が掻き消えたことに驚いている仮面の男の前にたち側頭部を回し蹴りで蹴り抜く

仮面の男は吹き飛ばが少し吹き飛んだところで空中で動きを止めている……僕が第四の魔眼を使用したのである。

僕の両目に浮かぶのは赤い時計カチカチと今なお、秒針と分針そして時計針が正確に時を刻んでいる

そう『カトブレパス』の瞳だ

あれは片目にしか時計が浮かばなかったが神様パワーで両目になっているみたいだ。

能力は時止める瞳じとめるとしという対象の時間を止める力と死時滅る瞳しときめつという相手を抹殺する力である。

ぶっちゃけチートここに極まれりという感じがするが……まあ気のせいだろう

ちなみに発動ではなく起動に魔力が必要だったらしく一回起動させてしまえば使い放題である。

そしてそれを用いて仮面の男の外套を時止める瞳を用いて空中に固定している。

空中で固定されている男に近づき何故『基本魔法読本』内に収録されていた魔法を知っていたか尋ねようとした瞬間、その場にはいけない気がして後ろに飛び下がった。

すると爆発音と共に今まで居た場所が爆発する……ちっ仲間がいたのか

そして気を取られた瞬間に魔眼を解除してしまい、仮面の男に逃げられた。

「くそっ!!」

僕は取り逃がしたことに對する八つ当たりで近くにあった石柱を蹴り崩した。

畜生！！

あいつが二回目に使った魔法も僕の魔法だぞ！？

あれも実家にいたときに領民が楽しめるよう必死に作り上げた花火を作る魔法だぞ！？

それをあんな風に使いやがって……絶対許さん

こうして僕はあまり気が向いていなかったウエルズ皇太子殿下の護衛に全力を尽くし犯人を捕らえることを決めた。

あまりの展開の早さに空気と化した殿下を無視して思考を進めていく

誰かが城の中に侵入して『基本魔法読本』の中身を確認していたっ
てことか？

なら『アーリマンの書』も見られたっ
てことか？

僕の黒歴史は勿論のことだが他の魔法も見られたら洒落にならないぞ？

・・・待って

最後のページを破ったのはそいつらか？

なら破ったページで何をする気なんだ！？

どうも死亡フラグが現実になりそうだな・・・ああムカつく

《続く》

27話：誰が為の魔法（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

いやはや今までに例をみないグダグダ展開

そして何よりシリアスに移行

むっまさか最終回フラグ！？

次回もお楽しみに

28話………てへっ (前書き)

堪え難い身体の怠さ

堪え難い偏頭痛

人はそれを………

二日酔いと呼ぶorz

多分二日酔いより普通に体調不良

短くてごめんなさい

正直繋ぎorz

28話……………てへっ

とりあえず三姉妹に急いで事態の深刻さを告げて、ついてきた皆にも最大限の注意をするよう促す。

そして何より知らない魔法を使われたら即刻逃げるよう厳命した……
……戦いは情報戦だからね、相手の手札を知らないということ
はよろしくない

僕が魔法を教えてもいいが『アーリマンの書』の中にある魔法を教えるとなると話は別だ……あれは誰も知る必要はない、今回一つでも会得しているやつがいた場合は記憶を消すか最悪その場で殺す。

悪いが見知らぬ他人の命など知ったことではない、僕にとって君たちが覚えた魔法が広がり僕の大切な人達が傷つく方許されないことなのだ。

だから後悔しろ

ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスに
喧嘩を売ったことを

28話………てへっ (後書き)

次回は長めに書くので勘弁してください

29話：ある意味魔王つながり（前書き）

僕は帰ってきた！！

しかし文才がない

シリアスに耐え切れずすぐにちよっとしたネタをいれる駄目人間な僕

誤字脱字は報告お願いします

29話：ある意味魔王つながり

僕は昨日の夜に襲ってきた仮面の男たちを探すため、一人でアルビオンの町を歩き周りながら探索魔法を使用し魔力を探查していると、急に仮面をつけた男たちがたくさん現れ囲まれた。

周りに人がいないので頃合いを伺っていたのだろう………ただ気になるのは先程から町に広がっている変な魔力である。

変に広がっていて要領をなしていない。

そして襲撃者たちはその数有に30人を越え、全員が杖を構えていることから全員がメイジだということが窺えた………本気で潰しに来たってことか？

でも昨日の奴らの魔力は感じられないみたいだ……足止めか？

まあとりあえず………

全員叩き潰す!!

仮面の男たちが詠唱を始めたので僕は自身の背後に複雑な記号が絡み合った手に収まるか収まらないかぐらいの大きさの球体：三次元魔法陣を9個展開していく、全ての球体の紋様は異なりそれぞれ魔力を込められ脈動し、いまやいまかと出番を待っている。

僕は準備を終え、仮面の男たちの呪文の詠唱をきく………やっぱ僕が作った魔法だ、なら遠慮は要らない。

球体がグルグルと僕を中心に公転を始める、さながら宇宙のようにそして僕は彼らを恐怖のどん底にたたき落とす。

「さて、魔法使い、精神の貯蔵は十分か？今から君達が味わうのは幾千の恐怖、心してかかるがいい」

計9つの球が四方八方に飛び散り何かしらにぶつかり砕け散る。

『死球九連』

圧倒的なまでに籠められた死の概念を相手に無理矢理叩き込む魔法

概念だから肉体に影響は出ないが心は死ぬ……精神を殺す

一つに籠められしは圧死

周囲を巻き込み物体を圧縮し粉々にする

一つに籠められしは壊死

周囲を巻き込み物体を腐敗させる

一つには籠められし惨死

周囲を巻き込み物体を見えない斬撃で切り刻ませる

一つに籠められしは焼死

周囲を巻き込み物体を紅蓮の業火で焼き払わせる

一つには籠められし餓死

周囲を巻き込み物体のエネルギーを吸い付くし枯渴させる

一つには籠められし溺死

周囲を巻き込み物体を水に取り込ませる

一つには籠められし凍死

周囲を巻き込み物体を絶対零度で凝固させる

一つには籠められし感電死

周囲を巻き込み物体を高威力の電撃で襲わせる

一つに籠められしは、死、

周囲を巻き込みただひたすらの虚無なる死で全てを失わせる

それぞれ球体を喰らったものはそれぞれの対応を取り最終的には白目を向き精神が破綻したようにブツブツ何かを言い始めたり気絶したりし始める。

これで全員ですかね？・・・いや一人逃したみたいですね、ちょうどいい彼をつけて黒幕まで案内してもらいましょう

僕は『死球九連』から逃げおおせた男の後を追うことにした。

ビクビクと怯えながら逃げる男を狩人のように気配を消しながら追いかけてつづ、町の様子を見ています・・・やはり変な魔力が町を覆っていることが気になった。

なんとというか急に見させられた顕微鏡の中身のような

拡大してみさせられまったく意味のわからないものになっている感じなのである。

複写眼を発動させて解析してもまったく反応を示さない・・・不気味だ。何かしら企んでいるのは分かるんだが・・・この気配は不気味すぎる。

よく分からない魔力を警戒しつつ気配を絶ち男を追いつづけると何故か城へと入っていた……警備のやつは何をしてるんですか？

半ば警備兵に呆れつつ男と同様に城の中に入ると……

違う仮面の男によって剣で串刺しにされ殺されていた。

男を殺した仮面の男は僕に気づいていたらしく、こちらに向かつて『ファイヤー・ボール』を放ってきたので横に飛びかわして男を見つめる。

今の魔力反応は昨日襲ってきた方を助けにきたやつか！？

警戒を深め仮面の男に相對し、先程からコソコソと練っていた魔力を足に通し、足を振り上げ地面に下ろし魔法を発動させる。

『サウザンドアイアンニードル』

踏まれた地面から魔力が地面へと通り、地面から隆起した土くれは金属の棘へと変わり幾千の金属の棘が仮面の男へと襲い掛かる。

「チツ」

仮面の男は舌打ちをしつつも後退し追尾してくる僕の魔法をかわして、『スターフラワー』を僕に向かって放ってきた。

「・・・力を喰らう」

僕はそれを殲滅眼で吸収し、すぐにカトブレパスの瞳に変更し時止める瞳で男の衣服を空中に固定、魔法を使い地面を錬金し地面から競り上がるように出てきた刀剣たちを男に向かって投げ両手両足を貫き地面と壁に抜い止め固定した。

「ぐっ!?!」

男は手足を貫かれたことに苦痛の声を上げたがそれを無視し男に近づき仮面を取り払った、そして出てきた顔は………ニーフアランスだった。

「そうか君が犯人だったか………」

僕は少し予定外な人物だったことに驚き顔を歪めながら驚愕をあらわにする……

「ふっレコン・キスタに栄光あれっ!!」

そう言ってニーフアランスは自分の手を貫いて刀剣を無理矢理引き抜き自分の身体に突き刺し自害した。

くっもう一人の犯人が分からなくなってしまった!!

悲嘆にくれながらもニーフアランスが言ったことを考える……
・レコン・キスタだって？

あの組織がアルビオンに関与してくるのはもう少し先になってからじゃないんですかね？

だぁぁもう面倒くさいっ！！

苛立ちを込めたように両手で頭を掻きむしり、昭和の不良も真っ青なうんこ座りで貧乏揺すりをしながら思考を続ける。

レコン・キスタってことはあの人がっと！？

ちょうど黒幕について考えているときに背後から何者かに襲撃を受ける、それを主人公にはなかなか見れない前転がりで避け体勢を立て直し振り返るとお約束のようにゴーレムたちがいた・・・ミヨズニトニルンめっ！！

しかも100体近く、前回の教訓を忘れなかったらしい・・・
非常に面倒な話ですが

ゴーレムたちはそれぞれ色々な武器を持ち、剣やら槍やら弓やら銃やらとどっかの軍隊ばりの装備だった。

「うざいっ！！」

半ば戦々恐々としつつも地面を揺らさんばかりに足を踏み下ろし、魔力を地面に練り込ませ地面を隆起させ目の前に巨大な土の壁をつくり遠距離からの矢と弾を防ぐ

しかしその行動を読んでいたかのように近接戦用の武器をもったゴーレムたちが壁を迂回し後ろから攻め入ってくる。

少し気づくのが遅くなり左腕を斬られたが多少血が出る程度で問題はなく、すぐに壁を蹴りあがり壁の上へと立った。

そして右手をピストルのような形にして空を狙うように真上に向け、指先に込めていた魔力を打ち放つ

「受けてみて！デ バイン スターのバリエーション！！スーラ
トブ イカーっ！！」

少し悪ふざけ気味にリリカルな魔法を解き放った。

空からビーム状の光線が大地へと突き刺さりゴーレムたちを焼き払
っていく

うん絶好調

クレータが出来ているので多少やりすぎた感はあるが多分大丈夫だ
ろう・・・メイビー

全てのゴーレムがバラバラの黒焦げになったのを確認しつつ周囲の
魔力反応を探ると逃げ去っていく魔力を確認した・・・多分ミヨズ
ニトニルンだろう。あとはずっと町を覆っている気持ち悪い魔力し
か・・・ちよつと待てよ

なんか違和感があると思ったらこの魔力・・・魔力自体が形をとって魔法陣みたいな形になっているんだっ！！

こんな魔法を使えるのは僕しかないはずだぞ！？

でなんの魔法陣なんだ？

複写眼で今度こそ魔法陣を解析し・・・・・・・・理解した。

アルビオン王国にいる全ての住民の生命力を魔力へと変換する魔法だということに・・・・・・・・

また僕の魔法かよ！？

《続く》

29話：ある意味魔王つながり（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

なんかリリカルな魔法が出てきたが気にしないで下さい

僕も忘れますから

次回もお楽しみに

30話・召喚されしは………(前書き)

あれ？今回で話を区切らせるつもりだったのに……

またウダウダと

誤字脱字は報告お願いします

30話・召喚されしは……

畜生っ！！

気づいたときにはもう遅いユウキ・エンドリオール・ル・デファン
ス・ド・アンペラトリスです！！

悪ふざけしてる時間も惜しいです！！

ああ完全に見逃してたまさか変な魔力の放出が魔法陣になっていた
なんて……だから変に活気がなかったのか！？

というか連中は生命力を魔力に変換して何をやらかすつもりなんだ
！？

大規模破壊魔法？

いやあれはこんなに魔力必要じゃないはずだし………ああ全
然分らん！！

それに集められた魔力が大きすぎて全然気づかなかつたし、最悪すぎるだろ！？

ウダウダとネガティブ思考に走りつつ、魔法陣の中心へと魔力で肉体を強化して駆け付ける。

ああやっぱり魔導書は全部破棄しよう、さすがに悪用されるのは不快すぎるし、子供たちのために作った魔法をあんな風に使われるのは許されることじゃないというか赦さない。

悪用されるぐらいなら知ってるやつらを全部消しちゃうのが僕の責任かもしれないね・・・どれだけのやつが知っているかは分からないけど、とりあえず全員忘れさせますか。

・・・はあ仕事増えたorz

ようやく魔法陣の真ん中につくとそこにはやはりというかなんとい

うか黒いフードを被ったミヨズニトニルンがいた……原作
キャラを殺すのは色々まずい気がするから記憶を消すだけにしよう

普通に歩いて近づいていくとミヨズニトニルンは僕を見据えながらも詠唱をやめようとはせず……ただひたすら呪文を唱えている。

よし近づいて一瞬で意識を刈り取っ!？

僕が立っていた場所に炎が広がりミヨズニトニルンとの間に炎の壁
が形成される……昨日最初に襲ってきた方か？

そう思い炎が飛んできた方向を見ると昨日の仮面の男が仮面の間か
らただ怒りを込めたような目つきで僕を睨みつつ杖を構えずに立っ
ている。

僕は時間が惜しいので男が詠唱より早く意識を失わせるために接近
戦に持ち込もうと魔力で強化した脚力を用いて男に近づき蹴りかか
るが……

「なっ!?!」

男は僕の脇腹を狙った蹴りをかわして、僕に格闘を挑んでくる・・・
・・・メイジが格闘!?

疑問を覚えつつも男が繰り出してきた右拳を左手で弾き、右足で男の左足を蹴り払う。

男はバランスを崩しながらも僕に右足で蹴りを放ってきたので、右腕で打ち払い距離をとる。

くっ結構鍛えてますね、少し脅威を感じつつ男の様子を探りみる・・・
・・・こんなことをしている間にもミヨズニトニルンが詠唱を続け異常な魔力が違う形になろうとしているのに!!

男はやはり近接戦をするのか腰を落とし、半身になり右腕を後ろに引いている・・・そういえば杖はどこにいった?

最初に蹴る前には持っていたはず・・・しまった!!

あいつ格闘しながらも呪文を唱えながら戦闘してたのか!?

くっ!!

僕が気づいたと同時に魔法が完成したらしく右腕の袖に隠していた杖で僕を狙い魔法を放ってくる。

『ビームフレア』

また僕の魔法!!

杖先から放出された圧縮した高熱高温の炎がビーム状に姿を変え、僕目指し高速で解き放たれる。

すんでのところでかわしビームが突き刺さったところを見るとあまりの高温に地面がマグマ状と化している・・・あんな当たったら死んじゃう!!

どうしてあんな魔法作っただんですか！？僕のバカ！！

内心自分を責めつつ冷静に状況を判断する……格闘しながら呪文を詠唱できる器用な魔法使いは僕がいる限り四人しかいないですよ。

まず僕

これは複写眼の恩恵です。杖なしで魔法も使えますし

で次が母上とカリン様

正直そんな技術いらないでしょって言うぐらいの高速詠唱ですが、昔近接格闘で挑んだら『カッタートルネード』を唱えながら僕をボコボコにしていたから確実に出来ます。

で最後の一人

これは僕が隊長になったときに吹っかけられた決闘でその人が使ってたから間違いありません……あれ以来姿を見てないと思っただらそんなところにいたんですか？

「お久しぶりですね、兄上？」

「チツ」

僕の言葉に仮面の男は舌打ちをしつつ仮面を外しその面を僕に向けた……憎々しいものを見るように爛々と輝く憎悪の瞳で

やはり兄上だった。

「兄上はガリアにいるんじゃないかなかったですかね？」

ニヤニヤと厭らしげな顔つきで尋ねる……僕が隊長になった時に納得が出来なかったらしく決闘を挑んできて、負けたのをきっかけにトリスティンから離れガリアに大使として遣わされているはずなんです

「はっ貴様のような愚か者などを弟と思ったことはないわ」

すごくバカにしたように鼻を鳴らし僕を見下したように見つめてくる。

「そうですか、それは残念です。そのわりには弟の部屋に不法侵入して魔導書を写していたみたいですけど」

悪いがあの量は一朝一夕で終わる量じゃないなのに、それを全て使いこなしているし

それと完成して畏をしかける前に書いている途中なら誰にでも見ることは出来る・・・子供の頃それが出来たのは母上か父上それに兄上だけと言っわけだ。

「くっ」

兄上は顔を憤怒により真っ赤にし杖を構えている。

「邪魔なんでどいて下さい・・・・・・ミョズニトニルンが唱えている魔法はそろそろ笑えなくなる」

離れて見ていても身を凍らせるほどの魔力が渦巻き柱のように光り輝いている……すでに何かが発動しかけている。

「別に構わん、世界が終わろうと私には関係ないことだ」

狂気を宿した笑みを浮かべ僕に相對する……どこでこんな狂つちやつたんですか兄上？

僕は上着の内ポケットに入っていた黒く光る宝石を五つ取り出す。

523

それは全ての光を拒絶するような輝きを発して異常な魔力を内包している……僕の最後の切り札、人がいない山里などにいき、その魔力を根こそぎ奪いとり宝石にぶち込み貯蓄したのだ。

そして僕はそれを口に含み噛み砕き、内包されていた魔力を体内へと吸収する。宝石より解き放たれた魔力は僕の体内を暴れ回り僕自身を変化させていく……薄い赤色だった髪は少し伸びささくれだつたように立ちくたびれたような白色に、そして綺麗な優しい茶色だった瞳は凍てつき全てを貫くような緋色へと変わる。

これで魔力量はいつもの10倍
思い描くだけで大抵の魔法は発動する。

まあさすがに人体に悪影響すぎて身体が勝手に変化するけど、今も
どっかの血管やら神経やら筋肉が切れたりくっついたりを繰り返して
いる。

早く勝負をつけるためにいまだに僕の変化を見て唾然としている兄
上に反応出来ない速度で近づき首に一撃入れ気絶させた……
悪いがこんなんでも兄上は兄上なんです。殺せはしない

524

気を失った兄上を放置しミョズニトニルンへと襲い掛かるが……

すでに遅かった。

街の人々からかき集めた生命力を変換し作り上げた魔力で

ナ

二

力

が生まれた

その瞬間身体が崩れ落ち立ち上がれなくなった……あまりの恐怖で

地面に這いつくばり生を後悔した

歯がカチカチと震え噛み合わない身体が芯から震え全く言うことを聞こうとしない

捕え所のない死を感じる
覆りようのない死を感じる
絶対的な死を感じる

全てが死を直感させられた

逆らえば確実に死ぬ

必ず殺されるまさに必殺

僕は震え怯える身体に鞭を入れはいつくばった状態から視線をあげる。

巨大な魔法陣の中心から長さの違う五つの塔のようなものが競り上がってくる……まさかあれは

あれは……指なのか!?

もしかしていや、もしかしなくてもレコン・キスタの目的は魔神召喚なのか!?

おいおい怪獣大戦争とかが始まっちゃうのかよ?

僕はこんな死亡フラグを乗り切る自信はないんですが!?

《続く》

30話・召喚されしは………(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか？

ずっとシリアスです
う〜ん微妙

再び登場な兄上ですがただの時間稼ぎ本番はこれからorz

ずっと保留になっているサブタイトルが次回使えたらいいなあ〜な
んて

次回もお楽しみに

最終話・ずっとstand by you (前書き)

がっはぐっはぶっげ・・・・・・・・・・xxはあまりの批判に立ち上がれないダメージを受けた。

誤字脱字は報告お願いします

最終話：ずっとstand by you

僕はプルプルと震える脚を殴りつけ無理矢理立ち上がる……
まだ大丈夫指だけなら
まだ……

そう自分自身に言い聞かせ魔神を召喚した衝撃で吹き飛び気絶した
ミヨズニトニルンを確認しつつ、複写眼で魔神を解析する……せ
めてどんな相手かを知らないと

なっ!?!まさかバロールですか!?!

なんであんな魔神が召喚を……そうか最後のページに書か
れていたのはバロールの召喚方法でした!!

でもミヨズニトニルンは魔法を使えないはず……誰が魔法
を彼女に教えたですかね?

バロール

見たものを誰でも殺すことができる邪眼を持ち、通常は閉じられている。戦場では4人がかりで取っ手を回し、まぶたを押し上げる。子供のときに父のドルイドたちが毒の魔法を準備しているときに窓から外を見ていて、煙が目に入ってしまい、この力を得た。この他にも魔力で風や炎を操る。また、神々を惨殺することになるクロウ・クルワツハを呼び出したのもバロールである。最期は、自分の孫に殺されるという予言どおりルーの手で邪眼を射抜かれ殺されている。

まさに魔眼の神

僕に相對するには相応しいだろう………相性最悪すぎて笑える

無理矢理立ち上がった瞬間塔の一つおそらく人差し指が倒れこちらに向けられた……そして圧倒的な死が迫る感覚がした。

まずいつ……！

咄嗟に気絶していたミョズニトニルンを後ろに庇い地面を踏み締め隆起させ壁を作り上げさらに魔力で障壁を何重にも重ねる。

そしてバロールの指先から複写眼を持つてすら解析出来ず、殲滅眼

を持ってすら吸収出来ない何か光線のようなものが飛び出してきた。

光線は僕の数倍の太さで簡単に僕を飲み込もうとするがなんとか持ちこたえ、後ろに受け流していく

土の壁は当たり前のように崩れさり、何重にも張った障壁もどんどん割れていくので、すぐに造り直すが再生と破壊が同じような速度で行われるので油断は出来ずにいる。

ぐっ辛い!!

そして遂に光線の重さに耐え切れず飛ばされる中ミヨズニトニルンを抱きしめさらに障壁を張り怪我をしないようにした。

ズドーンっ!!

飛ばされる中爆音と共に全身に広がる激痛で気を失ってしまつ。

「ガッ!!」

目を覚ますと身体全体に走る激痛を覚えながらも辺りを見回すとウエルズ皇太子、ネルフ、デンベールにゴーゴン三姉妹が僕の顔を覗き込んでいた。

「ユウキ殿、あれはなんなんだい!？」

焦ったようにバロールを指差すウエルズ皇太子……僕が気絶してる間に完全に右腕が出てしまっている。今は顔半分が出るか出ないかの状況だ。

「あいつは先程の一撃で空中に浮いていた島を3個も消してしまっただ!!まだ住民がいたのに!!」

殿下は住民が殺されたことに激怒しながらも今まで見たことないような化け物をどう相手にしているか分からず、かなり心痛な顔をしている。

僕は痛みで立ち上がるのも辛い身体に無理矢理鞭を打ちながら説明する。

「奴はバロール、魔神の一柱です。ある意味最強の魔神で目があったものは必ず即死させるといふ力があります」

「「「なっ!?!」」」

僕の言葉に驚愕を浮かべ絶望するような顔をする殿下以下2名……
……ゴーゴン三姉妹は知っていたらしく
あまり驚いてはいないがあまりの格上の相手に唇を噛み締めている。

僕は三姉妹に手を翳し

「……力を喰らう」

三姉妹から魔力を根こそぎ奪い取り、三姉妹を封印状態に戻した。

いきなりの僕の行動に目を見開き、唾然としたような表情をする三姉妹

魔力残量を確認しつつ銀髪紅眼のまま、僕と同じように吹き飛ばされていたミヨズニトニルンに近づき僕の魔法についての記憶を消去し、エウリュアレの力でガリアの玉座のある部屋に転移させる・・・せいぜいジョセフに怒られる。

記憶に関しては多分大丈夫だろうと甘い考えをしつつ抗議的な眼差しで見ってくる三姉妹を無視してネルフ、デンベールと共に三姉妹をトリステイン城の前に転移させた・・・ああ怒られるだろうなあ

苦笑いが浮かぶ中大事な友達を死なせたくないという思いが僕を行動させる。

これである5人はまだマシなはずです・・・そしてウェールズ殿下には服の中に入っていたため先程の衝撃で多少ボロボロになった箱を渡す。

「正直嫌な話ですが、僕に何かあったらこれをアンリエッタに渡してください」

「……………」

殿下は無言で僕を睨みつけながらも受け取り、そして……………

「帰ってきて自分で渡してくれ」

そう本当に嫌そうな顔をして言ってきた。その様子にまたも苦笑するしかなかったが殿下をそのままアルビオン城に飛ばした……………
・殿下も無事ではいて欲しいが殿下には悪いが城内の内部で指揮をとって欲しいからね。

535

そしてバロールに向き合う。

僕は空気中にあるありったけの魔力を吸収し自分の中で練り続ける。

『聖なるかな星なるかな』

手を天へと翳し、足を開いて立ち今は出ていない太陽を見据える。

もっただもつと・・・

『万物の再生と破壊を司る対極なるものよ』

手で何かをつかみ取るように手を開き、さらに魔力を練りあげ続ける。

全然足りない！！

『偉大なる存在にして邪悪なるものよ』

様々なこの世界の魔力が僕の手に集まっていき、力が集合していく

こんな量じゃ足りない！！

『最強にして最悪、最愛にして最高』

集められた魔力は交じりあい虹色の輝きを放ち世界を揺るがす

こんなんで足りるかよー!!

『全ての母にして雄大、されど無限に広がりし天にただ一つ』

大地は激震し空は揺らぎ空間が歪む、全ての生物が異変に気づき安堵する。

まだまだっ!!

『汝孤独なれど、祖は正に天空の霸王なり』

虹色に輝いていた魔力が金色へと輝きを変え、さらに密度の濃い魔力へと変わる。

もっと集まれよー!!

『無限にありし有を統べ、手繰りよせ引きずり落とせー!!』

翳していた手をつかみ取るように下に引き、全てを薙ぎ払うように手を振るう。

喰らえっ！！

『陽神墮とし！！』

魔力を用いて太陽の力を無理矢理引きずり落とし相手にぶつける僕の最大最強の魔法

バロールは最期自分の孫に殺さである光の神ルーの手で邪眼を射抜かれ殺された。

ならば些か暴論ながらも光に弱いはず、そう思い光の最上級である太陽の力を使ったのだが……効果は抜群みたいだ。

バロールの右腕は悶えるように暴れまわり魔法陣に引きずりこまれるように吸い込まれている。周辺に危害を加えているが、あそこらへんはバロールの登場とともにすでに全滅してるからなんら問題ない。

そして終わったことに安堵し、空を見上げていると………バ
ロールの最後の悪あがきを見過ごした。

迫りくるバロールの手をかわせず、捕縛され口の中にほつり込まれ
た。

そして体内に吸収され、目が覚めると真っ暗闇の中に僕の目の前に
僕と同じような身長黒髪で目を包帯でグルグル巻きにした男が立
っていた。

そして口を開き語りかけてくる。

「いようく我が眷属、いい度胸だな。魔神たる我に眷属の分際でタ
テをつき剣を向けるとは」

ニヤニヤと厭らしい笑みで笑いかけてくる男……どうやら話の流
れからしてバロールっぽい。

「そう我が魔眼の神バロール！」

どうやら思考が読めるみたいです・・・うざっ

「・・・まあいい。さて我が眷属よ、我を傷つけたるそなたの力に敬意を評しあることを教えてやるっ」

ニヤニヤと楽しくてしょうがないという風に聞いてくる。

「なんですか？」

「なあに〜我はまだ倒されていないというだけさ、呼び出されておいてそう簡単に引き下がるわけにはいくまい」

「なっ!?!?」

ふざけないでくださいよ?こっちとらフルパワーで撃ったんですよ?

「なに神たる我には届かなかったというだけさ・・・しかし」

不意に無言になるバロール・・・そして

「我を封印する方が一つだけある」

簡単に自分が引き下がると言ってきた・・・なんなんですか、この神は

「簡単な話だ・・・我が眷属、貴様が体内より我を封印すればいい・・・自分の命と引き換えに」

成る程そういうことですか・・・・・・・・・・さすが魔神、厭らしい

まあ答は簡単です。

「嫌なこつた!!」

こつちとらアンリエッタと「バキューン!!ズキューン!!」な生

活が待ってるんだ！

そう簡単に死んでたまりますか！！

「ならこの世界中の人々が全員死ぬだけだ」

くっ………ム力つく魔神めっ！！

僕は思い返す

この世界での日々を………

みんなと楽しみふざけあつた日々

嫌々ながらも仕事を終え笑いながら休憩してた日々

苦しかったが最後は結局笑って終わっていた日々

ああ僕には笑つてた記憶しかないや………
それに僕は………

「分かりました……封印してやりますよ」

凜猛な笑顔を浮かべ言い放つ

アンリエッタがいるこの世界が好きだから

「よかるう、それでこそ我が眷属……特別に貴様の心残りであろう魔導書については存在を消し去っておいてやった、神たる我に感謝しておけ」

それは有り難いことで……さあて

「封印の時間だ!! 覚悟しとけ!!」

こうしてユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスは魔神を打ち倒し英雄となった。

- - - - -

この世には『魔法』が満ち溢れている、それはとても些細なことでも温かく信じられないほど奇跡的なこと

人々は世界に『魔法』を求める、しかし実は『魔法』は誰にでも使えるものなのだ、そう『魔法』とはきつと『愛』なのだから

誰にだって『魔法』を起こせる簡単な『奇跡』など目ではないのだ。
・ ・ 大いなる『愛』の前では

時間も過ぎある日アンリエッタ姫のもとにあるボロボロの箱が届けられた。

中に入っていたのは何の飾りもない銀色の指輪

そして指輪の内側には『stand by you』

『あなたのそばに』

《終わり》

最終話・ずっとstand by you(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか？

なんか酷く打ち切り感が強いですが………終わりましたね？

ああ疲れた

方向性が分からない？

こっちは終わらせる気だったんじゃないっ！！

あれ次回？

次回なんかあんの知らないんだけど

またね、(´ー´)ノ

第2章1話：誰が終わったと？（前書き）

皆さん

お待たせしました第2章！！

出来は微妙だけど楽しんでいただければ幸いです

第2章1話：誰が終わったと？

「ああうんおはようマチ・・・ロングビル姉さん」

サワサワ

「相変わらずいいお尻ですね」

ドンッ！

「ちよつ姉さん！？魔法で弟を折檻するのはよろしくないと思いますよ！？」

「ぎゃあああああああああああ」

「全くちよつとした冗談じゃないですか・・・だから嫁の貰い手がないんですよ？」

サワサワ

「ああやっぱりお尻はいいなあ〜」

ズドンっ!!

「ぐっは!?!」

麗らかな日差しの中黒髪で目を包帯でグルグル巻きにした青年が眼鏡をかけた緑色の髪の女性に折檻をうけていた……まあ主に青年が女性にセクハラしたのが問題ではあるが

青年は女性から折檻を受け終わり、自室を出て温かい日差しの中伸びをしている。

ここはトリステイン魔法学院

貴族の子供たちのメイジが魔法を学ぶ場所である。

そして今、他国ではあるが救国の英雄ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスがいなくなり一年が経った。

彼がいなくなったことによりアンリエッタ姫はふさぎ込み、国自体も急激に衰退していきかつてゲルマニアと肩を並べていたというのが嘘に見える衰退ぶりである。

宰相であるマザリーニ枢機卿が頑張ってはいるものの甘い汁を吸おうとする貴族は多々おり、対応仕切れずにいた。まして王位も空位のままであるし、王族の一人が姿を見せないとなれば尚更であろう。

そして僕ユウ・・・間違えましたリーブはトリステイン魔法学院で働いているただの青年である。

「おはようございますリーブさん」

「おはようございますシエスタ」

伸びをしていると後ろから可愛い黒髪の女の子が挨拶をしてきた。

彼女の名はシエスタ、僕の世話係みたいな役をしてきている・・・
・・・まあ最も包帯で目を覆ってはいるが見えるんですけどね

「今日も可愛いですね」

笑顔でニッコリと話し掛けるとシエスタは顔を真っ赤にしつつ

「もうーいつもそんなことばかり言っってー!!」

とちょっと怒ったように言ってきた・・・しょうがないですね

サワサワ

「ほらあまりの可愛さに勝手に僕の右手が動くほどですから!」

シエスタに近づきお尻を撫で回す。

「キャツ……………リーブさん」

あつ…………可愛い顔に青筋が

「いやわざとじゃないんですよ!?僕の右手が勝手にシエスタのお尻を…………ほらシエスタのお尻の形がいいからつい「もう知りませんっ!」…………すみませんでした」

敵度なボディーランゲージにより地に伏せられ、頭を下げる…………
…………ちやつかり下から下着を覗くことは忘れない。

縞パンが二次元だからこそ許される究極の秘宝だが可愛い子がつけるならばなんら問題ないな

平謝りしつつもシエスタと一緒に洗濯物を洗っていく・・・盲目という設定なので配膳とかは出来ないのだが、こういう仕事ならできるし皿洗いとかもやってる。

いやぁこんなところで働けるのもロングビル姉さんのおかげですね・・・
・ いろいろお尻してますし

実際の弟と言うわけではなく拾われたのだが、まあそこらへんはど
うでもいいです・・・正直な話テファも連れて来たかったが
子供たちがあるので無理だった。ああテファの胸・・・違っ
たお尻は最高ですからね。まあ触ると姉さんにぶっ飛ばされるですが

とつか胸の何がいいんですか？
今はお尻でしょ？

胸なんて汚れが詰まってるんですよ？
ツルペタな方が清純なんです。

ほら某姫様を見てくださいよ、あんだけふさぎ込んだ振りをしてる
けど自分の思い人がいなくなって三ヶ月後には他の男と抱きしめあ
ってたんですよ？

へドがでる。

だからこそお尻！！

お尻なら胸みたいに悪意が籠ってませんし！

僕は自分をア ルキングと自称するほどお尻が大好きですっ！！

ああなんていう甘美で淫靡な響きなんでしょう・・・ああお尻に触れていないと禁断症状が！

適度なお尻を求めつつ城の中庭を歩いていると・・・中庭から女の子の泣き声が聞こえた。

なんか昔似たような展開があったような気がしますねと思いつつも女の子のためならたとえ火の中水の中スカートの中、どこにでも参上しましょう！！

行くとそこには散らばった教科書とその真ん中で泣き崩れ桃色核弾

頭だった……おおジーザス！

もう今更なのでしょうがなく桃色核弾頭に近づき声をかける。

「どうしたんですか、ミス・ヴァリエール？」

近寄り肩を叩いて優しく語りかけるとルイズは焦ったように涙を拭き取り何事もなかったかのように無理矢理笑みを浮かべ

「なんでもないわ、ただ転んでしまっただけよ」

その割りには教科書が引き裂かれたような感じがするんですけどね

……はあ公爵家の娘にこんなことして無事で済むと思ってるのかね？

「そうですね」

ルイズの横に立ち無惨な姿になった教科書を拾い上げていく

「あっ……」

僕が教科書を拾っていくのを見て困ったような声をあげるルイズ

「なんでこんなことに？」

あまりにも酷かったのでしょうがなく理由を尋ねる。

「私が『ゼロ』のルイズだから……」

あれ？昔魔法使えるようになりませんでしたっけ？

「小さい頃は多少は使えたのに急に使えなくなっただの……小さい頃から簡単なコモンマジックしか使えなかったけど、今じゃそれすらも成功しなくて……」

成る程だから虐められてと……でも原作のルイズならブチ切れ

て爺ちゃ・・・オールドオスマンにチクリそうなんです

「どうしてオールドオスマンに報告しないのですか？」

そう尋ねるとルイズは悔しそうに唇を噛み締め毅然とした眼差しで

「ここで誰かに頼ったら、私は私自身を許せなくなるわ。私は『魔法』の一番弟子なんですもの・・・こんな程度で弱音を吐くわけにはいかないわ」

ううんなんか原作より変に優しく変にプライドが高くなってしまってますね・・・というか『魔法』の一番弟子って

「『魔法』ってあのユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスの・・・様のことですよ？あの方は誰にも魔法を教えようとしなかったのでは？」

「そうよ、あのアルピオンの英雄よ。私が幼少の頃魔法が使えなくて泣いてしまっていた時に彼が現れて私に魔法の使い方を教えてくれたの・・・その時はコモンマジックは使えるようになったんだけど。もう一回教えてもらおうにも今はもう彼はいないし・・・」

「

ルイズは酷く沈痛そうな赴きをしてうなだれている。

「私は彼と遊んだこともあるのよ？彼は誰にでも平民にすら優しくて私の尊敬する人よ……私も彼みたいになら一人で強く優しく人になりたいわ」

遠い目をしてさも自分のことのように嬉しそうに話すルイズ

成る程目標になる人を見つけたから性格改変が発生したと……
・原作に介入するしないのレベルじゃありませんよ、これ

558

桃色核弾頭が桃色不憫になり変わってるよ

あまりのしょうもなさにも内心ため息をつきつつ言う。

「強さを履き間違えてはいけませんよ、ミス・ヴァリエール

『魔法』様だつて人間です。あの方だつてピンチの時は仲間に頼りました。強さには色々ありますが・・・彼が持っていたのは孤高の王たる強さではありません」

ルイズは僕の言葉に不思議そうな顔をしつつもちゃんと聞いている。

「彼が持っていたのは何かを守りたい、何かと共にありたいという
思いです」

「じゃあユウキは別に強くなかつたつてこと？」

「一人で戦うことが強いと言うことではありません、友と共に敵に立ち向かい喜びを分かち合う。これもまた強さの一つです・・・だからミス・ヴァリエール。一人で耐えるのではなく友と共にいてください・・・友を作ることから始めましょう」

僕の言葉に少しだけ納得したように頷き笑顔を浮かべる・・・よしよし

「貴方の名前は？」

「僕はリーブです」

「そう……リーブありがとう」

「いえいえお気にせずに……」

そう言って破れてスタボロになっていたはずの教科書をルイズに渡し……さらに余計なお節介を言う。

「ほらあそこに心配して隠れているミス・ツエルプストーリーはよき友になれますよ？」

「ふふふそうね、友達になってくれるか聞いてくるわ」

僕の言葉で茂みに隠れていたキュルケがビクツとして驚いていたが、ルイズはそれに気づき笑顔を浮かべてキュルケがいる茂みへと近づいていった……ああもう原作に介入しまくり、これからは今度こそ目立たないにしなければなりませんね

まだあの人との約束の時ではありませんから……

まあそれでもお節介はしちゃうんだろうけど………なんてお人よしの僕orz

今も余計なことしたし、ああ渡すついでに魔法で教科書直すとか馬鹿なことをしました。

でもやっぱり女の子の泣いてる顔は見たくないわけで、いやはややつぱり馬鹿だなあ〜

風で揺れる黒髪をガシガシとかきつつ、仕事場にお尻を求めて帰る。

ああ空が青いなあ〜

今日も最高に幸せな天気だ

《続く》

第2章1話：誰が終わったと？（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

というわけで学園編のスタート

リーブが誰かって？

誰でしょうね（笑

わざと1日空けるというただの嫌がらせですが
まあ気にしないでください

次回もお楽しみに

ステータス（一章終了時）（前書き）

試しに書いてみました

なんか気になる点があったら報告を

ステータス（一章終了時）

暇だから主人公のステータスを書いてみた
もちろんFate風（笑）

名前：ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリス

容姿：薄い赤色の髪と茶色の死んだ魚のような目をしている。身体は鍛えているので痩せマッチョ、右手と胸に昔受けた狼の爪痕がある。

身長：178センチ

体重：67キロ

属性：混沌

筋力：B（A+）

魔力：A（EX）

耐久：C（B+）

俊敏：B+（A++）

幸運：E-

宝具：なし

イメージカラー：赤

特技：覗き、魔法の解析

好きなもの：覗き、女の子、乳

苦手なもの：家族、覗きを邪魔できる強さをもった人

主武装：鍛え上げた己が身体を魔力により強化する。

保有スキル

魔眼：EX+

神（幼女）から与えられた五つの魔眼。

他にも使い魔の契約により三つの目を保有する。

順に

一つ目：特殊な複写眼

元々は伝説の勇者の伝説の主人公の能力で、魔法を見ることで解析し構造を理解することが出来るといものだが主人公の目は伝説の勇者の伝説の主人公が物語後半で手に入れた複写眼の上の存在で魔法に限らず人や物、全ての構造を解析し理解することが出来る。

使用時には瞳の中央に七色に輝る涙型の紋様が浮かび出る。

二つ目：殲滅眼

魔法を吸収し自分のエネルギーに変え、自分の肉体を強化・再生させるというものでこれもまた伝説の勇者の伝説のキャラクターが使っているものである。

あれは魔法だけではなく人からもエネルギーを奪っていたが、それは人を食べなきゃいけないので主人公は改良し接触により吸収できるようにした。

使用時には瞳に赤い十字が浮かび上がる。

三つ目：ギアス

目があった人物に一回だけどんな命令でも下せるとい絶対遵守の力使用時には鳥が羽ばたくような形の紋様が浮かび上がる。

四つ目：カトブレパスの瞳

能力は時止める瞳じとどめるまなこという対象の時間を止める力と死時滅る瞳しときめぐるまなこという相手を抹殺する力である。

使用時には両目に赤いアナログ時計が浮かび秒針と分針そして時針が正確に時を刻む

本来は片目にしか時計が浮かばなかったが神様パワーで両目になっている。

五つ目：不明

使い魔の契約により得た魔眼：ステンノの魔眼、エウリュアレの魔眼、メデューサの魔眼

ステンノの魔眼

対象の能力を5倍にする。

対象と倍化する能力は決められる。

ただし一度に一つのみ

エウリュアレの魔眼

対象を自在に転移させられる。本人もそれにより移動可能だが目に入るものしか転移出来ない。

メデューサの魔眼

目があった対象を石化させる。石化は使用者の意思で解ける。

全ての魔眼が切り替え可能、無意識による発動はしない。

神の加護：E -

神により護られるはずが神によりだいたいのイベントに巻き込まれる羽目になる。

魔力強化：EX

魔力により身体能力をランクアップさせる。

魔力操作：EX

複写眼によりだいたいの魔法が使える。空中から魔力を吸収し自分のものとして使用出来る。

女難：A +

なぜかしらのフラグが立ち、知らない間に好感度が上がる

鈍感（偽）：A

前世のせいで基本的に自分がモテることはないと思いついでいる。

説明

元はエロゲーショップの店員だが、神との遭遇エロゲーについて仲良くなるものの免許をへし折ったことにより死亡

神が罪悪感を感じたことによりハルケギニアに転生する。基本的にはアンリエッタラブだが身分の差などから身を引いていた・・・
・その衝動により覗きに走るようになったのかもしれない

争いごとはあまり好きじゃないがスイッチが入るとわりと戦闘狂
そしてメイドさんを侮辱するものは決して赦さない。

魔神バロールとの戦闘に勝利するもののバロールに飲み込まれ体内より封印することにより行方不明に

いまだ行方は知れず

ステータス（一章終了時）（後書き）

うんなんか微妙

まあがんばる

第2章2話・オリキャラを出し過ぎて收拾がつかない(前書き)

××です

いやあ〜勢いだけで書いてるからネタがないorz

第2章2話：オリキャラを出し過ぎて收拾がつかない

「で封印方法はどうすれば？」

「神たる我はそこまで教えようとは思わん！」

「ケチ神が（ボソツ）……なら僕自身に封印するという形にしますか？」

「成る程その方法なら確かに先程の攻撃で神格にダメージを受けた今の私の内部からなら封印可能だな」

「じゃあ始めますか……やれやれ命懸けの割りにはシリアス（笑）な展開ですね」

.....

「おはよございませすシエスタ、相変わらず素敵なお尻ですね」

朝っぱらから言葉によるセクハラを敢行する僕ユウキ・・・間違えましたリーブ18歳

そんな僕をジト目で睨みつつも挨拶を返してくれるシエスタ

「おはようございますリーブさん・・・普通に挨拶できないんですか？」

「これが僕のスタイルですから」

ニコニコと笑顔を浮かべながらシエスタと一緒に食堂へと向かう。

食堂には丸まると太った粋のいいおっさんがいたので挨拶をする。

「おはようございますマルトーさん」

「おっ元気そうだなリーブ、かつかつ今日も嬢ちゃん達にセクハラしてしめられたか？」

「いえ今日はまだ肉体的なセクハラはしてません」

サワサワ

そう受け答えしつつも横にいたシエスタのお尻を撫で回す……
・うんナイススタイル!!

パアーン!

フライパンで叩かれました。

「ほら今日はスクランブルエッグにソーセージにシチューとパンだ」

マルトーさんは喋りながらも手を動かし僕らの前に少しだけ豪華な朝食を置いてくれた……普通の平民に比べたら十分贅沢ですよ

いつも通り自分で食べようとフォークを探すフリをしていると……
……

「あっ……あ〜ん」

少しだけ顔を赤くしたシエスタがソーセージをフォークに突き刺しこちらに突き出してきた………役得ってやつですかね

「あ〜ん」

パクっ

差し出してきたソーセージを食べ笑顔でお礼を言う。

「美味しかったです」

シエスタは嬉しげな顔を浮かべた後、結局僕に雛鳥のように食べさせ続け朝食を終了させました………う〜んちょっとだけ恥ずかしいですね

マルトーさんが口笛を吹いてからかっけていましたが、シエスタの案

外パワフルな照れ隠し（裏拳ちなみに僕には見きれなかった）によつて壁に埋没させられていた。

いやはやこの世界の女の子は基本的に O H A N A S I が得意ですから余計なことと言わないようにしましょう。

シエスタの意外な一面を再発見しつつも内心あれを喰らいたくないが為に怯えて、学院の付近にある森へと向かう……。仕事をしようとすると他のメイドさん達がやってくれるせい暇なので散策するのが日課になっている。

ボディーランゲージ
ちなみにやんわりとお断りしているのだが「いいからいいから」と優しさMAXで奪われてしまう……。むう男としては少々情けないかもしれないね

と自嘲しながらもどんだん森の奥へと進むと「ピーピー」鳥の泣き声が聞こえた……。雛が巣から落ちたんですかね？

とりあえず泣き声が聞こえる方向に向かい目の前の茂みを掻き分けたどり着くと……。OHジーザス

よくある罨：トラバサミに引っ掛かった手が羽で足が鳥の紅い髪の子要はハーピーがいた……なんというフラグの立て方とりあえず罨に引っ掛かっている女の子のお尻を眺め……うんありだな！

「大丈夫ですか、お嬢さん？今外してあげますから」

優しい笑顔を浮かべつつ近づきトラバサミを外してあげるとかなり警戒したように後退りしていく女の子……そんなにやらしい顔してますかね？

「あっありがとう」

少しorzポーズに移行しそうになるくらい落ち込んでいると女の子がお礼を言ってきたので

「いえお気になさらずに……」

そう言っただけの子が怪我していた部分を魔法で治してあげると女の子はさらに警戒し怯えたような顔をしてしまう・・・ふむ魔法に何か恐怖心があるのかもしれないね

ここはワ　ピース風に全裸になって害意がないことを語りかけた方がいいかもしれません。

そう思い衣服に手をかけたところで女の子が不思議そうな顔で僕を見てきた・・・あれ？

「あなた誰ですか？」

「ああ名前を言ってませんでしたね、僕はリープです。あなたは？」

「私はミカサ・・・なんで私はこんなところにいるの？」

んっ？

「いえ今あなたは罨に引っ掛かって・・・」

なんか違和感を感じ近寄るとまた後退りをされる。そして・・・

「あれ？ここはどこ？あなたは誰？」

再びかなり警戒心高めで話しかけられる・・・OK把握しました。

あれですね、鳥頭ってやつですか三歩歩いたら忘れるってやつ・・・
・・・作者馬鹿ですねこんなキャラ使えるわけないでしょう？

あまりの予想外の出来事に作者をバカにしていると、無言の僕に怪しさを感じたせいかまた後退りし三歩あるくミカサ

「あれ？ここはどこ？あなた誰？」

・・・無限ループもありえるわけですか

とあまりのアホさ加減に絶望しつつもミカサに指先を向け指を振るう。

『人外なるものよ、人たれ。この者に永久たる記憶を与えよ』

これはどっかのゴーゴン三姉妹にかけられた封印魔法の改良版で話が通用しない魔族たちを無理矢理人間化させる呪文である。

今回は記憶力をあげる呪文に改良して使用する。

ようやくまともな会話が出来るようになったのでここに至るまでを説明した。

「かくがくしかじかで今に至るんだよ」

「私は初めて現実でかくがくしかじかと言った人を見ました」

なんか呆れたような目で見てくる鳥娘・・・いやだって今更同じようなことを二回も書くの面倒じゃないですか

「まあそこらへんは置いておいて」

箱を隣にずらすようなジェスチャーをとりちよつとだけ真面目な顔を
をして言う。

「人間になれるからなってみて下さい」

「へえ、すごいですね……どうですか？」

僕の頼みにすぐにハーピーから人間へと変身するミカサ……..
ああ、うん変身するとき正直気持ち悪かったので、今度から変身と同
時に煙が発生するようにします。

「うわあ動きづらいけど……楽しい、ああでも手っていうのがわ
からない」

今までになかった指と手に戸惑いつつも楽しげにはしゃぎ回ってい
る……..
ただ、僕は人間になったミカサの腕にある火傷痕を
見過ごさなかった。

今まで羽毛で隠れていたから気づかなかったけど、アレは魔法によって誰かにつけられた火傷だ。

複写眼を使って詳しく解析するとやはり残留魔力が火傷に張り付いているので、間違いないだろう。

だからミカサは魔法に対して警戒心をあらわにしたのか……誰がこんな小さな子に魔法をぶつけたんですか

内心プチ切れながら身を焼き尽くさんばかりの怒りを抑えつつミカサに問い掛ける。

「どうしてここに来たか覚えてますか？」

「……………」

僕の問いにミカサは急に沈んだように無言になりガクガクと身体を

震わせ自分の肩を抱くようにうずくまってしまった……
Kも素晴らしいです、わかりました。

完全にブチ切れました……いやブチ切れたぞ畜生

身体に恐怖心が刻まれるほど繰り返し虐待をうけていたというわけだ

ふざけんじゃねえぞ!!

「もう大丈夫、ここには君を傷つけるやつはいないよ」

震えるミカサを抱きしめて恐怖心を安らげるために魔法でラベンダーの匂いを作り風に乗せて嗅がせる……ラベンダーには精神を和らげるリラックス効果がある、それを魔法でさらに強化しミカサをの恐怖心を和らげさせた。

ミカサは恐怖心が和らぎ落ち着いたのか身体を震わせるのを止めて安堵したかのように急に眠ってしまう……おいおいいくら恩人とはいえ初めて会った人間に気を許すなよ。

安らかな寝顔を浮かべて抱き着いているミカサ……はあな
んか怒ってたのが冷めちゃった……いや冷めちゃいました。

寝ているミカサをお姫様だつこで運び学院へと向かう。シエスタに
お世話をお願いしますか……。彼女はいい人ですからきつと
火傷痕を見たら何も言わずミカサを助けるでしょうね。

やれやれまた乙女の味方、乳帝の出番ですかね？

いや待つんだ僕！！

僕はオツパイなんていう汚れの詰まった俗物への興味を棄て神聖な
るお尻に悟りを開いたじゃないですか！！

だから乳帝なんかではなく尻王として降臨しなければいけない……
いやならないのです！！

貴方たちには解りますか？あのお尻の尻線美を！足へと繋がるあの
曲線が堪らない！

二次曲線に興奮するやつのが持ちが若干わかるあの曲線美は最高ですよね！！

ああお尻・・・なんという素敵な響きああ堪らない

さて・・・なんてシエスタに言い訳しますか、このまま普通にお持ち帰りしたら間違いなくO H A N A S I Iが始まりますからね。

・・・どうしましょう。

森から出るときに案の定シエスタに見つかり何か話す前に鉄製のお盆が鉄屑に成り変わるほど叩かれました。

ああ今日も平和ですね（泣）

《続く》

第2章2話：オリキャラを出し過ぎて收拾がつかない（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ちなみにミカサちゃんのイメージは普通に某打ち止めさんwww

これストック分なのであんまり話すようなことありませんw

次回は現在製作中

感想見るたびにやる気が削られていく

ああ次回は懐かしのあのキャラが登場

次回もお楽しみに

第2章3話：増加するイレギュラー（前書き）

前編と後編になってしまったorz

誤字脱字は報告お願いします

第2章3話：増加するイレギュラー

「では封印を開始しますか」

「うむくるしゅうない始めよ」

「………はぁ」光に討ち滅ぼされし魔眼の神たるバロールよ、
魔眼王たる我が身を持って御身を「待つんじゃっ!!」

「「なつ母上（幼女）!?!」」

「母上っ?!」

「うむ、久しぶりじゃな我が娘よ」

「娘?!」

「うむ、我は基本的に性別はないがどちらかというと女人に近い人格だ」

「でどうしてここに來たんだ幼女？」

「いやお前さん、丁寧語はどうしたんじゃ？」

「ああうんあれはこっちに來てから無理矢理教育されたからたまに外れちゃうんだよ・・・それにお前と僕の仲じゃないか」

「貴様！母上をお前などと・・・」

「よいのじゃバロール、奴は我が同士。我が半身のようなものよ」

「なんか随分な身分になったな僕」

.....

「あつおはようございますキーリさん、こちらでの仕事になれましたか？いいお尻ですね」

給仕の方法を学ぶためにここトリスティン魔法学院に派遣されているわけですが……残念なことに、ここに来るまえに彼女とは色々あって知り合いになりました。

先に言っておきますが、キーリさんは完璧なメイドさんです。

おしとやか、貞淑、巨乳……はおいておいて掃除、洗濯、料理に介護までなんでもござれですが

メイドして相応しいという特筆すべきものはその……ドジっ娘加減にあります!!

彼女は三日に一回は大きなポカをやらかします……まあ何故かいつも犠牲になっているのは僕なので辞めさせられたりしません。これが原因で発生した事件が彼女と出会っかけとなりました。

それは六ヶ月前の事、色々あってここトリスティン魔法学院に勤め始めようやく慣れてきたので町に行き、魅惑の妖精亭で女の子たちを視かゲフンゲフン……愛でようとしている時だった。

もちろん包帯グルグル盲目スタイルです。

今までなら出先になんらかのイベントが発生し、女の子にボコボコにされるといった感じだったのだが今回は珍しく何も発生せず思わず幼女への感謝の祈りを捧げながら魅惑の妖精亭に入り、蕩けきった目と長く伸びた鼻の下を手で隠しながら様々な衣装女の子たちを見ていると……あ……ありのまま、今起こった事を話すぜ！催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ、もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……どうして座っている僕にゴールデンポールストライカーが出来るんだ！？

僕は座っていたんですよ！？机で股間が隠れていたのに何故！？

何がどうなったらそんなことが！？というか当たったのなんですか！？？

相当な疑問を感じつつも大事で敏感な部分への激痛で床を悶え回り、攻撃してきた相手を見ると……何故かゴスロリ服を着た懐かしのキーリさんがあわあわしながら立っていた。

畜生こんなところに伏兵が！！

さすが神の加護：E -

イベント発生ぷつりが半端ないです！！

そして悶え回っている僕をようやく発見したらしく胸毛というか存在が非常に異常に気持ち悪いミ・マドモワゼル通称スカロンがこちらに向かってきた。

あまりの気持ち悪さに吐き気がしたがどっかの恋姫の主人公（一作品目真・恋姫十無双）縛られた完遂者もよろしく！！）に比べたらきつとマシだと信じて我慢した。

「すいませ〜んこの娘まだ仕事になれてなくて」

クネクネと腰を揺らしながら謝ってきたが、それを無視できる程股間がダメージを受けていたのでorzポーズでライフを回復しながら返事をする。

「いえ不慮の事故です、お気になさらずに・・・」

股間をサワサワしようとしてくるスカロンの手を蹴り払いながらも
キーリさんに微笑みかける。

「あわわ〜本当にごめんなさい！本当に私ドジでノロマで不細工
で仕事もろくに出来ないし迷子になるしあわわ〜もう生きてる価値
なんか」

なんか暴走し始めるキーリさんを放置してセクハラしてくるスカロ
ンとバトルしながら話す。

「どうして彼女はここで働いてるんですか？チッ」

ローキックを外した。

「元々トリステイン魔法学院で働くため学院に向かっていたらしい
んだけど、休憩がてらたまたま近くにあったここによって食事をし
たらお財布を落として文無し。お代を払えないなら働いて払いなさ
い！ということよ。甘いわ！！」

さらに脇腹への蹴りも弾かれた。くっ固い！

「成る程・・・しにさらせ!」

全力で側頭部へと蹴りかける。

「だけどここの娘働き慣れてはいるんだけど、たまに大きなミスをやらかしてね。その度に皿を割ったり店の物を壊すからなかなか代金がゼロにならないのよ～～～。ハアツ!」

どこぞの魔王だ!!人の渾身の蹴りを気で防ぐなよ!ちつまずい奴の魔手が僕のリトルサンシャインに!?

597

「それは大変ですね。というか僕トリスティン魔法学院に勤めているので代金立て替えて連れて行きましょうか?危なっ!」

奴の魔手を右手で間一髪弾き、そのまま左手で奴の肩を狙う。

「あら、それは助かるわ。ただ今日一日だけ待ってくれるかしら?ぬんっ!」

何！？残像だと？！・・・後ろかつ！！

「構いませんよ、なら暇なので皿洗いでもさせてください。甘い！」

後ろ回し蹴りだ今度こそ・・・

「あらさらに助かるわ。ならお願いするわ~~~~ん！ふっ我が拳に触れぬものなし！」

僕の後ろ回し蹴りをうけそのまま股間に手を伸ばされ・・・

シクシクもうお嫁にいけない、汚されちゃった。

無理矢理行為をされた村娘のような虚ろな眼差しでほっけていると、後頭部を叩かれた。

「仕事してくれよ」

と活発そうな女の子が腰に手を置き仁王立ちをしていた。

「私はジェシカ。あんたの面倒をみるよう頼まれたんだが・・・さ
っきのパパとの戦いを見たら必要ないと思うけどね」

何故か呆れたような顔で見られているので、笑顔を浮かべて

「なんとなく物の位置は分かるので手伝わなくても大丈夫ですよ」

やんわり断ったが

「んん〜やっぱり心配だから手伝うよ」

と優しく微笑まれ手伝ってくれようとするので微笑みかえし

「ありがとうございます。優しいですね」

と言つと何故か頬を染めて

「当たり前だよ、店長の娘なんだからね!! さっ仕事仕事」

と強引に押し切られてしまう。頬を染めた顔は可愛かったのに……

なんだかんだで皿洗いの仕事を続ける僕であった。

《後編に続く》

えっちょっと頑張って書き終わらせるよ作者!!

……………。

《続く》

おiiiiiiii!!

第2章3話：増加するイレギュラー（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

何故かスカロンが最強にWWW

後編もお楽しみに

実はまだ作ってないけど汗

謝罪（前書き）

誠に勝手ながら体調不良のため今日はお休みさせていただきます

あとがきにて理由をお話しますが

暇つぶしにオチナン小話をどうぞ

謝罪

この会話は昔

とある駅に現れた革ジャンの青年と学ラン坊主のお話し
駅ベンチにて

青年は大股開いて上を見ているのにたいして
坊主は携帯をいじり中

「なあ」

「ああ？」

「お前のフォルダの意味が分からないんだけど」

「だから中身によって分別してるんだって」

「お前……青春とかネタとか人妻とか分けんなよ」

「いや分けた方が見やすいだろ」

「フォルダが50以上あつたら逆に見にくいから」

「人から借りとしてよくそんなことが言えるな」

「愛してる」

「死ねば？」

「つてかINNAって何？」

「INAZUMAさん」

「あああの人ね」

「よくな？」

「うゝんあんま中身覚えてない」

「あれは神だよ」

「まじか！？楽しみだな」

「ああ」

「動画はないの？」

「動画とるのタルいから取ってない。つうか著作権あつてmicr
OSDに移動できないやつしかない」

「ギャルのとか見たかったのに」
「ギャルとかないわ」
「お前人生の8割は損してるわ」
「いや肌茶色とか受け入れられない」
「年上とか最高じゃん」
「いやあ確かに年上は最高だけどギャルはない」
「ああ可哀想」
「まあまず女子高生好きじゃないし」
「お前今なんて言った？」
「女子高生が好きじゃない」
「お前生きてる意味があるのか」
「そんなお前は温暖化の原因だから死ね」
「女子高生嫌いとかダメだめじゃん！！」
「ダメだね」
「俺なんか女子高生って聞くだけでムラムラするのに」
「それはただの変態だから……お前は足フェチだからスカートならなんでもいいんだろ？」
「いや違うっ！！制服のスカートとソックスの間のラインが大事なんだっ！！」
「ああ……ニーソックスなら分からんでもないが」
「でも現実にニーソックス似合う女の子いなくね？」
「大和撫子がいないのと一緒にだね」
「まあ現実から逃げちゃダメだね」
「最初から現実なんざ信じてないし」
「なにそのひねくれ具合」
「親の教育の賜物だよ」
「お前なんか児童ポルノ規制法で捕まっちゃダメ」
「いやロリコンじゃないし」
「関係ないだろ……ああ今度の高校生たちは可哀想だな」
「がんばれ性少年」

「なにうまくいってんの」

「コピー終わった？」

「まだ……多すぎる」

「んまあ俺の魂の結晶だから」

しょうもない

謝罪（後書き）

体調不良の原因の一つ筋肉痛

ボタンが押せませんorz

ちなみに今回の文は昔書いた実話（笑

そして体調不良の原因二つ目

酔っ払った友達に茂みに引きずり込まれ足に枝が刺さったから

ちなみに次の日まで刺さり放し

血が止まらない（泣

で最後は結局

二日酔いorz

もう酒飲むの辞めよう

第2章4話：前後編（前書き）

グダグダと・・・ああクオリティーが下がってるよ！！

クオリティーあげるにはやっぱりオツパイがいっぱいなきや駄目なのか！？

所詮乳好きの僕には尻については語れないというのか！？

畜生！！

二日酔いだぜ！！

あれ？

誤字脱字は報告お願いします

第2章4話：前後編

「でなんで封印をとめるんだ幼女？」

「うむ実はな、元タイレギュラーだったお前さんの登場でかなり物語が変わってしまったんじゃが……更なる問題が発生したのじゃ」

「やっぱり物語変わったのかorz……でどんな問題？」

「バロールが召喚されたことによって周囲の環境にある影響が発生し、本来この世界にはない異常が生まれてしまったんじゃ……それをお前さんに治めて貰いたいのじゃ」

「異常っていうのは？僕と幼女の仲じゃないかいくらでも引き受けるよ」

「我が召喚されたことにより我から発せられた魔力を吸収してしまっただろっ」

「うむ、そやつらは異形を身に宿しとある集団を作っているその名は……」

.....

グダグダと皿を洗いつづける僕

暇ですね

暇すぎたのでお客様の会話を聞くことにしました。

「馬鹿野郎、ニーソックスこそが始祖様が許された唯一の絶対なんだよ」

「馬鹿めガーターベルトに決まってるだろう」

「はっこれだから素人はストッキングに決まってるだろうが!」

「いいや素足だね」

「「「「ああん!? やんのかコラ!?!」」」」

そんな僕はニーソックスの君を応援します。

次は・・・

「あそこはルルたん×ロロが」

「違うわよ〜んルルたん×スザクたんよ」

「なにいつてるのよアレは「ズキューン」だからいいのよ!」

「何言っちゃってるのよ受けにまわ「ドキューンバキューンズド」

ン」だからいいのよ!~!」

「なんだと?やんのかゴリア!~?」「」

アアアア~~~~~(。(。アアアアキコエナイ

マッチョな漢女おとめの言うことなんか聞こえないし認められない。

というか他作品に浸出してこないでください!!
早く恋姫の世界に帰れよ!

そんなタンーガンダムみたいな髭のやつと禪にモミアゲだけミツ
アミの変態は見たかないんですよ!!

あまりの気持ち悪さにダメージを負い毒状態のように視界が白く点
滅する中、辺りを見回し癒しもといフリフリ振られるリリカルな少
女たちのお尻を眺めていると.....店内に下卑た声が響く

耳を澄ませて聞いてみると

「もつこの国は駄目だな！」

「ああ！そろそろガリアかアルビオンに亡命した方がいいな」

「そうだな！野蛮なゲルマニアとこの国じゃなきゃどこでもいい」

「「ゲラゲラ」」

非常に気持ち悪い笑い方をする肥満体型な二人組のオッサンがいた片や髭を生やし片や眼鏡をかけているがどちらにしろ会話の中身は下卑ている。

「アルビオンと言えば『魔法』を覚えているか？」

「ああユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスだろ？あのエセ英雄の」

『魔法』様のお話になったのでかなり興味をもちさらに聞き耳をたてると

「クツクツ何が救国の英雄なんだ？まったく笑わせてくれる」

「ハツハハ八確かに！何が魔神だ！あんなの自作自演に決まっている！どうせ『魔法』は自分で起こした爆発に巻き込まれて死んだだけだろう！！」

「違うない！アツハハハハ！それに魔神なんか我々にかかれば屁でもないだろうな！」

「まったくだ！」

と周囲の反応を気にせずシロシロと自己発電な会話を勤しむ二人組

周りはかなり嫌そうな顔をしているが二人組が腰に杖をぶら下げているのを見て文句を言えずにいる。

まあ正直な話ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスが馬鹿にされようがどうでもいい。ただなんとなく魔神まで否定されるとあの時死んだ人々が嘘になってしまいう気がして若干いらつく………ということだ

『もう一回頭れますかバロたん？』

『何がたんだ！！この愚か者！心にも思っていないことをぬかすな！』

『そりゃあそうでしょー一応僕は君が関係ない人々を殺したことを怒ってますからね。二度とでてくんなこのドM！ぐらいには思ってますよ』

『くっ我はドMではない！ただ痛いのが好きなだけだ！』

『人はそれをドMと呼ぶ』

『そんな風に責めるな！……興奮するじゃないか、ハアハア（*、；）』

『……………』

『（*、；）……………（はっ！？ゴホンゴホン……それよりアレは放っておいていいのか？』

なんか本格的に解放ちたくなってきた……………

『アレとは？』

『目の前のアレじゃ』

脳内で変態なバロたん与会話していたため前方不注意になっていたが

ズドン！！

と何かが発発するような音を聞き慌てて前を見ると、そこには……

もうもうと立ち込める煙というか土埃の中壁に突き刺さりピクピクとわりとヤバい感じに震えるオッサンと……まるで何かを殴り振り抜いたかのように片足をあげ右の拳を突き出したキーリさんだった。

あれは僕が魔力で身体能力を底上げしたときと同じ威力だなあ〜とほのぼのとしつつも内心キーリさんの意外な怪力にビビり先程からまともに皿が持てずにパツリンパツリンと割り続けている次第であります。

ヤベエーヤベエよ母さん母上お母様

冷や汗が止まらない

(((。°。;)))

あんな娘をからかっていたのか……命懸けでしたよ僕

知らない間に命綱なしのバンジージャンプをしていたことに本気で怯えキーリさんを眺めているとキーリさんは不意に自然体（力を抜き真っ直ぐ立った状態）になり深呼吸をして叫ぶ。

「私のご主人様を馬鹿にしてんじゃねえーっ!!」

キーリさん口調！

「私はあの人に仕えていた事を今でも誇りに思っている！そんなあの人を貴方たちのような薄汚いゴミクズに汚されたくはない!!」

キーリさんは叫びともに裂帛の気合いを込めた殺気を放つ

残っていたやつは冷や汗を垂らしながらも杖を抜きキーリ様に向ける。

「きつきゅ給仕ごときに貴族の何が分かる!!」

あからさまに震えながら杖を向けているのであらぬ方向に杖がいたりきたりしている。

「あの人は決して私たちを馬鹿にしたりはしなかった！！それだけで貴方と違って優しいということはすぐに分かる！」

「だっ黙れー！ーっ！！！」

キーン様の言葉にビビりながら逆上して魔法を放とうとするが……
………すでに遅い。

限界まで肉体を魔力で強化し人間が反応出来ないスピードですれ違い、そしてその場には………

セーラー服を着てネコミミをつけたオッサンが立っていた……
気持が悪いオエツ
もちろん杖は没収済み……何より杖が短くて腹が出てるのが尚気持が悪い。

「あっ？」

オッサンが混乱している間に近づき左目の包帯だけをずらして包帯の隙間からオッサンを睨みギアスを発動させる。

「……………の名において命ずる。貴様の名前はミルなんだ。今日から一生語尾にニヨをつけてその姿で生活している。」

「イエス、ユア・マジエステイ」

虚ろな瞳に鳥が羽ばたくような紋様を浮かべ敬礼するミルたん（
中年：ネコミミ装備）

さらに僕は大声で叫ぶ

「見てくれ諸君！ここにいるオッサンと横にいる女の子どちらが可愛い？」

僕の言葉に疑問を感じつつも大声で返してくれるノリのいい客たち

「「「「女の子だ!!」「「「「

「なら正義はどちらにある!?!?」

ようやく僕の言葉の意味に気づき歓声をあげる。

「「「「女の子だ!!」「「「「

「可愛いは?」

「「「「ジャスティス!!」「「「「

「なら可愛くないオッサンは?」

「「「「ギルティー!!」「「「「

「では後はスカロンさんに任せよう！」

「「「「おう！」「」「」

その言葉とともに何処からともなく現れたスカロンさんと不愉快な仲間たち（先程何かについて語っていた人たち）

「あら結構好みよ〜ん」

そう言つて状況が分からず混乱しているミルたん（・中年：ネコミミ装備）を抱え壁に突っ込んでいる憐れな子羊イケミエを舌なめずりしながら何処かに連れていった……。何処から「助けてニヨ〜っ！！ドライバーとドライバーは組み合わせられないニヨ！！」とか聞こえたけど気のせいだろう。

こうして「可愛いはジャスティス」と叫ぶ集団と共に盛り上がりキーリさんを胴上げしてから仕事を終え無事に学院への道のりを終えた。

帰った後マチルダ姉さんに香水の匂いが体中についていることについてみっちりO H A N A S I Iさせられたが………生き残っただけましなのだ。

ああ畜生今日も空が青いです。

.....

ところ変わって場所も分からぬどこかで向き合う二つの影

紫色の髪を持った三人の女は真剣な赴きで話し合う。

「何かわかりましたか？」

「ええあの事件にはレコン・キスタという組織が関わっていたであります。彼らはアルビオンに戦争の火種をもたらすために主を利用

したであります」

「そう……なら許さない。彼らにも協力してもらおう」

長い髪の女は見て取れるような憎悪を目に宿し今は見えない敵を睨む

そして三人は手を取り合い誓う……今は亡き主との優しい思い出を思い出しながら、それを奪った敵への憎しみを募らせて

「」「我らは主のために……」「」

そして短髪の女が笑うように言う。

「さあ行きましょう。我ら『ウィユラポール』が敵を滅殺しに……」

そしてその場から煙のように一瞬で消えた……その場に残るのはただ狂気のみ

《 続 》

第2章4話：前回後編（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

なんかリリカルなのはSSを書いてみたい今日この頃
ちなみに原作は見てないwww

なんかリリカルでマジカルな感じでいけばいけるかな？

ちなみに主人公はユウキくんの予定だけど・・・あの世界だとユウキがただのロリコン、ペド野郎にしか見えなくなるな。

627

うん止めとこう

Fateの世界とかも面白そうですよね

実際英雄にはなってますから呼び出し可能なわけですし

うん妄想が止まらない！！

次回もお楽しみに

第2章5話・釣りって何が釣れるかが分からないのが辛い(前書き)

ようやく伏線一つ回収

というか結構忘れかけてたorz

またグダグダに

誤字脱字は報告お願いします

第2章5話・釣りって何が釣れるかが分からないのが辛い

「でその『ウイユ ラポール』をどうすればいいんだ？」

「まあとりあえず原作開始、つまりサイトが来るまですることはないからそれまで楽しむがいいのじゃー！」

「じゃあ早く帰してくれ、これからアンリエッタとキシギシアンアンを高橋名人も真っ青なぐらい続けるんだから」

「16つて人間のする数字じゃない気がするんじゃない？」

「愛で人は簡単に奇跡を起こせるらしいぞ？作者が悶えながら書いてたし」

「恥ずかしいなら書かなければいいのじゃ」

.....うるせえ

「じゃあ早く現実世界に戻してくれよ」カクカク

「腰振るのをやめろっ!! いやその.....悪いんじやが.....」

「なんだ？」カクカク

「夜のお勤めの練習はもういいのじゃ.....うん正直言つて無事に戻すのは無理」

「.....なんでさ」

冷たい現実に絶望した!!

- - - - -

どうもユウキ・エン・・・間違えましたリーブです。

今ミカサと一緒に学院付近の森にある湖で釣りをしているとこゝろです。

中々釣れませんが釣りは待つのが醍醐味ですからね、待つのも楽しみつつですよ。

10分経過

「ミカサはなかなか釣れないことにミカサなりの自己主張を持って抗議してみる」

「10分という時はシエスタのパンツの色を想像しながら待つんですよ」

「・・・ペッ」

どうやらミカサなりのヒエラルキがあるらしく

二時間経過

「釣れないんですけどーっ！っ！っ！」

「おかしいでしょ！？二時間ですよ！？二時間アホみたいに釣り糸垂らしたのにピクリとも動かねえじゃねえか！！」

「イライラする！！」

「畜生こつなつたら・・・ミカサ！変身を解いてナメた魚どもを急襲しろ！！」

「ミカサは了解した！！」

暴走から10分経過

時以外に使用するのは止めましょう)

そして気絶して浮き上がった魚たちをリーブくん同様若干ヤバ気な笑みを浮かべたミカサが陸地へと運んでいく。

「見ろ！！魚がゴミのようだ！バルス！」

傍から見たら狂ったようにしか見えない二人だった。

暴走から30分経過

二人は暗いオーラを浮かべながら普通に湖に糸を垂らし釣りをしている……気づいたのである。互いに今何をどんなテンションで行っていたのかを

まるで中二にとり憑かれたかのようにアホなことをしていたので正気に戻ったときのギャップが激しかったようだ。

リーブはブツブツと「中学生の時の黒歴史が復活しかけていた」などと反省というか落ち込んでいる。

そして二人が茫然自失とする中ミカサの竿に反応があった。

「ようやくキタ（。°。°）！！とミカサは2チャンネル風に喜びの歓声をあげてみたり」

「君絶対転生してるでしょ！？バルスとか普通言わないよ!？」

他愛のない漫才を続けながらも竿を引つ張り糸を巻き取り続ける。

「なかなかつれないし重いから大物だとミカサは推測しミカサは喜んでみたり」

そしてミカサが思い切り釣り上げたのは……上半身が河童、下半身が人魚というよく分からない生物だった。だがよく見ると上半身にはジツパーがついており素材がシルクぽっ

かった。

「ちょっとツリバリが痛いよ!?結構口に突き刺さってるから!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

喋りやがりました。

「痛いから外し・・・・・・・・ん?あれこの魔力は・・・・ユウ」多連
脚!』ペポラっ!？」

一秒間に四発の蹴りを繰り出しミカサの釣竿に付いていた奇っ怪な
生物を蹴り飛ばす。

「まさか?今のはあの人か!?確かに途中で化け物でもいいから釣
れるとは言ったけどアレはないです!!というかナニアレ?ケルピ
ー!？」

ケルピー:スコットランドの川や湖で目撃される、美しい馬の姿

をした妖精。

人間に対して悪意を恐ろしい水の精で、キラキラした目と絹のように美しい黒か灰色の毛並みをもつ馬の姿をしている。

姿を変えることが得意なので、ボロボロの服を着た老人になることもあれば、ハンサムな青年の姿、四足の動物なら何にでもなれるという話もあり、どんな姿のときにも、髪の毛や毛に水草をからませているので、水の精だとわかるそうだ。

人間の姿をしている場合には、馬に乗っている人の後ろに飛び乗って脅かしたり、若い女性には恋人のような姿で現れ、水の中に誘いこむ。

馬の姿でいるときも、湖畔で迷った若者や子どもに近づいて、背中に乗せたが最後、水中の一番深いところに引きずり込んで、溺れさせ、すぐに食べてしまふとか・・・肝臓だけは食べずに、岸に残しておくそうだ。

朝になると水面に内臓が浮かんでいるなんていう怖い話もあり、また川や湖の水かさを増して、ちよつとした洪水を起こし、安全な場所を歩いていたはずの旅人を、水中に沈ませた話もある。

とりあえず逃げるか・・・・・・・・

「ミカサ撤たい・・・・・・・・」

ミカサに逃げることを促そうとしたら先程のエセケルピーに湖から手を伸ばされ足首を捕まったミカサがいた・・・・・・・・オライ

「全力しっ「逃げるな！！とミカサは恐怖のせいで涙目になりながらもミカサは道連れにするためにリーブの腕を掴んでみたり」離せ！！畜生！そんな害意の固まりみたいなやつと一緒に居たくないんだっ！！」

リーブは取り乱しミカサに捕まれた腕を引きはがそうとするがミカサは抱きしめるようにリーブの腕を取り、離れようとしなない。そしてエセケルピーは陸地に上がりリーブの前にたちリーブの肩を掴み笑いかける。

「久しぶりだなユウ」色々あって今はリーブなんでリーブって呼んでください」リーブくん！！」

「……………ええ誠に非常に無敵に素敵に残念なことにお久しぶりです、大叔父さん」

リーブがすごく嫌そうな顔をしながら返事をする大叔父と呼ばれた人物は上半身に着いていたジツパーを下ろし河童スーツを脱ぎ緑色の髪を後ろに流しわりとカッコイイ顔を晒した。

そしてそのまま笑顔を浮かべ足を掴み吊したままのミカサに挨拶をする。

「やあどうもポルネサスです。またはポルネサス・ド・アルザスと言ってデンベール・ド・アルザスの祖父で一応人魚の親玉なんかやっています」

《続く》

第2章5話：釣りって何が釣れるかが分からないのが辛い（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

会話の中身から分かるように実はデンコちゃんとユウキくんは親戚です。

まあ互いに会ったのはあの場が初めてですが、ちゃんと自己紹介のときにユウキくんが反応を示しています（14話参照）

もともと外伝でデンベールの正体に触れネルフと仲良くなるというなんて瀬戸の花嫁って？感じのお話しにしたかったんですが

伏線投げっぱだったんで拾っておきました。

なんかはっちゃけてきた気がしますますが気のせいでしょう

次回もお楽しみに

第2章6話：大叔父さんいらなから省略で（前書き）

趣向を変えてみた！！

だけど失敗くさいorz

今回はわりとシリアス

誤字脱字は報告お願いします

第2章6話：大叔父さんいらさないから省略で

「いやいや待てよ幼女、笑えないジョークにジョニーさんも真つ青
だぜ？H A H A H A」

「落ち着くのじゃ。一応お前さんにバロールを封印しないと外の世
界が崩壊してお前さんを戻すどころの騒ぎではないのじゃ」

「ぐっ」

「封印すること自体は我の力で簡単なんじゃが・・・バロールは一
応神。そんな神を体内に封印するとなるとお前さんの体に相当な影
響が出てしまうのじゃ・・・それでも構わんか？」

「なんでもいいから封印して早くアンリエッタとエッチするんだ！
！ようやく違う意味での魔法使いから決別して賢者にならなくて済
むんだ！！ありがとう神様！」

「多分三ヶ月ぐらい行動出来なくなると思っけど」

「あ？」

「じゃあそついうことじゃから！ハイ封印完了！バイビー！！」

「なっ！？ちよっいつの間に！？んっなんだこの穴！？吸い込まれてる？！畜生呪われる！！」

.....

どうもユウキ・エンド・・・間違えましたリーブくんです。
今魚類の王様と二人仲良く釣り糸を垂らしてた釣りをしているとこ
ろです。

「へえ懐かしい魔力を水を伝って感じたからここに？」

「うん、私クラスになると雨粒一つあればそこを目標に水を伝って
移動できるからね」

「へえ」

「でなんでリーブくんはあんなに水中に魔力を打ち込んだのかな？」

「ああと鍛練です鍛練。決して魚とか乱獲してませんから」

「リーブ、この大量の魚の山はどうするの」とミカサはミカサなりの優しさ「黙ってなさい！！今魚類の王様とお話ししてるんだから！！あつ決して乱獲とかしてないんで・・・気にしないでください」ブーブーとミカサは不満を表してみる「

「ハツハハハハ八元気な娘だね。いやああいう娘の卵に赤ちゃんの素を振り掛けたいよね」

「大叔父さんそれは犯罪ですから。あと一応ハーピーなんで食物連鎖的には食われるのはそちらかと・・・さらに突っ込むなら魚類の交尾の仕方と違いますから」

「うん流れるようなツツ」三間違いないね！いやあ死んだと孫娘から聞いてたのにね！」

「ああうん色んな意味で死んでるんで誰にも言わないでください」

「分かってるさ私と君の仲じゃないか！！」

「竜宮2丁目のオカマバーに拉致して見捨てて帰る仲ですもんね」

「ハツハハハハ過去の過ちを気にしては前に進めないよ？私を見たまえ過去に作った過ち（子供）は棄てて新しい未来（子供）を作ろうと頑張っているよ！！」

「それは認知しましょうね！！色々問題ですから！あとあんた愛人作りすぎだから！そういうとこだけどうして魚なの！？振り掛ければいいからって作りすぎだから！！」

「ハツハハハハ八気にしない気にしない、で今日は大事な話があるって来たんだ」

「……また無精卵と有精卵の分別とかにくりだされるのは勘弁です」

「そうじゃない。今回はアトランティス王、ポルネサスとして来た」

「ポセイドンの神格を持つあなたがわざわざ……」

「うむ。我々人魚族もといアトランティスに属するものは今後起きる人間同士の争いを関知せず、介入もしない。また巻き込まれそうになった場合のみ自衛のために戦うことをここにアトランティス王ポルネサスの名において宣言する！！」

「……成る程争いが起きることをそちらは察知したと」

「ああだからこそ君に伝えにきた」

「僕は死人ですからね、誰にも伝えませんよ？」

「むっそれは困ったな。人間の中で一番頼れるのは君だったんだが……」

「それにしても思いきったことをしますね。これじゃあデンベルを見捨てるって言ってるようなもんじゃないですか」

「可愛い孫娘だがあの娘は人間と共に歩むことを選んだのだ。それに身内のために一族を争いに巻き込み危険に曝すようなことは出来ないのだよ……私は王なのだから」

「……王の選択ってやつですか。それを告げて僕にデンベルを守らせようか？」

「そんなことは考えてはいないさ。あの娘にはすでに騎士がいるよ
うだからね」

「あああのヘタレですか・・・まああいつなら僕が鍛えたから大丈夫ですよ」

「そうか！私の目に狂いはなかったか！！」

「ええあいつは人から言われたことを想像し理解することが異常に上手いんです。だから今頃は多分ユニコーン隊の副隊長と一対一で戦えるぐらいにはなってるはずですよ」

「それは嬉しい誤算だな・・・それにしてもいつまでそうしているつもりかな『魔眼王』？」

「・・・・・・・・・・。」

「理解しているのだろうか？英雄が去りこの国が一瞬で腐ってしまったのを？すでに立て直しが効くか分からない状況まで民たちの不満は高まっているぞ？」

「ギリツ………死人は何も見えないし聞こえません。例え好きだった人が何をしようとも………死人は気づいちゃいけないんです」

「………そうか。腑抜けたな英雄。私はもう帰るよ」

「二度と来るなエセ海神」

ポツチャン

「………死人はただ黙して何もしなければいいんだ」

《
続
》

第2章6話：大叔父さんいらなから省略で（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

会話文中心にして見たんですが………なんかイマイチですね

もう少し地の文を書いた方がよかったですな

次回もお楽しみに

ひつまぶし・・・間違えた暇潰し！もしもユウキくんがサーヴァントとしてリ

200万PV記念

とつか作りたかったWWW

皆さんが読みたいと言われたら続編を作る予定です。

ひつまぶし・・・間違えた暇潰し！もしもユウキくんがサーヴァントとしてリ

side ????

私は今身動きのとれないよう手足を縛られ喋れないよう口にさるぐつわをされてどこかの廃工場の柱に縛りつけられています。

床には何か落書きなようなものがありあまり綺麗とは言えなかった。

どうしてこんなことになっちゃったんだろう？

ただ一人で帰ってただけなのに・・・

お父さんがケガしてみんなが大変だからメイクをかけないようガンバってたのに・・・

どうしてジャマするの！？

私はいい子になろうとガンバっていたことをジャマされ隠しきれな

い苛立ちを感じると共に悲しくなり、涙がこぼれそうになるのを我慢し睨むように私をここにさらってきた人達を見据える。

「おいおいそんな目で見るなよお嬢ちゃんクツクツ興奮するじゃないか！」

「ちょっとお前ロリコンかよ！洒落にならないな」

ゲラゲラ

男たちは余裕たっぷりな様子で私を馬鹿にして仲間同士でお喋りを楽しんでいる……私に出来ることなんてないのかな？

「それにしても本当にコイツはあの野郎に似ていらつく顔してるな」

男の一人が私に近づき髪を引っ張り頭をもちあげ私の顔を食い入るようにつめてくる。男が憎しみを籠めた眼差して見てくるのに対して私は睨み返すことしか出来なかった。

男たちの話をきいたかぎりではお父さんに仕事のジャマをされた腹いせに私を誘拐したらしい……今みんなが大変なときなのに！！

私はいいい子でいなきゃいけないのに！！

苛立ちを隠しきれずさらに男をニラみつけると男は舌打ちをして私の頬を叩いた。

「チツ生意気なツラしやがって、殺してやろうか？」

今の一撃で口の中が切れてしまったのか私の口からさるぐつわの間を通り血が地面に垂れた。

その瞬間、地面の落書きが金色に輝き出し何かが聞こえる。

それは……

『聖なるかな星なるかな』

悲しむ老人のような声だった。

金色の輝きが増していく

『愚なる世界が仕立てし英雄よ』

嘆くような子供の声だった。

輝きは脈動し大気が反応していく

『世界に望まれしはただの仄暗い絶望のみ』

哀れむような男性の声だった。

輝きはさらに光を増し目をつぶらなければならぬ強さになっていく

『されど神に逆らいし反逆者は絶望を焼き払い希望を渴望した』

苦しむような女性の声だった。

輝きはさらなる脈動を秘め今にも何かが生まれそうだった。

『七天を越え、頭れたまえ』

狂ったような笑い声が重なる。

脈動が止まり輝きが止んでいく

『堕ちろ、堕ちろ、堕ちろ、堕ちろ！！最大なる咎人よ！輪廻の果て、抑止の輪よりいでよ！』

全ての負の感情を籠めた慟哭のような声が誰とも分からない声で発せられる。

そして輝きは脈動ともに再び活動し一際強い光が発生したとき

私の目の前に何かが現れた。

「サーヴァント、ミューティナー。召喚に従い参上した。問おう、あなたが私のマスターか？」

私の目の前にいたのは腕を拘束衣で縛られ目を包帯でグルグル巻きにしたよく分からない男の人だった。

「ん？あれ登場シーンミスりましたか僕？とりあえず君が呼んだんですよね？」

男の人は私に困ったような苦笑いを浮かべながら問い掛けてくるが、私は今口を塞がれていて喋れなかった。

「いやあ英雄になったばっかりですからちょっと格好つけてみたんですが、失敗だったよですね」

周りの状況を気にせず（見えないから当然か）男の人は自分の考えに浸っていた……しかし私を誘拐した男たちはそうではなく不思議な現象に啞然としながらもこちらを気にしない男の人に話し掛ける。

「だっ誰だ、てめえ!？」

「だから僕はミューティナーですって……ん？誰ですかあなたたちは？ああもしかしてこの状況は誘拐だったんですか……マスターがこの歳ですでに変態の趣向というか極みに到っていたのかと内心焦っていたんですが、杞憂だったみたいですね」

「何グダグダ言っただやがる!？」

男たちは持っていた拳銃を取り出し男の人に向ける。
危ない逃げて!!

声に出そうとするもののさるべつわがあるせいでうまく喋れない。

「フゲッフゲッ！」

「えっ実は縛られてるのが楽しかった？」

「フガウ!!！」

「すみませんマスターの趣向に口を出す気はないので……
今度から気をつけます」

男の人はシヨックをうけたように私から距離をとり、男たちの方に近づいていく

引かないでよ!!！」

思わずツッコミそうになる中男たちの一人が男の人の後頭部に銃の先を当てる。

「おいてめえなにもんだ？」

「僕はミューティナー、反逆者です……で何の用ですか？」

男の人が銃を当てられたまま後ろを向き銃口が彼の口元にきた瞬間、その場の空気が変わった……今までのどこかふざけたような空気は消え去り、すぐに爆発するような首筋に鋭い刃物をあてられたような濃密な気配がその場を支配する。

「ひっ……!？」

そして銃を当てていた男はその空気を発している男の人に怯え引き金を引いた。

バーンっ!!

発砲音と共に男の人は倒れて、発砲した男は驚き腰を抜かしている。

私は発砲音に怯えて目を閉じたが男の人が倒れた音を聞き目を開けてしまう。

「ハアハア・・・何だったんだコイツは!？」

男は怯えたように手の平で顔を隠し倒れた男の人から座ったまま後退りして離れていく

「だからミューティナーだって言ってるじゃないですか」

場が固まった。

撃たれたはずの男の人は立ち上がり何かを口から吐き出す。

「いやあ歯で弾丸を受け止めようとしたら失敗して喉に直撃しちゃいました。さすがに英雄でも喉に弾丸を受けたら痛いんですね」

口から吐き出されたのは男の人が身に受けた鉛玉であった。
そして男の人はニヤニヤ笑いながらとんでもないことを言っている。

「さあてもう飽きたことですし、マスターも次の蠟燭プレイに移行
したいようですから……貴方たちは消えてください」

その声と共に男の人が掻き消えたように姿を消し、一瞬の間に男た
ちの後ろに回っていた。

「いやぁ絶好調ですね、封印がなきゃさらに最高なんですけど……」

再びふざけたような態度で私に近づいてくる。

まだ男たちが立っているのに！

疑問を感じた次の瞬間、男たちは崩れ落ち泡を吹きながら気絶して
いた。

・ ・ ・
どうやら男の人が倒したらしい、私には全く見えなかったが・ ・ ・

男の人は器用に足を使って私のさるぐつわと手足を縛っていた縄を解き、立たせてくれた。

私はあまりの急展開さについていけなくなりただ呆然とする中、男の人は悪戯っ子のような笑顔を浮かべて聞いてくる。

「もう一度問います。あなたが私のマスターですか？」

「えっあっ・ ・ ・たぶん」

よく分からないがうなずいておくことにした。

「そうですね・ ・ ・あなたの名前は？」

「あっ私の名前は高町なのです」

「リリカルなお名前ですね・・・結構笑えませんが」

男の人は私の名前を聞き何故か引き攣ったような笑みを浮かべてくる。

「あなたのお名前は？」

「僕はミュウティナーです。気安くミュウテって呼んでください」

「ミュウティナー？」

「はい、反逆者って意味です・・・これからよろしくお願いしますねマスター？」

こうして後々魔王と呼ばれる少女と魔眼を持った霸王は出会った。

《つづ……かない!!》

ひつまぶし・・・間違えた暇潰し！もしもユウキくんがサーヴァントとしてリ
お楽しみいただけたでしょうか？

というか早く本編書けて話しますが・・・まあ細かいことを気に
しては人間生きていけません

次回をお楽しみに

第2章7話：変態同盟（前書き）

なんかリリカルが異様に人気でしたね

今回はどうしようもなく下品です・・・・・・・・あぁいつもかWWW

誤字脱字は報告お願いします

第2章7話：変態同盟

「・・・見渡す・・・限り・・・木・・・というか森・・・ここ・・・どこやねん、というか痛い！なんか全身痛い！！全身を焼かれているような激痛が！」

『ああああ興奮する！ハアハアこの身体を弄られてるような感じがたまらない！！ああんもつと！もつと強く激しくー！ー！っ！！』

「頭の中から変態電波が！？というか痛い！痛すぎて無理！！あつ意識が・・・」

『ハアハア気絶したら快感が得られないだろうが！！早く起きて！もつとこの身に悶えるような痛みを！！』

「・・・知らない天井だ。・・・なんてベタなことを

言ってしまったんだ僕はorz」

「あのか大丈夫ですか？」

「なっ!?!? 貴女は、いや貴女様は!?!」

「キヤツ、なんでいきなり手を握るんですか？」

「エッチを前提に結婚して「吹き飛ばせ!」『アースハンド!』」ぐっは!?!?」

.....

どうもユウキ・エンドリ.....間違えましたリーブです。今オールドオスマンと一緒に景品を賭けたチエスをしているところですよ。

カッ

「どうしたんですか、爺ちゃん？そんな気難しいげな顔をして」

カッ

「何ちと可哀相な生徒がおってな、どうにかしてやりたいんじゃないが・
・・儂らではどうしようも出来んのだ」

カッ

「そうですね、ちなみに誰ですか？チエック」

カッ

「ミス・ヴァリエールじゃよ。．．．．．待った」

「ああヴァリエール嬢ですか．．．彼女は勤勉で生活態度もよく給
仕たちとの仲も良好、まさに貴族の鏡でいい娘ですよね。待ったは

なしですよ爺ちゃん」

「唯一魔法が使えないという点が彼女を苦しめているのじゃよ。．．．
．．．．．給仕たちの制服を変えていいよ」

「それは僕に言われてもどうしようもありません。しょうがありませんね、では戻します」

カッ

「何を言っておるか英雄のくせに．．．ほっ」

カッ

「英雄は死にました。またチェックです」

「ふうやれやれ．．．．．もう僕の負けだよ」

「ならこの姉さんの使用済下着は僕の「失礼します」「サッ」やあ姉さん今日も綺麗ですね」

「今何を隠したんですかリーブ？」

不審な挙動をした僕に訝るような目で疑問を提示してくるロングビル姉さん

「なんにも隠してないですよねオールドオスマン？」

「そうじゃ儂らはただチエスをしてただけじゃよミスロングビル」

さわさわ×2

僕とオールドオスマンは10を取るために1を犠牲にして姉さんのお尻を撫でまくる。

「そう！・・・ですかっ！！」

ロングビル姉さんはすぐにセクハラしてきた僕とオールドオスマンにスタンピングを敢行してくる・・・ふっこれで使用済パンティーについては忘れたでしょう。

「まったくこのエロガッパどもは！！」

僕たちに呆れながらもまるで止むことのないスタンピングのあめあられ・・・正直きついぜ！！

まあオールドオスマンは何かに目覚めそうなペルソナでいうと新しいコミュニティー目覚めそうな顔をしている。多分目覚めたコミュニティーは女王様とかだろっけど・・・

怒りが冷めたのかスタンピングを止めて僕らに向き直り色々と報告してくる・・・正直な話だれそれが問題を起こしているとか

面倒だから聞きたくないわけで

「今日の下着の色は黒でしたね、オールドオスマン。ナイスチョイスですよ姉さん」

「うむやはりミス・ロングビルには黒があうのう・・・しかし嫁の貰い手がのう」

「大丈夫ですよ姉さんは綺麗ですから！！そのセクシーなランジェリーで一気に畳み掛ければ野郎なんてイチコロです！！」

「何普通にセクハラしてるんですか！！この！！この！！だいたい結婚とかも大きなお世話です！！」

僕たちのナチュラルなセクハラに再び怒り狂い僕の『多連脚』にも勝るとも劣らない速さでスタンピングを繰り返してくる姉さん。

「大丈夫ですよ、もし行き遅れても僕が貰ってあげますから！！」

亀のように丸くなりながら再びセクハラ発言をすると何故か

ドンっ！！「げふっ！？何故儂に？」

オールドオスマンだけに止めを刺して真っ赤な顔でどっかに行ってしまった……そんなムカついたんですね？

姉さんの行動がよく分からず首を傾げているとオールドオスマンが魂の抜けそうな口から

「リア充死ね」とか言い放ってきた………というか異世界。

side オールドオスマン

今日の前で隠していたミス・ロングビルの下着を取り出しているこ

のリア充が学院に来たのは六ヶ月程前のことじゃった。

ミス・ロングビルから弟を一人雇って欲しいと言われ連れてこられたのがこいつじゃった。

僕はこいつが学院の門に入る瞬間から遠見の鏡を使い様子を窺っていたのじゃが……一言で言えばこいつは異常じゃった。

一応ミス・ロングビルの弟じゃからと思えもなしに内包している魔力を探ったらあまりの暗さ深さに恐怖した程じゃ、そして探った瞬間やつは遠見の鏡越しに僕を睨みつけて来た。

さらに僕に向かって中指を立てそのまま歩き出したのじゃが……
……つい僕は怖くなりとっさに魔法を放ってしまった。

それは避けたらミス・ロングビル当たるので避けることはしないだろうし、まず見えないじゃろうとたかをくくっていたのじゃが……
……甘かった。

やつは放たれた魔法を掴みとり、再びこちらに視線を向け今度は親

指で自分の首を掻き切るような動作をしたあと儂を指差してきた・・・まるで言外に殺すぞと言わんばかりに。

儂は内心死刑宣告を待つ囚人のように怯えながらも彼らの到着を待ち、そして彼らが学院長室に入ってきた。

ミス・ロングビルは先ほどのことには全く気づいておらず、ただ淡々と自分の弟の紹介をしてすぐに仕事場に連れていこうとしたが・・・やつが引き止め儂に話があるから外に出ていてくれと言いやつと二人きりになってしまった。

そしてやつは口を開いたかと思ったら先ほど放った魔法を儂の机に突き刺し不快げな顔していた。

「見えない程薄く尖った氷の槍で攻撃してくるとは厭らしい魔法だとは思いませんか、オールドオスマン？」

儂はその問い掛けにビビりながらも学院長として答えるしかなかっ

た。

「僕は学院の長として生徒を守る義務がある……お前さんのように危険そうな存在を近づけるわけにはいかんだ」

するとやつは途中までニヤニヤ笑っていたのが

「ご立派なことだが……僕の家族を巻き込むなよ」

一変し絶対零度のような視線で心臓が凍てつかんばかりに睨まれた。

射線上にミス・ロングビルがいたことはバレていたらしい。

冷や汗を垂らしながらもそれについては詫びたら……

「ならいいです」

とすぐに笑いだし、さすがにお世話になる相手その上怪しまれている相手に正体を言わないのはまずいと自らの正体を明かしてきた……

……まさかあの『陽光の英雄』とはのう。

内心呆れながらも他愛のないことを話して何故か気が合い、ミス・ロングビルには正体を言わないよう口止めをされ（口止め料代わりに下着の色、たまに下着を提供してくる）今に至るといっわけじゃ。

今は共同で透視魔法を制作しているんじやが、なかなか完成まで辿り着けん……。戦利品（下着）で英気を養って頑張るかのう。

《続く》

第2章7話：変態同盟（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

爺さんとリーブくんはただの変態ですねww

さあてリリカルはどうしようかな、作者は原作知識が微妙なので原作？ナニソレ？な展開になると思いますよ？

まあこれを完結させてから………終わんのかなこれ？

まあともかく

次回もお楽しみに

第2章8話：バレタヨ（前書き）

機工魔術師が面白かった！！

ヤバいですボロ泣き

××です！！

相変わらず原作？ナニソレ？的な話になってます。

誤字脱字は報告お願いします

第2章8話：バレタヨ

「なんなんだいコイツは！？急にテファに飛びついて！」

「落ち着いて姉さん！ーちょっとびっくりしたただけだからそんなにその人を蹴らないで」

「テファがそういうなら……」

「どうも初めまして私はティファニアよ。親しい人はテファって呼ぶわ」

「ふん、あたしはマチルダ」

「ええとすいません先程は取り乱しました。僕はユウキ……」

「そうユウキ・・・怪我は大丈夫？」

「いえわりとダメです。さっき何故動けたのかが疑問に感じるほど体中が痛いです・・・なんでティファニアは室内なのに帽子を被っているんですか？」

「っ・・・それは・・・」

「ティファニアがどんな存在であれ、命の恩人ですから気にしませんよ。それに帽子のせいでティファニアの可愛い顔が見えません」

「ううその・・・」

「テファが嫌がってるから止めてくれないかい？」

「違うの姉さん！・・・その・・・ユウキはエルフについてどう思う？怖いと思う？」

「全然、むしろ会った瞬間抱きしめたいです」

「「はあ？」」

「エルフだよ！？エルフ！！怖くないのかい！？」

「僕は他人の物差しで他人の善悪を決めたくはありません」

「・・・・・・・・分かったわ」

「テファ！？」

「私は・・・ハーフェルフなの・・・怖い？」

「キャッ」

「エツチを前提に結婚「テファから離れる!!」……………冗談
デスヨ」

「目が獲物を前にした狩人みたいだったんだけど」

……………

どうもユウキ・エンドリオ……………間違えましたリーブです。

今なんか知りませんが異様に重い木箱を運ばされているところですよ……………また余計なもの買ったんでしょうねコルベール先生が。

コンコン

「ミスタ・コルベール。貴方宛に宅配物が来ていますよ」

ノックしてコルベール先生を呼ぶとすぐに上機嫌な様子で部屋から飛び出してきた。

「やっと届きましたか！？いやあずっと待っていたんです」

すごい嬉しそうな顔してますね。こんな嬉しそうな顔をする時僕とか爺ちゃんなら中身はエロ本なんですが、コルベール先生だと見当がつきませんね……毛生え薬とかでしょうか？

内心失礼なことを考えながらも気になることはそのままにしない！それが僕のもっとうなので聞いてみることにした。

「何が届いたんですか？」

するとコルベール先生は悪戯っ子のような笑みを浮かべて楽しそうに

「新型のスキルニルです。高かったんですが、あまりにも素晴らしかったのでつい買ってしまいました」

「へえちなみにどこらへんが旧型と違うのですか？」

スキルニルとは

過去の魔法使いが作った土系統の魔法で作られた人形で、人間の血を与えるとその人間そっくりになる。外見のみならず記憶や仕草、身につけた技術まで再現できる。古代の王達はこれを用いて戦争ごっこに興じたらしい。

Wiki参照

今変な怪電波が流れたが気のせいだろう。

尋ねた瞬間コルベール先生は自慢のおもちやを説明する子供のような顔をして語り始める。

「従来のスキルニルは対象者の血液を取らなければ変化しなかったんですが、今回の新型は不完全ながらも対象者の髪や爪などで対象者に変化することが可能なんです！！いやぁガリアもすごいものを

作ったものです！一年ぐらい前から発売されていたんですが、中々手に入らなくてね。ガリアにいる知り合いに送ってもらったんですよ！」

ガリアねえ

胡散臭いけど大丈夫なんですかね？

「不完全と言っていましたけどどの程度まで複写できるんですか？」

「記憶などは8割、技術は5割ってところですかね」

ふむ結構完成度としては高い方ですね。
やれやれ面倒なものを作るもんですね。

内心ジョセフ王に呆れながらもいまだに語っているコルベール先生の話の話半分聞き流し、仕事に戻る。

仕事場に戻ると、どうやらコルベール先生が語っている間に休み時間になっていたらしく僕の部屋に戻ると何故か当たり前のようにキーリさんとミカサがいた……おい

ミカサにはちゃんと自室を与えたはずなんですが……

「二人とも何をしてるんですか？」

とつかミカサが異様にキーリさんを警戒している。

「ミカサはシエスタが構ってくれないからしょうがなくリーブを構いに来てみた。ミカサなりの甘えをみせてみる」

「上から目線なのが大層気に入りませんが、ちょうど暇だったんでいいですよ。でキーリさんは？」

「わっわわわ私も暇だったので暇つぶしにリーブさんとお話が出来た……」

「なるほど暇つぶしにはもってこいな僕というわけですね」

なんだろうコンビネーションでいじめられた気がする。ふて腐れて部屋の間で」の」の字を量産していると・・・・・・キーリさんを警戒（荒ぶる鷹のポーズ）しながらこちらにミカサが寄ってきた。

「ミカサは警戒しながらあの人から危険な匂いがするとミカサはリーブに報告をしてみる」

「それはセクシャル的な？」

「・・・・・・べっ」

そんなゴミを見るような目で見るなよ！！

「冗談はともかく人にそんなこと言っちゃいけませんよ」

ミカサを軽く窘めるとミカサは不思議そうに首を傾げながら

「あの人は『人間』じゃないでしょ？」

と真面目に返してくる。そしてそれを聞いたキーリさんは苦虫を潰したような顔でミカサを見ていた。

「コラ！失礼なことを言っちゃいけませんよ」

余計なことを言わないで下さい面倒くさい！！

「ミカサは頬を膨らませながらあの人はミカサと同類だと普通に言い張ってみる」

「えっ!?!」

ミカサの言葉にキーリさんは驚きこちらに近寄ってくる。

「ミカサちゃんも夢魔なの!？」

ハイ自爆しましたこの娘。さっきまでならまだごまかせたのに何やらかしてくれちゃってんでしょっか。

「違つとミカサは首を横にふり否定しながらミカサの変身を解き本来の姿に戻つてみる」

「ハーピーだったの!？」

ミカサが変身を解きハーピーになったことに驚き腰を抜かしてペタンと女の子座りをしてしまうキーリさん

「それにミカサは貴女と違って純粋な魔族だしとミカサは胸を張つて答えてみる」

「そんなことまで分かるの!？」

ミカサの爆弾発言にキーリさんは驚き慌てていたがミカサは首を横にふりながらなんでもないと言わんばかりに僕を指差し

「リーブが教えてくれた」

やりやがったこのアマー!!

「リーブが『そういえばキーリさん、昔は普通の人間だったのになんで今はサキユバスなんかになってんですかね?.....先祖帰りとかですか?』とか嫌そうなというか面倒くさそうな顔でミカサに語りかけてきたことをミカサは記憶している!!」

「えっ?昔って.....」

ミカサの更なる爆弾発言にキーリさんは硬直してギギギとなりそんな動作でこちらをふり向き

第2章8話：バレタヨ（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

さてはてなんかまた超展開になってきました

うん最後キーリさんにはらすつもりなかったんですがorz

とりあえず今リリカルは構想中です。

次回もお楽しみに

第2章9話：フェイントだと！？（前書き）

原作キャラが空気過ぎたので復活

ああリリカルがストーリーわからなすぎてかなりオリジナル展開になりそう……ああこの作品もか

原作にすら突入してないから本関係なさすぎるorz

誤字脱字は報告お願いします

第2章9話：フェイントだと!?

「それにしてもユウキは目が見えているの?」

「えっ普通にお目めは二つあるんですが?」

「目の周りに包帯巻いてて見えてるのかい?」

「………What?」

「何言ってるんだい?」

「えっちょっと包帯ってどどどどどどどですか!?!?」

「はい鏡よユウキ落ち着いて」

「ありがとうございます、包帯ってそんなバカな……。ああ？まじだ！ー！というか黒髪！？なんでバロールの外見になってんですか！？」

「キヤッどうしたのユウキ？落ち着いて！」

「はあ！？なんでナニコレ！？どこの殺人貴！？直死な感じの眼は持ってませんけど！！あれ！？というか魔眼が発動出来ない！？あつ三ヶ月行動できないってこういうことですか？！いやいやちよつとナニコレ！？このエンディング（初夜）の前に現れる隠しルート的なのは！！なんなんですか！？」

「落ち着けてー！！」

.....

「ユウ……。ユニコーン隊の方だったんですか！？」

んっ？

「そうとは知らずすみません!!私のが分かるってことはメイジの方ですよね!?!やっぱりユニコーン隊のメイジはすごいんですね!?!」

なんとなくキーリさんの発言に違和感を覚えながらも正体がバレなかったことに安堵し詳しい話を尋ねようとしたら……

コンコン

「リーブさんいらっしやいますか?」

シエスタが部屋を訪ねてきた、なんでも少し手伝って欲しいことがあるらしく僕を呼んだらしい。

シエスタが訪ねてきたので一旦話を打ち切りまた後で詳しい話を聞くことになったのだが、その時僕の精神は摩耗しており話を9割方聞き流していた……というか一厘すら入っていたか怪しい。

「新しい教師ですか？」

「はい、学院に新しく配属される先生の荷物をお部屋に運ぼうと思っただんですが。何故か皆さんがいらっしやらないので、ついリーブさんを頼って……」

シエスタは俯きながら本当に申し訳なさそうに言ってくるので

「可愛い女の子に頼ってもらえたら役得ですよ」

と笑顔で答えておいた。これを聞いたシエスタが俯きながら計画通りという黒い笑顔を浮かべてるとは知らずに……

本当に誰もいなかったので二人きりで物を運んでいると何故かシエスタが何回もバランスを崩して僕にぶつかってきた。

その度に豊富なアレを体に押し付けられその度に……南無大慈悲

救苦救難広大靈感 観世音菩薩 摩訶薩

南無仏 南無法 南無僧 南無救難観世音菩薩

妲姪とおん 伽羅伐た 伽羅伐た 伽羅伐た 伽羅伐た 伽羅伐た

娑婆訶

天羅神 地羅神 人離難 難離身 一切災殃化為塵

南無魔訶般若波羅蜜

一心不乱に白衣観世音経を唱え自らの本能というか野生を抑え続けた……耐えるたびにシエスタが舌打ちしていたような気がしたが気のせいだと信じたい。

さらにたまに暑いとか言つて胸元をパタパタと開きチラチラとピンク色の何かが見えている状態が続いた。一瞬だけルパン三世並に「不二子ちゃあ〜ん」とか言いながら服をキャストオフして飛び掛かりそうになつたが雀の涙よりも小さな理性が「このまま手を出したら終わるぞ!？」と言つた気がしたので拳を握りしめ爪が手の平に突き刺さり血を流しながらも耐えきつた……というかシエスタさん

僕が包帯しながらでも周りが見えることに気づいてますね!!

そんなこんなでライフポイントを著しく削られフラフラになりながら歩いていると柔らかい何かにぶつかった……マルトーさんのお腹ですか？

ふざけながら柔らかい物体に手を置くと

「あじっ？」

ピシッ

世界が凍りついた。

H a h a h a h a h a h a h a h a h a h a h a h a
h a h a h a h a h a h a h a h a h a h a h a h a
h a h a h a h a h a h a h a h a h a h a h a h a
h a h a h a h a h a h a h a h a h a h a h a h a

オチツケヨ僕

こんな辺鄙な学院にあの御方がおられるわけナイジャナイカ？

Heyボーイ
オチツケって

今のは幻聴ってヤツダヨ

ウンソウニキマツテル

作者ダツテ空気読むツテアイツ自称エアリーディング2級ダロ？

ナイナイナイナイアルワケナイツテマイリトルブラザー

「あらあら手を退けてくれないかしら」

あまりの恐怖にカチンコチンに固まりながらも柔らかい物体から離れ柔らかい物体が付属していた全体を見た………ジーザス

神も仏もないんだろつなあゝ自分の身に魔神宿してる身でどつこつ言えた義理じゃないけどさ

さすが神の加護：E -

笑えない現状に現実逃避し続けていると僕の目の前のトラウマメイカーさんが自己紹介をなさりました。

「私の名前はカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。貴方の名前は？」

原作だとカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌだったけど身体がよくなったからフォンテーヌ領は与えられなかったんですね。身体が治ってよかったですよねなどととめどなく現実逃避をし続けながらも

「リーブです」

無礼にならないように名前を言い、その場から逃げようとするとうかしたが………うんまあ分かってましたよ？どうせ僕はこういうもんなんだと、ある意味変な主人公補正が入ってますからね。こういうイベントから逃げられないんですよ。

逃げようとしたらガシッと腕を捕まれ

「あら？そんなの、そうだったの……悪いけど学院長室まで案内してくれないかしら？」

「スイマセン僕目暗（盲目）なもので詳しい案内トカハデキナイン
デスヨ」

冷や汗なんてもんじゃないですよ、お尻に氷柱をぶち込まれてるような恐怖を感じます。

それでもカトレアさんは突き抜けるというか色々突き通すような
笑顔を浮かべて僕に O N E G A I してきた……正しくは脅迫だろうな

「あらそうなの？……まあでもなんだか大丈夫そうな気がするわ」

「いえだから「お願いするわね」……イエスマム」

ホラネ！！
ヴァリエール家の女性には理屈とか一般常識って言うのは通用しないんですよ！！

というか僕の理論崩れましたね！！オツパイが大きな女性程常識的な心を持っていると思いましたがビ　チエツタやカトレアさんを見る限り違いますね！！

すでに色々諦めたような死んだ魚や腐った魚のような目で学院長室まで案内をして仕事に戻った。

学院長室に行くまで腕を組まれていたことは言うまでもない・・・
・・・うんきつとバレテル。あの人は直感：A++を装備してますからね！！

そして全ての仕事を終えさらに摩耗した精神を一度癒すために自室に戻り扉を開けると・・・

「お帰りなさいアナタ。テーブルでする？お風呂でする？それともベッドでしますか？」

バタンツ

っう。あれ？僕そんなに疲れてましたかね？幻覚見る程精神が摩耗していたなんて思っても見ませんでしたヨHahaha

目頭を指で軽く揉みほぐすように真上を向きながら目の前の現実が幻覚であることを言い聞かせる。

そして再び開けると・・・・・・・・

「お帰りなさいアナタ。テーブルでする？」「バタンツ」

「スウ〜ハ〜スウ〜ハ〜」

オーケイボーイズ

あれが現実だとしよう・・・・・・・・しかし何故選択肢に行為に及ぶものしかないんですか！？テーブルでするってなんですか！？

とうるかあの格好何！？なんでタオルを身体巻き付けた状態で横に
ビーチマットみたいなのがあるの！？
使い道がお風呂ですよ？！よく風俗にあるアレですよ？！？

暴走するようにツツコミを続けて受け入れたくない現実を受け入れ
ることにした。

ガチャッ

「どうもカトレアさん」

「久しぶりねユウキくん」

うんバレテラア

《 続 》

第2章9話：フェイントだと！？（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

はいカトレアさん復活

作者はカトレアさんが結構好きです
というか最近ネタに走りすぎているような気が……気のせい
か面白くないって言われてるし

次回もお楽しみに

第2章10話・花は英雄を・・・・・・・・（前書き）

グッダグダ!!

そろそろ原作と合流します!!

誤字脱字は報告お願いします

第2章10話：花は英雄を……

「いやあ三ヶ月の間お世話になりました」

「いいのよ、私がやりたいからやっただけなんだから」

「テファに感謝するんだね」

「姉さん!!」

「もちろんテファにもお義姉さんにも感謝しています。本当にありがとうございます」

「あなたにお義姉さんなんて呼ばれる筋合いは微塵もないよ!!」

「まあ冗談ですから」

「バカにするんじゃないよ!！」

「じゃっまた会いましょう」

「リーブ……………その……………」

「記憶なら消させませんよ」

「「なっ!?!」」

「なんでそれを知ってるの!?!」

「僕は『魔法』使いですからね。なんでも分かるんですよ、また会いましょうね僕の友達のティファニア……………《転移》」

「「えっ!?!」」

「消えた!?!どこに行ったんだいアイツは!?!」

「うん………また会いましょうね私の友達」

.....

どうもユウキ・エンドリオー………間違えましたリープです。
今カトレアさんとお話もといどこぞのリリカルな魔王式OHA
NASSIの真っ最中です。

「どづしてまたこちらに?」

「家に居てもすることがないからオスマンさんに働かないかって言
われて来たのよ」

アホなことを考えながらも認めたくない現実から目を逸らしつつける。

こんな筈じゃなかったのに！！

『世界はいつだって、こんな筈じゃない事ばかりだよ
ずっと昔から、いつだって誰だってそうなんだ！』

なんか変な電波が流れた気がしますがきって気のせいですよ
リリカルなお話に出てくる真っ黒いKYな人が出てきた気がするが
きって気のせいですね

作者がリリカルを調べているときに気に入ったから書いたわけか
じゃないですからね！！

「でユウキくんはどうして死んだふりなんかしてたのかしら？」

かなり蠱惑的というか肉食獣が爪で獲物を遊ぶような笑顔で胸を押し
当ててこないでください！

「僕の名前はリーブで「ユウキくん？」……………はい」

ごまかしは利かないんですね、分かります

とつかカトレアさんと会った時点でバレそうな気がしたんですよ

(泣)

「……………どうして僕がユウキ・エンドリオール・ル・デファ
ンス・ド・アンペラトリスだと思っんですか？」

僕はわざとらしく若干の否定を混ぜながら聞くとカトレアさんはそ
れはもう楽しそうに

「好きな人を見間違えるわけないでしょ」

とおっしゃられました……………愛の力ですね！！全く分かりま
せんけど！

「まあそれもあるけど私を見て逃げようとするのは私の愛しいユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスだけよ

」

蕩けるような極上の笑顔で言うのはいいんですが……確か
にカトレアさんは可愛いですよ？近くにいてくれたら嬉しいですよ？

でもですね！昔貴女に可愛がられ続けたトラウマがグサグサと容赦
なく僕のグラスハートを打ち砕こうとするんですよ！！

僕のハートは一タコメントで一喜一憂する作者並に脆いです！！酷
いコメントがあると落ち込んで執筆速度が落ちるほどがガラスハ
ートなんですよ！？これ書いてる時なんか更新まであと3時間もな
いんですよ！！（泣）

などと作者とフュージョンして魂の叫びをあげていたが、結局現実
とは儚いもので……人に夢と書いて儚と読むんですよ？

精神が摩耗しすぎて摩擦係数が0になるほどボディランゲージ+セクシャルランゲージをされましたorz

ああカトレアがトラウマメイカーかじゃなきゃすぐに襲ってたんですがorz

我が身を襲った不幸を嘆きながら覚束ない足取りで律義にもキーリさんの元へと向かい話を聞く

キーリさんのお話を軽くまとめると

・サンキュバス（夢魔）化したのは一年程前、バロールが顕神した一週間後ぐらい。

・魔眼が使えるようになってから夢魔になれるようになった。

・魔眼が他者にバレないように生活していたにも関わらず『ウィユラポール』という組織から接触があった。

・『ウイユ ラポール』の目的は『レコン・キスタ』の打倒であり、
虐げられてきた魔眼保持者たちを救うためである。

・建前上はそうなのだが実は『ユウキ・エンドリオール・ル・デフ
アンス・ド・アンペラトリス』と親しかった人物が先頭に立ち敵討
ちをしようとしている。

・キーリさんは『ウイユ ラポール』ではない。

やっぱりバロールの影響で生まれたのは魔眼保持者たちみたいですね。

そしてキーリさんのように魔眼を己が身に宿したことにより、先祖
の魔族の血が目覚めちゃった人も多数いるみたいです。

というか敵討ちとか誰が考えてるんですか？やめてくださいよ、命
を奪われたから奪い返すとかはバカがやることです。

思考の海へと潜り色々な疑問点やら重要なところを決めている中

どうしても気になったことがあったのでキーリさんに尋ねてみた。

「キーリさんはユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスの敵討ちをしようとは思わないんですか？」

するとキーリさんは困ったような顔をして包帯で見えないはずの僕の瞳を見ながら言った。

「確かにご主人様が利用されたときいて『クソヤロウどもが「ズキユーン」から手を突っ込んで内臓引きずりだしてやる！』と思うほど怒ってましたが……気づいたんです、ご主人様はそんなことをしようとしている私を見て笑ってはくれないと。私の大好きなご主人様はいつも笑顔で皆さんを笑わせようとしていたりからかったりしてすごい楽しそうでした……そんなご主人様が私が復讐に身を置き笑えない状況を見て喜んでくれるはずがない。そう気づいたんです」

「……………そうですか」

なんか愛されちゃってますね僕……それでも正体を明かそうとはしないクソツタレな僕はいかがしたらよろしいんでしょうかね？

空を睨みつけるように上を向きながら考えた。

《続く》

第2章10話：花は英雄を………（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

カトレアさん人気に吹いたWWW

一気に8000アクセスぐらい上がったWWW

次回はようやくサイトくん登場予定

次回もお楽しみに

第2章11話：ゼロの使い魔（前書き）

またグダグダ

そして短めorz

誤字脱字は報告お願いします

第2章 11話：ゼロの使い魔

「ただいま！貴女の恋人が今夜は寝かさないと言わんばかりに滾らせながら帰ってきました・・・」「ガチャッ」・・・
つうくあれなんか場所間違えましたかねえ？いや次元かな何次元間違えたんですかね？とりあえずもう一回確認してみましよう、うんそうしましよええきつと僕の見間違えに間違いありませんからね！！」

「ガチャッ・バツタン！」「うん・・・死のうかな・・・
・・・なんでアンリエッタとウェールズが抱き合ってるんですかね？
・・・三ヶ月か。死んだ僕を忘れるにはちょうどいい長さかも知れないな。やっぱり英雄は死して何も語るべきじゃない・・・
・・・今出ていってもせつかく僕を忘れたばっかなのにまた現れてはアンリエッタを傷つけるだけでしょうし。・・・もう
英雄なんかいませんね。《転移》」

「・・・どうやって生きていくの？」

.....

どうもユウキ・エンドリオール……間違えましたリーブです。今爺ちゃんと一緒に二つの《遠見の鏡》の前で優雅にお茶を楽しんでいます。

「いやあ〜今回のサモン・サーヴァントはあまり面白い使い魔が出てくるのう……ピンクじゃ」

「出てきたら出てきたで面倒だからいいじゃないですか……
緑で」

「おおツエルプスターの娘がサラマンダーを召喚したようじゃぞ！
！……くっ何故緑なのじゃっ!？」

「二つ名にあつたいいい使い魔ですね。これで4勝1敗……
もう負けを認めて楽になりませんか？」

「今度は偽名のタバサ殿が風竜をしたようじゃぞ!くっ……」

まだじゃまだ諦めんぞ！！黒じゃ！ミス・ロングビルは黒じゃ！！」

「やっと竜種が出てきましたね。まあまだ幼生ぼついですけど・・・
・・・ふっバカですねオールドオスマン！！姉さんの下着の色など
毎朝確認している！！白だっ！！」

「くっなんじゃと！？あの歳で白なんて清纯を気取るとは「あら何をやっていらっしやるのかしら？」ふむ、それはただ使用済の下着を賭けてパンツの色を当てあっているだ・・・け・・・」

「・・・さてと僕はやらなきゃいけない仕事があるのを思い出したので失礼します」

その場を脱出し緊急回避をしようとしたのだがすでに遅く、知らない間にその場に現れていたカトレアさんに抱き着かれ乳でホールディングされる・・・新しい拷問か何かですか？一瞬で吐血しそうに成る程ライフポイント（精神力という名の理性）を削られ摩耗していく中・・・

「オールドオスマンに命令されて下着を盗まされました」

同志を売ることにした。

「ちよつと」それに盗まさせられた下着と全く同じものを作らされ、使用済と入れ替えるよう命令されました」・・・・・・・・・・
「儂らの友情は？」

「はっ！命の前では紙屑にも劣ります！！」

鼻で笑いながら正々堂々？と言葉を返す・・・・・・・・野郎の友情なんてこんなもんですよ。

爺ちゃん、貴方の犠牲は決して忘れません。嘘泣きをしながらメイド服を着た給仕さんたちに（冥土に）連れていかれるオールドオスマンを心の中でドナドナを歌いながら見送った。

すぐあとに悲鳴が聞こえたが気のせいだろう・・・・・・・・ボクニハ
マツタクキコエナカッタ

僕がおふざけをしている間（オールドオスマンは折檻というか老人虐待？）にサモンサーヴァントの儀式は終わったらしくトボトボと歩いていくルイズとサイトが《遠見の鏡》に映し出されていた・・・ああ肝心な場面を見逃しました。落胆しながらも帰ってくるルイズたちの元へと向かう。

途中すれ違ったメイドさんに前に作っておいた布団を用意するように頼み、トボトボと歩いていたルイズに話し掛ける。

734

「こんにちはミス・ヴァリエール。お元気がなさそうですが、どうかしましたか？」

元気づけるように笑いかけたが、ルイズはやはり人間を召喚してしまったことにショックをうけ陰りのある笑顔を浮かべながら返答してきた。

「こんにちは、リープ。そんなことないわ・・・それより、

その・・・後ろにいる彼は・・・・・・・・私の使い魔なんだけど・・・
・・・彼に学院を案内してあげてくれないかしら？私は少し具合が
悪いから寝てるわ」

「お安い御用ですよ。体調に気をつけてくださいね」

笑顔で答え、サイトくんに向き合う。

「どうも初めましてリーブと申します。貴方のお名前は？」

「平賀才人だけど・・・・・・・・」

サイトくんはいまだにショックから立ち直れないのか呆然としなが
ら返事をしている・・・・・・・・やれやれさすがに呼び出されて異世
界ですじゃ、こうなりますよね。

納得しながらも主人公としてはもう少しキッチリしていて欲しいの
で・・・・・・・・

「痛っ」

頭を小突き、こちらに集中させる。

「人の話はちゃんと聞きなさい。あと礼儀として敬語を使うよう努力してください」

「応面倒なことにならないよう注意をしておく」

「分かった・・・分かりました」

「ハイ、OKです。素直な子は大好きですよ」

また人をくつたような笑みを浮かべ、ルイズに言われたよう色々とサイトくんを案内していく……。途中すれ違ったメイドさんたちには使い魔であるということと他の国の人なので多少色々あるということ話を話して、困っていたら助けてあげるようお願いした。

そして一通りの案内を終え、ルイズの部屋に帰そうとしたのだが寝
ている女の子を起こすのが気が引けたのでとりあえず寝る所として
一日だけ僕の部屋に泊まらせた。

・・・面倒くさい

《続く》

第2章11話：ゼロの使い魔（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ようやくサイトくん登場

なんか弄るの面倒WWW

どうやっていじっていいか……

次回もお楽しみに

第2章12話：闇に働く（前書き）

グダグダよ

ネタが浮かばない

リリカルはプロローグだけ書き終えました。

まあ一話はこちらにあげたのを多少いじってあげなおすだけだけど

誤字脱字は報告お願いします

第2章12話：闇に働く

「・・・・・・・・ユウキ？」

「ああどうもテファ・・・・・・・・あれこんなところまで歩いていたんですね、ハツハ八八どうでもいいや」

「どうしたのユウキ？そんな悲しそうな顔をして・・・・・・・・」

「・・・・・・・・それは巨乳に裏切られて、絶望して・・・・・・・・あれ？・・・・・・・・テファのオツパイにときめかない。えっ？オツパイへのパッションが消えた？失恋で？失恋で僕の最後の生きるための道標が消えちゃった・・・・・・・・アツハ八八何を楽しみに生きていけば・・・・・・・・」

「本当に大丈夫？」

「・・・・・・・・そうか、そうか！！今はオツパイじゃなくお尻の時

代なんだっ！！オツパイなんて俗なものは忘れるべきなんだ！！ついでに名前だつて捨ててやる！！僕はリーブ、お尻のために生きる尻王だっ！！あの素敵な曲線美のために生きるんだっ！！全ては尻というリーブ（フランス語で夢）のために！！アル最高！！ジークオシリ！ジークアル！！」

「キヤッどうしてお尻を触ってくるの？！」

「イヤッホー！！！！オツパイなんか大っ嫌いだぁー！！！！」

.....

どうもユウキ・エンドリオール・ル・・・・・・・・間違えまじたりーブくんです。

一晩経ち、とりあえずサイトくんを叩き起こしてルイズちゃんの部屋へと連れて行きあとは・・・・・・・・知りません。

のかを冷静に考察してみることにした。

ポクツポクツポクツポクツ……チーン！！

閃きました！

なんか知らないけど爆発イベントが延期されたということですか！？

そして運悪く覗いた瞬間爆発ですか！？笑えない！！このイベントの遭遇率笑えない！！

痛みも治まり顔面に突き刺さったガラスを抜きながら自分の神の加護：E-という不幸しか生まないアビリティーに絶望して食堂の手伝いをするために食堂に向かうと……

「決闘だっ！！」

サイトくとギーシュが睨み合い決闘することになってました……
……もう知りません帰ります。探さないでください。

巻き込まれないようその場から逃げようとしたが

「リープさん！！なんとか広場って場所が分からないんで案内してくれませんか？」

サイトくんが道案内を頼んできた………なんとかじゃわかんねえよなどと丁寧語が崩れ落ちそうになったが耐えてサイトくんを決闘の場所である広場へと送り届け、すぐにその場を後にした。

744

主人公っていうのはあんな嘔ませ臭のするキャラには負けないんです。だから大丈夫と言いつつしながらブラブラしていると………
・決闘が終わったらしく学院の生徒たちが散り散りに帰っていった。

サイトくんはギーシュのゴーレムでポロポロのズタズタにされたらしくさすがに保健室で治療を受けているとのこと………ギヤラリーはギーシュとサイトくんの決闘の勝敗を見て何もなかったらしい。

平民に負けたなどプライド第一のトリステインの貴族たちには考えられないことなので、ギャラリーのメイジたちが何かやらかさないかが多少不安だったが爺ちゃんが覗き見をしていて勝敗がついたあとすぐに行動を起こし貴族たちを釘をさしていたというのは後々知ることとなる。

そして僕は自分の仕事をすることにした……………

「これで37人目ですか……………」

気絶している人の山の上に座り月を見る……………やはりということかなんというか人が見てない時にサイトくんを殺そうとするおバカな貴族さんたちが保健室へと殺到してきました。

でムカついたので顔が見られないようキングダムハーツの ? 機関ごっこ（パーカーのついた真っ黒いコート）をしながら寄ってきた貴族たちを気絶させ積んでいく……………テトリスみたいに身体を変形させてみましょうかね。

こつこつ形とか

ただ積み上げるだけじゃ芸がありませんね。とりあえず貴族たちの衣服を剥ぎ、身体に落書きをしていく

『まだ火星です』

『皮のついた鰻は如何ですか？』

『神聖ですけど、何か？』

『三擦り半』

『早過ぎてふりきるぜ！』

『8cm水鉄砲』

『緑亀くん一号』

『タートルネックな君に・・・上野整形外科』

とかかなり悪意を込めた文をこの前制作した油性マジックで書いて
おいた。

きつと引きこもりになりますねと仕事をやり遂げた顔でサムズアッ
プしていると茂みから物音が聞こえたので、そちらを見ると誰かが
今の様子を見ていたようだった。既に逃げたらしく面倒すぎて追っ
気にもならなかった・・・・・・それにしても迂闊

またうっかりスキルが・・・というか僕不注意すぎ
危機感が薄いなあ

地味にへこむわ

《続く》

第2章12話：闇に働く（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

すっごい飛ばしたorz

リーブくんがサイトくんに絡む理由が浮かばなかったのかもしれませんがなくこういう形に

それにしても誰が見ていたんですかね？

次回もお楽しみに

第2章 13話：ただの間（前書き）

すっごい短いです理由？

今日は出だしとということwwww

誤字脱字は報告お願いします

第2章 13話：ただの間

ひっさしぶりーっ！っ！パラレルワールドだと違うけど現実では十日ぶりぐらいですね！などと初っ端からメタ発言全開で読者を振り切るユウキ・エンドリオール・ル・デ……おっとうっかり間違えました！リーブです！！

乳帝を名乗るユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスとやらは乳へのパッションを無くして死んだんです！！

世の中から自分を否定しつつブラブラと散歩していく……
いいお尻はそこらへんに転がってないもんでしょうか？

美尻探検隊をしながらキョロキョロ周りを見ているので怪しいことこの上ないですが……まあそこらへんは皆さんまた見慣れたもんで「またリーブがセクハラする機会を窺っている」程度にしか思っけません。ちなみに一部生徒は美尻探検隊に入隊希望の……
……プライドを捨てて尻を追い掛けられる漢しか仲間にはなれないんです（俗にそれを変態という）。

まだ貴族でなれた人はいませんね、残念なことに

別に入れてもいいんですが、まだ平民との身分やら何やらを気にし

ているのでついイラツとくるんですね……偉大なる尻の前では人類皆平等。偉大なる尻の前では男はただの雄でしかないのですよ!! 多少生々しい表現をしながら尻への熱いパッションをたぎらせる。

フツハハハ尻の前では巨乳などただの脂肪の塊よ! 失せるがいいっ!!

若干入り組んだ変な方向に入り込んでしまったようだった。

まあそんなこんで……戻って来ましたよ?

《続く》

第2章 13話：ただの間（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか……まあ無理だなW

第2章14話・家政婦は見たっ！ータンタンタンー (前書き)

グツダグツダ！

久しぶりなのにグツダグツダ

最悪や

誤字脱字は報告お願いします

ちなみにわりとシリアス成分多め

第2章 14話：家政婦は見たっ！ータンタンタンー

まあ散歩というものは得てして自分の興味があるものに流されるわけで……更にそこに罾が仕掛けられてるとは思いもしないわけで……網に包まれ引きずられているユウキ・エンドリオール・ル・デフ……間違えまじたり ブ2 1……リーブです。

ストレスによる脱毛はリー 21で回復出来るものなのでしょうか？あああとストレス性胃腸炎も併発してたり、トラウマメイカーによる寢床侵入により胃潰瘍になりかけたりとか……保険下りますかね？リア充、モゲろ？俺もあんな婚約者が欲しい？……バカめっ！！手を出したら既成事実で一発で結婚という墓場いや牢獄行きなんですよ！！覗きもセクハラも一切赦されない地獄に落とされるんですよ！？……そのどこにリア充要素があると（血涙）

まあ軽い現実逃避を止めて悲しい現実に向き合おうと……散歩中つい明かりによる蛾のように更衣室へと向かってしまい、その際通った道に落とし穴with網があり網に包まれた状態で、この落とし穴を仕掛けたと思われるトラウマメイカーかとカトレアさん

が僕を落とし穴から引き上げ「買物に行くから一緒に行きましょう？」と拒否権を発動させる気はさらさらない様子で微笑みながら網in僕を引っ張り馬車を借りようとしているところです……
・うん、このままはベリーベリーエクストリイイイイイイイイイイイイ
イイイ………ムツ！！にマズいですね。

なんとなく死を感じたので近くを通ったシエスタと一緒に来てくれるよう頼んだのだが………呼び掛けた時、何故か怯えられ、そしてまるで命令されたかのように従順にお願いを聞いてくれた。

その様子に悲しみと昔一度だけ感じた疎外感を覚え………ネガティブな気持ちに陥った。

そして少し不機嫌そうに「せつかく二人きりだったのに………」と咳いているカトレアさんと共に馬車に乗り込む中

シエスタはただ淡々と御者の席に座り、こちらを見ようとしなかった………なんで………なんでそんな………ああダメだ。昔のトラウマが……

グルグルとダークサイドに落ちかけながら、カトレアさんに腕に抱

き着かれ馬車の壁に寄り掛かっていた。

馬車の中は沈黙で満たされ誰も言葉を発しようとはしなかったのが、さらなるダークサイドへの道を近くしていく

そして遂にフラストレーションが爆発した。

「なああああああああー！ー！ー！ー！」

雄叫びをあげながらシエスタに抱き着き乳も尻も触りまくる。

「キャッ」

シエスタが悲鳴をあげるが無視をして、手をワキワキさせて撫で回し続ける……満員電車の某最強な線路の痴漢も真っ青な手つきだった。

そしてセクハラに耐え切れなくなったシエスタにどこからともなく出したフライパンでぶっ叩かれた。

「何するんですか!？」

シエスタが真っ赤な顔をして怒鳴りつけてくるので・・・

「シエスタが僕を避けてるからやっ たんですよ!！」

と怒鳴り返す・・・まあ僕に正当性は全くないわけだが

言い返されたシエスタはまた怯えた顔つきをした後、すぐに

「だってリーブさんは貴族なんですよ!？」

と言い返された。

成る程この前僕を見ていたのはシエスタでバンバン魔法を使っていたのを見られてたわけですか・・・

「貴族様たちをあんなふうには倒せるのは貴族様だけです!!」

何やら変な誤解もあるようだった。

「貴族が強いなんて誰が決めたんですか？」

「えっ？」

僕の言葉にシエスタは驚いた顔をする。

「貴族は平民に生かされているんですよ」

「だって貴族様は魔法を・・・」

シエスタは僕の言葉を否定しようとするが僕は更にそれを否定する。

「魔法だけで食べ物を作れますか？魔法だけで衣服や家が作れますか？魔法だけで暖かい生活を送れますか？・・・貴族は平民たちから支えられ生きているんです」

「・・・・・・・・。。。」

驚き無言になるシエスタにさらに僕は言葉を重ねていく

「シエスタはユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスという貴族の男を知っていますか？」

シエスタは僕の問い掛けに質問の意図が分からないと言わんばかりに不思議そうに首を傾げながら答える。

「ええキーリさんからとても素晴らしい方だと聞いてますし、『救国の英雄』とか『最強の魔法使い』とか……あと悪い言い方で『トリステインにいるべきではない魔法使い』とか」

「ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスは愚か者でした」

「えっ？」

「確かにユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスという男は類い稀なる魔法の才能、そして政務を牛耳る力がありました……しかし彼は孤独を感じていたんです」

「……どういことですか？」

「彼は何をしても満足は出来なかった。何をしても自分に自信が持たなかった・・・これをしてよかったんだろうか？あんなことをしてよかったんだろうか？暖かい友に支えられながらも愚かにも彼はただひたすら孤独を感じていたんです」

思い出すように語り始める。

「いきなり飛ばされたと思ったら知らない人がたくさんいるし、今までの友や両親も誰もいない・・・ただただ怖くて誰も信用出来なかった。そしてある日新しい母に認められ、彼は少しだけ前に進めました・・・しかし彼はまだ怖かったです。前の世界になかったあるものが、簡単に命を奪えるあるものが・・・だから研究して研究しつくし一冊の本に纏めました。まあ愚かにもそれを奪われたりしますが、今はおいておきます・・・で理解したことにより多少恐怖心は和らぎましたが・・・今度は孤独に恐怖したのです。また一人になるのは嫌だとそして彼は全ての人々を受け入れ、孤独でいることを拒絶しました。嫌われたくない一心でバカをやり他者を引き込み続けました」

「・・・・・・・・」

「彼は一人では生きていけないただの愚か者だったのです。他者に生きる理由を委ね、生きる目的すらも委ね……死ぬ理由すらも他者に委ねました。……彼は決して強い人物なんかじゃなかったんですよ」

「……そうなんですか？」

「ええ貴族は決して強くなんかはないです……ただユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスは……
・死んで正解でした」

「えっ？」

驚きの声をあげるシエスタに対してカトレアはただ無言を貫いていた。そして最後は見えない誰かに語りかけるように……己の肩を抱きながら震えながら言う……ただ己の心の内を吐露する
ように

「怖かった……自分の作った魔法で誰かが傷つけられていくのが……許せなかった……自分の魔法で誰かを傷つける人そんな魔法を作りだした自分が……そして恋人に拒絶された……だからユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスは死ぬべきだったんです」

そう告げると何故か前後から暖かみを感じた……抱きしめられているのですか？

シエスタとカトレアさんに優しく抱きしめられた。

「この世に死ぬべき人なんていないんです」

「そうよ……それにどれだけユウキ・エンドリオール・ル・デアンス・ド・アンペラトリスが孤独を感じようと彼の周りには暖かい人がたくさんいるわ」

「……………」

その温もりと言葉はただただ温かかった……………
異世界で感じた久しぶりの心地良さだった。

《続く》

第2章14話：家政婦は見たっ！ータンタンタンー (後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか？

ユウキくんはただ逃げただけなんですよ
ずっとずーと現実逃避をし続けていたんです

まあ彼がまだ現実と向き合うのはまだまだ先ですが

次回もお楽しみに

第2章15話：事故って怖いよね、事故って………（泣）前書き

多少……かなり遅めですが更新です。

まあグダグダです

あとあとがきにお知らせがあります
更新についてなので要チェックですよ

誤字脱字は報告お願いします

第2章15話：事故って怖いよね、事故って……………（泣）

下着というものは乙女にとって最後にして最強の武器であり、獲物を仕留めるためには必要不可欠なものである……………のであまり人には見せない方が僕ことユウキ・エンドリオール・ル・デファ……………リーブくんは思うわけですよ。

なかなか見れない秘境のような存在であるからこそ、漢たちはここに夢を求めそれを見ようとするわけですから

男の子は探求者なのですよ、儂き理想郷に夢を見て猛進する勇者たちなのですよ。

だから男の子の寢床に侵入する際にそういう格好をしてはいけな
いと思われるわけですよ。

「分かりますか、カトレアさん？」

殆ど全裸のような・・・まさしく紐っ！！と言わんばかりの服装をして僕の寢床に潜っていたカトレアさんに言う・・・もちらんそちらを見ずに

見たら理性の紐・・・・・・・・系が契れ飛ぶので

既成事実の作るわけにいかんとですよ

「見たいのなら見ちゃえばいいじゃない」

そんなに嬉しそうな呼び掛けるような声を出してもそちらを向くわけには行きません・・・・・・・・あっ首がっ！！首が勝手にっ！

本能で勝手に動き始めた頭を地面に打ち付け、理性の糸を強化させる。多少脳が揺れている気がするが、乳揺れを見るよりはまだまだましである。

アレを見たら終わるぜ！

脳が揺れたせいも多少変なテンションになりつつも目の前に広がる真なる理想郷アサアロンから目を逸らしつつカトレアさんに更なる注意を与える。

「だいたいそういう格好は好きな人（獲物）の前でして、是非仕留めて来て下さい」

「あら私は仕留めに來てるのよ？」

「……………。ゲフッ」

吐血しそうになるほど地雷を踏み抜いた……………あまじで僕のこと好きなんですか？リアリー？

急にきた変化球に耐え切れずデッドボールを受けた打者のような気分だった。うん分かりづらい！

「それに淋しいんでしょ？ほらお姉さんの胸が空いてるわよ」

顔を掴まれタワワに実った果実に向けられる……くっ堪える堪えるんだ僕っ!!

「孤独だったのよね？」

「止めてー言わないでーっ!!アレは気の迷いだからよくある14歳病の自分を知って欲しいって言う悲しい青春の叫びですから!!やめてーっ!!」

やはりトラウマメーカーなカトレアさんだった。

まあ確かにシエスタに嫌われたくないあまりに感情を吐露しましたが……あれじゃあ構って欲しい淋しがり屋の中学生じゃないですか。

……鬱だ死のう

先日の黒歴史を思いだし落ち込む中……

- - 爆! ! - -

「キヤッ」

外から爆発音がしたのでカトレアさんを抱き寄せ上に被さる。

・・・・・・・・わりと近くからですか？

爆発音？

破片が飛んで来ないようカトレアさんに覆い被さったんですが、どうやら杞憂だったようです。

そして現状を確かめるために状況を確認した・・・・してしまっただ。

・・・・・・・・ムニユ

咄嗟の判断だったからこれは故意的なものではなく事故であり・・・

・・・その・・・

「あらあら」

カトレアさんがニコニコと獲物を罾に嵌めたような笑顔を浮かべる中、ガツチリと掴んだ果実をどうするか迷ったあげく・・・

「あんっ」

とりあえずもう一度揉んでみた・・・ヤッチマッタ

すぐに果実を離して、迫りくる現実という名前の悪夢から逃げ出すために自室の扉を蹴破り爆発音のした方へと向かう。

「爆発はどっからですかーーーーーっ!」

36 計なんとやらという奴ですね、分かります。

どうやら宝物庫の方角かららしく向かったのだが……途中
で普通に大きなゴーレムが宝物庫に手を突っ込んで見えた。

……諦めてなかったんですね、姉さん

わりと警戒しながら姉さんの様子を見守っていたにも関わらず、マ
チルダ姉さんがフーケとして盗みをやらかしてしまったことを止め
られなかった自分に多少腹を立てながら

姉さんの行動を見据える。

姉さんは宝物庫から長細い箱のような物を取り出した後ゴーレムに
飛び乗り、そのままゴーレムに乗ってどこかへ行こうとした……
・途中ゴーレムから飛び降りて、ゴーレムを遠隔操作しゴーレム
が行く方向とは全く違う方向へと行く

そしてそんな姉さんの前に魔力で強化した脚力を利用して先回りを
して立ちほだかる。

「そこまです」

「っ！……」

姉さんは立ちはだかった相手が僕と気づき多少躊躇いながらも杖を向けてきた。

「おとなしくその箱を置いて逃げれば何もしません」

「……お前に何ができる」

僕に気づかれないよう声を低くして喋りかけてくる姉さん

「さあ何も出来ないかも知れませんね」

「なら引け・・・・・・・・死にたくはないだろう?」

そう言つて杖を向けてくるので杖の先を首筋に当たるように近づくと姉さんは目に見えるように動揺した。

「っ!?!何をしている!?!」

「外さないように的を絞つただけですよ・・・・・・・・どうしてこんなことを?」

宥めるように話しかけたが、姉さんは震える手で杖を向けたままそっぽを向き

「・・・・・・・・お前には関係ないことだ」

と言い捨てた。

なので満面の笑みを浮かべて

「いえ関係ありますよ・・・・・・・・マチルダ姉さん」

全てを見透かしたような言い方で姉さんに話しかける。

「なっ!?!」

マチルダ姉さんが驚きの声をあげる中笑みを浮かべながら言葉を重ねていく

「いくら声を変えても家族なら分かりますよ」

その言葉にマチルダ姉さんは被っていたフードを外し美しい緑色の髪と整った顔を表に出した。

「分かっていたのかい？」

「ええ」

姉さんは辛そうに唇を噛み締めこちらを見てくる。

「どつする気だい？」

答えによってはどつにかしななければいけないことを分かっているせいか姉さんはとても辛そうな顔をした。

「何もしませんよ」

「はっ？」

僕の答えに姉さんは意味が解らないと言つような声をあげ口を開いている。

「なんで家族をアホな国に売らなきゃいけないんですか？」

「私は盗賊なんだよ！？普通は捕まえたりするだろ！？」

なぜか盗賊に一般道徳を問われる中なんでもないとつうように笑顔を浮かべて

「盗賊だろうが、人殺しだろうが家族は家族です。そこに法とか道徳なんかは入りようがないんですよ」

そうつうと姉さんは再び啞然としたように口を開いていた。

「じゃあどつするんだい？」

「とりあえずお仕置きをした後に………多少細工をします」

お仕置きを言った時に浮かべた悪魔も怯えるようなあくどい僕の笑顔に姉さんが身体を震わせた後

「細工ってなんだい？」

と尋ねてくるので………ニヤリとまたあくどい笑顔を浮かべて

「身代わり大作戦です」

《続く》

第2章15話：事故って怖いよね、事故って……（泣）（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

まあカトリアさんとのイチャイチャはまだ先です

でお知らせなのですが……

リリカルの無印を書き終えるまでこちらをお休みします

リハビリに全力を注いで本編を休むなんて本末転倒もいいところですが

779

あと2〜3話で終わるので

終わらせちゃおうと思います

まあお待ちいただいた皆さんには悪いと思いますが
何とぞご容赦いただきと存じます。

ではまた4日後ぐらいに

「くそ！固いぞコイツ！」

- 斬! -

「サイト離れて！行くわよタバサ！」

コクッ

『ファイヤートルネード』
『ウインデーアイシクル』

- - 轟つ!! - -

「やったー!!」

「まだだー!!」

「ちっこいつあやべえぜ相棒」

「分かってるよデルフ！」

「フツハハハハハハ貧弱う貧弱うううーっ！！我がゴーレムに勝てる者なし！！」

どうも、もう面倒なんですがユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスことリーブです。

今現在マチルダ姉さんの代わりにフードを被ってフーケの振りをしているんですが……うんちよつと調子に乗りすぎましたね。

さすがに油断とかうっかりをするわけにはいかないので初めっからクライマックスで目を覆っていた包帯を解き、複写眼を使いまくってるんですが

少し調子に乗りすぎて、というか悪乗りしてゴーレムをチタン合金で作って人間サイズにして自らの鎧として纏って戦ってます。

ぶつちやけ顔面も金属で覆われているからフード被る必要がありませんね

とうかこの戦い方ってよく考えたらしロケットランチャー撃たれたら逃げ場ないですよ？しかも今のところ負ける気がしません
orz

ギアス使って四人を退けてもいいんですが……なんというか友達に使うのは躊躇われるとうか、うん！ただヘタレなだけです。

それに原作忘れた上に現在と全く違うからどうしようもないですし、あんまり怪我すると仕事に関わりますし……どうしましよ？アンケートでもとりますか？

まあ唯一の救いは正体がバレていないということですかね？
姉さんには馬車で待機してもらってますし、ここまで来る馬車には乗らずに馬車の下にヤモリのように張り付いてここまで来ましたから僕が疑われるわけありません。

「うおおおおおーっ！！」

「ぶんっ！」

デルフを振りかぶり袈裟がけに斬ろうとしてくるサイトくんを蹴り
デルフを弾いた後で吹き飛ばす。

「サイト!?!」

そんなサイトくんを心配して近寄るルイズちゃん。唇を噛み締め睨
みつけてくるキュルケちゃんに相変わらぬ無表情のタバサちゃん、
しかし全員共通して怒りを込めた眼差しで僕を睨みつけてくる・・・
・・・ああまじでどうしましょう。

さすがに知り合いからああいう目で見られるとへこみますね、他人
からはああいう目でよく見られたことはありませんけど

不意にルイズちゃんが駆け出し、地面に転がっていた『破壊の杖』
が入った箱を取り中からロケットランチャーを取り出し振りはじめ
る。

……じーぞす。

「くっどうして!?!どうして発動しないの!?!」

無我夢中で必死に振りつづけるが何も発動はしないので、やむなく隙だらけになっているルイズちゃんに襲い掛かろうとしたら

ドンっ!

右から衝撃が走ったので、そちらを見ると杖を構えこちらに魔法を放ったと思われるキュルケちゃんがいた。

その後ろでタバサちゃんがチヨコチヨコと呪文を唱え援護しようとしている……まずいですね。

これは完全に死亡フラグ「ルイズ!?!それをよこせ!」ほら!目を覚ましたサイトくんがロケットランチャーに気づきルイズちゃんから受け取るうとしてる。

完全に死亡フラグじゃないですか!!

けないことが分かっているので離れられない。

チッ

内心舌打ちをしつつ両腕に魔力を込めて二人に叩きつけ吹き飛ばした。

「しめた！」

サイトくんはその隙を見逃さずに僕に向けてロケットランチャーを放つ

ブシュ

ガスが抜けるような音と共に風を切り裂きながら僕へと向かいくる暴力の塊。
必死に魔力を練り上げ全身を強化し、くるである衝撃に備える。

- -轟つ! - -

着弾と共に爆発が身体を揺るがし全身を痛めつける、チタンの鎧は衝撃によりバラバラにされながらもなんとか堪えきつたが全身は傷だらけ左腕がブラブラとちぎれかけ、右足は鎧の破片が突き刺さり切り刻まれている。

「があ!?!」

痛みにより肺から空気が抜けるが歯を食いしばり全身からダラダラと流れる血を無視して森の中へと逃げた。

「ハア・・・ガッ!・・・ハアハア・・・グッ」

必死に痛みをこらえながら気配を消す、サイトくんたちは爆撃により出来たクレータを見て僕の死体がないか確かめている・・・
・・・やばいな、失血死しそう。思わず昔の口調が出るほど危険な身体の状態に焦りながらも深呼吸をして自分を落ち着かせ、

痛みを堪える。

滴り落ちた血により血痕が出来こちらへと道標のごとく続いてしまっているが、それを消す余裕もなくただ息を殺す。

バレないよう必死に祈っていると先程の爆音を聞き付けた姉さんが焦った様子で皆と争っていた場所にかけてくる。一瞬地面に出来たクレータに目を向け驚愕の面持ちをしたが、そこに四散した金属のかげらを見て憎悪を秘めた眼差しをしよう。

あの馬鹿姉さん！

心配してくれるのはありがたいですが、その目はまずいですって！

焦っているとそれが伝わったのかなんなのか姉さんは深呼吸をして僕を傷つけた皆に対する怒りを鎮め、冷静に皆へと帰るよう促していく

皆は納得出来ないような顔をしていたが、さすがに僕との戦闘の後で疲れていたらしく渋々馬車へと戻っていった。

それを遠目で確認しつつ殲滅眼を全開で使用しそこから魔力を搾りとり、止血し動けるレベルまで回復する、しかし敢えて動かず垂れた血は拭かずに横たわったまま姉さんが来るのを待つ。

姉さんはようやく血痕に気づき必死に辿って僕を見つけたす、最初は激怒したような眼差しだったが僕の有様を見て泣き出しそうな顔をしてしまう。

「……………リーブ」

「…………ガツ…………大丈夫ですよ姉さん」

血が気道に入り込んだせいで噎せながらも姉さんに笑いかけると姉さんは更に顔をクシャクシャに歪め泣き出すような顔になっていく

「…………リーブ」

「姉さんが無事でよかった」

ヤバいな……………分が不足している。怪我をしたせいか身体が今までのような代理品でなく本来必要なものを欲しているというのか？

くっ正直な身体め！

血だらけのままニコニコしていると姉さんが僕を優しく抱きしめてくる。

そして僕はそれに……………

ムニコモミモミ

乳を揉むことにより答えた。

ああ乳分が不足してて身体の構成が甘いです。

「……………」

無表情の冷めた目で僕を引きはがし、目を細め僕を見据える姉さんに

「I am the bone of my breast」
体はおっぱいでできている

と真面目な顔で言ったところで気を失った最後に見たのは白のパンツに振り抜かれた姉さんの右足だった。

蹴り対する防御よりパンツを見ることを優先させるとは……………
なんと正直な身体なんだ！！

《続く》

第2章16話：I am the bone of my breast（体は

お楽しみいただけただけでしょうか？

久々のゼロ魔なので流れが分からなかったorz

話し飛んだなあ〜

キンググリムゾンか・・・・・・・・・・そうかそうか

いつになるかは分かりませんが次回もお楽しみに

第2章17話：こんな馬鹿な英雄なんてクソ喰らえ！！（前書き）

どうも久しぶりです

アホな子××です

誤字脱字は更新お願いします

第2章17話：こんな馬鹿な英雄なんてクソ喰らえ！！

痛いつて鼻が削れる焼けるもげる！！

地面が！ちよっあつ僕の唇！？熱っ！！アレなんか、速くなってません！？加速してません！？009！？加速装置！？それともアクセルでトリアルな感じですか！？そんな僕はファイズのアクセルフォーム派ですが。あつ紐が入っちゃいけない場所に食い込んで！

髪が！？今度は頭皮が地面との摩擦でえぐれてますよ、姉さん！ちよっまじ無理！！

どうも馬車の荷台の下に縄で縛り付けられ地面と身体を擦り合わせるといふ奇妙奇天烈なプレイを味わされたユウキ・エンドリオール・デファンス・ド・アンペラトリスことリーブくんです。

過去形なのは既に学園についたのでプレイから解放されたためです。ああうんうちの姉さんは見かけ通りDSでしたね、目が覚めたら地面と顔が接触し摩擦により石が突き刺さる僕の気持ち分かるだろうか？

まだ怪我が完治していないせいで紐がヤバい所（内臓）とかに触れる気持ち分かるだろうか？

DMな君は試してみるといい君ならば突き抜けるような快感と共に

恍惚の果てにたどり着くことができると思いますよ。

簡単にどの程度の惨事があつたかを言えば摩擦のせいで頭皮が焼けました。

髪が・・・髪があああああああああーーーーー！
ーーーーっ！！

前世のふぁざーがどこまでがデコなのか分からないほど前髪が後退していたので、やはり髪についてはデリケートになってしまいましたね。

軽口を聞きながらも今日の分の仕事が終わってないことを思い出し移動する。

移動中に見つけた鏡により頭皮のチェックを行った後に殲滅眼による魔力吸収で大分修復された身体を引きずり仕事場へと向かっている

「そんな身体でどこに行くつもりなんだい！！」

爺ちゃんに報告を終えた姉さんが僕が移動しているのを見て血相を

変え、怒鳴りながら駆け寄ってくる。

「大丈夫なのかい、リーブ!？」

仕切りに僕の具合の安否を尋ねて、休むよう促してくる姉さんに既に身体が治ったことを伝えると

「アホなことを言うんじゃないよ!!あんな風になった身体がすぐに治るわけないだろうが!!」

めちゃくちゃ叱られたのでしょうがなく傷口を見せ、くっついていることを確認させた上で殲滅眼について説明をした。

「はあ目茶苦茶な奴だったんだねアンタは」

説明すると何故呆れられた眼差しを向けられたので、その視線から逃げるように身を振りながら自分の体調が良好であることを伝え

「じゃあそついうことで失礼しますね、姉さん!」

郊外の森に造った仕事場へと向かおうとすると

「身体は治っているかもしれないけど疲れてるだろ？今日は休みな」

何度も休むよう言ってくるので少し不思議に思い尋ねると

「……もう家族を失いたくはないんだよ」

少し涙を浮かべながらも頬を朱く染めて僕の視線から逃れように横を向きながらそう言ってきたので、思わず……

「姉さんがデレた!!」

口に出して姉さんのツン期が終わり、デレ期に入ったことを言ってしまった。

すると姉さんは目を細め僕を責めるような凍える眼差しで見つめてくる。

「……まあ病み上がりだから辞めといてやるよ」

致死量のダメージを覚悟していたのだが、デレ期の姉さんは今までの姉さんとは一味違うようで許された。

やべえデレ期の姉さん、超可愛いですね！

多少おふぎけをしながらもなんとか姉さんを引きはがそうとしているのだが、デレ期の姉さんは僕から離れようとはしない。

……もしかしてヤンデレとかストーキング属性に入ってしまったのではないだろうかと一人で勝手に不安なる。

まあ実際はそんなこと全然思ってませんが……

くだらないことを面白半分で考え中々離れようとしなない姉さんに嘆息し、しょうがなく代わりに仕事をやらせてもらうことにした。

仕事内容を説明せずに姉さんを学院の郊外にある森へと案内し、仕事場である洞窟の中へと引き入れる。

洞窟の中には蟻の巣穴ように縦横無尽に穴が掘られており、地下深くまで連れていきこれから何をするかを伝える。

「下に向かって慎重に穴を掘ってください」

「はぁ？穴を掘ってどうする気なんだい？」

よく分からないという顔を浮かべながらそう言われたので

ニツコリと姉さんに笑いかけ、悪戯するような子供の笑みを浮かべ

「世界を救っちゃうんですよ」

そう言い切り、それを聞きアホな子を見るような眼差しをしながら
いまだほうけている姉さんに細かい説明はせず、慎重かつ丁寧に穴
を掘るよう頼み、その後ろから掘った穴の土を確認していく

姉さんはゴーレムを器用に使い簡単に穴を掘り進めていたが途中で
作業を止めて、離れて地面を確認していた僕を呼びにきた。

「リープ！！」

姉さんに呼ばれゆっくりとそちらに向かうと顔の色を変えた姉さんが急かすが気にせずゆっくりと向かい、漸くその場へと着いた。

姉さんは指を震わせながら目の前にある光景を指差し、身体を震わせる。

「なんだい、これは!?!」

姉さんの指差す方にあるのは数多の大きさの風石が四方八方に多量に埋められている光景だった。

「ふむ、今日は少ない方ですね」

「えっ!?!」

それを見てあまり数が少ないことを嘆いていると姉さんは声をあげ驚き、こちらを睨みつけてくる。

「どづいことだい!？」

姉さんは目の前の光景に取り乱し、僕の身体をガクガクと揺さぶってくるので落ち着くよう促した上で説明をする。

「本来、僕はあの森で隠居生活をしながら死ぬまで暮らす気だったんです」

「それがどう」「いいから聞いてくださいって」「むう」

「でもある日……いえ前から気づいてはいましたが、姉さんと会話している時に確信したんです」

「……………」

呟くように説明をしていると姉さんは真面目な顔をしながら無言で僕の話に耳を傾けている。

「アルビオンに在つてはいけない植物があつたんです……低地にしか生えない植物なのに、何故か空中にあるアルビオンに生えているのはおかしいことだと思いませんか？」

「……まさか!？」

「ええアルビオンは最初から浮いていたのではなく、元々は大陸と繋がっていたんです。けれど多量の風石の暴走により空中へと浮き上げられた……そして今ハルケギニアも同じように浮き上げられようとしています」

「……」

姉さんは知らされた真実に絶句し、恐怖に身体を震わせる。

「誰が好き好んでこんな原作スポットに近寄るもんですか、この学園の周囲が風石を発掘するのに一番最適だったからわざわざここに来たんですよ……まあカトレアさんに捕まるとは思ってませんでした」

独白するようにぶつくさ呟きながら、風石を暴走させないよう複写眼で解析しながら魔力の流れを読み取り丁寧に地中から取り除き、地上へと運んでいく

「……………あんたはずっと一人でこんな危ないことしてたのかい？」

作業を続けていると姉さんが声のトーンを落とし、俯きながら身を震わせ悲しげにそう尋ねてくるので笑いながら

「別に大したことじゃありませんよ、やりたいからやってるだけなんですから」

それを聞いた姉さんは俯いていた顔をあげ、僕に掴みかかり身体を壁に抑えつけ感情を発露する。

「なんで……なんで、こんな危ないことをしてるんだよ！？もし風石が暴走したら一番最初に巻き込まれるのはあんたなんだよ！？そうだ！逃げちまえばいい！テファや子供たちを全員連れて安全なところへ逃げよう！！リーブ、あんたがこんな危ないことをする必要なんかないんだよ！！！」

やっぱり今日の姉さんは一味違いますねと内心からかい半分で微笑みながら姉さんの頭を撫でて
否定するように首を横に振り

「惚れた女の子にフラれてその女の子を忘れられない男に出来るのは、その女の子の幸せを守ることだけです……人が動くのにイチイ理由が必要なら僕理由はそれで十分なんです」

優しい声色で姉さんの頭を撫でつづける。

「それに僕には好きな人がいっぱい出来ましたからね、その人達が笑っていてくれるのであれば僕の命なんか安いもんですよ」

以前も思った青臭い偽善者的な事を今度は口に出して姉さんに告げると

「馬鹿がつ!!」

姉さんは僕を突き飛ばして思いっ切りビンタしてくる。

叩かれた頬を抑えながら姉さんを見ると、泣きながら身を震わせ

「残される奴の気持ちを考えろ、この馬鹿!! あんたが犠牲になつて平和な世界なんかには価値はないんだよ!! あんたがいることがあんなに好いている人たちが笑顔でいられる最低限の条件なんだ!!」
自分の感情を叩きつけるように怒鳴り散らしてくる。

「この馬鹿! 馬鹿! 馬鹿! 馬鹿! 馬鹿! アホ! 馬鹿たれ! 馬鹿変態! 痴漢馬鹿! セクハラ馬鹿! 馬鹿! あんたなんか知るか!! 女の尻でも追いかけてろ!!」

姉さんは怒鳴りながらズンズンと足を進め、僕を置いて外へと出ていく

「.....」

そんな姉さんを僕は無言で見送ることしか出来ずに.....

ただひたすら歯を食いしばっていた。

言われて気づいた残される人達のこと

何が英雄なんだろうか

こんなクソツタレは英雄とは言えない。

9（他人）を守れても1（大事な人）を守れない……………そんな奴を僕は英雄とは呼びたくはない。

そして目を細めながら去っていく姉さんの背中を見つめる。

大事なことを教えてくれた愛しいその背中を

何よりあの温かくも眩しいその背中を……

やれやれ

やり直しですか

これは主人公たちと協力するしかないんですかね？

《 続 》

第2章17話：こんな馬鹿な英雄なんてクソ喰らえ！！（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ととうりりカルがゼロ魔の話数を抜きましたorz

次回もお楽しみに

更新予定について

どうも皆さんお久しぶりです

××です

はてさて最近まったく更新できていない今日この頃な素敵な感じですが……まあ軽口はともかく

スランプです
しかも極度の

とりあえず更新停止させていただきますが

必ず帰ってくることを誓います

嘘は付きませんが約束は破る気はありません

ですから首をながくしてお待ちくださいWWW

たまにストーリーが涌いたら更新しますが

今までよりも頻度は低いものとなります

感想など皆さんの応援をお待ちしております

ではまた

番外編：電光の付き人 - 挿話（前書き）

電光の付き人を削除したので

そのためあちらに在ったオリジナルストーリーをこちらにあげさせていただきます

まあ面白さは期待しないでください

ちなみに暇つぶしならリリカルをオススメします（宣伝かよwww

リリカルは本編より面白いと言われるぐらいですからHahaha

番外編：電光の付き人 - 挿話

ユウキがカトレアさんから逃亡している間俺はレイナーさんの元で訓練をしていたっす

ああそついえば借りた刀返し忘れたっす・・・まあ明日返せばいいっす

そう思いユウキの刀を借りたまま訓練に参加し

模擬戦をしてポコポコにされたあと地面に頃がっているとレイナーさんが近づいて話しかけてきたっす

「いい刀を持っているな」

俺の手にあった刀を見て物珍しそうな顔をする

「友達から借りたっす」

「少し見せてくれ」

「いいっすよ」

素直にレイナーさんに刀を渡すと、鞘から刀を抜き放ち真剣な顔つきで刀を見ている。そして鏢についた六芒星を見て顔色を変えた

「なっ!?!これは!?!」

「どうしたんっすか?」

レイナーさんは鼻息を荒くして俺の肩を掴みながら言うてくる・・・
顔が近いっす

「これを貸した友達はどこだ?」

「知らないっす、もう(こころ)らん(こころ)には(こころ)いないっす」

ユウキなら多分色々逃げ回ってて忙しいっす

その俺の言葉にレイナーさんはあからさまな落胆をみせたため息をつきながら刀を返してくる

「・・・はあそうかもつ（城には）いないか」

「大丈夫つすよいつか会えるつす」

というか明日にはきつと帰ってくるつす

「そうだな（まあいつかは帰ってくるだろう）・・・じゃあな」

レイナーさんはそう言って立ち去ろうとしたので、声をかけ引き止め気になっていたことを聞いてみることにしたつす

「レイナーさん聞きたいことがあるんつすが、ちょっといいつすか？」

「ああかまわんぞ」

「ユニコーン隊の隊長ってどんな人なんっすか？」

俺の言葉を聞いてこちらに向き直り、俺の質問を聞き苦笑しながら答える。

「よく言えば伝説、悪く言えば怠惰だな」

「どづいつ意味っすか？」

俺はレイナーさんの言葉の意味が分からず首を傾げ意味を尋ねた

「少し昔話になるが構わないか？」

「大丈夫っす」

レイナーさんは笑いながら俺の質問に答えようとしてくれる

「昔ある村に200マイルはあるドラゴンが出没したと聞いたまま近くにいた俺たちがそこに向かったんだ」

懐かしい過去を思い出し嬉しそうな遠い目をして話を続ける。

「正直200マイルなんて大きさのドラゴンがいるわけないとタカをくくつて油断して村に向かったんだが………本当に200マイルはありそうなドラゴンが普通に横になって村のど真ん中で寝ていたんだ」

「正直あの時は死んだと思ったぞ、あんなに勝てるわけないって隊員全員が絶望して逃げようとしている中、当時まだ隊員でしかなかったうちの隊長様は普通にドラゴンに近づいて………鼻頭をぶん殴ったんだ」

「はっ？」

200マイルあるドラゴンをぶん殴るなんて頭悪いんじゃないんですか!？」

「でそのままドラゴンに『邪魔だから山奥に帰ってくれ』とか普通に言うんだぞ？アホでしかないだろ？」

「・・・ハツハハ」

苦笑いしか出ないっす

「そしたらドラゴンが韻竜で『戦って勝ったらどいてやる』とか言
って襲い掛かってきたんだ」

「でどうしたんっすか？」

なんか盛り上がってきたっす！！

「隊長様は最初はただドラゴンの攻撃をかわしてただけだったんだ
が、何発か掠ったときにスイッチが入ったらしく・・・不意に空中
に浮いたと思ったらドラゴンをぶん殴ってぶっ飛ばしたんだ」

「はあっ！？200メートルあるドラゴンをつすか！？」

なんなんっすか、その隊長は！？

どんなゴリラっすか！？

「で吹き飛ばされたドラゴンは殴られた状態から姿勢を立て直したと思っただけに爆笑し始めてな。『人間に殴り飛ばされたのは初めてだ！』』とか言っただけで隊長と喧嘩し始めたんだ」

「……………バトルマニアのドラゴンっすか」

タチが悪いつすね

「二人というか一人と一匹は大規模な魔法を使いつつ殴ったり蹴ったりと出鱈目に戦いやがってな……………何回流れ弾で死ぬかと思っただけ、ドラゴンが灼熱を放てば隊長は氷河を放って対抗してドラゴンが竜巻を放てば隊長は地面を隆起させ相殺させる」

「……………。」

……………なんて怪獣戦争っすか？

普通人間にそんなこと出来るんっすか？

「最後らへんは互いに魔力が尽きたみたいでな、交互に一撃ずつ放って勝負し始めたんだ。ドラゴンは尻尾、隊長は拳でかなり重い一撃を放ちあって・・・周りの地形変わってたからなあ。」

「……………」

無言になるしかないっすね

「爆笑しながら殴り合ってるからどうしようもなくてな…………で最後は結局ウチの隊長がドラゴンをぶっ飛ばして勝ったんだ」

「…………ドラゴンと殴り合いして勝つとか本当に人間なんっすか？」

レイナーさんは俺の言葉に苦笑いしつつも答える。

「だから言つたる伝説だつて、で終わつたら疲れたとか言つて復旧作業手伝わずに爆睡しやがったんだ……えぐれた山直すのがどんなに面倒だったか」

遠い目をして過去の苦勞を思い出しながら言つ

「だから怠惰なんつすね」

「ああ……よく仕事サボるし、本気で戦つことは滅多にないしな」

「……大丈夫なんつすか、うちは？」

「はっはは他にもオーク鬼30匹を一瞬で消滅させたりとか、色々な逸話があるが一番有名なのはこれだな」

レイナーさんは笑いながら簡単に言つが……オーク鬼を瞬殺も結構笑えない話つす

と内心ビビりながらも苦笑いで返す

「そんなアホ隊長だが、この城のだいたいの使用人連中は隊長と仲がいい」

「隊長さんって平民なんっすか？」

「いや貴族だ。かなり名のある公爵家の次男なんだが、平民や貴族に関係なく誰にでもお礼は言うし謝る。それに仲良くなれば普通に喧嘩したり一緒に飯を食ったりするし・・・あと平民の友達が馬鹿にされたからって貴族と喧嘩したこともある。」

「あいつは普通の貴族には考えられないことをする人なんだ」

「レイナーさんまるで自分のことを言うように誇らしげな顔で隊長の話をする」

「あいつの下で働けることを俺は誇りに思うよ。だからネルフも早く強くなって隊長についていけ」

「はいっす」

そんないい人の下で働いていたなんて知らなかったす

確かに無茶苦茶だが・・・いい人には違くない

ああ俺も一目会ってみたいっす

《続く》

予告

明日一話だけ更新します

お楽しみに

ちなみに中身はギャグです

久しぶりにあんなくだらないもの書きましたwww

以下字数稼ぎ

・貧乳と他属性の組み合わせ
いわゆる典型的な『ギャップ萌え』のエレメントとして貧乳が威力を發揮する場合は非常に多い。
例えば、高身長＋貧乳、年上＋貧乳、女性らしい立ち振る舞い＋貧乳など、枚挙には暇がないだろう。
特に綺麗な黒髪＋高身長＋貧乳などは、それぞれが圧倒的なプラスシナジーを持っているので、愛好者には堪らない魅力をもたらすものとなる。
貧乳は他の属性を引き立て、より強調する要素であると言える。
この他にも、様々なパターンが考えられる。

【派生概念】

冒頭で定義したように、貧乳とは大掴みに言えば『小さな胸』のことであるが、この小ささにも様々なものが想定出来る。

この辺りは人によって言葉の選択にばらつきがある場合もあるが、とりあえず代表的な二つを紹介したい。

・微乳

『わずかな膨らみ』と言ったところ。

無いわけではないが、あると言うにはあまりに控え目な膨らみのこと。

・無乳

『膨らみが無い』。

完全に平坦な胸で、乳首が無ければ背中と見分けがつかないほどの胸のこと。

単純に並べた場合、大きさ的には

(狭義での) 貧乳 > 微乳 > 無乳

とされる場合が多いようだ。

第2章18話：レッツパーティー（前書き）

待ちがって昨日一瞬だけ投稿しちゃいましたorz

読んだ人すいません

姉さんが小声モードになったため、それを聞き流すべく何故こんな状況になっているかを軽く説明してきましょう。まあ正直すごい簡単なお話しなんですがね

まず姉さんを助けるために学院を無断で離れたために仕事が溜まっており、サイトくん爆撃されたせいでHPの低下と貧血による体力の低下で活動が鈍り、そんな中無理して働いたせいか効率が悪くなり、更に仕事が溜まるという悪循環に陥りついにはぶっ倒れたというわけです。

正直真面目に働きすぎてオツパイゴッドであるこの僕が一週間程セクハラを働いていないなんて、在ってはならないことと言えますね。

セクハラをしていないせいか身体から漲るような欲望がたぎり続いています。

まあ解放する前に過労と熱でぶっ倒れましたが……ちなみにタンパク質が固まるのが45 からなので、今現在42 程ある僕は絶賛瀕死中というわけで、大人しく寝ているわけなんですけど……

熱で死にかけると本能が身体を刺激して子孫を残そうとするんですよ？知ってました？つまりマイサンは絶好調というわけです。具合悪くてそんな気には微塵もなれませんが……

あああれ目が霞んできた。

僕このまま死んじゃうんですかね？

前にバカ姫を助けた時みたいに身体から力が抜けていって……
・ああ……最期に……最期に……

「やめて、オシリ、触らせないで
それじゃないから
欲しいのはオチチよ！」

我覚醒せり」

そう尻などはマヤカシに過ぎない。僕が求めていたのは臀部などではなく、オッパイ！！

オッパイこそは最強！無敵！！絶対不敗っ！！今までは幻覚によって騙されていたダケDeath

今の真・覚醒状態の僕ナラバ臀部の幻覚ヲ破ることなどたやすいと
言えるのデスYO

ヒヤアハ―っ!!

「おっぱいがいつぱい

おっぱいがいつぱい

おっぱいがいつぱい

うれしいな さわりたい

ぼくが触って モミモミしたのに

おっきなままだね アナタのおっぱい

ひとさしゆびで ちょこんとおしたら

びっくりするほどやわらかだった

ぼくがのんで のみつづけたから

おっぱいがでない アナタのおっぱい

がんばってすえば

またでるようになるのかな ふしぎ

おっぱいがいつぱい

おっぱいがいつぱい

おっぱいがいつぱい

きれいだな だいすきさ

（ くり返し ） 「

クイツクイツ

「オツパイがあるところに我が姿あり!!とうっ!!」

混乱している生徒たちのだ真ん中に飛び降り決めポーズをとりつつ
叫ぶ

「オツパイによるオツパイためのオツパイだけの味方!女体仮面!
推参っ!!」

荒ぶる鷹のポーズを改良したような股間を突き出した姿勢をとる。
決まった!!

「「「「変態だっ!!」」」」

生徒たちが更に混乱するのも頷ける。何故ならば今変な歌を歌い、
叫びながら校舎の上から飛び降りてきた人物は三角の真つ黒いかな
りモッコリしたビキニしか装着しておらず、顔には誰のものかは分
からない少し大人向けの黒い女性ものの下着がプロレスラーのマス
クのように着けられており、足を通すべき部分に目がくるようにな
っている。惜し気もなく、筋肉のついた身体を晒し、胸と右腕に大
きな傷痕をも晒していた。

そしてパンティーの足を通すべきその穴から見える目はピンク色に
怪しく輝き、女性陣に寒気を走らせる。

「必殺っ!!」

未来ある乙女には助言をしつつ、ひたすら学院内を練り歩く

モツコリさせたビキニをクイックイツと前後に揺らしながら完全なる変態として男子生徒を洗脳しつつ、ついには男性教職員まで味方と化していく。無論、白髪の爺さんが女体仮面の右腕になりつつあるのは言うまでもない。

「ククククククククククレッツパーティー!!!」「」「」「」「」

既に脳内メモリーが焼き切れんばかりに多数の裸を記録した野郎たちが異常に過剰にはしゃぐ中、女体仮面は湯気を出しながら軽く暴走していた。

「オツパイ、いつパイ、夢イッぱイ〜どんぶらこどんぶらここと川の上からオツパイが〜オツパイがああああああぁぁぁぁぁー」
「っ!!」

女体仮面は言うまでもなく我らが主人公のユウキ・エンドリオール・デファンス・ド・アンペラトリスことリープであり、押し潰されてきた過剰な性欲が瀕死の危機にさらされたことにより狂化され、熱により理性がとんだため女体仮面へと相成ったというわけである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2337m/>

ゼロの使い魔～魔眼を持ちし霸王～

2010年12月27日07時04分発行